近代男【モダン】の哲学史

modern

moderne

moderno

mo-dan?

本田 透
toru honda

講談社

カバーイラスト：沙村 広明

喪男［モダン］の哲学史

modern
moderne
moderno

本田 透
toru honda

講談社

喪男（モダン）の哲学史　目次

第四章　国家萌えと鬼畜　191

第六章　文化は喪男が作り出す　287

喪男（モダン）の哲学史

序　章　喪男とは何か

「モテ」の思想 「喪」の思想

二〇〇六年、映画『ダ・ヴィンチ・コード』[*1]が世界的に大ヒットしました。しかし、この映画が主張する**「イエス[*2]・キリストは実は結婚していて子供もいた」**という説に対して、バチカンをはじめとする多くのキリスト教信者が「キリストへの冒瀆(ぼうとく)だ」と怒っている理由について、ちゃんと理解できている日本人は少ないのではないでしょうか。

そもそも、「イエスに奥さんがいた」なんて話が、どうしてこれほど世界中の人々の関心の的になるのでしょう?

イエスは普通の人間じゃなくて神の子だから、結婚しちゃまずいんだろう、と考える方もおられるかもしれません。しかし、よく考えてください。神の子どころか、神様だって結婚したりセックスしたりしている神話のほうが多いわけです。ギリシア神話でもローマ神話でも日本神話でもだいたいそうです。日本という島を産んだのは夫婦神ですからね。つまり、キリスト教のイエスはかなり特殊なわけです。そもそも、なぜ「結婚」が「冒瀆」なのでしょうか。普通に考えれば、人間は結婚して子供を作らなければならない生き物のはずです。子作りをしなければ、人類は滅亡してしまいます。

実はキリスト教が「**童貞宗教**」なのです。童貞宗教とは、童貞や処女の純潔性というものを尊ぶ宗教のことです。童貞宗教であるキリスト教、特にカトリックにおいては、人間の欲望、特にセックスに対する欲望は罪深いものであるとされてきました。

「**モテてはいけない**」という思想です。

① 「ダ・ヴィンチ・コード」
二〇〇六年。アメリカ映画。主演はトム・ハンクス。原作はダン・ブラウン。イエスがマグダラのマリアとセックスして子供を作っていたという秘密を巡る闘いが描かれる歴史ミステリーだが、イエス様が非童貞だとは何事、とキリスト教徒とくにカトリックの怒りを買った。キリスト教は童貞至上主義の喪男(注③)宗教なので、イエスが非童貞なんて言語道断。恋愛資本主義社会は『最後の誘惑』(第一章注㊾)や『ダ・ヴィンチ・コード』といった作品によって、喪男童貞宗教キリスト教を根本から書き換えようとしているわけだ。

② イエス
BC七年頃〜AD三〇年頃。処女マリアから生まれた。バプテスマのヨハネから洗礼を受け、修行に励む。その後、布教を開始。このあたりまではブッダに似ているが、王や長者を次々と帰依させたブッダと異なりイエスはエルサレムで捕らわれて十字架にかけられてしまった。しかし、なんと! 三日後に『サイボーグ009超銀河伝説』のハインリヒの如く復活したという。イエスは生涯独身であったと信者たちから堅く信じられており、イエスが非童貞だったと言い出す者はローマ法王や多くのキリスト教徒から怒られる。

この考え方は二一世紀の消費社会の思想とは正反対です。
現代日本では、童貞はもちろん処女も恥ずかしいことだとされていますよね。より多くセックスし、より大勢の彼女・彼氏・セフレ・愛人がいるほうが「カッコいい」「勝ち組」「イケてる」「幸福」とされています。
逆に、童貞を貫いて学問や芸術の道を究めんとする人間は、キモいとかなんとか言われて「負け組」「不幸な人間」だと決め打ちされるようになってしまいました。
このような現世快楽主義的な思想を僕は**「モテ」の思想**と名づけました。
これに対して「モテてはいけない」「童貞は素晴らしい」とする思想が、「喪(も)」という思想です。「喪」の思想では、現世は実に生きにくい地獄とされます。だから「天国」や「極楽」といった「別世界」のユートピアが発明され、語られることが多いのです。つまり「現実からの飛翔」が行われるのです。
実は、哲学および宗教の歴史は、この「モテ」と「喪」という二つの思想の争いの歴史なのです。
というよりも、哲学というものは、「喪」という思想そのものなのです。ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』を観てください。イエスとヨハネの間に「M」の字が隠されていますよね。あれは「喪」のMなんです。ダ・ヴィンチは、イエスは「喪」な男（モテない男）、すなわち「**喪男**(モダン)*3」だったというメッセージをあの絵に隠しているんです！
本書は、人類の文化の歴史を「喪男(モダン)」の歴史であるという視点から捉え直そうとする「喪男(モダン)復興」の試みの第一弾です。まずは「ポスト・モダン思想」によって喪男が排除されてしまっている哲学から見てみましょう。

③　喪男
ネット用語で「モテない男」の意味。「モテたい男」は「鯛男」と呼ばれ、厳密に区別されている。喪男とは「モテたい」のではなく「モテない」あるいは「モテたくない」男なのだ。「非モテ」という呼び方もあるが、これは「モテ」に正の価値を置いた価値二元論による差別用語なので本書では使わない。喪男とは「非モテ」ではなく、人類を迷妄に落とし込んでいるモテという腐った価値観を拒否する「拒モテ」なのである。

本当の哲学とは「モテない苦悩」から始まる

恐らく多くの人々が、哲学というものを誤解しています。

哲学の歴史とは「現実からの飛翔」の歴史であり、そして真の哲学者はみな「喪男（モダン）」なのです。

そうです。哲学とは、「モテない苦しみ」や「自分が喪男である苦しみ」の謎と原因を解き明かそうとするための思索活動なのです。

すべての人間が「モテ」側に立てるのであれば、哲学は不要でした。しかし現世では、人間は「モテ」と「喪」に二分されてしまいます。なぜだなぜなんだ。そういう存在論的な疑問を抱いた喪男哲学者は、世界の意味とか人間の精神というものについて悩まなければならなくなったのです。

そもそも、酒池肉林[*4]のハーレムで女に囲まれて遊び踊っている六本木ヒルズ族みたいな勝ち組ＩＴ長者が、哲学などに人生を捧げるわけがありません。彼らのような勝ち組と、そして、そういう勝ち組になりたがっているけど一生なれない大勢の負け組人間にとって、哲学とは「処世術」のことです。要領よく生きるためのハウツーこそが現代日本における「哲学」なのです。その証拠に「〇〇の哲学」と銘打たれた本を書店の一般書コーナーで漁（あさ）ってみてください。どこにプラトン[*5]がおりますか。どこにニーチェ[*6]がおりますか。「処世術」と呼ぶと生々しくてお洒落じゃないので格好つけて「哲学」と言っているだけなのです。

逆に、本物の哲学の専門コーナーに行くと、今度は何を書いているのかさっぱりわからない頭の良さそうな本が並んでいます。どれもこれも一般大衆に読まれることを最初から拒否したかのような分厚い装丁、意味不明の内容。これらの本がいわゆる

④ 酒池肉林
BC一一〇〇年頃の古代中国・殷王朝で紂王（ちゅうおう）が開催した乱交パーティ。「酒を以て池と為し、肉を懸けて林と為し、男女をして裸にして其の間に相逐わしめ、長夜の飲を為す」などという凄まじい酒宴だった。素手で猛獣を倒すくらい強くて頭も良かった紂王をこんなダメ君主にしてしまったのは愛人の妲己（だっき）という美女だったそうだ。で、こんなことをしていた殷は当然滅ぼされてしまった。つまりモテの魔の手が殷を滅亡させたのだ。

⑤ プラトン
BC四二七年頃～BC三四七年。古代ギリシアの喪男哲学者。師匠がソクラテスで、弟子にアリストテレスがいる。師のソクラテスが死罪になったため絶望。その後、絶望先生となってアカデメイア学園を創設。プラトンという名前は肩幅・胸幅が広くガッチリした体型、または額が広いことからつけられたあだ名らしい。現代で言えば「ブタゴリラ」とか「ハゲ」みたいな感じだろうか。ブッダ、イエスと並ぶ最強喪男哲学者の一人。プラトニック・ラブを説いた人。美少年マニア。生涯童貞だったと言われている。またお母さんは処女のままプラトンを産んだと信じられている。本書で最も重要な人物。代表作『ソクラテスの弁明』『饗宴』『国家』『パイドン』。

⑥ ニーチェ
一八四四年～一九〇〇年。一九世紀ドイツの喪男哲学者。子供の頃から酷い頭痛持ちで、二〇代で大学教授になるも三〇歳を過ぎた頃から二

「ガチの哲学書」ですが、こんなの読む人、日本に数千人しかいませんよ。**だいたい何書いてるのかわかりません。**こういうのはいわゆる一九八〇年代ニューアカブーム[*7]の時から出てきたわけですが、つまりは「知」というファッションなのです、「知」です。「知」とタイトルに銘打たれた本を並べてみてください。なんだか一部のインテリサブカル女にモテそうではありませんか。どれもこれも著者近影がなんだかカッコよくありませんか。そうです、これらは「処世術系哲学」とは対極に位置する「ニューアカ系・知の哲学」ですが、これも結局「モテ」が目的となっている点では「処世術系哲学」とたいして変わりません。ノリが体育会系か文系か、モテたい相手が水商売系のキャバ嬢かそれとも眼鏡インテリフェミ系っ娘かという違いだけなのです。

これらはいずれも「現世利益」を求めて読まれる本ですので、本当の意味では哲学とは呼べません。

本当の哲学とは、モテつまり「現世利益」を目的としたものではないからです。

本当の哲学は、「モテない苦悩」から始まるのです。

なぜ俺はモテないんだ。なぜだ。なぜこんなに俺は貧乏なんだ。なんで俺だけこんなブサイクなんだ。なぜだ！

喪男がそのような苦しみを逃げずに自覚し、現実世界の不条理を目の当たりに認識した時、はじめて「哲学」が生まれるのです。すなわち、俺を不当に苦しめるこの「現実」とはいったい何なのか、「俺」と「現実」とはいったいどういう関係なんだ、という探究が始まるのです。

そもそも「現実」に満足している人間、いまは現実に不満があるけれどいつか必ず満足できると信じている人間は、この世界に「意味」だの「起源」だのを問うたりし

ートに。ショーペンハウエルの影響の下、「神は死んだ」と宣言。ニヒリズム・実存哲学から、インド思想に影響されて「永劫回帰」の概念に到達。ついには「ルサンチマン」（怨念）にまみれた人間を見捨てて「超人」という思想を生み出した。喪男作曲家ワーグナーと仲良しだったが後に絶交。生涯童貞だったと言われているが、売春婦にうつされた性病が原因で晩年に発狂したとする説も有力。つまり素人童貞だったらしい。モテなかったが自ら護身（第一章注⑭）していたわけではなく、ルー・サロメというサークルクラッシャー（第一章注⑯）女に入れあげて苦悩しまくり、ストーカーまがいの手紙攻撃を行ったりした。また妹エリザベートが自分よりも先に結婚した時にはブチ切れた。一八八九年に発狂してからは妹に看病される日々を送った。代表作『悲劇の誕生』『ツァラトゥストラはこう言った』『善悪の彼岸』『道徳の系譜』『この人を見よ』『力への意志』。

⑦　ニューアカ

ニュー・アカデミズム。一九八〇年代日本に流行した現代思想ブーム。はじめは個々の思想家が雑誌『現代思想』（青土社）誌上を中心に真面目に哲学していただけなのだが、それが「知」というモテるための「商品」となった瞬間に日本の哲学は……。

ません。必要ないからです。そういう人は、この自分に都合よくできている「現実」こそが唯一絶対の真実であり、永久不変の世界であると信じ続けようとします。

従って、「現実」という世界の意味をわざわざ探究しようとする人間は、どいつもこいつも喪男なのです。あるいは喪女もいるかもしれません。いずれにしても、どうしても「現実」に染まりきれない心を持っているから、一歩離れて「現実」を客観視できるわけです。そして、「意味」を問うわけです。「俺がなんでこんなに苦しまねばならぬのか、それを知りたい」と欲するのです。かくして、「我キモい、故に我モテない」というコギト[*8]ならぬ喪（モ）ギトを発見した喪男たちによって、哲学が生まれたのです。なぜモテないのか、そもそもなぜキモいのか？　いやそもそも、「モテ」だの「キモい」だのといった「価値体系」には、どんな正当な理由があるのか？　こういう大きな問題を真面目に考え出すと、哲学者の思考対象範囲は、近所に暮らすジャイアンやスネ夫みたいな同級生たちから、いずれは全世界へと広がらざるを得ません。

例えばジャイアンをドラえもんの道具でやっつけたって、第二第三のジャイアンが出てくるだけではないですか。つまり喪男が苦しめられるのは目の前のジャイアンが悪いんじゃなくて、「ジャイアンがのび太を虐げるようにできている世界の仕組みそのもの」に原因があるのです。

僕は以前『電波男』という自著の中で、いかに現代日本が「恋愛資本主義」というシステムに支配されているか、なぜ貧乏なキモメンは何をやってもモテないのか、という問題を論じたわけですが、最初は「負け犬女ども超ムカつくぜ！」と思ってたんですけど、考えに考え続けた果ての結論は「**恋愛資本主義という世界の仕組みそのものが原因なのだ**」ということになったわけです。

⑧　コギト
コギト・エルゴ・スム。デカルト（第一章注㊸）が『方法序説』で辿り着いた「我思う、故に我あり」という発見。あらゆるものを疑っても、自分が思考している・自分が存在するという事実だけは疑えない。近代合理主義の出発点であるが、同時に観念論の出発点でもある。

これです、これが哲学です。

ここで「悪いのは俺を愛さない女たちだ」と言って思考を止めてしまうと、それは哲学ではなく、単なる他人の悪口です。現代社会の「モテ」どもは、喪男がモテない苦しみを「自己責任」の四文字で縛りつけようとしますが、そんな話を鵜呑みにして苦しむ必要はありません。喪男に責任などありません！　しかし、だからといって、自分がモテない責任を他人に押し付けてはなりません。超ムカつくけど！　それでも原因はこの「世界」にあるのです！　悪いのは「現実」という「世界」そのものなんです！

かようにして僕のような喪男哲学者は、それぞれ、「俺がモテないのは、世界がかくかくしかじかだからだ」という真理を見出します。真理といってもそれぞれの喪男が勝手にそう考えてるだけで、つまり幻想なんですが、とにかく何らかの確固とした自分自身の世界観・自分自身の価値観というものを、勝手に作り上げるわけです。なぜなら、社会が押し付けてきた価値観の中では、喪男は惨めな敗者でしかないからです。そんな価値観の中では生きられません。いや、実は生きようと思えばダンゴムシのようにひっそりと生きていけるんですが、中には「俺はダンゴムシじゃねえ！　人間だ！」と立ち上がる人がいるわけです。

そういう「現実」に抗う喪男が、時には犯罪者になり、時には革命家になり、時には哲学者になるわけです。

少し硬く言うと、「自我をアイデンティファイする基本原則」を自ら作り上げて言語化しようとする運動こそが、哲学だと言えるのです。つまり、たいていの人間は「社会」という「現実」の中でなんとなく社会が永遠不滅の唯一の真実だと思い込ん

でぼーっと生きている。しかし、あまりにも虐げられまくっている喪男の中から、時時「こんな社会は本当の現実ではない！」と逆ギレする哲学者が現れて、新しい「俺ルール」の世界観を作り出すのです。

苦しみがなければ進歩はなく、悲しみがなければ発展はありません。

喪男でなければ、哲学を生み出すことはできないのです。

『北斗の拳』[*9]のフドウ[*10]はラオウ[*11]に教え諭しました。

「悲しみを知らぬ男に、真の勝利はないのだ」と。

同様に、僕は言いたい。

「喪の苦しみを知らぬ人間に、真の哲学はないのだ」

一元論という「王様の世界観」

そもそも**人間の文明の歴史とは、「自我を支えるための装置」の変遷の歴史**です。宗教も政治も恋愛も、すべては自我を支えるための装置です。人間の自我は生まれてきた時には「タブラ・ラサ」[*12]つまり白紙だと言われていますが、白紙のままでは人間は生きていけません。自我がないと社会生活が営めません。自我とは「自分はだれだれであり、社会の中でこういう位置にいて、こういう役割を持っている」という物語の体系です。すべての人間は自我という物語の体系を持ち、その物語の中でだけ生きていける。物語＝自我が壊れると発狂したり失踪したり自殺したりするわけです。故に物語の体系そのものを世界から一掃することはできません（18ページ図0－1）。

ところが、すべての人間の持つ物語が、その人にとって最善の……最善は無理でもせめてぎりぎり満足できるものになるかというと、そうはなりません。なぜなら自我

⑨「北斗の拳」
原作・武論尊、作画・原哲夫のマンガ。一九八〇年代『週刊少年ジャンプ』で連載された。核戦争後の荒廃した地球で北斗神拳の伝承者ケンシロウや世紀末覇者ラオウたち超人的な拳法家が（基本的に）素手で闘うという夢のようなボンクラ喪男ワールドを描いて大人気に。異常な性格と熱い魂を持った喪男たちが続々と登場して片時も目が離せない。アニメも大ヒットした。

⑩ フドウ
『北斗の拳』に登場する南斗五車星の一人。かつては人の心を持たない鬼畜殺人鬼だったが、幼女ユリアに萌え狂って回心。いきなり善人となり、以後は身寄りのない子供たちを養子に迎えて暮らす。「愛を知らない喪男が萌えに救われる」という僕の着想はフドウから与えられたのだが、よく考えると果たしてフドウに子供を預けて本当に大丈夫なのか。ちなみに身長は一〇メートルぐらいあった。

⑪ ラオウ
『北斗の拳』最強の男。ケンシロウの兄。「世紀末覇者拳王」を名乗り、乱世を武力と恐怖で平定しようとした。しかしケンシロウの許嫁（いいなずけ）ユリアに魂を奪われたためにケンシロウとむやみに対立。病魔に冒されたユリアに自分の気を分け与えた状態でケンシロウと闘って敗れる。最後は「我が生涯に一片の悔いなし！」と叫んで自決し伝説となったが、後に実は隠し子がいたことが判明してガッカリ。ユリアに操を貫いて童貞のまま死んだんじゃなかっ

は他人の自我との関係性の中でだけ自我であることができるからです。ですから、誰かがどこかで妥協しなければならない。**すべての人間が「俺様は王様でハーレムの主だ」という物語を持つことは許されない**のです。それが現実です。

いわば「現実」とは「ネットワークゲーム社会」みたいなものです。全員が王様の役でプレイできるわけではない。負ける奴もいます。スライム[*13]としてしか存在できない奴もいます。なぜなら「現実」には限られたリソースしかないからです。その限られたリソースを大勢の人間でシェアしなければいけないのです。「現実」とは、分譲賃貸マンションみたいなものです。男なら誰しも一度はハーレムを持ちたいと思うものですが、そんなことを「現実」で実現できる人間はごくごくごくごくごくごく一部です。言うまでもなく女の数が足りないからです。人類全体で見れば男のほうがちょっと多いだけなわけですから。それにハーレムの維持費だってバカになりません。市場を流通しているお金にだって限りがあるわけですし。

しかし、それでも、ハーレムを作る奴は作る。すると、一生童貞を余儀なくされる男も生まれる。王様の陰には、常に多くの喪男がいるわけです。一人のモテモテイケメンの陰に、一〇〇人の喪男がいると言ってもいいでしょう（18ページ図0－2）。

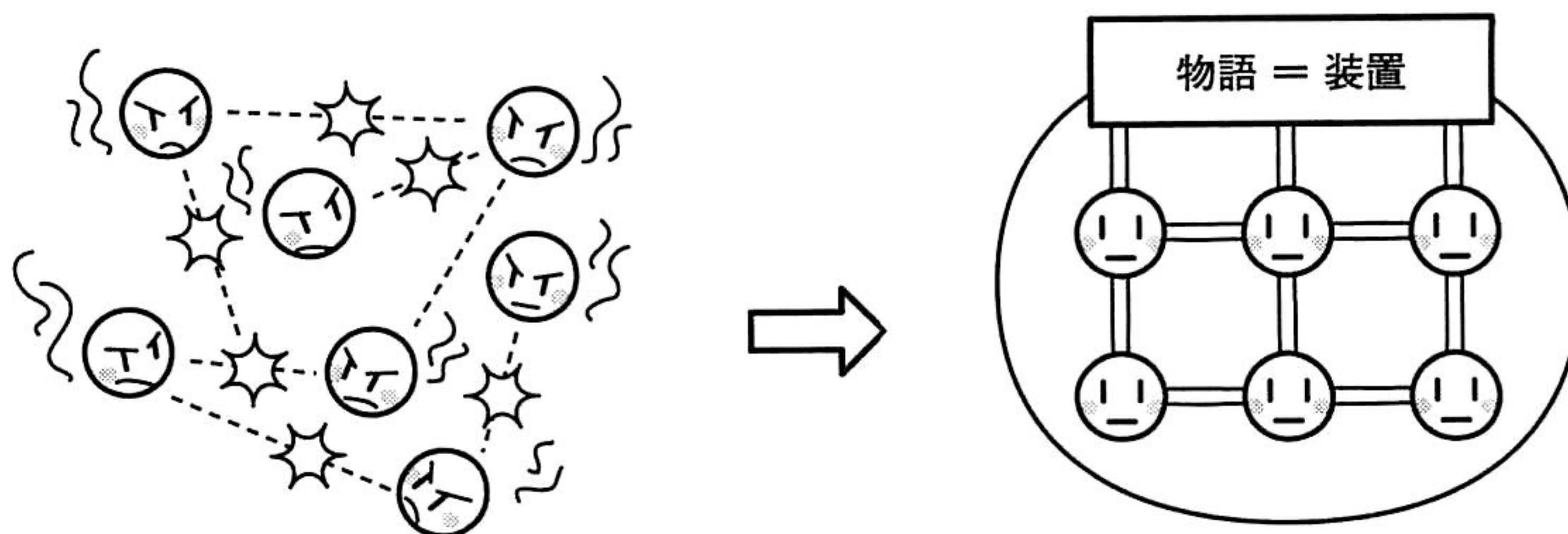
イケメンの王様は、この「現実」が永遠に続けばいいのに、と思います。当然ですな。次に、この「現実」こそが永遠不滅の真の世界なのであって、それ以外に「現実」は存在してはならない、と考えたがります。革命なんか起こされたら困りますからね。

ここに「一元論」という思想が生まれます。

一元論とは、この世はたった一つの「真実の世界＝現実」だけで構成されていて、

たのかYO！　ユリアを求めて童貞のまま闘い続けたケンシロウのほうがやはり真の伝承者に相応しい男だったというわけだったのか。

⑫　タブラ・ラサ
白い石版。「白紙」（ホワイト・ペーパー）。イギリスの経験主義哲学者ジョン・ロックは、人間はタブラ・ラサつまり何ら観念を持たない真っ白な状態で生まれてくると考えた。

⑬　スライム
『ドラゴンクエスト』などのRPGに登場するザコモンスター。ザコといえばスライム。姿は、ヌルヌル・ドロドロした固体とも液体ともつかないゲル状の物体。アメーバーが巨大化したようなもの。二〇世紀に脳内発明された。たいてい経験値稼ぎとかGOLD目当てで勇者に狩られる。直接触れるオモチャのスライムも販売されている。筆者は幼い頃にこのオモチャのスライムを収集していたのだが、当時のスライムには時間が経つと水分が蒸発して固まってしまうという欠点があった。そこで科学精神に満ちた幼い筆者は、スライムが入っているバケツの中に水を注ぎ込んだのである。するとたちまち恐ろしい悪臭が発生し、ネチョネチョに軟らかくなったスライムの表面からはボコボコと不気味な気泡が……！　筆者は、悪夢の新生物が誕生するのではないかと真剣に恐れたのだった。

自我が白紙のままでは人間は
何をやっていいのかわからず、
カオス状態となる。

文明という物語を産み出すこ
とで、これまで人間は何とか
生きてこられた。

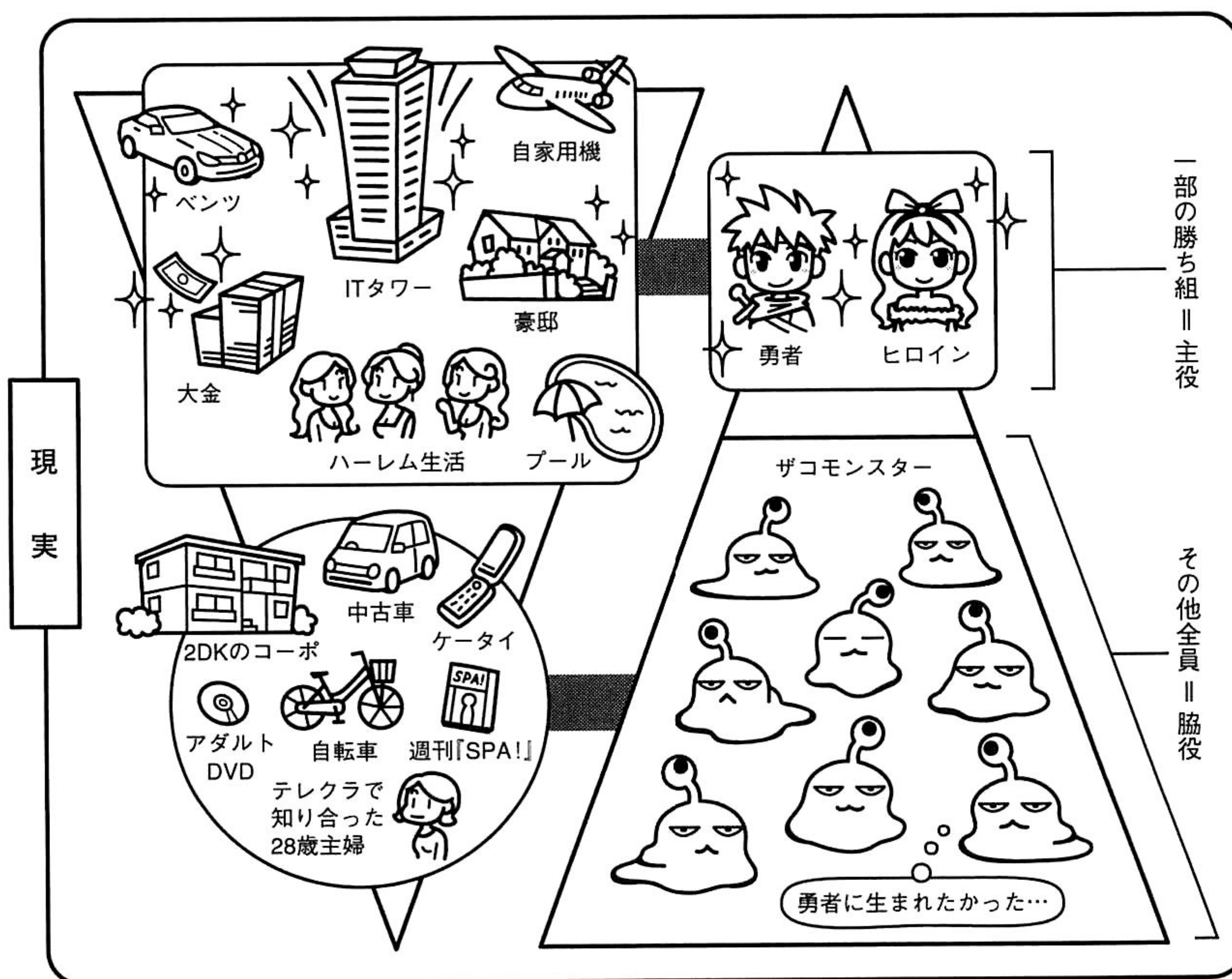
図０―１　すべての文明は自我のための物語

「現実」で主人公の勇者をプレイできるプレイヤーは、ごく一握り。そのごく一握りの勇者が、リソースのほとんど全てを独占してしまう。残りのプレイヤーは、勇者に斬られてGOLDを奪われるだけのザコモンスター。

図０―２　多くの人間にとって「現実」とは糞ゲーです

世界は永遠に何も変わらない、という思想です。これは「**王様の世界観**」です。王様の「俺ルール」[14]と言ってもいいです。ジャイアニズムです。
しかも、大多数の人間は、自分自身は王様ではないのにもかかわらず、この一元論を自分の自我の根幹に据えてしまうのです。王様に強制されたり洗脳されたりしたからという側面もありますが、むしろ自ら進んで一元論を受け入れるのです。いまいち現実に不満があったとしても、「起きてみたら革命が起きて一文無しになるかもしれない」とか「目が覚めたら甲虫になっているかもしれない」[15]みたいな流動的な世界観は自我を不安にするのです。カフカの文学みたいな世界が本当にやってきたら困るのです。
ですから、一元論はほとんどすべての人間の自我のベースになっていると言っていいでしょう。映画『マトリックス』[16]では、みんなマシーンに眠らされて夢を見ているだけなのに、その夢を「現実」だと信じていますよね。あれと同じです。

映画『マトリックス』のネオもまた喪男哲学者である

でも、時々、バグといいますか、目を覚ます奴がいるんです。「なんだよ、何が現実だよ？　みんなで同じ夢を見てるだけじゃないか、全部幻想じゃねーか！」と言い出す奴が出てきます。これが喪男です。あまりにも与えられた「現実」が辛(つら)いと、イヤでも目が覚めてしまうわけです。中には犯罪者になる人もいますが、犯罪者になって暴れる人の場合、「現実は耐えられないけど、やっぱ現実は現実だよな」というドグマの罠に陥ってしまっているのです。一方、犯罪者にならないで芸術家や哲学者になる人の場合、「現実は耐えられない。そして、現実は本当は夢にすぎない。だから

⑭　王様の「俺ルール」
例えば、ヨーロッパの絶対王制を正当化するために考え出された「王権神授説」。これによると王権は神から与えられた神聖不可侵なものなので、のび太に口出しする権利などないという。そんなバカな。

⑮　カフカ
一八八三年〜一九二四年。オーストリアの喪男作家。プラハ生まれ、プラハ育ち。「ある朝、起きたら虫になっていた。家族がキモがるので仕方なくひきこもりになる」という喪男の不条理な苦悩を描く『変身』で有名。本人は背が高くてモテモテだったが、父親がジャイアンだったためか、はたまた身体が弱かったせいか、生涯結婚せずに意固地に独身を貫いた。自分から婚約を破棄して逃げ出して後で一人苦悩することもしばしば。本書で何度も登場するように、この「婚約を破棄して逃亡して絶望する」という行動パターンは喪男作家に顕著な特徴である。代表作『変身』『審判』『城』。

⑯　「マトリックス」
一九九九年に公開されたハリウッドのSF映画。監督はジャパニメーションオタクのウォシャウスキー兄弟。兄弟揃って喪男。「この世界は実はマシーンが人間に見せている共同幻想＝夢にすぎないんだよ！　本当の世界は、イカ型ロボットと人類が洞窟で闘っているSF世界なんだよ！」「な、なんだってー！」という内容で、全世界の喪男&オタクを驚喜させた。しかし、続編ではカリスマに祭り上げられてしまった喪男の苦悩がありありと。

俺が頭の中で現実を書き換えてもいい」と気づくわけです。革命家はこの両者の中間ぐらいでしょうか。

『マトリックス』で言えば、ネオ[*17]が哲学者、モーフィアス[*18]が革命家にあたります。二人とも現実ではさっぱりモテない文字通りの喪男です。ネオは社内ニートでひきこもりのパソコンオタク。童貞臭いです。モーフィアスはオカルトオタクだったのが災いしてイケメンに彼女を寝取られています。二人とも意地でも現実から脱出したがっています。ネオなんて、本当は「アンダーソン」というショボい名前なのに、勝手に自分で「ネオ」と名乗ってるわけです。モーフィアスは「現実なんて妄想だ」という教えを信じる同志を次々と作って、武力闘争する革命家になりました。対するネオはひたすらウジウジしてるだけなので、喪男哲学者と言えるでしょう。しかし「悟り」の度合いから言えば、イヤな現実を打倒すればいいんだと思っているモーフィアスよりも、「現実を破壊すれば良いというわけではない。マシーンが支配する『現実』も、目を醒ました喪男たちが作り上げたもう一つの世界も、どちらも同じ『幻想』なのだ」と気づいて悩み続けるネオのほうがより深いわけですね。

シリーズ完結編『マトリックス・レボリューションズ』において、ネオはイケメン（映画中では「マシーン」という姿で登場します。無論、資本主義社会そのものの象徴です）が支配する現実と、喪男たちが集まっているもう一つの現実とを和解させるために、なんとイエスのように自ら十字架にかかります。ここまでくると哲学者を通り越して救世主になってしまうわけですが……。

革命家モーフィアスは「既存の悪い現実」vs.「俺の正しい現実」という世界観で動きます。つまり原始的な二元論といいますか、「善悪二元論」ですね。古い現実が夢

⑰ ネオ
『マトリックス』の主人公にして伝説の救世主。喪男。昼間はボンクラサラリーマンのアンダーソンだが、夜はネットハッカー・ネオとして「PC－GIGA」や「ラジオライフ」に怪しいCDを売って暮らしている。救世主なのでマシーンを打倒し人間を解放するはずだったが、第二弾『マトリックス・リローデッド』で童貞を捨てたあたりから急激にヘタレ化。完結編『マトリックス・レボリューションズ』では人工知能少女に萌えて「マシーンも人間も同じだよ」と言い出す。

⑱ モーフィアス
『マトリックス』の名脇役。ネオを救世主と信じて奇行を繰り返す。その過激な急進的救世主主義のために彼女に逃げられた過去がある。予言頼みなので、戦略らしきものはあまり持っていない。とにかく困ったら予言者の元へ行っていたような印象がある。

であることには気づいたけど、これから自分が作ろうとしている現実もまた夢でしかないことには気づいていません。

しかしネオは、いずれかの現実が唯一の正しい現実だとは考えません。古い現実を打倒しても、新しい現実がドグマ化されるだけで、人間の苦しみは終わらないのです。そこで、両者の和解と共存のために死ぬという選択肢を選びます。ネオの二元論は二元論の中でもより哲学的に深いレベルに達した相対主義的な二元論なのです。だが、**相対主義は、多くの人間を不安にします。**だからネオの考えはほとんどの人間に支持されませんでした。『マトリックス・レボリューションズ』のラストがファンにガッカリされたのは、そういう理由からです。ファンは、ネオが「喪男たちの本当のパラダイス」を実現させる道を教えてくれると信じていたわけです（図0-3）。

現代日本は「恋愛資本主義社会」という「現実」に支配された世界です。恋愛こそがすべて、モテこそがすべて。そんな悪夢のような前代未聞の社会が実現してしまったのです。現代では「哲学」という

イケメンは一元論
現実（三次元）
世界は
このままで
良いんだ！
¥
女
女
車
女
脳内（二次元）
この二つの世界が
だいたい一致して
いるので、世界の
変化を望まない。

喪男は二元論

モーフィアスの場合
既存の悪い
現実（三次元）
俺の正しい
現実（二次元）
悪
暴力
革命
善
マシーンを
いてまえ〜！
モーフィアスの素朴な二元論は
「善悪二元論」であり、実体論。

ネオの場合
どうすれば
いいんだ…
脳外現実
（三次元）
脳内現実
（二次元）
会社
税務署
ひきこもり
カンフー
宇宙戦争
萌えキャラ
ネオは三次元も二次元も現実でありいずれか一方だけを排除することはできないと悟り、悩み続けている。三次元を倒しても、また新しい三次元が作られるだけなのだ。

図0—3　イケメンは一元論、喪男は二元論

本来喪男が生きるために必須であったものまでが、「モテるための商品」にされてしまっているのです。現代は、喪男にとっては真の地獄です。ですから、いまこそ「哲学」が復興されなければいけないのです。哲学とは、モテない喪男による「現実認識」と「現実からの飛翔」の歩みの歴史だったのですから。本書では、「この現実は、実は幻想にすぎない」という「悟り」から「現実からの飛翔」に至る道だけでなく、その先、ネオが指し示せなかった道、すなわち「喪男のパラダイス」を、暴力革命を起こすことなく平和裏に実現する方法を探究していきたいと思います。

第一章　世捨て人の出現

Ⅰ　女からの「解脱」を説いた喪男ブッダ

なぜカースト制度が存在するか

さて、高校の倫理の教科書を開いていただくとおわかりのように、紀元前のほぼ同時期に、地球上の各地に偉大な哲学者・宗教家が同時多発的に発生しています。古代ギリシアのプラトン・中国の孔子[*1]・インドのブッダ[*2]、生年はやや遅れますがナザレのイエスです。

このうち、中国の孔子は「怪力乱神（かいりよくらんしん）を語らず」という合理主義を説いたので、「現実からの飛翔」を目的とした「喪男哲学」の系譜からは少し外れています。ありていに言えばこのような合理主義は文明がそれなりのレベルに達していて自然を克服できる力を持っていなければ、つまり人間が自らの能力に対してそれなりの自信を持っていなければ生まれてきません。つまり、当時の世界では中国の文明が一番進んでいたので、中国からいちはやく合理主義が生まれてきたのではないかと考えられます。

孔子は、人間は礼（道徳）によって理想の世界を実現できると説きました。これは、「道徳」という一定のルールを徹底させることで人間の内面世界に宿る「理想」（本書では「二次元世界」、略して「二次元」と呼びます）と人間の外界に広がる「現実」（本書では「三次元世界」、略して「三次元」と呼びます）とを合致させることが可能になる、いやむしろそれぞれの人間が持つ内面世界のほうを「現実」という巨大な物語のほうに合わせてしまえばいいのだという一種の楽観論的な一元論です。多くの人間にとっての「現

①　孔子
BC五五一年〜BC四七九年。中国の思想家。魯の国に生まれ、春秋時代に儒教教団を率いて活躍した。理想主義を唱えたので実際の政治とはかみ合わず放浪したあたりはプラトンにそっくり。しかしちゃんと子供も孫もいたあたり、プラトンやブッダ、イエスのような喪男哲学者のうちには数えにくい。代表作『論語』『春秋』。

②　ブッダ
BC六世紀頃〜BC五世紀頃。本名はゴータマ・シッダルタ。カピラバストゥを治めるシャカ族の王子として生まれたが二九歳で出家。七年ほど苦行するが、こんな極端なことをしていても悟れないと気づいて苦行を放棄。中道路線を取って悟りを開く。八〇歳の頃、キノコにあたって没した。

実」が悲惨な状況の場合、このような仕組みを維持することは絶対に不可能です。故に、それなりに文明が発達し、自然を支配していなければ、この一元論は成立しません。

これに対し、プラトン、イエス、ブッダの三人は、「怪力乱神」を語らないどころか、怪力乱神についての哲学をそれぞれ妄想した、もとい、打ち立てたと言えます。この三人のうち、日本の文化にもっとも大きな影響を及ぼしたのは言うまでもなく仏教の開祖であるブッダです。

というわけで、まずはブッダの本質が「喪男哲学者」であったことについてお話ししましょう。

ブッダは紀元前六世紀中頃に、インドの小国カピラバストゥの王子として生まれました。ブッダというのは尊称で、本名はゴータマ・シッダルタです。ブッダはまた釈迦とも呼ばれますが、これは彼がシャカ族の生まれだったからです。

ブッダ

インドにはいまでもカースト制度という身分制度があります。このカースト制度はシッダルタが生まれた時にはすでに存在していました。古代インド社会には確固とした階層ピラミッドが構築されていたわけです（図1-1）。

しかも、現代日本にはびこる「顔面カースト制度」――恋愛偏差値を基準とした人間の階層――は生きている間だけ苦しめばよいもので、死ねば終わりですが、インドのカースト制度は死んでも終わらない。インドでは、人間の魂は死後も消滅

超えられない壁
バラモン（僧侶）
クシャトリア（武士）
バイシャ（市民）
スードラ（奴隷）
このカースト制度から排除された人は、いよいよ人間あつかいすらされなくなる。
例：フィギュア萌え族（仮）

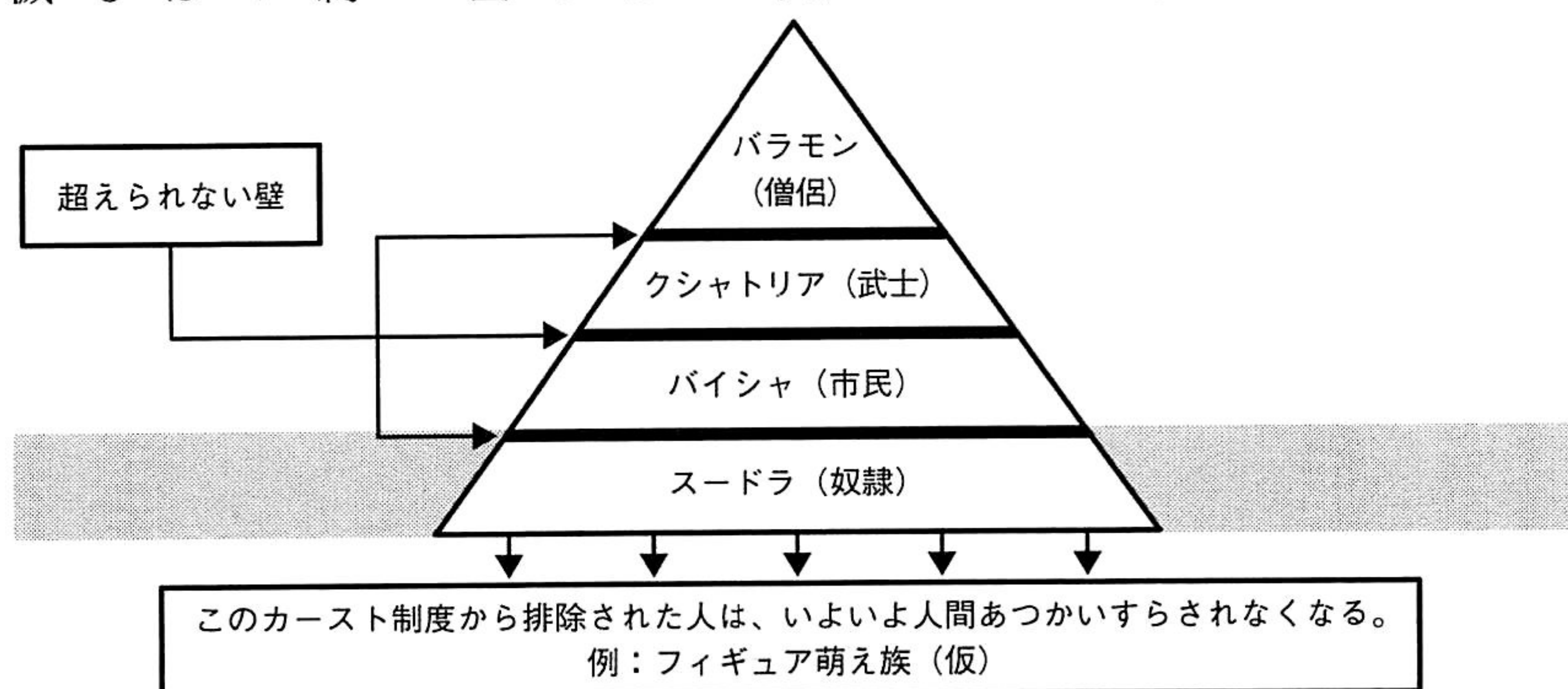



図1―1　インドのカースト制度

せずに輪廻して生まれ変わると考えられていたので、つまり人間は永久にこのカースト制度から逃れることができないというわけです。

恐ろしいですね。地獄ですね。

いったいどこの誰が、こんな酷い世界観を考え付いて、採用したんでしょうか？

そのヒントを僕は最近、摑むことができました。

現在でもインドにはカースト制度が残っているんですが、なんと数千もの身分に細分化されているそうです。大雑把に分けると四個ぐらいの身分しかないはずなんですが、いつの間にそんなに細分化されたのか。そもそも数千に分ける合理的な必然性なんてありません。

ところで、最近まで日本では「オタク」は恋愛資本主義カーストピラミッドの最下層に落とされていました。オタクというレッテルを貼られた人間は恋愛資本主義市場から締め出され、不可触民扱いされていたわけです。「オタク＝キモメン＝ロリコン＝ニート＝幼女殺人者予備軍」というような連想によるレッテル貼りが平然と行われていました。オタクという身分に、あらゆる社会のマイナスイメージがすべて仮託されていたのです。ナチス政権下のユダヤ人みたいな扱いです。つまり恋愛資本主義市場における「最下層の人間」というカテゴリーにたまたま「オタク」という言葉が使われていたわけです。

ところが『電車男』のヒットや「萌えバブル」の到来によって「オタクも案外イケてるじゃない」ということになりました。すると、掌を返したようにオタクのイメージが良くなりました。これによって恋愛資本主義市場にオタクの参入が許可されたわけです。

さて、『電車男』のヒットによって、オタク差別が軽減され、オタクの春が来ると思った人も多かったのではないでしょうか？　恋愛資本主義市場とオタク界を行ったり来たりできる、そんな世の中が来るのではないかと。

ところがもちろん、そうはなりませんでした。

今度はオタクの中に「**モテるオタク・イケてるオタク**」と「**キモオタ**[*3]」という二つの身分が作られたわけです。つまりオタクのうち、（顔が良いとか金があるといった恋愛資本主義に参加する資格を持つ）一部だけが恋愛資本主義市場に認められて「キモくない」というお墨付きをいただき、そうでないものは今度は「キモオタ」という新しい蔑称を与えられてさらに差別され続けることとなったわけです。

はい。これで、「オタク」が「オタク」と「キモオタ」に二分されましたね？　たぶんインドのカースト制度もこのような身分の分割を繰り返してきたのです。何千年もかけて分割を続けていくうちに数千もの身分ができてしまったのではないでしょうか。違うかもしれませんが。

身分制度、つまり人間を一つの価値観によって順列付けるという世界観は、常に人間に「上」と「下」を作らなければならないのです。そうしないと一番上の人間以外は誰も納得できません。人は、自分より「下」がいないと我慢できないのです。ですから、今まで「下」だと思われていた人々の地位が上昇してきたら、さらに「下の下」を作るのです。それによって「人間には常に上と下がある」という価値体系を維持するのです。どんどん地下階層を掘り下げて増築していくことにより、「下」に追いやられた人間も「まだ下には下がある」と思うことで優越感を得られるという仕組みです。「一番下」以外の人間は、みんな、自分より下の人間がいると思うことで不

③　キモオタ
「キモメン」（ブサイクで気持ち悪い男）と、今地球上で最もクールな趣味である「オタク」の両方の属性を持っている勇者のこと。つまり僕です。なぜかモテませんが、それは日本の若い女どもがプラトンもニーチェも知らない愚か者だからです。

平等感から目をそらすのです。

「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と福沢諭吉は言いましたが、僕はこう言いたい。

「**人は人の上に人を作り、人の下に人を作る**」と。

インドではこのような身分体系が死後も永遠に続くのですから、それはもう恐ろしい話ですよ。生き地獄どころか、死んでも地獄です。この世に絶望したからといって自殺しても絶対に救われない。

ブッダの「悟り」と「電波男」

さてシッダルタ自身はクシャトリア（武士）という高い身分で、しかも王子様ですから、生まれながらの勝ち組と言ってよい人です。ただし、ピラミッドの頂点ではありません。クシャトリアの上にはバラモンというエリート階層がありまして、これはつまりバラモン教*4の宗教家たちのことです。また、シッダルタの生まれたカピラバストゥ国は弱小でいつ滅んでもおかしくなかったのです。いまの学歴社会にたとえれば、東大に入れず早稲田の文学部に入りました、あっでも文学部そろそろ潰れそう、ぐらいの微妙なポジションですね。なんと言いますか結構辛いですね。

シッダルタは若い頃から国を捨てて出家したがっていたらしいです。出家というのは、現実社会（俗世）における縁のすべてを捨てて、修行者としての生活に入ってしまうことです。そこで父親の王は、シッダルタに酒池肉林のハーレム生活を与えて出家を思いとどまらせようとしたのです。春・夏・冬それぞれの季節専用に別の建物を建ててシッダルタを住まわせたとか言います。羨ましいです。もちろん王子様ですか

④　バラモン教
古代インドの宗教。カースト制度を特徴とする。バラモン（司祭）が最も偉く、次にクシャトリア（武士）。その下にバイシャ（庶民）、スードラ（奴隷）と続く。バラモン教の階級制に反発したところから仏教やジャイナ教などの新宗教が生まれた。

ら女はよりどりみどりです。当然、奥さんもいました。父王はシッダルタをヤリチンのＤＱＮ[*5]、つまり現世快楽だけを追いかける人間に育てることで、この世ならぬ世界を追求する修行者になる道を思いとどまらせようとしたのでしょう。

こんな恵まれた環境だったのにもかかわらずシッダルタは体が弱く、いつも寝ていたそうです。この不健康ぶりが、せっかくハーレムを持っていたのにシッダルタが喪男になった一因でしょう。館を季節ごとに作ったのも実はシッダルタの健康不安が理由だったそうですし。体が弱いということは、性欲も通常の男よりずっと少なかった可能性がありますね。子供も一人しか作っていませんし。

しかも、シッダルタは奥さんが妊娠したと知るや否や、その子供に「ラーフラ」(障壁)という酷(ひど)い名前をつけます。芥川龍之介[*6]なみの喪男です。そして、さっさと城から逃げ出して出家してしまいます。シッダルタが出家を決意したのは、「年老いる苦しみ」「病の苦しみ」「死の苦しみ」を目の当たりにして、「人生とは、苦しみである」と知ってしまったからだと言われます。

さらに、ここに「生の苦しみ」が追加されます。

この「生・老・病・死」の四つの苦しみを「四苦」と言いますが、病気や死はともかく、生まれることまで苦しみというのが凄いですね。喪男ですね。ハーレム暮らしの王子様という身分でありながら「生まれること自体が苦しみだ！」という喪男にしかわからない境地に到達できた点に、シッダルタの凄まじい喪男ぶりが示されています。なぜ生まれることが苦しみなのかというと、たぶん、「生まれてこなければ病も老いもなく、死ぬこともなかった」という理由でしょう。ほとんど『ボヘミアン・ラプソディ[*7]』ですね。

⑤　ＤＱＮ
ドキュン。動物化した人々。狭義にはヤンキーとかその筋の人のことを指す。

⑥　芥川龍之介
一八九二年〜一九二七年。日本を代表する喪男作家。『戯作三昧』や『地獄変』などの作品を書いて「現実よりも小説のほうが大切だ！」と唱えた芸術至上主義者＝二次元至上主義者。しかし自殺した義兄の家族を養わねばならなくなり借金返済に追われるといった現実に圧迫され、三五歳の時「ぼんやりした不安」のために自殺。代表作『鼻』『羅生門』『藪の中』『蜘蛛の糸』『河童』。

⑦　「ボヘミアン・ラプソディ」
1：クィーンの曲。一九七五年『オペラ座の夜』に収録されている。全英チャート九週連続一位。四人のバンドメンバー全員の顔に下からライトを当てて歌うというキモいプロモーションビデオでも有名。ゾロアスター教の家系（！）に生まれ、九一年にエイズで死んだフレディ・マーキュリーによる歌詞は、とてつもなく喪。「ああママ、死にたくない。僕なんて、生まれて来なければよかったのに」。カラオケに入っているがオペラハートをどうしても一人で歌えない。喪男友達がいれば映画『ウェインズ・ワールド』のガース&ウェインのように一緒に歌えるけど……。
2：ウンガロのスタンド。

シッダルタは二九歳で出家し、三五歳でついに解脱しました。三五歳といえば僕が『電波男』を出版した歳と奇しくも同じです！　きっと**三五歳という年齢は、喪男が一本切れるお年頃**なのでしょう。

解脱とは、この世の真理を悟ることによって、シッダルタがこの世の法則、すなわち「輪廻」の輪から永久に自由になった、ということです。つまり、死んでも永遠に続くカースト制度という無限の地獄から、シッダルタは抜けたわけです。「俺は輪廻転生という『現実』からいち抜けた！」と宣言したわけです。これによってシッダルタは「ブッダ」と呼ばれることになりました。

当時修行していた人々は、みなこの解脱を最終目標としていたようです。「ブッダ」とは、実はシッダルタ本人の呼称ではなく、そもそも「解脱した人」という意味の一般名詞だったそうです。現代で言えば、そうですね、「電波男」という程度の意味ですね。電波男という言葉も、恋愛資本主義の顔面カースト制度から「抜けた」「解脱した」という意味ですからね。

もちろん、僕は別に自分がお釈迦様のように偉い人だと言っているのではなく、ブッダ＝シッダルタが「喪男」であり、ブッダの悟りとは「喪男がイヤな『現実』から解脱した」ということなのだ、と言っているのです。つまり**ブッダは別に偉い人ではない**のです（もちろん、ハーレムを捨てて解脱したという点では実に立派な人です。僕がモテなくてひきこもり[*8]続けた結果しぶしぶ居直ったのとは大違いです）。

にもかかわらず、いまでも多くの人間が喪男ブッダを何か途方もなく偉い人だと勝手にカリスマ視しています。これこそ、人間を縛っているドグマ[*10]の働きなのです。例えば昔、ジョン・レノン[*9]が「ビートルズはイエス・キリストより有名だ」とかなんと

⑧　ひきこもり
家に閉じこもって外に出ない人のこと。滝本竜彦の小説『ＮＨＫにようこそ』でメジャーになった言葉。少々家の外に出られようが、学校や職場へ行かない場合はひきこもりに認定される。僕は二〇年前からずっとこれです。

か言って袋叩きに遭いました。ところが、「自分をキリストになぞらえるとは、なんという思いあがりだ」と叩かれたジョン・レノンだったのに、いざ死んだら今度はファンたちによってカリスマにされてしまいました。人間のやることは、いつも同じなのです。ジョン・レノンがビートルズやら何やらをすべて捨て去ることでやっと発見した「イマジン（妄想してみようよ）」という「喪男哲学」を、自らも「知る」こと（自分自身が「現実というドグマ」から解脱すること）だけが本当に必要なことなのに、ほとんどの人間は自らが解脱しようとはせず、個人を勝手にカリスマとして祭り上げてしまうのです。

こういう人は必ず大勢出てきます。

「人間に上下はない」という言葉を理解せず、「人間に上下はない」と言った人間をカリスマ視して自らの「上」に置き、彼のカリスマ性を認めない人間を自分の「下」に置こうとする。

こういう人は、何もわかっていないのです。

僕はシッダルタ＝ブッダを「喪男」としてのみ認識しているのであり、彼を「救世主」や「教祖」「偉大なカリスマ」「神様仏様」としては認識していません。そもそも本書に登場するすべての喪男は等しく「喪男」なのであり、そこに「人間の身分の上下」はないのです。この問題については本書で何度も説明します。そもそも、そのような価値観をすべて否定するのが「解脱」であり「哲学」なのです。

「モテの魔の手」と「護身」

話をシッダルタに戻します。当時、多くの修行者は苦行によって解脱しようとして

⑨　ジョン・レノン
一九四〇年～八〇年。イギリス・リヴァプール生まれ。ビートルズを結成して一躍世界のアイドルに。うっかり「キリストより俺たちのほうが有名だ」と言ってしまってアメリカで大バッシングを受け、謝罪させられた。ああ恐ろしい。ビートルズのリーダー的存在だったが、途中からオノ・ヨーコ萌えに転向。ビートルズを解散し、平和活動に参加したりハウスハズバンドになったりした。八〇年、「俺こそが本物のジョン・レノン」と思いこんだ狂信的なファンにダコタアパートで射殺された。代表作『ジョンの魂』『イマジン』。

⑩　ビートルズ
一九六〇年代に活躍したイギリスのロックバンド。七〇年に解散。メンバーはジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スターの四人。かつて日本ではなぜかビートルズの曲が『ひらけ！ポンキッキ』のBGMとして使用されたり、角川の横溝正史映画のテーマソングに使われたりしていたので、六〇年代なんか全然知らない僕も幼い頃にビートルズを刷り込まれて育った。恐るべしテレビの洗脳。代表作『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』『マジカル・ミステリー・ツアー』『ラバーソウル』『リボルバー』『アビイ・ロード』。

いたわけですが、シッダルタは「苦行はしんどい」と言い出して途中でやめてしまいました。痛いし、おなかもすきますからね。断食を途中で投げ出して、スジャータという女の子から粥（かゆ）をわけてもらったそうです。ロリコンかよ。いやもう本当に喪男ですね。もちろん苦行仲間に嫌われてグループを追い出されました。当たり前ですな。

手塚治虫[11]先生のマンガ『ブッダ』[12]では、シッダルタはその後、スジャータに結婚を迫られた、つまり「モテの魔の手」[13]に襲われたことになっています。さすが手塚先生ですね。苦行しても無駄だと悟ったのはいいが、そこでそれまで一切の「モテ」を放棄して「護身」[14]していたシッダルタの心に「モテてもいいかな」という油断が生まれた。スジャータには死にかけてたところでメシおごってもらったし……と、まあ、手塚先生はそういう心理がシッダルタの中に生まれたであろうと妄想したのです。

言うまでもなく「解脱」のためには「モテの魔の手」を排除する努力、つまり「護身」が必要です。ハーレム暮らしを続けながら解脱できるほど世の中は甘くない。当時のインドでは、解脱するためには出家して山の中にひきこもり、修行することが必要だと考えられていました。毎日女の子とセックスしていたら、解脱なんかできるはずありません。当たり前ですが。**「モテ」は「解脱」の最大の敵**だったのです。山の中にひきこもるのも、モテの魔の手から修行者自身を守る護身の意味を持っていたでしょう。それ以外にも、社会から隔絶することで、「現実」を遠くから客観視しやすくなり、現実からの離脱＝「解脱」の境地に至りやすくなるという利点（利点なのだろうか？）もあったと思います。

苦行をやめたシッダルタは、瞑想（と言えば聞こえはいいですが、要するに「ひきこもり」）を始めました。そしてその結果、シッダルタは「すべては幻想である」と

⑪ 手塚治虫
一九二八年〜八九年。日本を代表する萌えマンガ家。一〇八個あると言われている萌え属性のすべてを一人で開拓した「萌えの神様」。幼い頃から宝塚歌劇に親しみ、何らかのスイッチが入る。戦時中も軍事教練をサボってマンガを描いたりしていた。大阪大学医学部に進み、タニシの精子の研究などにいそしむ。以後、医者とマンガ家の二足のわらじを履くが、アニメ制作の夢を追うために専業マンガ家となる。言うまでもなく生涯ただ一度の恋愛もなかったと豪語する凄腕の喪男。奥さんとは見合い結婚だが、手塚先生本人は「僕をお兄ちゃんと呼んでいた幼なじみだ」と言い張っていた。先生、それは脳内設定です！『鉄腕アトム』のヒットでマンガ界の頂点に上り詰めた手塚先生は、いよいよ虫プロを設立して念願のアニメ制作を手がけるもあえなく倒産、無一文となる。この絶望の淵で手塚先生は『ブラックジャック』という自分自身がモデルの孤独なキモメン医者マンガをヤケクソで描き始めるが、作中に登場した萌えキャラ「ピノコ」によってブラックジャックと子どもも救われ、「マンガの神様」として奇蹟の復活を果たした。遺作はドイツを代表する二大喪男、ファウスト博士とベートーベンをリスペクトする『ネオ・ファウスト』と『ルードウィヒ・B』。

⑫ 「ブッダ」
手塚治虫のマンガ。ブッダの伝記だが、手塚流にアレンジされていて前半から中盤にかけてはほとんどオリジナルに近い。ブッダの友達や弟子は、戦争大好きなタッタ、両目を焼かれたミ

いう真理に到達したわけです。これが「解脱」です。

　インド哲学では、人間はアートマンという実体を持った永久不変の「現実」であると考えられていました。だから人間は死んでも輪廻転生の輪から永久に逃れられないのです。しかしシッダルタはひきこもりの果てに「全部、気のせいじゃねえかYO！」と気づいてしまった。アートマンなどという実体は実はどこにも存在せず、故に輪廻もまた存在せず、自分自身の自我すら永久不滅の実体ではない。「諸行無常」だというのです。自我とは、実は他者との関係性によって生まれてきた相対的なものにすぎないのです。すべての事象は他者との関係性によって成立している。これが「縁起（えんぎ）」です。故に「実体としての自我」「永遠不滅のアートマン」は幻想にすぎないのです。つまり「死んだらそれまでよ宣言」です。

　シッダルタはインドの中心で**「お前らの信じている『現実』は、実はただの妄想だ！」**「死んだら全部消えるんだ！」と叫んだのです。『マトリックス』のネオがやったことを、二千数百年も昔の古代インドでやらかしたわけです。こんな喪な思想、いまの世の中で唱えたって石投げられます。今風に言えば、価値相対主義の走りみたいなことを言い出したわけです。

　残念ながら現代日本で僕が同じことを言っても大勢の人間から「負け犬の遠吠え」とか「キモオタの自己正当化」と言われて鼻で笑われるわけですが、シッダルタはなにしろ元々が王子様ですから、これは実に説得力があるわけです。自ら勝ち組セレブのハーレム暮らしを捨てて「すべては幻想だ」と唱えているわけですから。というわけでシッダルタ＝ブッダのもとには大勢の弟子が集まりました。以後、ブッダは弟子たちを「解脱」させるためにあれこれ活動したといいます。でも、本当はさっさと死

ゲーラ、自分で自分の目を焼くデーパ、悪魔の息子アナンダ、自分の身体を虎に食わせるアッサジ、狼に育てられた後女装させられていたダイバダッタ、キモメン巨人のヤタラ、頭が「イレイザー・ヘッド」なアジャセ、人語を話さず四つ足で歩き山にひきこもっているナラダッタなど、喪男喪女のオンパレード。こんな困った人々に囲まれてシッダルタが「あーっ！」「うーっ！」と苦悶している中盤までは最高に面白いのだが、悟りを開いて喪の苦悩から解脱してからはあまり盛り上がらないような気がする。

⑬ モテの魔の手
喪男に降りかかる受難のうち、最も恐ろしいものの一つ。モテるはずのない喪男が急にモテてしまった場合、たいてい、裏がある。そして、多くの場合、様々な厄災が降りかかる。イエスもブッダもプラトンも、モテの魔の手から自らを守ること（護身）に腐心していたし、弟子たちにも護身を強く勧めていたと思われる。

⑭ 護身
モテの魔の手から自らの純潔を守る行為。またはそのための技術。護身に失敗した喪男にはいろいろな厄災が降りかかる。うっかり売春宿に行って梅毒に感染したニーチェは発狂し、しぶしぶ見合い結婚して子供を作らされた芥川は自殺した。護身技には、「出家する」「ひきこもる」「少年愛を語る」「婚約を破棄して逃げる」「絶対に安全な相手を見定めて結婚する」「たとえ籍を入れても家には戻らない」などがある。しかし後者の二つは真性喪男には難しい。

んでしまいたかったのだそうです。全部幻想なんだから、生きてたって意味ないわけです。ではなぜブッダは、死なずに弟子たちに「解脱」の方法をコーチし続けたのでしょうか？　これについては後で考察します。

人類史上最強の喪男

本来、元々がキモオタだろうが六本木ヒルズ族のイケメンであろうが、言っていることが同じであれば等しく同じ説得力を得られるはずです。しかし、残念なことに、竹内一郎先生の言う通り**「人は見た目が9割」**[*15]。恐らく、当時シッダルタと同じようなことを言っていた宗教家は他にも大勢いたはずです。それなのにシッダルタだけがメジャーになれたのは、やっぱり元がイケメン王子だったからだと思います。実際、ブッダのいとこのダイバダッタがブッダの弟子を奪って分派を作ったのですが、こっちはあまり繁盛しませんでした。

「ハーレム」という地上最高の極楽浄土に生まれながら、ハーレムを捨て、妻子を捨て、息子に「障壁」なんて名前を付けて逃げ出したシッダルタの喪男ぶりは、人類史上最強喪男の称号を与えたくなるほどに強烈でした。「貧乏人の僻み」だと誰にも言わせないわけです。「ハーレム」という地上最強の「モテの魔の手」を撥ね退けることによって、シッダルタは「この世界はすべて幻想である」という真理に到達し、ブッダになることができたわけです。もしシッダルタがハーレムに満足していれば、出家もせず、「この世は幻だ」という真理を見つけることもなかったのです。たぶん雑誌の広告に出てくる「金貨風呂」に入ったオッサンのように「この世は極楽じゃ〜っ」と言っていたことでしょう。

⑮「人は見た目が9割」
新潮新書。竹内一郎著。非言語コミュニケーションの入門書。帯には「理屈はルックスに勝てない。」の一言が。二〇〇五年のベストセラーになった。

喪男が自らの仕事を成し遂げる上で、もっとも恐ろしい障壁がこの「モテの魔の手」です。もし僕がシッダルタだったら、一生ハーレムで酒池肉林のエロ生活を満喫していたことでしょう。断言できますとも。いくらなんでも、王様ハーレム生活を目の前にポンと差し出されたら、それを蹴り飛ばす度胸は僕にはありません。ましてシッダルタは生まれながらの王子。いったいどこで「喪男の魂」に目覚めたのか、現代人の目からは窺(うかが)い知れないところがあります。

さて、そんなブッダですからもちろん女性を忌み嫌いました。最初、ブッダは女性信者の出家を拒否していました。「女なんかが俺のサークルに入ってきたら、サークルクラッシャー[*16]になっちまうわ！」という護身の本能が働いたのでしょう。なにしろハーレム生活が長い人ですから、女性に対して何の幻想も抱いていません。むしろハーレム生活に幻滅して現実の女性に対して何らの希望も期待も抱けなくなったせいでています。シッダルタのハーレムでも、いろいろとイヤーなことがあったに違いないのです。息子だって、本当に自分の子供かどうかもわかりません。DNA鑑定とかない時代ですから。もしかしたら嫁が浮気してよその男の子供を生んだために世をはかなんで出家したかもしれないのです！

「すべては幻想である」と言い出したような気がします。ハーレムが楽しいなんてのは二次元の世界だけの話で、三次元のハーレムは恐ろしくドロドロしていたに決まっ

さて仏典によると、弟子のアナンダが「人間みな平等なんですから女も受け入れましょう」とブッダを言いくるめて、女性信者の出家を許可させたといいます。それでもブッダは、女性信者と男性信者が過度に接近しないよう、あれこれと規制を設けて女性信者を警戒し続けたそうです。女人(にょにん)、ついに往生しがたし。[*17]ブッダは女のほうが

⑯　サークルクラッシャー
サークル内のいろんな男と寝て、人間関係を破壊する女。文系サークルに多い。急にモテたら、まずこれを疑うのだ。

⑰　「女人、ついに往生しがたし」
古代インドでは女体は穢れているので女人は悟れないと考えられていたらしい。ひ、酷い……。「法華経」の「提婆達多品」（だいばだったぼん）によると、女人には五障があるので往生しがたいそうである。しかし、「変成男子」つまり男の子に変身すれば往生できるとか。宝塚かYO！

男よりも悟りから遠いと考えていたようです。いまの世ならフェミニストに抗議されるところですが、ハーレム時代によほど辛い目に遭ったのでしょう。

僕は本書で「真に哲学と呼べる哲学は、すべて『喪男哲学』であり、モテのための哲学はニセの哲学である」と主張しているわけですが、その意味では現世のハーレムを捨てて女人を遠ざけたブッダをこそ「哲学の開祖」と呼んでいいと思うのです。

なお、ブッダが信者を増やしていくにつれ、いまの世の中と同じでやっぱりスキャンダルに巻き込まれたりしました。中には**「ブッダに孕まされた」と言いがかりをつけてきた女もいた**そうです。お、女はおっかねえ、女は信用できねえ。また、「ブッダが女を殺した」というデマが飛んだこともあったそうです。いずれも敵対勢力による悪質な嫌がらせだったらしいのですが、この手の妨害活動の大半が「女がらみ」というのがまた怖いです。つまり当時のインドでも現代と同様に「解脱」と「モテ」は相反するものとして捉えられていたのでしょう。解脱したブッダが女を自分から遠ざけようとしたのは当然と言えるのです。

哲学の普及を阻む「組織化」「カリスマ化」「体系化」の三点セット

ところが結局、インドでは仏教は廃れてしまいました。一方、カースト制度を擁するバラモン教はヒンズー教[18]に形を変えて存続し続けました。ブッダもまたバラモンの神々の一人ということになり、カースト制度は結局そのまま現代まで残ったのでした。シッダルタの「あなたたちが現実だと思っているその現実は、すべて幻想である」という「喪男の叫び」は、結局、インドの人々を救えなかったのです。

なぜこうなったのでしょう？

⑱ ヒンズー教
インドでバラモン教から発展した宗教。四世紀頃に成立。カースト制度を引き継いでいるが、善行を積めば来世で上のカーストに行けるそうだ。つまり、生きている間はカーストを昇ることができない。何だそりゃ。

⑲ 「宗教はアヘンである」
マルクスが『ヘーゲル法哲学批判序説』で唱えた説。レーニンが真に受けたためにロシアは大変なことになった。

⑳ 「ジギー・スターダスト」
一九七二年。イギリスのグラムロッカー、デビッド・ボウイの作品。あと五年で地球が滅びるという世紀末の時代に、宇宙人ジギーがバンド

「すべてが幻想だ」という思想は、人々に大いなる不安を与えます。「この世は唯一絶対の現実であり、従って永遠に世界は続く」という一種の誇大妄想こそが、人間が発狂せずに生きていくための最高の精神安定剤になっているからです。

「宗教はアヘンである」[*19]とはよく言ったものです。一つの価値観を「唯一絶対の正しい真理」だと思い込んで信じ続けることによって、人間は自我の安定を得られるのです。「一切は流転する、自我すら幻想であり、死んだら何も残らない」などという相対主義的な価値観をそのまま受け入れて生きていくことは、ほとんどの人間には不可能でしょう。故に、ブッダが発見した「すべては幻想である」という悟りの境地は、結局、大衆化・普遍化されることはありませんでした。

ブッダの死後に起きたことは、「教団の組織化」（現実社会へ取り込まれる）、ブッダ自身の「キャラクター化・カリスマ化」（ブッダに対する個人崇拝）、そして果てしない「神学論争」（教義自体が体系化され、体系を作ることそのものが自己目的化される）、「教団の分裂」、というお定まりのコースでした。これは、ブッダ、イエスから『ジギー・スターダスト』[*20]、『メカニカル・アニマルズ』[*21]に至るまで続く問題なのです。

哲学の普及・伝播を阻む「組織化」と「カリスマ化」と「体系化」、この三つの現象は、多くの人間がいつまでもブッダの境地、「すべては幻想である」という「事実」に到達できないでいる原因となっています。結局、人間にとっては、真実の認識よりも自分自身の自我の安定こそが目的にならざるを得ませんので、組織を作り、個人をカリスマとして崇拝し、物語の体系を作ってその中に潜りこむことで自我を安定させようとするわけです。ブッダなんてどんどん超人化されていって、ついには「歯が四〇本生えている」「体毛が金色である」「口の中が広く正方形である」などなど「仏の

「火星から来た蜘蛛」を引き連れ、人類の救世主スターマンとして降臨し、電波で子供たちを洗脳してロック・スターに成り上がる。しかし次第に乱行沙汰やエゴの肥大によってジギーの人気は急降下しバンドは解散。ジギーは哀れ、ロックンロールの自殺者に……。という、どうにも文章で説明しようがないストーリーのコンセプト・アルバム。才能に乏しく、なかなか成功できなかったボウイの歪んだ喪男精神が「ジギー」（屈折）という名の宇宙から来た喪男カリスマを生み出したのだ。しかし、スターダムにのし上がったとたん、ボウイは「ジギーは死にました」と言い出してそそくさと逃げ去った。早く逃げないと狂信的なジギーファンに抹殺されると思ったのだろうか。こうしてグラムロックはボウイ自身の手で破壊されたのだった。

㉑「メカニカル・アニマルズ」一九九八年。アメリカロック史上最喪男、いまだに高校でイジメられていたことを恨んでいるマリリン・マンソンの作品。マリリンは「萌え」の象徴、マンソンは「喪」の象徴だろう。魂を体制側に売り渡してしまったマンソンは、両性具有のキモロボット「オメガ」に改造されてしまい、「オメガとメカニカル・アニマルズ」というバンドを結成してドラッグ&セックス三昧。ジギー・スターダスト+アラジン・セイン+ダイアモンド・ドッグズの「ボウイ・グラム三部作」オルタナティヴ版といった感じです。ジャケットのふたなりオメガ、マジキモッ！なおマンソンは二〇〇五年に人間と結婚してしまった。絶望した！

三十二相」まで行きました。萌え属性を三二個も同時に持ってるキャラなんてアキバにもいないですよ（図1－2）。

二〇世紀のインドでブッダと同じようなことを説いていたクリシュナムルティ[22]は、自分の教団を解散しました。彼は子供の頃に教団に拾われて教祖の座を与えられたのですが、**教団なんか有害無益なので潰したほうがいいと考えた**のです。自分を崇める面面を放逐したのです。喪男にも程があります。

クリシュナムルティの言っていたことも、ブッダと同じです。「すべては幻想である」という話です。自分自身の意識、思考、欲望、それらのすべてを客観的に観察し続けることによって、自我そのものが幻想であることを知ることができ、欲望は消える。これがクリシュナムルティの思想でした。しかし、結局、せっかく教団を壊したのにまたしても活動のために組織が必要となり、その組織は彼の死後も残ったのでした。ただブッダ教団のように組織が巨大化しなかったのは、クリシュナムルティが一度教団を潰したりして自らの喪男哲学の組織宗教化をとことん避けようとした努力のたまもの（？）でしょう

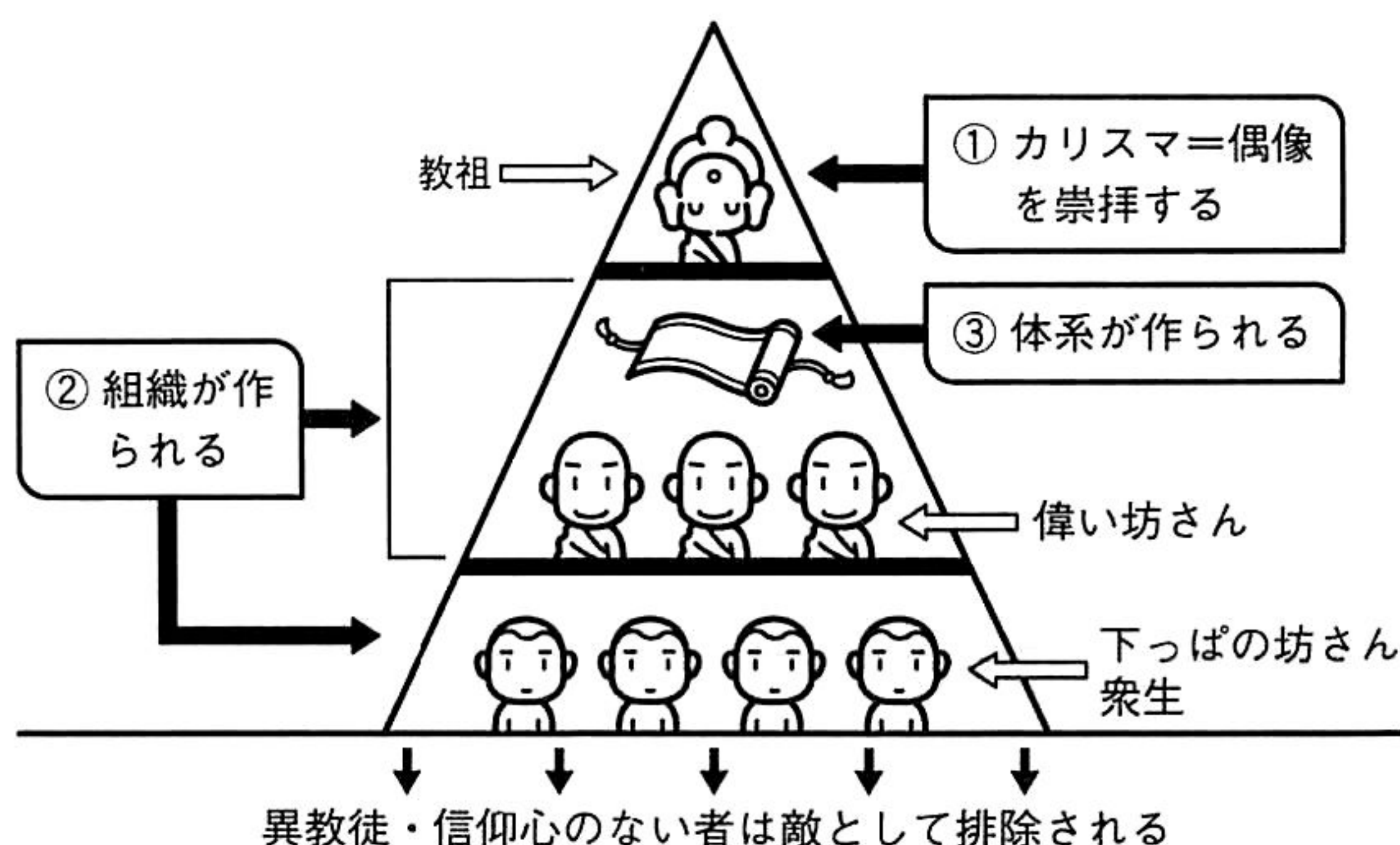



図1－2　喪男哲学が組織宗教化されるまで

か。

「喪男哲学」が「組織宗教」へ変質していく背景には、この「組織化」と「カリスマ化」と「体系化」という三つの原因があるわけです。これらをひっくるめて、「哲学のドグマ化」と呼んでいいと思います。本当に必要なことは「すべては幻想である」という悟りの境地に各個人が自分自身の努力（?）によって到達することであるはずなのに、それ（すべての人間が解脱できる方法を発見して普及させる事業）を成し遂げた喪男は残念ながらいまだかつて地上に存在しないのです。

　なぜ存在しないのかというと、そんなことは不可能だからです。完全な相対主義は、自我そのものを崩壊させてしまいます。「すべては幻想である」と考えること自体に人間の自我は耐えられないのです。

　ですから、その事実に気づいたとしても、それでもなお何らかの形で自我の体系を持ち続けていなければ人間は崩壊します。ブッダにしてもクリシュナムルティにしても、本当は何らかの自分なりの世界観・価値観を持っていたはずです。そうでなければ生きていけません。

　ブッダの場合は、より多くの人間に自分が知った「すべては幻想である」という事実を知らせたいという使命感・情熱によって生きていたのだと思います。なにしろ八〇歳前後まで生きたそうですから、当時としては非常に長生きです。ただ単にすべての人生の目的を捨てて「すべては幻想だ」とブツブツ言い続けていただけなら、こんなに長生きしていないでしょう。本当は死にたかったんだけど、他の人に「解脱」を教えなければならないので生き続けた、みたいなことを本人も言っていたようです。ところがこのブッダの努力が、ブッダ教団の宗教組織化を招き、せっかくの喪男哲学

㉒　クリシュナムルティ
一八九五年～一九八六年。インド生まれ。子供時代、当時隆盛を誇っていたオカルト系団体・神智学協会に拾われて水瓶座時代の救世主として育てられ、「星の教団」の教祖にされる。しかし一九二九年（三四歳!）に「救いは自己の内部にあり、組織は何ももたらさない」という喪男哲学の真理を開陳してさっさと自分の教団を解散。自らの苦悩に直面しようとせず、カリスマに救ってもらおうとする信者たちによほど嫌気がさしたのか。これで神智学協会はボロボロに。喪男哲学者が宗教の教祖に祭り上げられてしまうというパターンは多いが、その逆（教祖の座を捨てて一人の喪男哲学者に戻る）は滅多にない。クリシュナムルティは以後、組織を作らずに個人として説法・対話などの活動をしたそうな。著作を読むと、たいていは相手がバカなので怒っている。

が組織宗教へとすり替わってしまう原因になってしまったのです。

それじゃブッダは「解脱」した時に絶望先生[23]の如く首を吊ればよかったのかといわれると、もちろんそうではありません。多くの人間が「現実」に囚(とら)われて苦しんでいるという状況を無視してそんな身勝手なことをするなんて許されません。

じゃあ、どうすればよかったのでしょう。そうです、自らの解脱体験をドグマ化させることなく、「方法論」だけを人々に教えればよかったのです。もちろんブッダはそれをやろうとしていたのですが、組織が生まれると必ず「教団」そのものの維持と発展を目的にする人間、カリスマにくっついて栄達しようとする人間が現れるのです。ダイバダッタのようにブッダのシマを横取りしようとする奴まで出てきます。「派閥抗争」です。組織が巨大化すると、必ず派閥抗争が起きて、組織が分裂します。そしてその分裂が、終わりのない対立の原因となってしまうのです。すべての人間が解脱できる世界を実現するのは、本当に難しいのです。

㉓　絶望先生
『週刊少年マガジン』の連載マンガ『さよなら絶望先生』の主人公。本名は糸色望。横書きすると「絶望」と読める。何を見てもすぐに絶望する性格。作者は『かってに改蔵』の久米田康治。

喪男哲学は現実への本物の怒りと悲しみから生まれる

それはさておき、ハーレムという現世快楽の最高峰ともいうべき環境を捨てて「解脱」というライフスタイルを実践したことが、喪男哲学者ブッダ最大の功績でしょう。

「モテたい」という欲望は、結局のところ、「モテる／モテない」という価値体系を生み出し、人間に上下の身分関係を作ります。モテ欲だけではありません。会社で出世したいとか、いい大学に入りたいとか、お金を稼ぎたいとか、そのような欲望はすべて勝敗を生み、人間をカースト化します。ブッダはそれらの欲を全部ドブに投げ捨

てたのです。いわば、**「ひきこもりニートとして生涯を過ごす」という人生を自ら選択したの**です。いまの日本なら新宿の公園で寝泊りしてヤンキーに狩られるような人生になってしまいますが、当時のインドでは出家者は在世の人々から尊敬されていたので、お布施（ふせ）を貰えたのです。これは、多くの人が「この現実世界は地獄だ」と苦しんでいたからでしょう。もちろんすべての人が出家するわけにはいきませんでしたが、可能なら出家して解脱したいと願う人がいまの日本よりも大勢いたわけです。

　当時のインドは乱世で、複数の国が対立して戦争をしていました。弱い国は次々と滅亡します。国内でも、王子が父王を幽閉して王座を奪った、みたいな話が仏典にわらわら出てきます。ブッダの祖国カピラバストゥもブッダが生きている間に滅亡しました。ブッダはシャカ族の生まれですが、そのシャカ族も国の消滅とともに滅亡しています。生き延びることができたのは、国を捨てて出家し、ブッダの弟子、つまりニートになった人々だけだったと言います。

　真の哲学、すなわち喪男哲学は「俺って頭が良いだろう、見て見て」という思いあがった優越感からは生まれません。「こんな現実は間違っている」という本物の怒りと悲しみから生まれてくるものです。シッダルタが現実をすべて放棄して「目覚めた喪男」＝ブッダとなったのも、シャカ族の滅亡はもはや避けがたいという予感があったからかもしれません。

　さて「すべては幻想である」という喪男哲学の基礎を作ったブッダが後世に残した課題は、「人間は『すべては幻想である』という事実に耐えられない」という問題を解決できなかったことです。その後の歴史を見れば、人類は「すべては幻想である」という事実に次第に気づきつつも、結局は「それでもどこかに永遠普遍の真理があ

る」という妄想を捨てられなかったことがわかります。例えば、哲学の発展が遅れていた西洋においては、近代になってようやく「神」が否定されました。が、しかし結局は「政治」や「科学」が「神」に取って代わっただけだったのです。

やはり人間には、何らかの「絶対的な価値」が必要なのです。

とはいえ、自分が救われるために他人を蹴落とそうとしなければ生きていけない人が作り上げた身分制度は、滅ぶべき迷妄です。制度そのものが大勢の人間を苦しめ続ける原因となっているからです。しかし制度を打倒すればそれで解決するというわけにはいきません。例えば、西洋における貴族社会の身分制度は民主主義の勃興によってほぼ消滅しましたが、代わりに資本主義という新たなルールによる身分制度が生まれました。その資本主義を打倒しようとして共産主義が生まれましたが、今度は共産党の人間が権力を握る一党独裁の身分制度にすり替わっただけでした。つまり、**他人と自分とを比較することで自我の安定を得ようとする人間の営みが続く限り、どこまで行っても同じ**なのです。堂々巡りなんです。まさに、輪廻の地獄なんです。

「モテ」の欲望からの脱却を説いたブッダ

ではどうすればいいのか？

ブッダはこの難問に対して、とりあえず「モテの魔の手からの護身」をはじめとする「欲望からの脱却」を説いたわけです。欲望こそが人間を苦しめ、人間を階層化し、人間を悪の道に引きずり込む元凶なのです。しかし、その欲望は、欲望自体が「幻想」にすぎないと悟った時に、無力化できるはずである。ブッダはそう考えました。この「欲望」の中には、性欲と、モテたいという欲望も当然含まれます。

いや、当然どころか、この二つの欲望こそが、人間を支配する煩悩（ぼんのう）のほとんどすべてと言っていいでしょう。

つまりブッダは「モテたいという欲望こそが、人間を苦しめる原因の一つである」という事実を喝破（かっぱ）したのです。そもそもなぜ王様になりたがる人間がいるのか？　**王様は、ハーレムを持てるから**です。なぜ大金持ちになりたがる人間がいるのか？　**大金持ちは、ハーレムを持てるから**です。そう考えると、権力も、富も、人間の欲望のほとんどすべては性欲とモテ欲が原動力となっております。故に、モテへの誘惑を断ち切れば、モテるために必要になる権力や富に対する欲求も消えるというわけです。

ブッダが女人の出家を嫌がり、男信者と女信者を可能な限り隔離しておこうとした理由はそこにあったのでしょう。女性を蔑視していたのではなく、「モテの魔の手」が「解脱」の最大の障壁となるからこそ、女人を敬遠したわけです。

具体的には、ブッダは喪男の「苦しみ」がどのように生まれてくるかを、一二段階のプロセスによってチャート化しました。十二縁起です。

①無明　根本的な無知のこと。
②行　行動。
③識　認識すること。心。精神。自我。
④名色　身体全体。
⑤六処　認識・心が実際に稼働する、目・耳・鼻・舌・身体・意識の六ヵ所。
⑥触　対象物に触れる。
⑦受　感受。快感を求め、苦痛を避ける心性。

⑧愛　性欲、モテ欲。
⑨取　執着心。
⑩有　生きること、存在すること。
⑪生　生まれてくること。
⑫老死　歳をとって死んでいくこと。

縁起の前半はフロイト派の発達心理学みたいな話ですが、人間が母体から生まれてきた後には、「触」「受」「愛」「取」という段階で苦しみが生まれてくるのです。「触」とは赤ちゃん時代、とりあえずいろいろなものに触ろうとする欲望です。

これが成長してくると「受」に発展します。この段階では、まだ性欲はありませんが、苦しみを避けて快楽を求め始めます。「モテ」欲は、このあたりで生まれてくるのでしょうか。

次の段階「愛」は言うまでもなく発達しきった「モテ欲」および性欲です。これは説明不要ですね。「愛は地球を救う」なんて日本テレビは言いますし、KANは「愛は勝つ[*24]」なんて歌ってますが、**紀元前の大昔にお釈迦様がすでに「愛とは人間を苦しめるものだ」と喝破していた**わけです。つまり我々人類は何千年もバカのままなんですよ。

モテたいという欲望は、いよいよ「取」となります。王様になったりお金持ちになったりハーレムを作ったりしたくなるわけです。

このように、「モテ」への渇望が、果てしない執着を生み、この執着が苦しみになるというわけです。ブッダは、人は「愛」故に苦しまねばならん、という聖帝サウ

㉔「愛は勝つ」
愛は勝つ、愛は勝つって言うけど、それじゃ誰にも愛されないし誰をも愛させてもらえない俺は永遠に負け組ってことじゃないか。いや「愛至上主義」とは実際その通りなんです。絶望した！　愛至上主義の現代社会に絶望した！

ザー[*25]みたいなことを言っていたわけです。

　喪男の苦しみが生まれてくるまでの仕組みはわかりましたが、それでは具体的な喪男の苦しみとは、何でしょう。基本はすでに登場した生老病死の「四苦」ですが、これにあと四つ付け足して、「八苦」となります。あと四つとは、

・愛別離苦　好きな彼女と別れなければならない苦しみ
・怨憎会苦（おんぞうえく）　嫌いな相手と暮らさなければならない苦しみ
・求不得苦（ぐふとく）　モテない苦しみ
・五陰盛苦（ごおんじょう）　自分自身の存在そのものが苦しみ

というわけです。「愛」と「モテ」が喪男ブッダにとって最大の「苦しみの元凶」だったことがおわかりいただけましたでしょうか。ブッダはかつてハーレムでいったいどんな体験を積んできたのでしょう。実際にハーレムを捨てた人間だからこそ「愛とは苦しみの元凶なり」という言葉にも説得力が溢れるわけです。これらすべての執着を捨てることで、苦しみに満ちた「現実」からの「解脱」が可能だとブッダは言ったのです。まずは「モテの魔の手」への執着から脱却しなければならない。

　愛、性欲、モテの魔の手。これこそが喪男の人生を生き地獄にする執着の原因なのだと、喪男ブッダは発見したのです。故に、モテたいという欲望＝苦しみを消すことができれば、それによって生じてくるもろもろの欲望＝苦しみも消えるのです。

　ことほどさように、ブッダは解脱を追究する上で、モテと性欲を問題視しました。「モテへの執着こそが、苦しみの原因である！」「モテは諸悪の根源！」というわけで

㉕　聖帝サウザー
『北斗の拳』に登場する拳法家。南斗最強の男。愛深き故に歪み、暴君化してピラミッドを造っていた。

す。ブッダの縁起チャートを辿っていきますと、戦争やカースト制度など、およそ人間が生み出した邪悪な文化は全部人間の「モテ」への執着から生まれていることがわかります。すべて「モテ」が悪いのです。ただ、それを「悪」と呼ばず「苦しみ」と表現したところが、ブッダの喪男たるゆえんでありましょう。悪ならば倒さなければならない「他者」ですが、苦しみとは自分自身の内面の問題です。

そうです。ブッダは「俺がモテないのは社会が悪い」と暴れるのではなく、**「俺がモテないと苦しむのは俺が解脱していないからだ」と考え、自力による救済を目指したわけです。**

結果、ブッダの教団では、セックスは当然禁止となりました！「えっちなのはいけないと思います！」[*26]とブッダは弟子に教えたのです。もちろんすべての人間が出家してニート化してしかもセックスを捨ててしまうと、どう考えても人類は滅亡してしまいますので、そのような事態を防ぐために「在家」というシステムも採用されました。在家信者は家庭を持っていてよいし、仕事をしてもよいのです。出家とはつまりニートになることですから、全員出家というわけにはいきません。全人類がニート化したらみんな飢え死にしちゃいますからね。

ブッダの思想を一言で言い表せば、

「女を捨てよ。ニートになろう」

「モテぬなら　捨ててしまおう　ほととぎす」

恋愛放棄主義というか、サボタージュというか、とにかくこれは大変なことです。

このように世界三大宗教の一つ、仏教の出発点が「モテの魔の手」からの護身による「解脱」を目指した喪男の集団であったことは、偶然ではないのです。この出家と

㉖「えっちなのはいけないと思います！」『まほろまてぃっく』のメイドロボ・まほろさんの口癖。ご主人様に説教しないメイドさんはいけないと思います！

いう名の護身システムは、形を変えながらはるか日本にまで輸入され、しっかりと根付きました。もちろん「妻帯してもＯＫ」とか「女はダメでもお稚児さんならＯＫ」とか言い出す坊さんが出てきて、だんだんなし崩しになっていくのですが……。

さて、次は西洋哲学の基礎となった古代ギリシアに目を向けてみましょう。古代ギリシアにも、プラトンという喪男がおりました。そしてプラトンこそは、ブッダよりも強力な「妄想力」を持った恐るべき喪男だったのです。ブッダは「現実は幻想であり、モテとは苦しみである」という事実を認識したわけですが、プラトンはブッダのように「現実棄却」へは向かわず、もっと深い泥沼に突き進みました。**「この世は間違ってる！　だから、どこかに本当の世界があるはずだ！」**と言い出したのです。

以後、西洋哲学は、このプラトンが言い出した「本当の世界」に関する考察と妄想の歴史になったのです。

2　「現実こそが偽物」プラトンのイデア論

外見も発言も「喪」そのものだった師ソクラテス

西洋哲学のルーツは紀元前五～四世紀の古代ギリシアに現れたソクラテス[*27]、プラトン、そしてアリストテレス[*28]の三人です。このうち、後世の喪男哲学にもっとも影響を

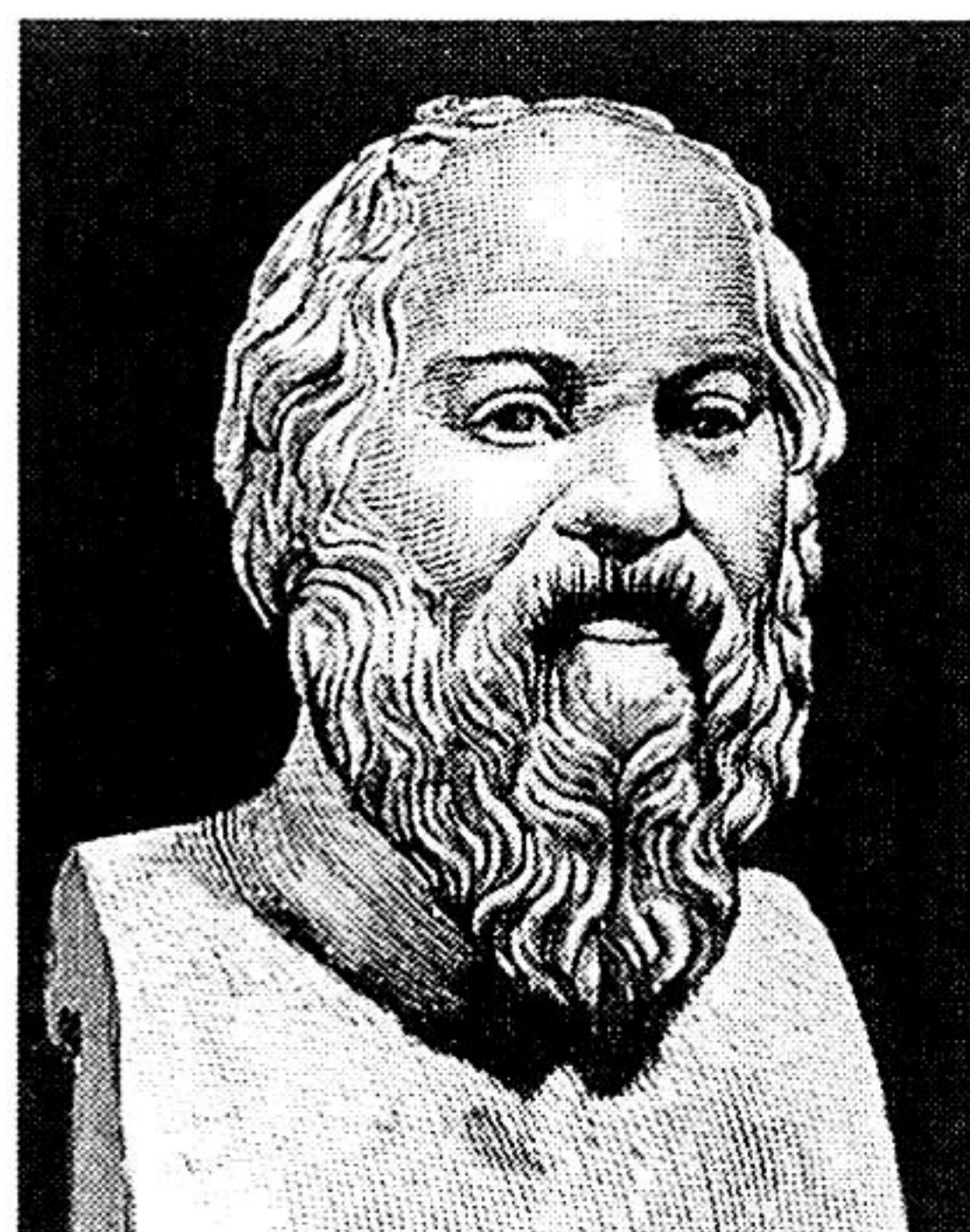
㉗　ソクラテス
ＢＣ四六九年頃～ＢＣ三九九年。アテナイの哲学者。プラトンの師匠として有名。プラトンの著書には、ソクラテスが誰かと喋っているという形式のものが多い。奥さんのクサンティッペは「世界三大悪妻」の一人に数えられているが、ソクラテスのブサイクな外見と奇行ぶりを見ればある程度はやむを得ないのかもしれないのだった。ソクラテスは人々に「是非結婚しなさい。良い妻を持てば幸せになれる。悪い妻を持てば私のように哲学者になれる」と言ったという伝説が残っている。つまりソクラテスにとって、哲学とは「悪妻」という地獄のような現実から飛翔するために必要な思索運動だったのだ。ソクラテスが悪妻に虐げられる喪男ダメ親父だったことが哲学の起源なのだ。故に哲学を「喪男の精神史」と言ってもいいのである。

㉘　アリストテレス
ＢＣ三八四年～ＢＣ三二二年。マケドニア生まれのギリシア哲学者。プラトンの弟子。プラトンの死後はアレクサンダー大王の家庭教師をも務めた。父親が医師だったこともあり、哲学のみならず論理学や自然科学をも探究した。プラトンがイデアという脳内世界（二次元）こそ真実の世界と考えた観念論者だったのに対し、アリストテレスは感覚論を採った。感覚で知覚可能な世界（外界、三次元）こそが真の世界だという反イデア論である。「四大元素」や「エーテル」といった中世ヨーロッパを支配した自然科学概念はアリストテレスに端を発する。また倫理学としてはブッダの中道に近い「中庸」、つまり極端なことは良くないと説いた。このあ

与えたのはプラトンでしょう。プラトンの哲学は、**『イデア界』**という想像の世界すなわち『二次元』世界こそが、目の前の『現実』＝『三次元』よりも価値のある世界なのだ！　イデアこそが真実なのだ！」と言い切ります。しかし、そもそも、イデアというものは人間の想像力が生み出した観念ですから、原始時代には存在しなかったはずです。人間の知性が進歩し、想像力が豊かになったからこそ、イデアという抽象世界が生み出された。そして、プラトンは最初に「**イデア（妄想）こそ現実に優先するものなり**」と言い出して「喪男革命」を標榜した哲学者だったわけです。

プラトン

　プラトンは有名な哲学者ソクラテスの弟子でした。ソクラテスは五〇歳まで独身だった喪男です。現代より平均寿命が短かったとおぼしき当時のギリシアで五〇歳というのは、もう死んでもおかしくない高齢でしょう。しかも、四〇歳を過ぎて哲学者になってからは事実上のニートだったので、生活費にもことかく有様だったそうです。ルックスは異常に太ったキモメンで、一日中同じ場所に突っ立っていたりなどのヘンな行動でも有名でした。大学の研究室にこもって禄を食んでいるような現代の哲学学者とは器が違うのです。ソクラテスの妻は亭主をバカ扱いする酷い悪妻だったという伝説が残っています。その上、ソクラテスは七〇歳で死刑になりました。「悪法も法なり」と言って自ら死に赴いたと言われております。ニート哲学者のソクラテスは、もちろん国家の転覆なんて面倒臭いことは企んでいませんでした。なのに、なぜ死刑になったんでしょう？

たり実に現実的でまともな人だ。しかし女性を男性より劣った存在だと考えていた点は、悪い意味で現実的と言える。アリストテレスには萌えがなかった。アリストテレスの代表作は『形而上学』『自然学』『ニコマコス倫理学』。

ソクラテス

それは、**ソクラテスの外見と発言があまりにも「喪男」すぎたからです。**

ソクラテスは見た目もキモければ金もなく、しかも「無知の知」という大勢の人間が怒り出すであろう話を得意としていました。無知の知とは、つまり、いまでいう「バカの壁」です。ソクラテスは「汝、自身を知れ」というフレーズを標語としたことで有名です。つまり人間はみんな利口ぶっているが実は自分のことすら知らないバカばかりだ、と言ったのです。「**自分が無知だということを知ることから、本当の知が始まる**」と言ったのです。

つまり、「本当のこと」を口にしたのです。これでは、自分は頭がいい、お利口だと思いたがっているバカな連中に憎まれて当然です。ソクラテスはそういう連中から「若者を扇動している」と告発されて、死刑になったのです。

プラトンが現実よりもイデアのほうに価値を置いたのは、師匠ソクラテスの踏んだり蹴ったりの人生を見ていた影響かもしれません。そもそもソクラテス自身は著書を残しておらず、ソクラテスの活動や言動は弟子のプラトンがまとめているのです。このあたりはブッダやイエスと同じですね。プラトンは元は現実の政治家を目指していたのですが、ソクラテスが死刑になってしまったので自ら師匠の遺志を継ぐために喪男哲学者になったと言われております。

しかしプラトンがブッダやイエスの弟子と違ったところは、彼自身がただの弟子という立場に留まらず、自ら後世の喪男哲学に絶大なる影響を及ぼしたある思想を考え

出した点にあります。それが「イデア論」すなわち「二元論」です。

「現実」のほかに真実の世界はある

プラトンと言えば「イデア界」です。
イデア界とは、真実の世界であり、永遠の世界です。
言うまでもなく、目の前の「現実」と呼ばれている世界は、永遠ではありません。万物は流転します。[*29] 諸行無常です。この事実についてはすでにギリシアでも知られていました。ここから懐疑主義や相対主義といった思想が生まれていたわけですが、プラトンはその種の相対主義にNOを突きつけます。
「現実はうたかたの幻想にすぎないが、どこかに真実の世界があるはずだ。それがイデア界だ」
というわけです。プラトンの思想をひらたく一言でまとめると、
「**えいえんは、あるよ**」[*30]
ということになりますね。
例えば、三角形にはまず「三角形のイデア」という普遍的な原型が（イデア界に）存在します。紙に描いた「現実」の三角形は、三角形のイデアを模倣した「似姿」にすぎず、本質（真実）ではないのです。同様に男には男のイデアがあり、女には女のイデアがあります。つまり、人間が認識しているすべての事象は、まずイデアが先にあって、このイデアを具象化しようとした結果として現実の事象が現れてくる、とプラトンは考えました。目の前にいる女の子を「女の子」という名称で定義づけているのではなく、最初にイデア界に「女の子のイデア」という永遠の本質があり、それを

㉙「万物は流転します」
古代ギリシアの喪男哲学者、ヘラクレイトスが唱えた説。「諸行無常」。ヘラクレイトスは極度の人間嫌いで、貴族の座を投げ捨てて山にひきこもり、医者にかからずウンコに塗れて死んだと言われている。ああ古代の哲学者ってこんな人ばっかり。ただしヘラクレイトスもこの諸行無常の三次元世界を支配するものとして「ロゴス」（言葉、原理、神）を想定していた。

㉚「えいえんは、あるよ」
TacticsのPCゲーム『ONE～輝く季節へ～』に登場する名台詞。このゲームでは、現実世界（三次元）の他にもう一つ「えいえんのせかい」（二次元）が存在する。えいえんのせかいに憧れた人間は、現実世界から消えるしかない。

現実に適用しようとして生み出されたのが目の前にいる女の子だというのです。

滅茶苦茶言ってるようですが、「女性らしさ」「男性らしさ」といった性質のうちの何割かの部分は本来生得的なものではなく社会的に付与されるものであるということが、近年のジェンダー[*31]研究によって明らかになってきています。また、分析心理学者のカール・グスタフ・ユング[*32]は、人間の無意識にはいろいろな「元型」がインプットされていると主張しています。例えば男の精神には「女性の元型」（アニマ）が備わっているそうです。つまり「女の子らしい女の子」というのは、男の持っている「女の子の元型」を、現実の女性に投影することで作り上げるものらしいのです。

なんか、卵が先かニワトリが先かみたいな話ですが、「なぜ女はみんなDQNが好きか」という問題を考えると、謎は解けると思います。女が乱暴な男を好むのは、彼らが「男らしい」からです。「男らしさ」とは「暴力性」「粗野」「セックス好き」「強引」といった要素です。女はこういう「男らしさ」の要素を持っている男を選びたがります。しかし、こういう要素を持っていない男も現実にはたくさんいますよ。そういう男は「キモメン」とか「オタク」というモテない階層に追いやられるわけです。で、「あの人は『いい人』だけど、男としての魅力がね～」とか言うわけです。

僕はこれを「**いい人いい人どうでもいい人の法則**」と名づけました。

ユング的に考えれば、女が持っている「男性の元型」（アニムス）を投影できる男だけが女に好まれるということになります。つまり女は実は現実の男を求めているのではなく、自らが心の中にあらかじめ持っている「男のイデア」を求めているのです。

男も同じです。「女のイデア」を投影できる女を好むんです。

また、男女ともに美人・美男が好きですよね。これはつまり美男美女の向こうに

㉛　ジェンダー
社会学的・心理学的な性差。これに対して肉体的な性差をセックスと呼ぶ。

㉜　カール・グスタフ・ユング
一八七五年～一九六一年。スイスの心理学者。フロイトの弟子として活躍した後、「汎性欲論」に固執するフロイトと袂（たもと）を分かって独立。独自の分析心理学を確立した。ユングの興味は臨床よりも芸術や宗教、そしてオカルトに向けられており、「集合無意識」や「元型」「アニマ」「シンクロニシティ」など様々なオカルトっぽい心理学概念を発明・妄想した。趣味は塔にひきこもって曼荼羅を描くこと。幽体離脱して宇宙に飛び出したこともある。大丈夫なのか、この人は。代表作『心理学と錬金術』『UFO～空飛ぶ円盤』『アイオーン』『結合の神秘』『ヨブへの答え』。

「美のイデア」を見出しているからなのですね。ブ男ブ女の向こうには「美のイデア」を幻視できませんからね。「ブのイデア」しか見えません。ああ。「ビ」と「ブ」。**五十音表で見ると隣同士なのに、**なんという隔たりがあるんだ……。

ナンシー・エトコフという人の書いた研究本『なぜ美人ばかりが得をするのか』によれば、ラングロワという心理学者が赤ん坊にいろんな人の顔写真を見せたところ、なんと赤ん坊は美男美女の写真のほうばかりを長く見ていたのだそうです。しかも人種とか民族にあまり関係なく、美醜の判定には一定の法則があるのだとか。つまり美醜の感覚は赤ん坊にもあるらしいのです。個人的な経験では、昔、幼稚園にあがる前の従妹ですら、ジャニーズのイケメンが好きだと言って、僕のことをキモいキモいとバカにしていましたよ。許せねえ。やっぱり「美のイデア」「ブのイデア」は実在するんです！

現実こそがイデアの影

話を戻しますが、プラトンのイデア論では、現実世界はイデア界の二次的な副産物、つまり模倣にすぎないのです。プラトンは現実を「洞窟に映った影」であると言います。イデア界こそが本当の世界であり、現実はイデアの影にすぎないのです。つまりこの世は幻想なんです。現実と言われているものは、実は人間の頭の中にある「イデア界」のコピーにすぎないんです（図1-3）。

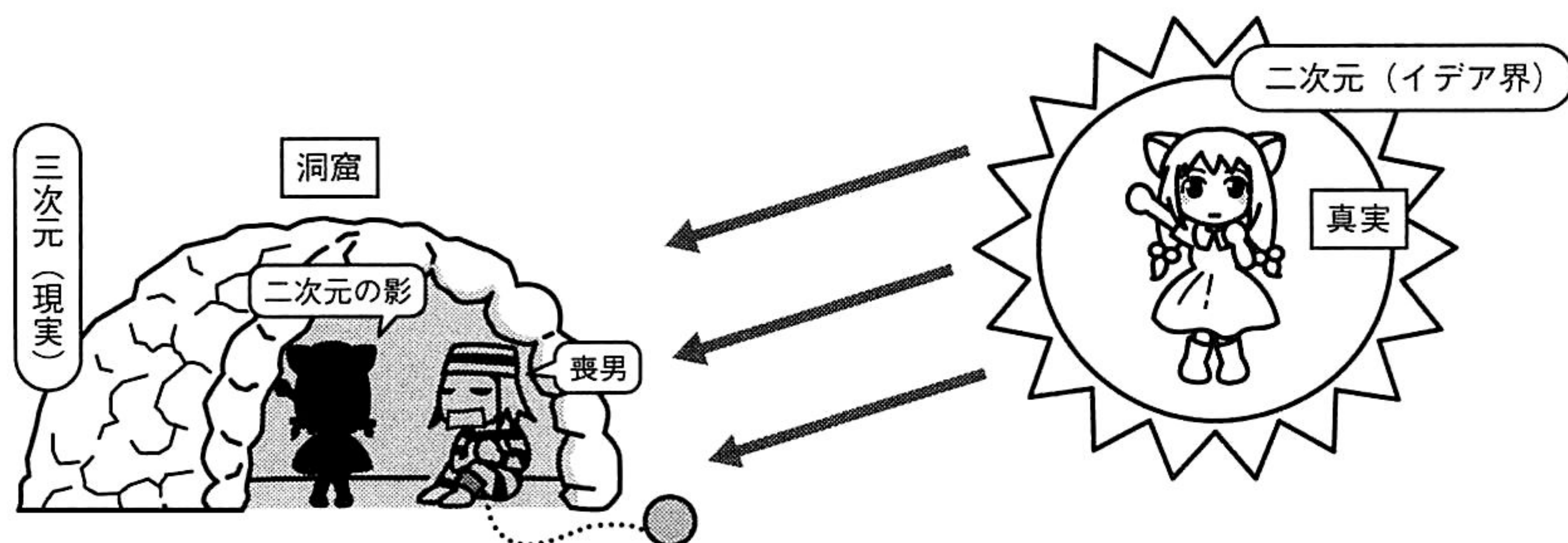
現代では、マンガやアニメばかり観ているオタクに対して、「常識人」が偉そうに説教しますよね。「現実を見ろ」「空想に逃げるな」と。しかしプラトンに言わせれば、「現実」のほうこそがイデアの影にすぎず、「現実」だけを「唯一の世界」だと考

二次元（イデア界）は「真実」。現実は真実を投影された影、幻のようなものにすぎない。プラトンのこの二元論は、後のヨーロッパ哲学に巨大な影響を与えた。現代の物理学にも同じ理論がある。「宇宙は n 次元の情報を（n＋1）次元に投影したものだ」という「ホログラフィー原理」がそれだ。

図１—３　プラトンの洞窟論

従ってプラトンは当時の現実主義的な知識人たち、つまりソフィスト[33]とケンカばかりしていたわけです。

プラトンがこのような二元論を持ち出したのは、よほどギリシアの現実に嫌気が差していたからに違いありません。当時ソクラテスやプラトンが暮らしていたアテネは政治的に混乱しており、せっかくの民主主義が衆愚政治に堕して没落しつつありました。理想なくして現実なし。故にソクラテスやプラトンは、理想を持たないソフィストを嫌ったわけです。ソフィストは現実主義・功利主義ですから、現世利益（モテ）のために哲学を利用したわけです。少なくともプラトンたちはそう思っていました。「真の哲学とは喪男哲学であり、モテない苦しみが哲学を生む」という本書の主張がここでも裏付けられています。

「現実とは、魂の牢獄だ」

「えいえんは、あるよ」

これらのフレーズにじーんとして目を潤ませてしまった人は、間違いなく喪男（または喪女）と言えるのです。そしてこの「喪男の苦しみ」と「天国への憧れ」は、すでに紀元前の古代ギリシアから「哲学」という形で、あるいは「宗教」に形を変えながら、脈々と続いてきたわけなのです。喪男の苦難は、数千年も昔から続いているのです。そして、いつの時代も、喪男の哲学が世界を変えるパワーになっていたわけです。

㉝ ソフィスト
「知者」。古代ギリシアの職業知識人たち。金持ちにディベート術や処世術などを教えてお金を稼いでいた。つまり、「知」を売り物にして儲けるという、モテ知識人の走りみたいな人々。ソプロニコスはソプロニコスではない。カレイデモスは父ではない」みたいなレトリックを凝らした言葉遊びの詭弁ばかり弄していたので、喪男哲学者のソクラテスやプラトンは、ソフィストを真実を追究しようとしない口先だけの輩と忌み嫌っていた。はなっから真理を追究するつもりのない商品化された「知」、つまりモテのための「知」など、喪男にとって何の意味もないどころかむしろ有害なのである。

イデアという脳内世界の発見

　とにかくプラトンは理想主義者でした。現実よりも理想を、真実を優先しました。目の前の現実の女にモテることよりも、イデア界に存在するであろう「美のイデア」を体現した萌えキャラに萌えることのほうが、より「真実」に近い、と喪男のプラトンは考えたわけです。

　プラトンは「現実」と「真実」をそれぞれ別の世界として切り分けました。「現実」の世界は、万物が流転する相対的な世界です。そこに永遠などはありません。ここまではブッダの考えと同じです。喪男にしか悟りえないこの世の真実です。イケメンも美女も、しょせんは年老いて死んでいくのです。故に現実の美女などには不変の価値などありません。ですから我々は現実の女なんかには別にモテなくていいんです。いやむしろモテないほうが良いんです。

　しかし、プラトンは、この地点（「現実は真実ではない」という認識の段階）で立ち止まらずに、「どこかに真実の世界・永遠の世界があるはずだ」と考えました。その結果、プラトンが発見したのが、脳内の空想世界＝イデア界だったのです。

　現実の「美女」は、結局は年老いて醜くなって死んでしまいます。つまり、**現実世界には実は「美女」は存在しない**のです！　「美女のイデア」の一部分を一時的に体現した人間が現れては消えていくだけなのです。でも、それにもかかわらず、人間は脳内にちゃんと「美女」という概念を持っていますね。この「美女」という概念はどこから来たのか？　この世に「永遠の美女」など存在しないのに、なぜ喪男は「永遠の美女」という現実には有り得ない概念（妄想）を持っているのか？

プラトンは、この謎めいた人間の妄想力の源泉に「イデア界」という概念の世界・本質の世界・想像の世界がある、と言い出したわけです。つまり、ブッダの喪男哲学は現実の世界から「解脱」したところで終わりますが、プラトンは解脱した先に「真実の世界」があると言い出したのです。

もちろんプラトン自身はイデア界をあくまでも実体として論じていて、「脳内の世界」とは言っていません。しかしながら「概念が現実の実体に先行する」という彼の考えは、喪男哲学に特徴的な「現実vs.空想」「三次元vs.二次元」という二元論世界モデルの元祖的なものなのです。

以後、この「現実」(外界)と「イデア」(脳内世界)を、本書では必要に応じてそれぞれ「三次元」「二次元」とも呼んでいきます。どっちも同じ「世界」だからです。違うのは世界が存在する次元だけです。現実とは三次元空間に広がっている世界で、イデア界(脳内世界)は奥行きのない脳内に収まっている世界なのです。

プラトンによるとこのイデア界こそが「理想」の世界です。プラトンにとって、現実とは、理想の世界を実現するための「場」なのです。

ただ世界を「現実」と「イデア界」の二つに割っただけで終わらずに、この現実には存在していない(脳内の)理想世界を目の前の現実より価値あるものだと断じたことが、プラトンの喪男哲学史における最大の功績です。

プラトン的な喪男二元論を一言で言えば、

「現実より妄想のほうが大事だ！」

という開き直りですね。

こんな大それたことを言い出した人はプラトン以前にはたぶんいませんでした。

プラトンの理想郷はアキバである

さて、プラトンはモテや恋愛をどう考えたのでしょうか？

プラトンによれば、人間の肉体はちゃんと現実界に存在します。

しかし人間の精神は、元々はイデア界に存在したはずのものだと、プラトンは考えます。ここで喪男そのものの存在が、現実とイデアとにまたがるものであるとされていることに注目してください。人間の魂は元々イデア界にいたので、現実界に存在している間も、常にイデア界への回帰を目指します。これが「エロス」(恋愛)である、とプラトンは言うのです。つまりプラトンによれば恋愛感情とは目の前の女に欲望したりすることではなく、イデア(想像上の観念の世界)に恋焦がれることだというのです。従って、現実的な肉欲はイデアの影である現実に対する欲望でしかありませんから、イデアを求める理性よりも下位に置かれます。もちろん、理性は頭に、欲望は腹にあります。

エロスというと現代人はすぐセックスを想像しがちですが、プラトンは、そのような欲望は現実にのみ向けられた下等な感情で、「美のイデア」という抽象的な観念に憧れ続ける理性こそが真のエロスだと言い出したわけですね。つまり生身の女優さんが出演しているAVを観るよりも、脳内の萌えキャラを崇拝するほうが、より上等なエロスだというわけです。

プラトンは、アキバ系というか二次元オタクの走りなのです。

この思想を体現していくと、最終的には現実の女性への欲望は消えうせていき、「美のイデア」という抽象観念のみに萌えられるようになるわけです。

実際、生身の人間よりアニメのキャラのほうがかわいいですよね。

えっ、かわいくない……かな？　かな？

プラトンは自らの理想国家を実現するためにシシリー島へ渡って失敗していますが、**彼が現代の秋葉原を訪れたら**「ここここそが理想郷だ」**と感涙にむせぶこと請け合い**です。二次元の萌えキャラクターの流行とは、つまり、現実の女性では表現不可能な「萌えのイデア」を現世に映し出そうとする運動なのですから。二次元萌えのオタクというのは古代ギリシアから存在したわけです。そして、プラトン哲学の実践の場として、二一世紀の日本に秋葉原が出現したわけですよ。

そもそも古代ギリシア世界は芸術天国でした。オリンポスの神々を模（かたど）った彫刻をたくさん作り、みんなで萌えていたわけです。フィギュアを集めただけで幼女殺害犯予備軍扱いされる現代日本とは正反対の世界でした。このような土壌があったからプラトンのイデア論が受け入れられたのだと思います。

さて、ここで「プラトンは、芸術を『イデアの模倣にすぎない現実をさらに模倣している』と否定していたではないか」というご意見を持たれる方もおられるでしょうが、それは違います！

すでに明らかにした通り、アキバ系の萌えキャラは「現実の模倣」ではありません。「イデアの具象化」、つまり抽象芸術なのです。象徴主義とか印象主義と言ってもいい。現実の女の子とは似て非なる造形です。異常に目が大きくて胸が大きくてロリでぷに[*34]なのです！　これをキモいとか現実の女に全然似てないとか言う人は、芸術の感性に欠けている上に芸術の歴史に無知で、さらにその無知にすら気づいていない恥ずかしい人です。

㉞　ぷに
萌え絵のキャラに特徴的な、ぷにぷにした感触。

これに対して、当時のギリシア芸術は、現実の人間をリアルに模倣する写実主義でした。プラトンはこの写実主義を嫌ったわけですね。というのは、イデアの模倣にすぎない現実を模倣した芸術は、イデアの孫コピーですよね。ですから、イデアからますます遠ざかっているのです。

それに対して、アキバ系の萌えキャラフィギュアは現実臭さのかけらもありません。フィギュアとは、本来は左下図のように、平面的に造形されている脳内の萌えキャラ（「アニメ絵」と呼ばれる非現実的な表現手法のキャラクター）を立体化したものです。つまり、二次元でしか存在しえない「観念」に奥行きを与えて三次元の世界に現出させたわけです。すなわち、萌えフィギュアとはイデアを現実世界に降臨させたものだと言ってよいでしょう。もちろん、萌えキャラをフィギュア化するまでにはフィギュア造形師[*35]たちの長い研鑽と鍛錬の歴史がありました。

現実の模倣としてのギリシア芸術
ミロのヴィーナス像（ルーブル美術館）

イデアの表徴としての萌えキャラ
あずまきよひこ『よつばと!⑤』メディアワークス、2006年、P151

㉟ フィギュア造形師
現代の仏師。「原型師」と呼ばれリスペクトされている。人気の原型師ともなると外車を何台も乗り回すくらいにお金が儲かるそうである。日本のアキバ界隈には、現代のミケランジェロや現代のダ・ヴィンチが原型を作った美術品がうようよあるのだ。彼らの芸術作品は数十年後には教科書入り・美術館入り間違いなしだが、現在のところ（日本の）美術界から正当な評価を受けていない。

ちなみに、ソクラテス・プラトン時代の萌えの主流は、ショタ萌え[36]だったそうです。ショタ萌えは実は古代ギリシアでは割と普通のことなのですが（現実世界においても、美少女と美少年の区別があまりなかったようです）、プラトンは現実の女は肉欲を喚起させるのでイデアから遠い存在だと考えていたようです。それに対して、ショタ少年は肉体そのものは男ですので、女と比べると肉欲からはずっと遠いというわけです。故に、ショタは女よりイデア界に近いのです。イデア界に萌え続けたプラトンは八〇年にわたって生涯独身を貫きました。**死ぬまで童貞だったと言われています。**

もっとも、師のソクラテスの場合は、単にソクラテス自身がキモメンだったのでモテなかったから女嫌いになってショタに走ったという解釈も可能でしょう。ちなみに後世に「太った豚より痩せたソクラテス」という酷い格言がありますが、本物のソクラテスはデブだったそうですよ。**デブが哲学者やってちゃいけないんでしょうか、デブが天才だったら何か都合が悪いんでしょうか！**　きっとヨーロッパのどこかで「頭の良い人間、優秀な人間＝痩せている」という腐ったプロパガンダがあったのでしょう。そういえばイエス・キリスト像なんかもたいてい痩せててイケメンですよね。最近では本当のイエスは濃ゆ〜いアラブ顔[37]だったという説もあるんですが、まあバチカンに公認されることはないでしょう。

萌え哲学を創始したプラトン

さて、生涯独身、八〇年間童貞を貫いたとの誉れ高いプラトンが自らの恋愛論を開陳した著書が『饗宴』です。童貞が恋愛を語るなんてバカげていると笑うような愚か者は、もう一度イデア論の基礎から学び直してください。プラトンの恋愛は脳内純愛

㊱　ショタ萌え
ちっちゃな男の子に萌えること。語源は『鉄人28号』の正太郎くん。横山光輝先生は『鉄人28号』でショタ萌えを産み、『マーズ』でやおいを産んだのだ！

㊲　「本当のイエスは濃ゆ〜いアラブ顔」
マンチェスター大学のリチャード・ニーブがコンピューターを使ってイエスの顔を再現してみたら、凶悪な人相の親父になってしまった。そのため、CGで復元された「イエスの素顔」は黒歴史（第二章注㉗）となった。

ですから、むしろ**三次元童貞にしか語れない**わけなんです。

プラトンは『饗宴』でいつものようにソクラテスの口を借りて恋愛について語るわけですが、他にもいろんなキャラクターが出てきて恋愛とは何か、という話をそれぞれ語っています。それらをまとめてみると、

- パウサニアス説。女を対象とする「パンデモス・エロス」は、低俗な肉欲の愛にすぎない。これに対して真実の恋愛は、ショタを対象とした精神的な恋愛「ウラニア・エロス」なのだ。**ショタ万歳。**
- エリュクシマコス説　良い恋愛は、人間の善悪二つの欲望を調和できる恋愛である。宗教にも教育にもエロスが必要である。**ショタ万歳。**
- アリストパネス説。元々人間は二者が一体となったアンドロギュヌスだったが、神々に嫉妬されて二人に分けられてしまった。それ以後、人間はお互いの半身を求めて彷徨（さまよ）うことになった。それが恋愛である。**ショタ万歳。**
- アガトン説。エロス神万歳。**ショタ万歳。**
- パイドロス説。ショタの前では恥ずかしいことはできないよ。**ショタ万歳。ショタ万歳。ショタ万歳。**

このように、みんなショタ萌えです。古代ギリシアにおいては「女性との恋愛＝肉欲＝低級」「ショタ恋愛＝精神的＝高等」だったのでありましょう。これは**新宿二丁目のオカマバーでの会話ではありません。**古代ギリシアを代表する知識人たちの会合なのです。この時点で現代の恋愛資本主義社会に洗脳された人々をはるか彼方に置い

てけぼりにしていますが、っていうか現代の秋葉原でもここまで先進的じゃないですが、さらに追い討ちをかけてソクラテス（の中に入ったプラトン）が出てきて、「プラトニック・ラブ」[*38]について演説するわけです。恋愛は、最初は肉欲から出発するが、そこから順次精神的な愛に進化し、最終的には「美のイデア」という純粋観念に到達するものである、という話です。

ここで、「永遠」という概念が出てきます。恋愛とは永遠への憧れ、不死への憧れであると。これはＴａｃｔｉｃｓのPCゲーム『ＯＮＥ～輝く季節へ～』の話ではありません。プラトンの著書の話です。

もちろんソクラテス（の中に入ったプラトン）も、女性への愛よりショタ萌えのほうが「精神的」であるが故に高尚である、と言い出します。この点についてだけは、参加者全員の意見が一致しているのです。「萌えを突き詰めれば最終的にショタに至る」とは濃いオタクの間で常々言われていることですが、すでに萌え哲学の開祖とも言うべきプラトンが、萌えの最終形態がショタだということを『饗宴』において示唆しているわけです。

しかしここでは、「女よりもショタ」という構図よりも、「現実の肉欲を経て、美のイデアに至れ」というプラトンが指し示した「新たなゴール」のほうに注目したいところです。目先の対象が女だろうがショタだろうが、プラトンの目指す最終ゴールは「美のイデア」つまり「観念」だからです。ショタがゴールなのではない。ショタは、肉欲の対象から外れているぶん、女よりも相対的にイデアに「近い」と考えられているだけなんですね。

故にプラトン哲学においては、アイドル声優さんよりもフィギュアやドット絵のほ

㊳ プラトニック・ラブ
岩波文庫版の『饗宴』では、訳者の久保勉先生が（ソクラテスの中に入った）プラトンの主張をこうまとめておられる。「イデヤが現象界との関係を超脱すればするほど、それに対する人間の愛もまた高尚となり、ついには理性は一切の感覚的なるものを脱却せる純粋な美の本体を直観するに至るのである。これこそフィロソフィヤすなわち智慧の愛求であり、道徳的にも知識的にも人間向上の最高段階である」すなわち、哲学（フィロソフィー）とは、ただひたすらに脳内で二次元キャラに萌えることなのだ！萌えよ、さらば与えられん。ちなみに世間で言うところのプラトニック・ラブは、せいぜいが人間女相手のセックスレスの純愛であり、プラトン本来の使い方とはまったく違う。なお、『饗宴』でプラトニック・ラブ（萌えこそ哲学なり）を最初に唱えた人は、ソクラテスではなく巫女ディオテマである。プラトンは巫女萌えだったのだ。

うがより「美のイデアに近い」存在となるわけです。当時の哲学者がこぞって「ショタ万歳」と言い張っていたこと自体、もしかしたら女からのモテの魔の手を避けるための護身術だったのかもしれません。というのは、彼らはショタ萌えを「精神的な恋愛」と言い張っているからです。これは秋葉原の二次元萌えオタクが「二次元万歳」と唱え、「三次元は醜い。肉欲は嫌だ。二次元には肉体がないから、より精神的なんだ」と唱える現状とぴったりシンクロしているではありませんか。無論、エロ同人誌やエロゲームの数々を見ていただければおわかりのように二次元萌えの世界にもたっぷりこってり肉欲はありますが、そこで終わらないでその先にある「永遠」の世界へ憧れ続けることこそが、二次元萌えの本質なのであります。

つまりプラトンは、ソクラテスの喪男哲学から出発して、〈イデア（＝観念）に恋愛する〉という哲学、すなわち現代語で言えば〈萌える〉という方法論、すなわち**「萌え哲学」を創始した人**だと言えるのです。ソクラテスには悪妻に酷い目に遭わされたという逸話が残っていますが、生涯童貞を貫いたプラトンにはその手の話があまりありません。死刑になることもなく、自らの学園アカデメイアを開いて長生きしています。プラトンは師匠ソクラテスがうっかり結婚してしまって失敗したのを見ていたので、護身を完成させていたのでしょう。ことあるごとに「ショタ万歳」と唱えたのも、すべては護身のためだった、と考えれば、納得できるというものです。**僕が護身のために「二次元万歳」と言っているのと同じ**です。

解脱系思考の東洋とユートピア的二元論の西洋

いずれにしても、東洋世界がブッダの影響で「この現実はすべて幻想であり、すべ

ては虚しい」という解脱系思想に染まっていったのとは対照的に、西洋世界はプラトンの影響で「この現実はろくでもない幻想だが、どこかに別の真実の世界がある」というユートピア的二元論思想に染められていったのです。

どちらかというとブッダのほうが大人の態度で、プラトンは往生際が悪い、という言い方もできるのですが、ただ現実を捨てるに留まらず自らポジティブに「萌え」るという生き様を人々に示したという点に、プラトンの最大の功績があったわけです。

ブッダとプラトンは二人とも「この現実は地獄だ」という喪男独特の認識からスタートしましたが、結論はまったく異なったのです。西洋文明がどこまでも突っ走る進歩主義に染まったのは、元はと言えばプラトンの「えいえんは、あるよ」という一言が原点だったのかもしれません。

ブッダがネガティブ喪男なら、プラトンは、

「モテぬなら　萌えてみせよう　ほととぎす」

というアグレッシブなポジティブ喪男だったのです。ただ、ポジティブといっても肉欲を遠ざけ、「モテてはいけない」と言い続けた点ではやはり喪男であることにかわりはありません。彼は「モテ」でもなく「涅槃行き」でもない第三の道「萌え」を生み出したのです。これは、同じ現実からの「解脱」でも、現実棄却というよりも「現実からの飛翔」と呼ぶに相応しい思想です。

また、プラトンは近代西洋における「恋愛至上主義」のルーツでもあります。近代西洋では、キリスト教の没落にともなって、「神」の代替となる何者かを求めざるを得なくなりました。そこでクローズアップされたのが「恋愛によって『美のイデア』という真実の世界・永遠の世界に触れることが可能になる」というプラトニック・ラ

ブの思想だったのです。近代西洋における恋愛至上主義の勃興については後述します。

ところで、ブッダとプラトンの登場から数百年遅れて、一人の恐るべき喪男スターが地上に降臨します。彼こそは全世界の虐げられし喪男たちが待望してやまなかった「喪男救世主」でした。そうです、ナザレのイエスです。後にニーチェが「奴隷道徳」と断罪したキリスト教の開祖となった人です。

3　ジーザス・キモイスト・喪男スター

ユダヤ教的な価値観をひっくり返した

イエスはキリスト教の開祖となった人で、紀元前七〜四年頃に生まれ、三〇歳の頃に活動を開始。三四歳の頃に十字架にかけられて死んだとされています。つまりイエスが実際に活動したのはほんの数年なのです。ご存知の通り、イエスはユダヤの生まれですが、当時のユダヤはローマ帝国の支配下にありました。ありていに言えば植民地化されていたのです。これは非常に辛いことです。「民族総喪男状態」と言っていいでしょう。ブッダが誕生した頃のインドにブッダ信仰が流行していたのと同じように、当時のユダヤ世界にも救世主メシア信仰が流行していたのです。

㊴　ゴッドランド
『北斗の拳』に登場する元特殊部隊レッドベレーの大佐が、荒廃した核戦争後の世界に建国した「神の国」。強靭な肉体と殺人術を併せ持つゴツい男ばかりの国だったので、子孫を作るためにあちこちから女をさらっていた。

マンガ『北斗の拳』では、拳法家のケンシロウが人々から「世紀末覇者ラオウの圧制から人々を解放してくれる救世主」として崇められたりしますよね。あんな感じで、ユダヤ教徒＝ユダヤ社会の間では、ローマの圧制から自分たちを解放してくれる救世主メシアを待望していたわけです。故に、イエスもまた人々からメシアとして崇められることとなりました。

しかしイエスの言動というのは、人々が想像していたいわゆる一般的な意味でのメシアとは異なりました。メシアは、ローマの勢力を一掃して「神の国」を建国してくれる人のはずだったのです。神の国と言っても**『北斗の拳』のゴッドランド**[*39]**みたいなところじゃない**ですよ。もっと平和で楽しい国ですよ。とりあえずパラダイスのことだと考えてください。つまりメシアとは、現実の世界において人々を物理的に解放してくれる救世主だったんです。

ところが、**イエスの「神の国」は、なんと脳内にあった**のです（図１－４）。一元論だったユダヤ教の世界に、二元論を持ち出したわけです。『天国にいちばん近い島』[*40]というタイトルの映画を上映して

エルサレムは現代でも三つの宗教勢力が「聖地」として信仰しており、終わることのない争いの種になっている。イエスは神の国を二次元へとしまいこんだのだが、人々を三次元という洞窟から解放することはできなかったのだ。

図１—４　ユダヤ教の神の国とイエスの神の国

おきながら、オチで「天国にいちばん近い島は、心の中にあった！」と言い出したようなものです。これはローマからの現実的な解放を願っていた多くのユダヤの人々にとっては、「ムキーッ」とちゃぶ台をひっくり返したくなるような話です。

これ以外にもイエスのやったことというのは、それまでのユダヤ教的な価値観をすべてひっくり返して否定することばかりでした。ほとんどアナーキストです。そりゃ『ジーザス・クライスト・スーパースター』[*41]なんて映画も作られます。まずユダヤ教の律法主義を否定しました。大事なのは人間であって、法なんてどうでもいいんだYO！　と言ったのです。そのために敵をいっぱい作って死刑になったわけです。ソクラテスがソフィストたちとケンカして死刑になったのと似ていますね。

その時代の体制となっている思想を真っ向から否定して弾圧されて死んでいくというパターンは、喪男哲学者の特徴かもしれません。体制ってのはモテですからね。モテる奴にとっては体制が変革されるというのは困ったことですから、現状でいいんだ、ということになります。また、**モテ体制哲学は理屈ばかりこねて、どうでもいい細かなことを延々と議論し続けます。**体制（喪男の苦しみの原因）をなんとかしようと企んでいるわけではありませんから、無駄でもなんでも議論し続けてないと仕事してることにならないのです。**予算が余ってるので無意味な道路工事をするお役所みたいなものです。**これでは真剣に（喪男の苦しみを解決しようと）哲学を追究している喪男と相容れるわけがありません。

また、イエスは民族主義も否定していまして、とことん個人主義でした。身分差別も認めませんでした。イエスの取り巻きの弟子の中には一説によると売春婦も混じっていたと言われています。マグダラのマリア[*42]がそうだった、なんて設定の映画とか小

㊵「天国にいちばん近い島」
一九八四年に公開された角川映画。原作は森村桂。監督は大林宣彦、主演は原田知世。あらすじは……忘れた。

㊶「ジーザス・クライスト・スーパースター」
イギリスのミュージカル。一九七一年初演。キリストの生涯を描いた演劇だが、歌う音楽はすべてロック。七三年にノーマン・ジュイソン監督で映画化された。なんとユダが黒人。

㊷マグダラのマリア
最後までイエスにくっついていた女性。売春婦だったと言われているが、聖書にははっきり書かれていない。イエスは童貞だったと堅く信じられているので（喪男宗教・キリスト教の思想に基づけば、童貞でなければ救世主になれるはずがないから）、マリアはイエスに近づく「モテの魔の手」扱いされる嫌われ者である。しかし同時にキリスト教世界における「非処女萌え」属性者のアイドルでもある。

説、よく見かけますよね。

マグダラのマリアは聖書によると「罪深い女」だったのですが（別人が混同されているという説もあります）、イエスはマリアをあっさり赦（ゆる）します。後に日本でも、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」[*43]という教えが出てきましたが、イエスは「罪深い人間のほうが、赦された時により多く愛せる」と言うのです。これはもう「**非処女萌え**」ですよ。**萌えの中でも最先端のジャンル**と言えましょう。

このように「無価値とされているものこそ、より素晴らしい」という思想がイエスの哲学の基本になっています。ニーチェがキリスト教を「奴隷道徳」と言ったのは、イエスが「価値転倒」をやったからなのです。

で、この論法で行くと、喪男のほうが愛が深いということになります！　イケメンはモテモテなので、いちいち深い愛など感じちゃいません。しかし喪男はいったん愛を得れば、どこまでも深く愛することができるのです。時々、勝手に他人を愛してストーカーになったりしますが……。野島伸司のドラマ『101回目のプロポーズ』[*44]は、見事にこのイエスイズムを表現した物語になっていますね。このドラマは、恋愛ドラマであるにもかかわらず、喪男代表として武田鉄矢が登場します。もちろんモテるのはライバルのイケメン男なのですが、より愛が深かったのは喪男武田鉄矢なのです。

しかし、いまの世の中でこのドラマを再放送するとストーカー擁護になるので地上波での再放送は難しいという都市伝説が……。ああ。喪男は心に「愛情」を持つことすら許されないのでしょうか、いまの日本では。いったいどこに救いがあるのでしょ

㊸「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」
親鸞の言葉。『歎異抄』（たんにしょう）より。悪人正機（しょうき）説。恥知らずにも自分を善人だと思いこんでいるような無知蒙昧なクソ愚民ですら仏は救ってくれるのだから、「私は悪人だ」と自覚して怯えている善良な喪男が救われないわけがない、という説。ここで親鸞が言う「悪人」とは煩悩に塗れた人間存在そのもののことで、犯罪者という意味ではない。つまり人間はみな「悪人」なのであって、世の中には「自分が悪人だと知っている人間」と「自分が善人だと思いこんでいる人間」つまり「偽善者」しか存在しないのだ。で、どっちがマシかと言えば、自分が悪人だと気づいている人間のほうがよほどマシだというわけである。つまり他人を非モテだと差別して生きている無自覚な偽善者よりも、己の喪っぷりを嘆き悲しんでいる喪男のほうがマシというわけなのだ。

㊹「101回目のプロポーズ」
一九九一年にフジテレビで放映されたトレンディ・ドラマ。脚本は野島伸司。ヒロインは当時人気絶頂の浅野温子。しかし浅野に迫る主人公は、なんと武田鉄矢！　もちろん鉄矢は浅野にまったく相手にされないのだが、浅野の言いなりになってボーナスを全部馬券に突っ込んだりターミネーターの如くトラックの前に飛び出して「僕は死にましぇん！」と叫んだり一念発起して司法試験を受けたりと涙ぐましい恋愛ポトラッチ活動を繰り広げ、最後にはすべてを失って一文無しになってしまう。マンガ『めぞん一刻』にインスパイアされた話だったが、主人公

うか。

神の愛

イエスはまた、神と人間との関係を「父と子」という家族関係になぞらえました。それまでユダヤ教の神は恐ろしい「裁く神」で、厳格な律法を人間に課す存在でした。ところがイエスの考えでは、「神は無力な人間（＝子）を赦してくださる」ということになったのです。全然逆です。**ユダヤ教の神が『巨人の星』の星一徹なら、イエスの神はKeyのPCゲーム『Kanon』[*45]の月宮あゆぐらい違います。**つまりユダヤ教の神には現代的な意味での「愛」はなかったのです（ユダヤ教だけでなく、だいたいの宗教に登場する神様は人間ごときに愛なんて持っていませんです。仏様は別ですが、仏は神様という属性ではありませんし）。イエスが最初に「神の愛」を持ち出したのです。

愛といってもプラトンの説いた恋愛的な愛であるエロスとは少々異なり、アガペーと呼ばれるものです。隣人愛、同胞愛、人類愛です。神の愛＝アガペーは無償の愛で、すべての人間に平等に与えられるものです。イエスはこのアガペーを人間と人間との間にも導入しようとしたわけです。「汝の隣人を愛せ」というわけですね。それどころか「右の頬をぶたれたら、左の頬も出しなさい」と言いました。自分を迫害する敵すら愛せというのです。「そんなことできるわけあるか！」と思いますが、イエスは実際、あっさりと捕まって十字架にかかって死んだのでした。

で、イエスの弟子たちはこれを見て「イエスは自らの命を犠牲にして人類の贖罪（しょくざい）をしてくれたのだ、これが愛だ！」とじーんと感動し、キリスト教の伝道に命をかけることになったのでした。

を鉄矢にしたことで喪男度が三〇〇パーセント増強された怪作。『東京ラブストーリー』が大ヒットしていたトレンディ・ドラマの全盛期にこんな怨念に満ちた喪男ドラマを作った野島は凄い。

㊺「Kanon」
Keyの名作PCゲーム。『涼宮ハルヒの憂鬱』を手がけた京都アニメーションが再アニメ化したのでぜひDVDを買って観てください。

性欲と萌えを完全分離

ところで、**アガペーも日本語で言えば、「萌え」**ですね。

プラトンも萌えの源流である「プラトニック・ラブ」を説いたわけですが、プラトンの萌えとイエスの萌えとはどう違うのでしょうか？

プラトンは、「美のイデア」という二次元世界への到達を理想としました。つまり最後には二次元萌えに行き着くわけです。でも、いきなり美のイデアに到達することはできません。感覚によってイデアを感じることはできず、理性による認識によってイデアを理解できる、とプラトンは考えました。また、美のイデアに到達するまでの過程で、とりあえず肉欲も経験しておかねばなりません。いろいろ試して、順々にステージをあがっていって知恵をつけて最後に美のイデアに到達するのだと。つまりまあ「**私も若い頃は散々遊んだけど、やっぱ、最後は愛よねー**」ということですね。なんだか内田春菊[46]のマンガとか、『ＮＡＮＡ』[47]みたいですが。経験値を積むことによってレベルをあげれば「萌え」が理解できるようになるかもね、というのがプラトンの考えでした。

これに対してイエスのアガペーは、宇宙空間に充満するエーテルの如く、神から人間に先天的に与えられるものです。直感です。つまり「考えるな、感じるんだ！」[48]ということです。ですからイエスにおいては萌えによる「赦し」が強調されます。「かわいらしさに悶える」「かわいらしいものに憧れ、恋をする」という意味の萌えではなく、「喪男の心を癒す」という意味での広義の萌えですね。

また、アガペーは肉欲とは無関係な純粋な愛情です。「萌え」の中にも、「萌えエ

㊻ 内田春菊
マンガ家、小説家。女の子がＤＱＮ男にセックスされてセックスされまくる乙女回路（第三章注(69)）破壊ショックホラーマンガが得意。喪男が読むと一生のトラウマになる。代表作『南くんの恋人』『ファザーファッカー』『私たちは繁殖している』。

㊼ 『ＮＡＮＡ』
矢沢あいのマンガ。『Ｃｏｏｋｉｅ』連載。映画やアニメにもなった。女の子がＤＱＮ男にセックスされてセックスされてセックスされまくる乙女回路破壊ショックホラーマンガ。喪男が読むと一生のトラウマになる。これが今の少女マンガの一番人気。世のかわいらしい女子小中学生がこんなただれたセックスマンガを読んでいるわけです。そして、誰にも咎められない。なのに『よつばと！』を読んで心を洗われて泣いている俺は犯罪者予備軍と咎められる。末法の世とはまさにこのこと。

㊽ 「考えるな、感じるんだ！」
ブルース・リーの言葉。感覚主義、直感主義。元はリーが創始したジークンドーという格闘技の理論だった（のだろうか）が、現在ではあらゆる思想界に普及している。

ロ」というジャンルと、「純な萌え」がありますよね。例えば「スクール水着フィギュア」は萌えエロですが、「くまのぬいぐるみ」は純な萌えです。「くまのぬいぐるみ」にエロスを感じる人はあまりいません。「くまのぬいぐるみ」のお尻の部分に穴ぼこを空けて、そこにナニを突っ込んでハァハァする人はほとんどいない、はずです。たぶん。まあ日本全国を探せば何人かはいるとは思いますが、僕を含めて僕の周囲にはいません。それでも、「くまのぬいぐるみ」を見ると胸がときめいて萌えますよね。その違いなのですね。

つまりイエスは、性欲と萌えを完全に分離して考えた人なのです。この思考は、明らかに童貞の思想です。プラトンは当時のギリシアで大流行だったショタ萌えを三次元で実践していたかもしれません。ですが、**イエスは必ずや真性童貞です。ええ。そうに違いありません**とも。二人の考えた「萌え」の違いは、この「ショタ経験の有無」にあった、と僕は勝手に睨(にら)んでいます。また、「赦し」にイエスがこだわったのは、ユダヤの神が恐ろしい「裁く神」であったので、その価値観をひっくり返したかったのかもしれません。父ちゃん、俺はもっと優しく甘やかしてほしかったんだよう、とイエスは主張したのです（図1-5）。

『ダ・ヴィンチ・コード』がバチカンの怒りを買ったわけ

さて、スコセッシのキリスト映画『最後の誘惑』[*49]では、イエスはマグダラのマリアとセックスします（といっても、実は童貞イエスが見た妄想夢だったけど）。そのため、この映画は全世界のキリスト教徒から大顰蹙(ひんしゅく)を買いました。イエス様が童貞を捨てて純潔を失うシーンを映像化するなんて有り得ない、というわけです。

㊾「最後の誘惑」
一九八八年。アメリカ映画。監督はマーティン・スコセッシ。イエスの生涯を描いた映画だが、この映画に登場するイエスは十字架にかけられた際に思わず脳内でマグダラのマリアとセックスして童貞を捨て、さらには他の女と結婚して子供を作って死んでいくという「もう一つの人生」をうっかり妄想してしまう。それがイエスに降りかかった「最後の誘惑」というわけだ。この一連の妄想シーンが「イエスに対する冒瀆である」とキリスト教徒の逆鱗に触れ、上映反対運動を起こされたりしたのだった。

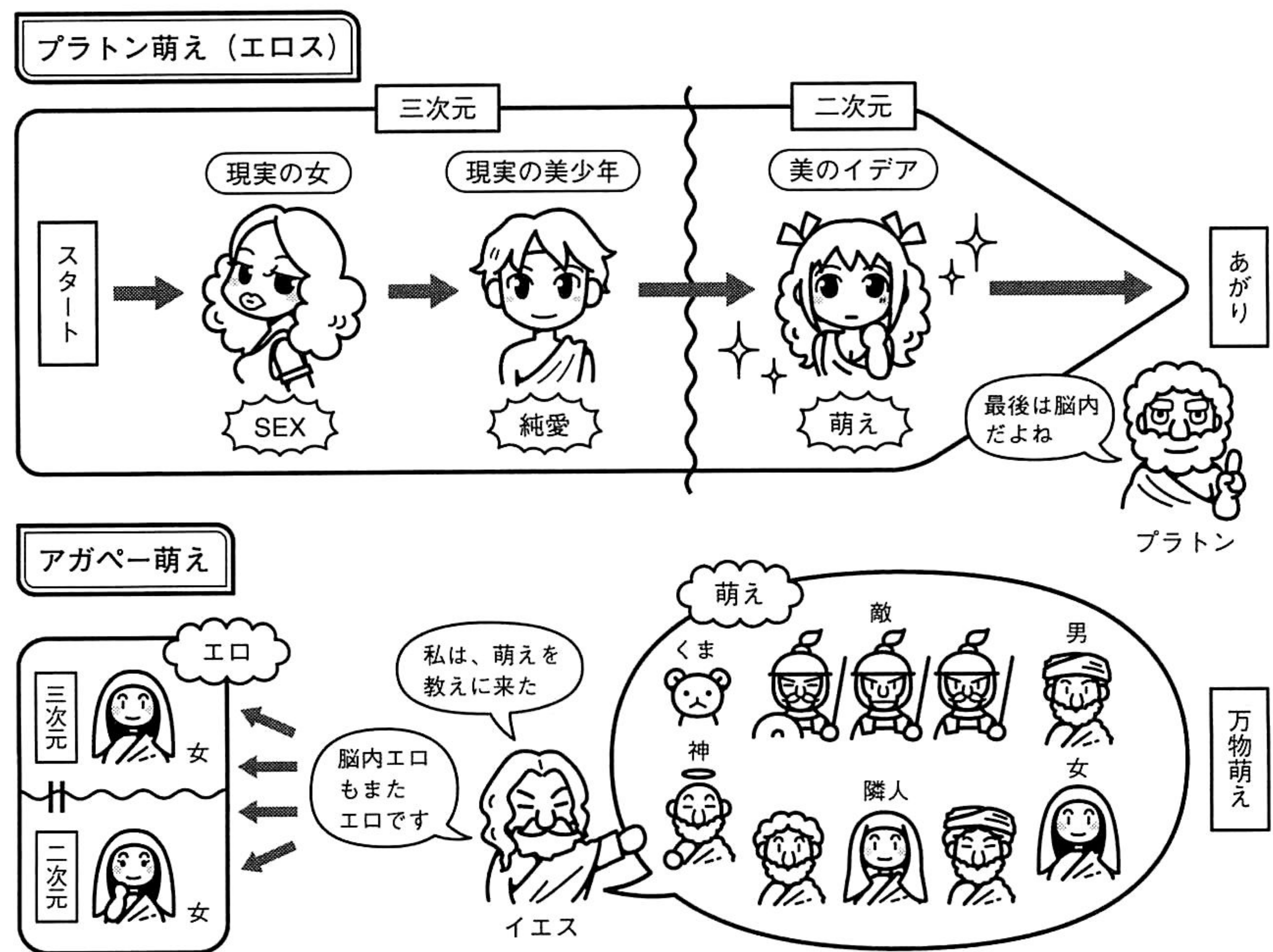
そして『ダ・ヴィンチ・コード』。イエスがマグダラのマリアと実際にセックスして子供を作っていた！　という主張がバチカンを激怒させました。しかしなぜキリスト教徒は、イエスがセックスすると怒るのでしょう。いったいイエスが童貞を捨てるシーンを描くことの何が「冒瀆」なのでしょう？

　そうです、本書の冒頭にも書きましたが、キリスト教は骨の髄まで「喪男宗教」なのです。

　イエスはローマからの解放を望む人々に、「汝の隣人を愛せ」「神の国は心の中にある」と言いました。たとえ現実ではローマに支配されていても、脳内で神の愛を感じれば、つまり神に萌えれば救われる、と説いたわけです。「萌えによる脳内勝利」という方法論を示したのです。

　で、現実の敵・ローマに対しては「右の頬をぶたれたら左の頬も出しましょう」とドMみたいなことを言いました。神はすべての人間を平等に愛してくれるので、現実での身分の違いや境遇の差などはたいした問題ではない、とイエスは考えたのです。

　これはつまり、二元論を導入することによって、イエスが人間の個の自立を説いた、**個人的に**（脳内

プラトン萌え（エロス）

アガペー萌え

プラトンは三次元から二次元へと進化することで愛は肉欲から脳内萌えへ「成長」すると考えた。イエスは恋の延長としての愛ではなく、あらゆる人、あらゆるものに平等に萌えよと説いた。同じ「萌え」でも、理論好きのプラトンと直感タイプのイエスでは目的に到達するプロセスが異なったのだ。

図1―5　プラトン萌えとアガペー萌え

で）救済されていればそれが魂の救済であると説いたということです。**元祖・電波男**です。もちろんそういう二元論思想のなかったユダヤ教を信仰する人々にとって、イエスの言っていることはまったくもって肩透かしでした。メシアは現実を変えてくれるべき存在だったはずなのに、なんだこいつは、ということになったんです。だから、イエスは十字架にかけられて死んだわけです。

ところがイエスが並大抵の喪男哲学者と違ったところは、この「十字架上の死」そのものを、「人類への贖罪という究極の自己犠牲」という感動イベントにしてしまったところにあります。正確に言えばイエスがそうしたわけではなくてイエスの弟子たちが勝手にじーんと感動してそういう物語を作ったわけですが、元々イエスの思想に「自己犠牲」という概念があったからこそ弟子たちは師匠の死に自己犠牲という教えの実践を見てじーんと感動できたわけです。「イエスはアガペーすなわち全人類への愛を実践するために、あえて彼らの罪を引き受けて死んだのだ」という「物語」がここに作られました。かくして、「喪男宗教」キリスト教が生まれたのです。

キリスト教が喪男宗教であるというのは、どういうことか？

例えば、キリスト教では、童貞が尊ばれます。同様に、女性なら、処女が尊いとされます。「処女崇拝・純潔崇拝」は喪男思想の特徴です。

もちろん仏教も喪男ブッダが開祖ですから、やはり童貞を尊びますが、**ブッダはほら、妻子持ちですから、「童貞を捨てた奴は穢（けが）れる！」とは言いたくても言えない**わけですね。しかしイエスは童貞のまま死んだと考えられているので、キリスト教はとことんまで童貞を崇拝できるわけです。

普通に考えて、**童貞というのはとりたてて価値のないことです**。生物の目的は自分

の遺伝子を残すことです（なぜタンパク質のコードなんぞを残さないといけないのか、誰が決めたのか、最初にこんな糞ゲーのルールを決めた奴を僕は小一時間問い詰めたいのですが）。ですから人間として生まれたからには子孫を作る仕事、つまりセックスをしなければならないというのが生物学的・社会学的な常識であって、童貞に価値を見出すというのは喪男思想だけの特徴なのです。『最後の誘惑』のようにイエスが脱童貞する映画はキリスト教の本質全否定なのでキリスト教徒の顰蹙を買うわけです。

さらにキリスト教では、イエスが「処女から生まれてきた」[50]という設定が作られました。**処女が子供を生むわけがない**のですが、なにしろ童貞・処女に至上の価値を置く喪男宗教ですから、イエスがセックスから誕生したとなると具合が悪いわけです。

このようにキリスト教は「童貞こそが尊い」「喪男万歳」と価値観を転倒させたのです。

一九世紀の実存哲学者ニーチェは、これを「弱者によるルサンチマン」であると断罪しました。ニーチェは『アンチ・キリスト』という本を書いて徹底的にキリスト教を批判したのですが、ニーチェの批判をまとめると、

「ローマの奴隷だったキリスト教徒は、現実ではローマに勝利できないので『脳内勝利』という詭弁を弄し、弱者こそが正しいというルサンチマンに満ちた転倒した価値観を作り上げた。それがキリスト教だ」

という具合です。ルサンチマンという言葉は、「怨念」という意味です。現代日本でも流行(はや)ってます。「現実における弱者が何を言おうが、それはルサンチマンの産物であるから、考慮に値しない」という論法でよく使われます。弱者の反論や不平不満の表明すら認めないという、ジャイアンやモテにとっては便利な言葉です。

㊿「処女から生まれてきた」
イエス以前にも、例えばプラトンにも「処女母伝説」がある。

ニーチェの言う通り、「童貞こそ純潔」「脳内でこそ勝利」という転倒したイエス哲学の価値観の源泉は「弱者のルサンチマン」です。要はモテない喪男とか貧乏人とかの妬み・僻みです。イエスの場合は個人的にモテないというようなささいな問題を通り越して自分の民族そのものがローマの奴隷ですから、そりゃもう凄い喪男ぶりです。ローマのイケメンどもに虐げられ、喪男民族にされてしまったユダヤの人々すべてのルサンチマンがイエスの一身に集まっているのです。そういう人々のルサンチマンが「メシア待望論」を産んだわけです。でも、現実では勝てないので、イエスは二次元の天国という概念を発明して、脳内勝利を宣言した、と。

二元論をユダヤ教世界に持ち込む

ここで重要なのは「神の国は脳内にある」とイエスが言い出したことです。つまり、「現実vs.空想」「三次元vs.二次元」の「二元論」をユダヤ教の世界に持ち込んだんですね。ニーチェの哲学は「生の哲学」と言われるように徹底した一元論です。二次元勝利の価値をニーチェは認めない。三次元だけがニーチェの生きる場所なんです。イエスとニーチェの思想の違いは、一元論と二元論の違いなのです。でも、本当は二人とも根本は同じなのです。そもそも後述するように**ニーチェの思想自体もモテない喪男のルサンチマンの産物**ですからね。ニーチェは一元論といっても二次元が「ない」と言ったのではなく、己の脳内の二次元を三次元へと敷衍することこそが生きることだと唱えたのです。

ニーチェが間違っていたのは、ルサンチマンが生まれてくる原因と責任を、喪男つまり敗者自身にすべて押し付けた点にあります。以前、『朝まで生テレビ！』の少子

化対策問題の回で森永卓郎氏[51]が「いまの日本の男はイケメン・フツメン・ブサメン・キモメンの四種類に階層化されてしまっていて、金のないキモメンは結婚できないんですよ！」とイエスの如き神々しさで演説を行ったという事件があったのですが、その場に居合わせた女性論客たちから「危ない」「モテない男の代弁者？」「ルサンチマンが溜まっている」と鼻で笑われて終わりにされてしまいました。

森永先生はイエスのように十字架にかけられなかっただけまだマシなのですが、「ルサンチマン問題」を考える上で、我々喪男は「ルサンチマンは敗者の自己責任であり、敗者はルサンチマンを持つ権利すらない」という勝者＝モテどもの意見を全否定するべきです。大勢の喪男がモテの言葉に騙されているのです。そもそも人間にモテと喪男の差別がなければ、勝敗や階層がなければ、ルサンチマンは生まれないはずではないですか。たった一つの価値観つまり一元論で一部の人間を喪男という立場に追い込んでおいて、恨みを抱かれたら今度は「危ない」「ルサンチマンだ」と言論封殺しようとする。これが卑劣な「現実」の仕組みなんです。

「現実」が間違っているからルサンチマンが生まれるのです！

ブッダも「縁起」を説いています。原因があるから結果がある、という簡単な話です。ルサンチマンという結果には、原因があるのです。ところが、原因を作っている連中は、原因を変えることはせずに結果だけを抑圧し続けようとするのです。イエスは、そんな世界に虐げられていた人々の煮えたぎるルサンチマンを「革命」つまりローマ帝国の打倒という方向に向けず、「愛による脳内勝利」つまり「萌え」によって昇華させせようとしたわけです。

(51) 森永卓郎
経済学者。三菱ＵＦＪリサーチ&コンサルティング経済・社会政策部客員研究員、獨協大学経済学部教授。ミニカーオタク。テレビやラジオに精力的に出演し、マスコミの度重なるオタク弾圧に敢然と立ち向かう喪男救世主。代表作『年収３００万円時代を生き抜く経済学』『〈非婚〉のすすめ』『萌え経済学』。

キリスト教でも組織化が始まる

ところが、ここからはニーチェの言う通りなのですが、その後のキリスト教は「萌えによる全人類の救済」をもたらしはしませんでした。確かにキリスト教は「ローマ帝国＝イケメン、キリスト教徒＝喪男」という価値を見事に転倒させました。イケメン皇帝が統治するローマ帝国は滅び、バチカンにはローマ皇帝に成り代わってカトリックの頂点に立つ教皇が君臨することになったのです。しかし結局は、**「キリスト教徒＝偉い、邪教徒＝悪い」という新たな価値体系が生まれただけ**だったのです。

どうして「寛容」の教えを出発点にしているキリスト教が自ら権威になってしまい、他の宗教や異端に非寛容になったのか？　イエスが十字架にかけられた上、その後もキリスト教徒は弾圧され続けていました。ローマ皇帝の中には、キリスト教徒とライオンを闘わせて笑っていた人もいたそうです。モンティパイソンのコントじゃあるまいし、ライオンに勝てる人間なんて範馬勇次郎[52]しかいません。闘わされたキリスト教徒はみんなライオンに食い殺されました。まさに悪の皇帝です。で、ローマ市民もその光景を見物して楽しんでいたわけです。こんな弾圧を長年受け続けているうちに、ルサンチマンを昇華するどころか、逆に「現実をキリスト教で逆洗脳しなければ生きていけねえ！」という方向に教団が向かったのは無理もないかもしれません。

ともかく、キリスト教が「童貞万歳！」「天国は脳内にあり！」という喪男哲学から出発し、「組織化・イエスのカリスマ化・体系化」という例のお決まりのコースを経て「喪男宗教」へと発展したことは間違いありません。そしてこのキリスト教が、西洋の歴史を事実上支配したのです。つまり中世とは、喪男宗教がヨーロッパ全土を覆っていた時代なのです。

(52) 範馬勇次郎
板垣恵介のマンガ『グラップラー刃牙（ばき）』シリーズに登場する地上最強の男。あだ名は「オーガ」（鬼）。ライオンどころか、シロクマやマンモスよりもデカい巨大象をも素手で倒す。

(53) デカルト
一五九六年～一六五〇年。ルネ・デカルト。哲学者、数学者。意味不明の形而上学的論争を繰り返すスコラ哲学をボロクソに罵り、方法的懐疑（とりあえず全部を疑う）を導入してそれまでの哲学をすべてリセット。自分自身の精神＝自我を哲学の中心に据えた。「我思う、故に我あり」の名言で有名。さらに世界を「延長」として捉えて数学的に計測可能とする座標系を考案。世界を「物質」と「精神」とに二分する新たな二元論を構築して近代哲学を生み出した。生涯独身。代表作『方法序説』『省察』。

哲学の教科書を開いていただければわかるように、哲学史はまずソクラテス・プラトン・アリストテレスに代表されるギリシア哲学からスタートします。その後、キリスト教時代をすっ飛ばして、いきなり近代のデカルト[*53]までワープしてしまいます。これはつまり、デカルトが近代的自我を発見するまで、西洋の人間はみんなドグマ化したキリスト教に支配されていたということを示しています。

イエスは「神の国は脳内にあり」という二元論を唱えたはずなのですが、いつの間にかキリスト教は現実に対しても絶大な権力を持つことになりました。喪男哲学が喪男宗教へと変質していく過程で、必ず「組織化」が起こります。そして組織化された集団は、脳内勝利のみならず、現実に対する勝利をも勝ち取ろうとするものです（そもそも脳内勝利で事足りるのでしたら、組織化など必要ありません）。というわけで、キリスト教化された西洋では教会が絶大な権力を握ることになりました。

もちろんキリスト教の教義も「体系化」されていきます。『新約聖書』[*54]が整備され、非常に複雑なキリスト教神学が展開していきます。もちろんイエス自身の「カリスマ化」も行われました。処女から生まれたという設定もカリスマ化の一つですが、何と言っても十字架にかかった後にイエスが生き返って神の国へ帰ったという「どんでん返しのエピローグ」が作られたのです。い、いや、作られたというと叱られそうですが。なんせ聖書によるといろんな弟子が生き返ったイエスと会ってるんですから、もしかしたら本当に生き返ったのかもしれません。往年の『週刊少年ジャンプ』マンガにもこの手法は引き継がれました。王大人（ワンターレン）[*55]がちゃんと死亡確認したはずが、しばらくすると「な、なにぃー？　生きていたのか？　雷電？」[*56]これはびっくりしますね。

で、さらに「神・イエス・聖霊」の「三位一体論」[*57]とか、どんどん複雑な体系が作ら

㊹「新約聖書」
世界一たくさん印刷されている本。仏典同様にイエス自身が書いたものではなく、初期のキリスト教徒たちが書いた様々な福音書や書簡などを編集したもの。現在の形になったのは四世紀頃で、数度にわたって開かれた宗教会議によって膨大な量の聖書文書から正典と外典とが決定されていった。

㊺ 王大人
宮下あきらのマンガ『魁!!男塾』に登場するラーメン頭の中国人武術家。バトルで闘死した生徒をチェックして「死亡確認」と宣告するのが仕事だが、この死亡宣告がまったくもって信用ならない。

㊻ 雷電
大往生。

㊼ 三位一体論
「イエス」（神の子）と「神」と「聖霊」が実は一体であるという説。何のことやら、日本人には非常に難解。聖霊って何？　元々はギリシアなどの古代宗教に「父と母と子」の三位一体思想というものが存在し、キリスト教では母性を排除したので母の代わりに聖霊が採用された、という説もある。

れていったわけです。

女性に厳しかった喪男宗教

キリスト教は喪男宗教の特徴として、**女性にだけ特に厳しかった**、という暗黒面も見逃してはいけません。

喪男のルサンチマンが現実にダダ漏れになると、実に恐ろしいことが起きるのです。

喪男宗教化したキリスト教の暗黒面の最たるものとしては、異端審問[*58]や魔女狩りがあげられます。一五世紀に『魔女の鉄槌』[*59]という本が出版され、魔女を狩るのが一大ブームになったわけです。魔女として捕まった女性はほとんど死刑になったそうで、フランスを救った英雄ジャンヌ・ダルク[*60]も魔女と罵られ、異端裁判にかけられて火あぶりになっています。なんでフランスを救ったのに魔女なんでしょうか？　ことほどさように「魔女」というのは実体が怪しいレッテルでした。**ブッシュが「反民主主義的」と言うぐらいに実体が怪しいです。**

とにかく魔女は悪魔の手下ですから、人間ではありません。人間じゃないから何やってもいいんだということで、好き放題に拷問したそうです。まあ、あんまり詳細に書くとアレなので拷問の具体例は割愛しましょう。魔女を水に沈めて「浮かび上がったら魔女、沈んだら人間」なんていう拷問もあったとか。

処刑される魔女と連行される魔女
チューリッヒ中央図書館、16世紀

㊳ 異端審問
カトリックの教えに背いた者を裁判にかける制度。一二世紀に南フランスでカタリ派（アルビ派）と呼ばれる勢力が拡大した頃から異端審問の制度が整えられ、各地で異端が捕らえられ火あぶりにされたりするようになった。さらに一五世紀あたりからは異端狩りから魔女狩りへとブームが移り変わった。

㊴ 『魔女の鉄槌』
一四八六年ドイツで出版されて二〇〇年に及ぶベストセラーとなった。執筆はドミニコ会の異端審問官、ハインリヒ・クラマーとヤーコプ・シュプレンガー。女の悪口と童貞のエロ妄想が爆発。喪男の暗黒面がこの書物に濃縮されていると言える。これが小説なら別に問題なかったのだが、当時はまだ二次元と三次元の区別がついていない中世ヨーロッパ。『魔女の鉄槌』はガチの魔女裁判バイブルとして読まれたのだ。

㊵ ジャンヌ・ダルク
一四一二年〜三一年。オルレアンの処女。百年戦争のさなか、フランスの片田舎ドンレミに生まれた。天使の声に導かれて男装し、イギリスに敗北しつつあったフランス軍を率いて闘っ

それじゃどっちに転んでも死ぬじゃないですか。

言うまでもなく魔女狩りブームは、喪男的ルサンチマンが現実の女性に向けられた一つの典型例と言えましょう（男が狩られることもあったそうですが）。

こういう時に絵はいいですよね、絵は。絵なら誰も実際には傷つかないですからね。少し話が逸れますが、饅頭のルーツを作ったのは、諸葛孔明*61だといわれています。諸葛孔明は『三国志演義』*62の主役ですが、南方の未開の地に遠征に行った際に、土地の人々が人間の頭を狩って河に流すという鬼畜な儀式をやっているのを見て心を痛めたそうです。で、饅頭を作って、

「儀式なんだから、本物の人間の頭を使う必要はありません。饅頭を使って代用しなさい」

と地元民に教えてあげたんだそうです。地元民の人々は、以後、儀式のために人の首を狩る野蛮な風習をやめて、儀式の際には饅頭を作って河に流すようになったそうです。

いい話ですね。二次元エロというものも、「本物」の代わりに「絵」を代用することで、人間の性欲や様々な欲望を昇華してくれる素晴らしいシステムなんです。だって「絵」は「絵」ですよ。絵に対して妄想の中で何をしても、「現実」の人間は誰も困らないわけです。もし二次元エロを規制したら、「絵」つまり想像の世界で欲望を昇華できなくなった人間がぞろぞろと、「現実」つまり三次元に出てきて、他人に迷惑をかけるはずです。

きっと三国志の時代でも、饅頭を人間の代わりに使いなさいと教える諸葛孔明に対して、

た。ジャンヌ萌え兵士たちの活躍で戦局は一変。しかしジャンヌの人気に嫉妬したフランス王に見放されて捕虜となり、一年間にわたって監禁された末に異端としてルーアンで火あぶりにされた。以後、世界中の喪男に崇拝される「萌えキャラ」となり、シラー、バーナード・ショー、アナトール・フランス、マーク・トゥエインらが「ジャンヌ文学」とでもいうべき作品群を残した。現代でもリュック・ベッソンなどがジャンヌ映画を作っている。しかしリュック・ベッソンはジャンヌを脳内神様と脳内で会話しているだけの「電波少女」として描いて徹底的にシメていた。確かにそうかもしれんけど……ひ、酷い……。

㉛ 諸葛孔明
一八一年〜二三四年。中国の三国時代、蜀の丞相として活躍した人。日本ではよく諸葛亮孔明と呼ばれる。三〇歳近くまでひきこもりで趣味の農作業と読書に明け暮れるニートだったが、劉備の「三顧の礼」を受けて政界デビュー。「天下三分の計」を説いて実行した。劉備の死後は、蜀を一人で切り盛りすることになる。ブサイクな嫁と結婚したことでも有名。

㉜ 「三国志演義」
中国の正史「三国志」をベースにした長編小説。作者は羅貫中。蜀が主人公（善玉）で、魏が悪玉。前半は劉備が主役だが後半は諸葛孔明が主役になる。呂布の武力はゲーム三國志では100。

「それ、饅頭じゃねーか！　人間じゃねーよ、偽物だよ！」
と反対したバカな人はいたはずです。**なんと、さかしらな。こざかしいとは、まさにこのこと。**

諸葛孔明は、儀式が残酷だから規制して廃絶しようとしたのではなく、二次元というもう一つの世界を利用することで、儀式を現実（三次元）に対して無害なものに変換したんです。禁止ではなく想像力による昇華。これが**本当の知恵**というものです。

ところがキリスト教の全盛時代は、二次元エロもまたエロだということで激しく規制されたのです。イエスが「脳内で妄想してもそれは罪」みたいなことを言ったのを拡大解釈したんです。イエスの真意は、女性を不浄だと責める「正しい道徳論者」たちの偽善を暴こうとしただけだったはずです。「あんたら、この女はエロいだの何だのと偉そうに正義の味方ぶってるけど、あんたらだって頭の中はエロじゃねーか」ということですね。いやつくづく立派な人です。

ところがいつの間にか「脳内ですらエロいことを考えるのは罪だ」ということになって、二次元エロもまた罪になったんです。つまり**「性欲のない人間」という有り得ない理想が作られ、すべての人間はその理想に近づくべきだ、ということになったんです。**無茶言うな、と。

現代日本で二次元エロメディアすら規制せよと言っている人は、こういう連中の末裔です。「子供を作って育てるための性交」だけが「正しい性欲」で、それ以外は全部禁止。脳内で妄想するのも禁止。そんな余計なエロ妄想を持っている人間はまともな人間じゃない、悪人だ変態だというわけですね。イエスがそういう偉そうなエセ道徳家を見かけたら、「お前の頭の中にはエロ妄想がないとでも言うのか」と説教して

くださると思います。
　イエスは人間の想像力（二次元の世界の力と価値）を最大限に評価したわけですが、中世のキリスト教教会は、自分たちが体系化して詳細なルールを作り上げた（元々は二次元の）世界だけが正しく、自分たちの世界のルールだけが三次元に適用されるべきで、そしてそのルールに従わない人間は全員悪であると考えたわけです。だから異教徒とか魔女に対してエロゲームでも有り得ないような残虐なことができたのです。つまり、**自分たちは勇者で、異教徒はスライム扱いだった**んです。
　こういう人――俺ルールだけが世界で、他のルールは全部悪だと決め付けて生きる人――を、本書では「一元論者」と呼んでいます。一元論者とは狭義には「現実だけを認めて、想像の世界の価値を認めない」人間を指すわけですが、実はこの「現実」というのも元々は誰かが設定した「フィクション」つまり「二次元の観念が三次元に適用されたもの」にすぎないのです。

喪男哲学から喪男宗教への変質

　拷問とか魔女狩りというものは、フロイト[*63]の登場を待つまでもなく性的サディズムの産物です。人間が性欲をはじめとする様々な欲望を過剰に抑圧されると、ルサンチマンが生まれます。現実に抑圧されてルサンチマンが溜まった状態の人間を、本書では「喪男」と呼んでいます。喪男哲学とは、この喪男のルサンチマンをいかにして平和的な方法で昇華するか、という方法論の追究なのです。
　ところが喪男哲学がドグマ化して喪男宗教に変質してしまうと、「現実への復讐」という別のルートが開けてしまうことがあるわけです。

(63)　フロイト
一八五六年～一九三九年。ジークムント・フロイト。オーストリアの精神分析学者。無意識を発見し、「自我とエス」「リビドー」「エディプス・コンプレックス」「快感原則と現実原則」などの様々な概念を発明した。この無意識の発見によって、フロイトは近代的な自我＝人間至上主義を破壊した。精神分析学は元々は神経症を治療するための臨床技法だったが、従来の近代的な人間観を破壊する革新的な理論だったために徐々に文化論・芸術論へと広まっていく。しかし、汎性欲理論に固執したために弟子のユング、アドラー、ライヒたちに次々と離反された。ユダヤ人であったために晩年はナチスに迫害され、ロンドンに亡命して死んだ。言語学のソシュール、現象学のフッサールと並ぶ現代思想の三大ルーツの一人とされているが、なぜこの中にアインシュタイン（第二章注㉝）がいないのか。代表作『夢判断』『精神分析入門』『性に関する三つの論文』『トーテムとタブー』『モーセと一神教』。

中世キリスト教の特徴は、異端と性に対する非寛容です。喪男宗教を信じないものは人間ではないのでヤッチマイナー、というノリで、異端審問や魔女狩りや十字軍遠征が盛んに行われました。本来は「神に萌える」というアガペーの教えだったイエスの喪男哲学がなぜこのような恐ろしい世界を現出させてしまったのかという問題を考えると、やはり「哲学の組織宗教化」にそもそもの原因が求められると思うのです。組織とは現実社会そのものですから、現実における権力を生みます。同じルサンチマンから出発したはずなのに、イエス個人の「汝の隣人を愛せ」という万物萌えの精神と、組織化された集団による「異端審問」「魔女狩り」「十字軍」という非寛容の精神とに、ルートがどこかで分かれてしまったわけです。

結局のところ、イエスの「神に萌えろ、隣人に萌えろ」というアガペー思想＝博愛萌え思想は、ほとんどの人間には実践不能だったのです。**イエスに萌えれば萌える程、イエスに萌えない異教徒を打ち倒したくなってしまう、という悪循環にハマった**のです。イエスは「萌えによるルサンチマンの昇華」という道を指し示したのですが、その具体的な方法論を全人類に悟らせることはできなかったのです。

組織化・個人のカリスマ化・体系化、これらはすべて、喪男哲学をまったく別のもの、つまり「体制」、言い換えれば「モテ」に変えてしまう原因なのです。しかも、体制としては「モテ」だけど、中身は「喪男」ですから、現実への復讐が始まるわけです。魔女を狩ったり、異教徒を攻撃したり。そこには「脳内で救われろ」という二元論哲学はかけらも残っていません。三次元を「神の国」に変えるためなら何をしてもいいのだ、という一元論の世界になってしまうのです。喪男宗教だったはずなのに、やっていることはモテと同じなのです！　ああ！　**結局、モテとか喪男とかいう**

立場は、相対的なものにすぎないのです。

中世を通して、キリスト教一元論に支配され続けた西洋において、真の「喪男哲学」の復興はやはりデカルトを待たなければならなかったのです。デカルトこそは、事実上忘れ去られていた「二元論」を西洋思想に再び持ち込んだ喪男哲学中興の祖なのです。デカルトの二元論によって、中世は終わりを告げ、神に代わって「科学」と「恋愛」という二つの「新たなる神」が現れることになったのです。それでは、なぜデカルトは新たな喪男哲学を打ち立てなければならなかったのでしょうか？　機械人形フランシーヌ伝説が、そのヒントを与えてくれます。デカルトは科学に新たなる萌えの可能性、万人が等しく喪男的ルサンチマンを昇華できる希望を見出したのです。

第二章　科学の誕生

I　科学はデカルトに始まる

押井守は『イノセンス』で何を語ったのか

　近代哲学の教科書は必ずデカルトから始まります。

　デカルトと言えば、押井守[1]監督のアニメ映画『イノセンス』[2]でも繰り返し語られます。押井守監督は話をわざと難解にして大勢の人間をケムに巻いているのですが、**実は『イノセンス』のテーマは「人外萌え」「人形萌え」です**。『イノセンス』には「ハダリ」という機械人形が出てきます。これが萌えであると。萌えキャラであると。それがこの映画で押井守監督が本当に言いたかったことです。でも、そんなテーマをそのまま描いたら、押井守を難解な方向で評価している小難しい評論家やそのシンパたちに怒られますから、あえてファンサービスで難しくしたのです。しかしながら本書が提唱している「哲学とは喪男哲学であり、二次元への飛翔、萌えを志向する精神運動である」という観点からこの映画を観れば、『イノセンス』=「人形萌え」=「デカルト」の三者が作品中で実に美しく結びついていることがおわかりいただけるでしょう。

　『イノセンス』は未来世界を舞台にしています。この世界では、インターネット社会が究極まで発達しており、「仮想現実世界」がいわゆる「現実世界」とまったく遜色ないレベルにまで進歩しています。っていうか『イノセンス』ではむしろネット世界のほうが三次元よりも巨大な世界に成長しているのです。つまり本書で何度か言って

①　押井守
アニメ監督。「この世界は現実なのかそれとも虚構なのか、どっちなんだ」というテーマにこだわったメタ的な作品が多い。犬マニア。代表作『うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー』『天使のたまご』『機動警察パトレイバー　the　Movie』『GHOST　IN　THE　SHELL／攻殻機動隊』『イノセンス』。

②　「イノセンス」
二〇〇四年。押井守が監督・脚本を務めたアニメ映画。『GHOST　IN　THE　SHELL／攻殻機動隊』の続編で、前作で身体を捨ててインターネット世界に行ってしまったヒロイン・草薙素子を想いながら少女人形ガイノイドの暴走事件を捜査する中年独身刑事バトーを主人公として描く。

きたプラトン以来の「二元論」が、科学の力によって実現した未来世界なのです。

主人公の独身中年喪男刑事バトーは、仕事が終わるとアパートに帰宅してペットの犬に萌えて癒される毎日を送っています。このバトーの姿は、まさに僕の……オタクの未来図です。で、バトーには実は好きな人（草薙素子）がいるのですが、**彼女はすでに人間をやめて仮想現実世界（ネットワーク世界）の向こうへと「解脱」してしまっています。**

素子は元々「義体」という機械の身体に入っている「人格」（作中では「ゴースト」と呼ばれます）でした。つまり素子は、最初から人間なのかあるいは機械なのか判然としない立場にいたわけです。

「生身の肉体を持ち、三次元世界に生きている」ものを「人間」と呼ぶならば、素子ははたして人間でしょうか。素子は身体をすべて機械化しており、かろうじて「魂は人間である」という認識だけが、彼女を人間としてつなぎとめてくれていたわけです。しかしその認識も本当に正しいかどうかはわかりません。実は素子の人格（自我）さえも人工知能かもしれないのです。悩んだ素子は結局、機械の身体を捨て、三次元世界も捨てて、二次元世界、すなわちネットワーク世界へと文字通り解脱してしまったのです。

三次元世界に置いていかれたバトーは、二次元に解脱することもできず、三次元世界で「恋愛」や「家族」といった「現実のルール」に沿った暮らしをすることもできず、宙ぶらりんの状態で放置されているわけです。故に、二次元と三次元、そのいずれを選ぶこともできず、仕事を終えた後は犬と戯（たわむ）れる毎日なのです。

そんなバトーが、「ハダリ」と呼ばれる人形にまつわる少女誘拐事件を捜査するこ

とになります。ハダリはセクサロイド、つまり性サービスをするために作られている量産型の少女型ロボットです。「セクサロイドなのに少女かよ！」というツッコミはさておき、捜査が進むにつれ、どうやらハダリの持っている人工知能の中に「本物の人間の精神」らしきものが混じっていることがわかってきます。で、バトーはヤクザを皆殺しにしたり、ひきこもりオタクのキムさんのお屋敷を訪問したりして、事件の真相を解明します。実はハダリの持つ人工知能は、本物の人間少女の自我をコピーしていたものだったのです。ハダリは、アキバの裏で売られてる海賊版ＤＶＤのような違法コピー商品だったんですよ。本物をコピーするとセックスする際の反応が本物っぽくなるので、客に受けるんだそうです。で、その本物少女の身柄はというと、悪い組織が某所に監禁しているというわけです。**これだから本物好きは困ります。**

少女の自我をコピーされたハダリは、オリジナルの自分を救出させるために、「助けて、助けて」と言い回って大暴れし、わざと警察の注目を浴びて少女誘拐事件に気づかせようとしていたのです。で、敵地に潜入したバトーは大暴れして少女を救出します。

めでたしめでたし……、ではありません。

バトーはなんと、自分で助けた少女にこんな説教をするのです。

「お前に利用された人形の気持ちはどうなるんだ！」

自分が助かりたいからって、人形を利用しやがって！

お前より人形のほうが大事だ！

とバトーは少女に切れたのです。

実に困った人ですが、バトーに言わせれば、人形といっても人間の自我のコピーを

持っていれば、それはもう人間と同じなのだ、故に人形も人間も等価値なのだ、と。バトーの萌えキャラ草薙素子も映画の後半にちらりと登場しますが、素子には体がないのでハダリの電子頭脳に乗り移るという形で現れます。で、喪男バトーは裸の素子（ガワは人形ハダリなのに）に自分の上着を着せてあげたりします。このシーンには、素子という「二次元キャラ」へのバトーの深すぎる愛を感じます。

『イノセンス』では、「人間」とは「自我」のことである、と定義されています。自我があれば、体が肉体だろうが機械だろうが人形だろうが同じである。もっと言えば、その「自我」が実はコピーでしかないにしても、それもやはり「自我」なのだ[*3]と。

つまり、もはや二次元だろうが三次元だろうが関係ないわけです。

とどのつまり「自我」こそが人間の資格であるとすれば、精巧に作られた機械の身体と、人間と同等の機能を持つ自我を有するＡＩ（Artificial Intelligence 人工知能）が開発されれば、人間は人間自身を科学の力で作ることが可能になるわけです。スピルバーグの映画『Ａ．Ｉ．[*4]』もそうした話でしたが、『イノセンス』ではそこで終わらずにさらに喪男哲学的な問題を追究したのです。

「してみると人間だって複雑な機械にすぎない。だったら、人形だろうがプログラムだろうが、人間と等価値だ。故に、**人形やプログラムに恋をしても良いのだ**（＝萌えてもいいのだ）」

バトーはもはや、そういうレベルにまで進化しているのです。

なにしろバトーは、人間の少女より人形や素子のほうが大事なんですから。それどころか、肉体を持たない精神だけの存在になったいまの素子こそバトーにとっての最

③「その「自我」が実はコピーでしかないにしても、それもやはり「自我」なのだ」
アナログ的な世界観では、コピーはあくまでもコピーにすぎない。プラトンが芸術を「ミメーシス」（模倣）だと唱えて非難したのは、そういう意味だった。しかしデジタルの世界観では、コピーもまたオリジナルと等価である。デジタルの世界には「本物」と「ミメーシス」という概念はなく、あるのは「情報」だけである。同じ情報を持つもの同士の間には何らの差異もない。そもそも僕たち人間自身が、ＤＮＡの複製によって作られているコピー品なのだ。

④「Ａ．Ｉ．」
二〇〇一年。スティーブン・スピルバーグ監督・脚本。元々はスタンリー・キューブリックの企画だった。『鉄腕アトム』と『オズの魔法使い』を組み合わせたような話で、愛情を持ったロボット「デビッド」が自分を捨てた人間の母親を探し求めて旅をするという一種のＳＦ地獄巡り。ロボットが人間の母を一方的に愛するが、人間の母はロボットの息子を愛せないという物語。ジュード・ロウ演じるジゴロ・ロボットのジョーがカッコイイ。ショタロボット・クマロボット・イケメンロボットが勢揃いしたが、美少女ロボ分が不足していたせいかアメリカではコケた。

高の「萌えキャラ」なのです。バトーは素子を「**俺の守護天使**[*5]」と呼びます。素子は「自我」だけの存在で、穢れた肉体を持ちません。故に素子は人間より純粋な萌えキャラ、すなわち「天使」なのです。素子は喪男バトーにとっての美のイデアなのです。

世界は精神と物体の二種類でできている

さて、『イノセンス』はこのように、人間という概念を、「自我」と「肉体」の二つに分類して捉えています。

そして、そのいずれもが、いずれは「科学」＝テクノロジーによって人工的に創造可能となるであろう「構造」にすぎない、と考えます。人間もまた、「自然によって作られた創造物」なのです。

「人間＝生物」という概念、「三次元＝現実」という概念を、『イノセンス』は「科学」の力によって乗り越えていってしまうわけです。

ところで、この「自我」とは何なのでしょうか？

「精神」のことだろう、と言われればそれまでですが、そもそも精神なんて脳の機能にすぎないわけです。つまり精神も肉体の一部なんです。まだまだブラックボックス的ではありますが、例えば脳のある部位をこう壊せば精神のこの機能がこう壊れる、というような脳と精神の相関関係はかなりわかってきています。また、様々な感情が特定の脳内ホルモン[*6]が分泌された結果生じる化学反応にすぎないこともだんだんわかってきました。**エロスとかアガペーとか言っても、すべては実は脳が生んだ物理現象にすぎないのです。**つまり、「脳神経」という「構造」を「機能」という側面から見

⑤ 守護天使
キリスト教の信仰の一つで、人間一人ひとりに守護霊の如く憑いて見守ってくれる天使。

⑥ 脳内ホルモン
神経伝達物質。脳神経細胞（ニューロン）はデジタルな電気信号をやりとりしているのだが、ニューロンとニューロンの間にはアナログ的な隙間が開いている。このニューロン間で信号を伝達する際に使用されるのが神経伝達物質（脳内ホルモン）と呼ばれる化学物質。つまり脳神経はデジタルな電気信号とアナログな化学物質の両方を使って情報を交換しているのだ。有名な神経伝達物質には快感を発生させるドーパミンや、精神を鎮静させるセロトニン、恐怖やストレスを感じた際に分泌されるノルアドレナリン、脳内麻薬物質と呼ばれるβ－エンドルフィンなどがある。例えばセロトニンが不足すると鬱状態になるし、ドーパミンが過剰になると統合失調症的な幻覚・妄想が湧いてくる。

ると「精神」（自我）に見えるというだけのことです。「光は粒子でもあり波でもある」[*7]というのと同じようなものです。

にもかかわらず、我々は未だに「自我」を特別視します。「肉体的」なものは下等なもので「精神的」なものは上等なものであると考えたがります。これは現代の我々の世界観において「肉体」と「自我」が分裂しているからです。

実は現代人の価値観というのはよくよく遡ると本来は二元論です。一元論に覆われているように見えるのは、「肉体（三次元）」と「自我、精神（二次元）」の二つの世界のうち、どちらか一方を否定したがる人、はっきり言えば二次元を否定したがる人が多いからです。

これは、「資本主義」が経済一元論だからです。すべてを経済、貨幣、物質が支配している。だからマルクス[*8]は、全部経済で決まると。経済関係がそのほか全部を規定すると、そう言ったわけです。これは実は資本主義の思想そのものなんです。いまの日本は、そういう経済至上主義の一元論によって動いていて、愛とか恋とかいうものも、商品化されてしまって、経済一元論の世界の上を流通するモノになっているわけです。これが、僕が「恋愛資本主義」と呼んでいるものです。

まあ現代の話は後に回すことにしまして、ここでは「自我」と「肉体」の分裂、「二次元」と「三次元」という二元論の元祖、デカルトについて考えます。

そうです、デカルトこそが、近代ヨーロッパに二元論を持ち込んだ人なのです。近代喪男哲学は、一七世紀のデカルトに始まり、『イノセンス』における「人間萌えはもう終わりだ！」という二一世紀の人形萌え宣言に至るわけです。

デカルトは、あらゆるものを疑ってかかる「方法論的懐疑」という性格の悪い哲学

⑦「光は粒子でもあり波でもある」
光は妙な性質を持った物質で、粒子なのか波なのか、昔から科学者の間で議論されてきた。『光学』を著したニュートンは、光は粒子だと唱えていたが、同時代のホイヘンスは「光は波動だ」と言い出した。一九世紀になってマクスウェルが「光は波で、しかも電磁波の一種だ」と唱え、これが定説となった。ところが二〇世紀にアインシュタインが「光は粒子でもあり波でもある」と言い出して、何がなにやらさっぱりわからないことになった。どっちなんだ。

⑧ マルクス
一八一八年〜八三年。カール・マルクス。ドイツの経済学者、哲学者。マルクス主義思想の元祖。「資本主義」はマルクスが発見して定義した。その時代における生産関係（経済関係）が文化をはじめとする上部関係を規定するという唯物史観（史的唯物論）を提唱した。代表作『共産党宣言』『資本論』。

デカルト

修行の末、「自分自身の実在だけは疑えない」という結論を出しました。これを一言で言い切ったのが「我思う、故に我あり」という言葉です。何かを疑おうと思えばなんだって疑えるが、「いま、俺が疑っている＝ものを考えている」という事実だけは疑えない、ということです。

デカルトが登場するまでの西洋には複雑怪奇な言語の体系と化したスコラ哲学[*9]などがあったわけですが、いつの時代にも真の哲学者たるものは**「今までの難しい話はなかったことに」**と言い出し、言語ゲーム化した哲学ごっこにリセットをかけ、世界観を「単純化」します。で、デカルトは今まで誰もやらなかった、恐ろしい単純化をやってのけてしまったのです。

「世界には『精神』と『物体』の二種類しかない」

と言い出したのです。

スコラ哲学では、長年にわたる論争や思弁の果てに世界はもっと複雑怪奇で訳のわからないものになっていました。デカルトは失われていたプラトンのシンプルな二元論を継承したわけです。このデカルトの登場は、近代の先駆けとなったルネサンス[*10]がプラトン哲学を復興したことと無関係ではないでしょう。

真の哲学とは、一言で言い表せるものです。ニーチェなら「神は死んだ」です。デカルトは「我思う、故に我あり」だけで全部言い切れるわけです。

何万ページものボリュームを持ち、複雑で何が書いてあるのかよくわからないようなシロモノ、つまり「体系」がなければ成立しない哲学は、喪男哲学ではないので

⑨　スコラ哲学
中世キリスト教哲学。アリストテレスが人気だった。「スコラ」というのは学校のことだが、同時に「ヒマ」をも意味する。神の存在証明といった言語では証明不可能な形而上学的問題を巡って延々と論争したりしていたので、後に近代哲学の祖・デカルトあたりからボロカスに罵られた。

⑩　ルネサンス
一四世紀イタリアで始まり、ヨーロッパ中に伝播した文化運動。古代ギリシア・ローマの文化を復興し、学問を再興しようというムーブメント。中世を暗黒時代と呼び出したのはルネサンス以後。ダ・ヴィンチなどのルネサンス人を輩出したが、活版印刷技術の発明によって本の流通量が飛躍的に伸びたりもした。ルネサンス以後も、ギリシア・ローマの古典文化ブームは何度か訪れる。

⑪　ヴィトゲンシュタイン
一八八九年～一九五一年。ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン。オーストリアの哲学者。姉萌え。学生時代、アドルフ・ヒトラーと同級生だった。喪男の常としてショーペンハウエルにハマる。鬱病体質で、しょっちゅう自殺を考えていた。若くして『論理哲学論考』を書き、「言語の写像説」や「真理関数」などを考案。で、これで哲学の諸問題はすべて片付いた、と思ってさっさと引退。小学校の先生になる。でも年を取ってから「いや、全然そんなことなかった」と正気に返って再び哲学を始める。ヴィトゲンシュタインの後期哲学は前期と全然違う

す。

喪男が生み出した哲学を「権威」にすることによって自分を「頭のいい人間」に見せかけ、「モテ」ようとする輩（やから）が、哲学を言葉遊びにしてしまうのです。**長く難しく書いておけば何が書かれているのかバレにくい**ですから。「言葉の意味はよくわからんが、とにかく偉い人なんだろう？」ってな具合にバカな人を騙せますし。あと「すべてを言語で説明できるはずだ、頭の良い俺なら」という誤解もあります。それでどんどん体系が巨大化するんです。ちょっと考えればわかることですが、そんなことできるわけないです。頭が良い哲学者はヴィトゲンシュタイン[*11]のように「語り得ぬものに対しては沈黙しなければならない[*12]」と書いたり、ソクラテスのように「無知の知」とか言うものです。

さてデカルトによれば、精神とは「思考する存在」「考える存在」です。これに対して物体とは「モノ」です。この二つはデカルトの世界では完全に分裂しています。普通に考えれば、この二つが完全に分裂しているのはおかしいじゃないか[*13]ということになるんですが、とにかくデカルトは二つに割ったわけです。

真理とは「モテない」ものである

デカルト自身、スコラ哲学者に対して「訳のわからないことを言いやがって、バカを騙して自分を賞賛させようとしてるだけだ！」とアニメ『ガン×ソード』[*14]の喪男ヒーロー・ヴァンみたいなことを言っていました。不必要に難解な哲学体系ごっこは、「真実」を求めていないどころか、そもそも「真実」に興味がなく、自分を「頭の良い人間」だとバカたちに思わせることで自己満足しようとする「モテ」のやること

「言語ゲーム」論というもので、難解なのだが、一言で言えば「哲学者たちはごちゃごちゃ形而上学について議論してきたが、そんなものは全部意味がねえ」。ヴィトゲンシュタインは自分の哲学をチヤホヤする連中の多くを自分の言っていることを理解できないバカだと思ってしょっちゅう怒っていた。晩年、自分がガンだと知った時には「自分がガンだと聞かされた時には少しもショックを受けませんでした。が、ガンを治せると言われた時には本当にショックでした。なぜなら私には生き続けたいという欲望がさらさらないのだから」という喪男な発言を残している。口癖は「女哲学者なんかと結婚するな！」。もちろん生涯独身。同性愛者だったとも言われているが、〈喪男→女嫌いに→少年愛に〉というルートはソクラテス以来の喪男哲学者の一つの伝統か。代表作『論理哲学論考』『哲学探究』。

⑫「語り得ぬものに対しては沈黙しなければならない」
『論考』のヴィトゲンシュタインの言葉。「この世に神秘などない」という意味で使われることが多いが、実際には逆で、「この世の神秘は言葉やら哲学やらでは語り得ないのだよ関口くん」という感じの意味らしい。

⑬「この二つが完全に分裂しているのはおかしいじゃないか」
精神と身体が完璧に分裂しているのでは、人間の意識は自分の身体を動かすこともできないはずである。当時からこの矛盾を突っ込まれていたデカルトは、精神と身体は脳の松果体（しょ

だ、とデカルトは知っていたのです。ソクラテスも当時の屁理屈派に同じようなことを言って死罪。イエスも律法派に似たようなことを言って磔(はりつけ)。喪男哲学の扉を開いた先人たちは、いつも「何やら難しいことを言っている知識人ぶった連中への怨念」を抱えています。

これはどうしてかというと**「真理」とは「モテない」ものだから**です。「モテ」と「真理」は相反するのです。真理を追究し始めるとモテなくなるんです。例えば僕はある日「服なんてただの道具だから、ユニクロ[*15]で充分だ」という真理を発見しましたが、それ以後まったくモテなくなりました。

逆に哲学者がモテようとすると、どんどん真理から遠ざかってしまうのです。なぜなら人間の真理というのは、最終的には現実棄却、「解脱」に行き着いてしまうものだからです。そもそも真理なんて厄介なものはモテる人間には不必要です。モテないからこそ「なぜ現実はこんなに酷いんだ、なぜ俺はモテないんだ」と悩み、世界の真実の意味を知りたいと望むようになるわけです。

だいたいデカルトの二元論はどうやって考えたかと言うと、「カン」です。「直感[*16]」なんです。理屈なんかどうでもいいんだ、考えるな、感じるんだ！　ということです。ブルース・リーみたいなものです。神秘的な夢を見て思いついたそうです。

デカルトと言うと近代合理主義の権化みたいなイメージがありますが、本来は、

「俺は俺だ！　で、世界は俺とは関係ない！」

という直感に後から理屈をつけていった人なんです。

こういうのを「演繹法(えんえき)[*17]」といいます。

ともかく、「自我=俺」と「世界」の分裂こそが、デカルト哲学の最大の特徴です。

うかたい）という器官で繋がっていると言い出した。この微妙な理論は後の西洋オカルト思想に採用された。

⑭「ガン×ソード」
二〇〇五年。テレビアニメ。監督・谷口悟朗、脚本・倉田英之。「エンドレス・イリュージョン」という困った名前の惑星を舞台に、腐り果てた世界に一度リセットをかけて理想郷を作り直そうとするマッドサイエンティスト系喪男「カギ爪の男」と、カギ爪の男にフィアンセを殺されたバカ系喪男ヴァンの抗争を描く。ヴァンは婚約者エレナがいたのに童貞。エレナを殺された恨みを忘れないために、常に真っ黒いタキシードを着ている。いろんな女性にアプローチされるが護身が完成しているのでまったく動じない。口癖は「俺は童貞だ！」「お前に俺の純潔は渡せねえ！」。敵キャラのミハエルが小難しいセカイ議論を始めようとしても、ヴァンは「何言ってるのかわからねえんだよ！」「うるせえ、バーカ、バーカ！」と叫んで論争を拒否。その勇姿は、さながらウィーン学団の連中を叩き出すヴィトゲンシュタインの如くであった。このようなバカアニメなので、当初はバカボンのパパ（のそっくりさん）が登場する予定だった。

⑮ ユニクロ
最近はおしゃれ系を狙っているらしい。

⑯ 直感
若きデカルトはある夜、謎に満ちた恐ろしい三つの夢を見た。その直後に、自分に「驚くべき

こんなの、よっぽどモテない人じゃないと、直感できません。いまこのくだりを読んで「ああ、そうだよなあ。俺は世界と関係ないや……」と直感できた人は喪男哲学者の素地がある人で、「は？　何言ってんの？」と首をひねった人は喪男哲学者になるのは難しいかもしれません。現代にもスコラ哲学者みたいなのがいっぱいいますので、そっちの道を考えたほうがいいかも……。

まあ、デカルトはこんな人なので、アリストテレスとその弟子たち＝スコラ哲学を腹の底からバカにしていたわけです。**近代哲学の誕生とは、まさしく、モテるスコラ哲学者どもへのルサンチマンの爆発だった**のです。

言ってみれば、自我と世界を完全に割ってしまった**デカルトの二元論は「最終兵器彼女が登場しない『最終兵器彼女』[*18]の世界」**です。かなり、嫌な世界です。ちせがいない世界が、自分とは関係なく最終戦争を始めて滅亡していくわけです。で、コマンドも入力できません。自分とは関係ない世界だから。糞ゲーですよね。ゲームにたとえれば「観鈴（みすず）ちんのいない『ＡＩＲ』[*19]」ですよ。最初からカラスとしてスタートして、カラスのまま終わり。そんな感じ（96ページ図2－1）。

共通感覚

ただ、デカルトは、これで終わりにせずに、「人間はみんな、共通感覚を持っている。良識がある。だから大丈夫です」とオチをつけています。すべての人間が自我の中に孤立してしまっていては、社会は成り立ちません。共通感覚とは、つまり、プラトンのイデアみたいなものです。二次元の世界、想像の世界、観念の世界のことです。万人が同じ「イデア界」を心に宿しているんだ、だから人間は素晴らしいのだ！

新たなる学問の基礎」を作ることができるという霊感を得て哲学者としての本格的な探究を開始したのだった。詳しくは拙著『アストロ！乙女塾！　星のプリンキピア（上）』（集英社スーパーダッシュ文庫）を参照ください。

⑰　演繹法
最初に結論があり、そこから敷衍していくという方法論。デカルトが演繹法の代表者。この逆がイギリスで盛んになった「帰納法」。帰納法では、様々な「事実」を収集し、そこから一つの結論を導き出す。「演繹法は非科学的、科学の方法論は帰納法なんだろう」と思われがちだが実はそうでもなく、ひょっと思いついた霊感から重大な法則が発見されたりもする。

⑱　「最終兵器彼女」
高橋しんのセカイ系（第三章注㊾）マンガ。『ビッグコミックスピリッツ』で連載された。北海道の田舎で暮らすちせが、謎の敵との戦争に巻き込まれて最終兵器に改造される。ちせが何と闘っていたのかは、最後まで不明だった。

⑲　「ＡＩＲ」
ＫｅｙのＰＣゲーム。主人公の国崎往人は何とはなしに旅をしている少年。ある夏、田舎の町でひきこもり少女・神尾観鈴と出会い、観鈴の家に厄介になる。しかし観鈴はやがて原因不明の病で倒れ、国崎は何もできないカラスになってしまう……！　京都アニメーション版のテレビアニメが秀逸。

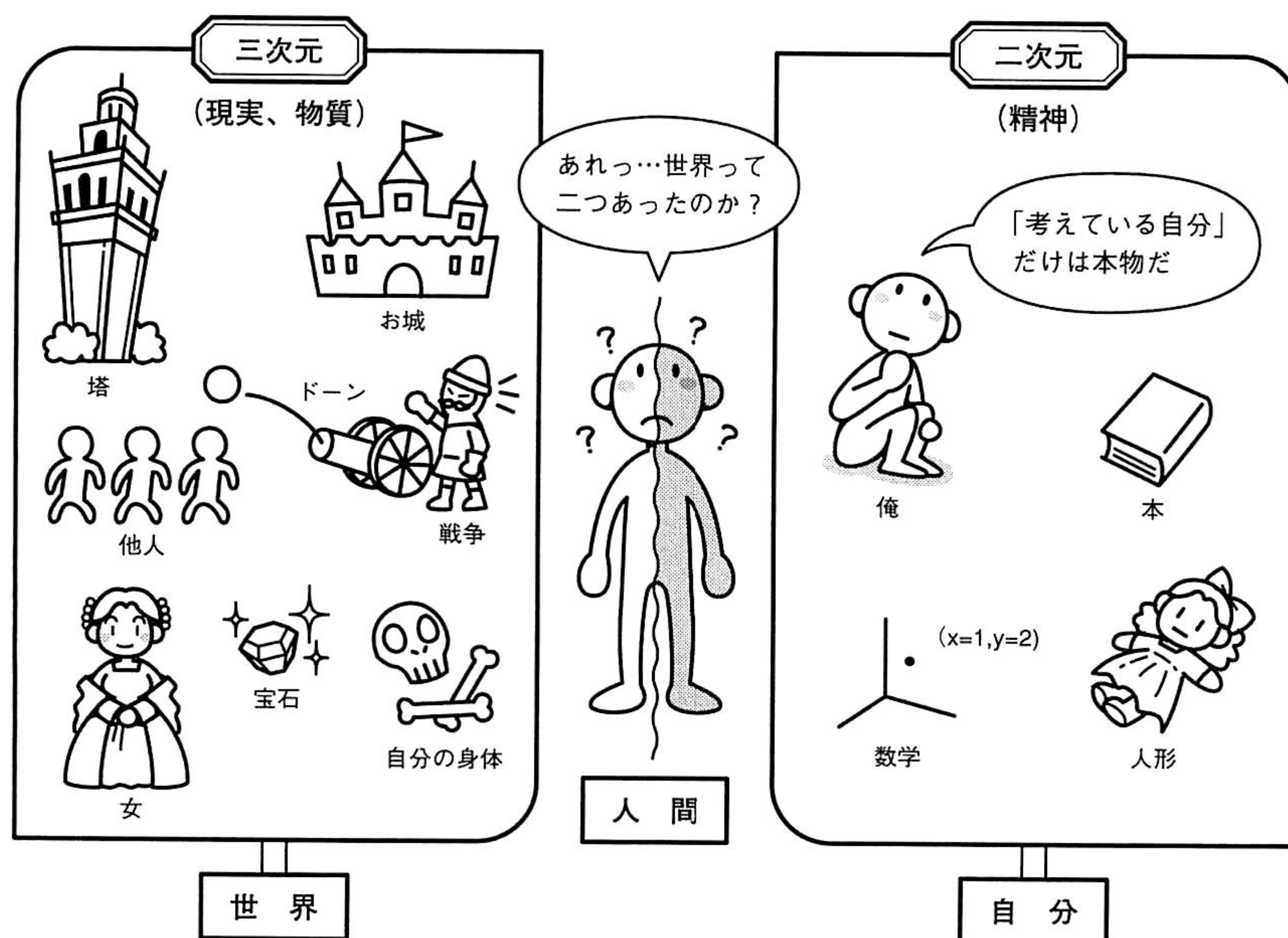
とデカルトは訴えたのです。
　これは有明のコミックマーケットの世界を論じているのではありません。デカルトは全人類が同じイデア界を共有しているはずだと考えたのです。冷静に考えるとそんなはずはないのですが、とにかくデカルトはそう言い張りました。「話せばわかる[20]」という犬養総理イズムとか「ああ、アムロ、刻が見える……[21]」という富野イズム・ニュータイプ思想のルーツは、このデカルトにあるのです。
　それまでの西洋では、神がすべての人間の関係を規定していました。人間なんてどいつもこいつも得体の知れない愚かな生き物なので、神様が保証人になってくれないと安心できなかったのです。夫婦だって親子だって全部同じです。ですから信仰を持たない人間や異端信仰者は信用されず、容赦なく狩られたわけです。これはこれで喪男思想です。でもデカルトはもっと凄い喪男なので、神も信じていません。一応著書の中では「神様はいるよ」みたいなことは書いていますが、たぶん火あぶりが嫌だったんでしょう。地動説を唱えてあぶられかけたガリレオ[22]を見て、せっかく書いた著書をビビって出版せず隠

デカルトは、人間を「物質」と「精神」の二つに分裂させた。ここから「唯物論→資本主義・自然科学」という現代社会の基本システムが産まれることになった。また一方では「観念論→神秘主義」という流れも発生する。いずれにしても、人間は未だにこの世界の二元論構造を解決できずにいる。それどころか、自分の精神を完全に見失って三次元一元論で生きている人がたくさんいるのだ。

図２—１　デカルトの喪男孤立二元論

したりした人です。でも喪男ですから内心ではきっと疑っています。なにしろ自我以外のすべてを疑ってるわけですから、**本音では神様も疑ってるに違いありません**（図2－2）。

しかしキリスト教世界から神と人間との関係を切り離してしまうと、大変なことになります。神がすべてのルールなんですから、これを捨てたらノールールです。アナーキズムです。禽獣（きんじゅう）みたいな連中がうようよ彷徨う無法地帯になってしまいます。

一つの価値観・一つの世界観だけしか認められていない一元論の世界には、こういう人間不信が渦巻くわけです。現代でも同じです。アキバ系を「何をしでかすかわからない変態予備軍」みたいに言う人人は、キリスト教の神様ではないにしても、何らかの神を信じているわけです。広告代理店の神とか。テレビ局の神とか。恋愛の神とか。熟年離婚の神とか。いろんな神がいますよ。**僕に言わせれば全部邪神**ですが。で、彼らは、自分の信仰テリトリーに入らないオタクを見ていると不安になるので狩りたがるんです。

それにデカルト自身も「俺」と「世界」の大分裂

キリスト教の人間関係

二次元

神

保証

保証

保証

保証

三次元の人間たち

デカルトの人間関係

共通感覚 ＝二次元

神

萌えキャラ

人形

人間たちが有するイデア

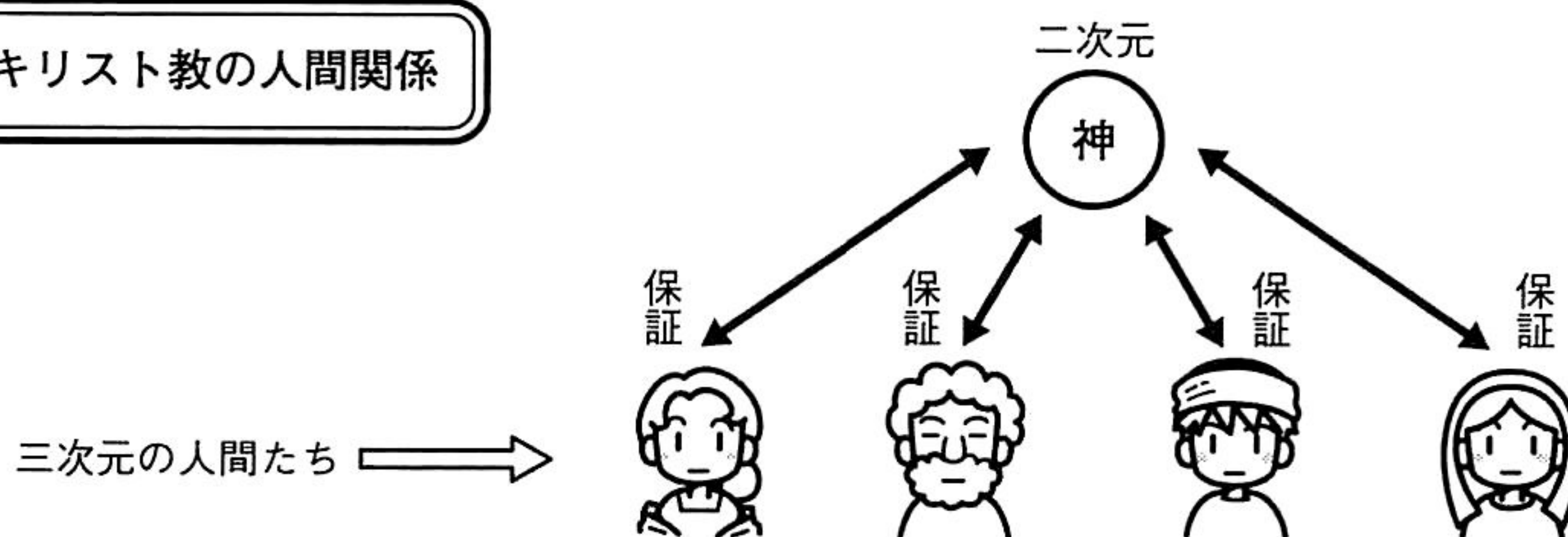
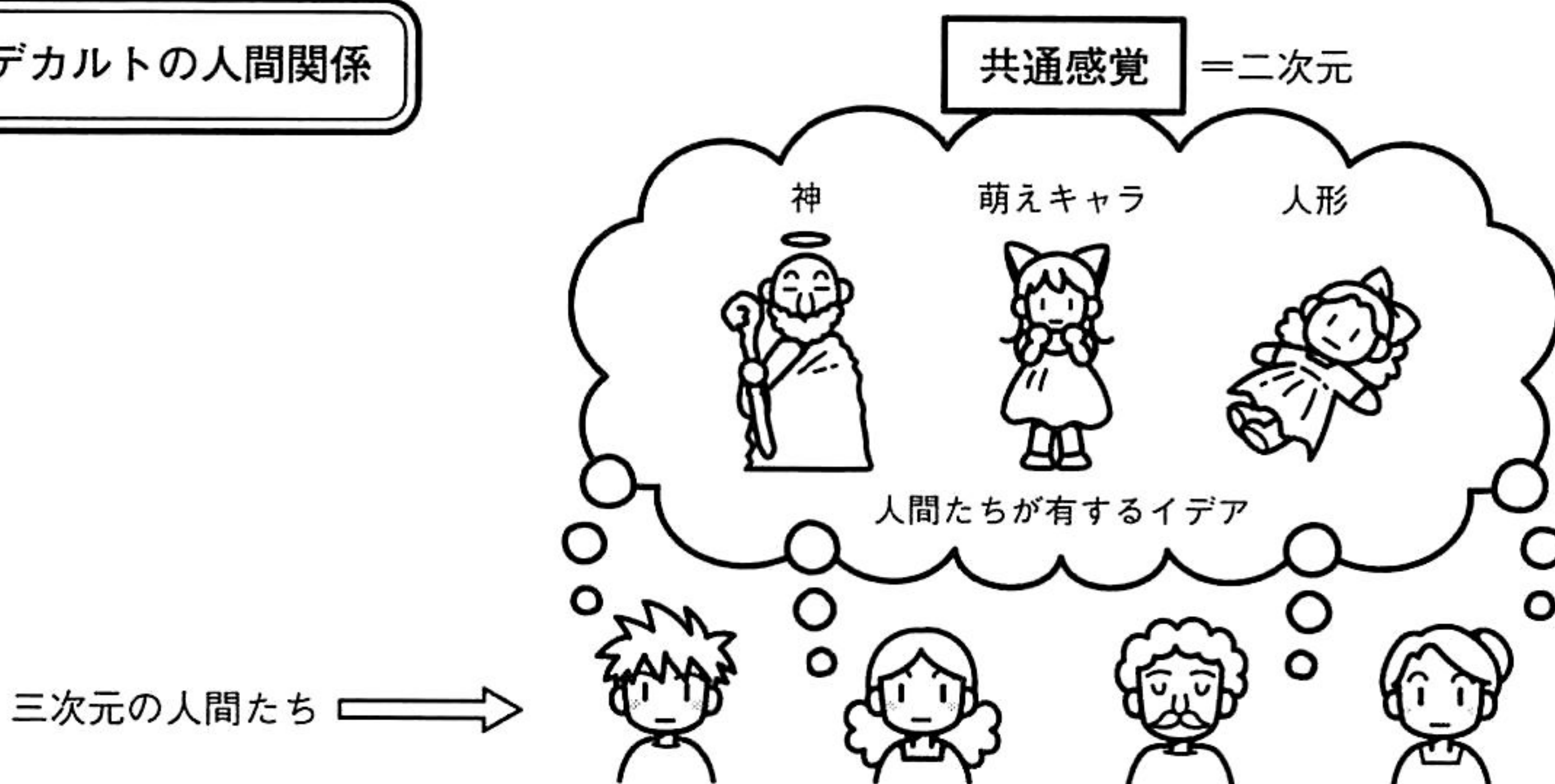
三次元の人間たち

三次元に生きる人間は二次元の「神」という装置によって集団としてまとまっていたが、デカルト以後は神のかわりに人間の理性が二次元の中心に座ることになる。理性とは、全ての人間の内面に共有される神なのだ。ここから啓蒙主義がスタートする。人間には等しく理性があるので、「話せばわかる」はずだと喪男哲学者たちは考えるようになったのだ。

図２―２　キリスト教の人間関係とデカルトの人間関係

を放置していてはまずいと思ったのでしょう。そこで発明したのが「共通感覚」でした。「良識」という言葉もデカルトが使い出したものです。良識とは共通感覚の一種で、つまりまあ「人類はみな兄弟」「話せばわかる」ということです。人間は同じ感覚を共有しているから、実は神の保証がなくても大丈夫だよ、とデカルトは言ったわけです。平和主義者っぽい言い回しですが、一種の婉曲なアナーキズムにも聞こえますね。

世界とは、モノにすぎない

いずれにしてもデカルトは中世のキリスト教ドグマに支配されていた喪男たちを「気にするな、やっちまえ！」とけしかけたわけです。「喪男自立運動」です。

彼はまず「俺」と「世界」を分裂させ、「世界とは、モノにすぎない」と言い切りました。モノなんですから、何やったっていいわけです。これによって、自然科学が発達することになりました。それまでは、木や沼といった自然にも「精霊」みたいなものが宿っていましたから、自然をみだりに弄（いじ）る行為は罰当たりなことだったんです。でもデカルトによれば世界は「モノ」ですから、神木だろうが何だろうが切り倒しても祟（たた）りなんかないわけです。それどころか、動物だって自我がないからモノです。この「人間以外は全部モノ」という一種のアナーキズムに基づけば、月にロケット飛ばそうが、原爆作ろうが、クローン動物作ろうが、全然構わないということになるわけです。

もう一つ、デカルトは神と人間の関係も壊しました。いや凄い人ですね。これによってどうなったかというと、「恋愛」の持つ機能がより重大化したのです。というよ

⑳ 「話せばわかる」
一九三二年五月一五日に発生した「五・一五事件」で、拳銃を持った反乱将校に囲まれた犬養毅内閣総理大臣が言ったとされている言葉。しかし「問答無用」と返答されて射殺されたとか。ああ……。

㉑ 「ああ、アムロ、刻が見える……」
『機動戦士ガンダム』でララァが死ぬ寸前にアムロに言った言葉。言葉の意味はよくわからんが、とにかく凄いトラウマだ。

㉒ ガリレオ
一五六四年～一六四二年。ガリレオ・ガリレイ。イタリアの天文学者。当時のカトリック・ルールである天動説に反対して地動説を唱えたが、宗教裁判にかけられて異端として処刑されかけた。またピサの斜塔からモノを落とす実験を敢行して、アリストテレスの自然科学に反する落体の法則を発見した。当時の西ヨーロッパの二大権威、キリスト教会とアリストテレス学の両方に背いたガリレオは、無理やり地動説を撤回させられ、晩年を軟禁状態で過ごすことになった。喪男の鑑（かがみ）のような人。ガリレオが活躍した一七世紀はすでに中世からルネサンスを経て近世バロック時代に突入していたが、イタリアは一六〇〇年にブルーノが異端として火刑に処されてからは中世に逆戻りという感があった。

㉓ アイザック・ニュートン
一六四二年～一七二七年。イギリスの科学者、錬金術師。万有引力の法則を発見、太陽系の惑

り、恋愛そのものが神に取って代わり、近代の神に成長していく要因となりました。
つまりデカルトは「科学」と「恋愛」という、新たなる「近代の神」への道程を示した人なのです（100ページ図2‐3）。

神に代わる恋愛の発展については次の章で詳しく述べます。ここではデカルトに始まった「科学」の発展についてもう少し説明しましょう。科学とは、自然を支配する術を探究することです。自然はかつて精霊が宿る神秘の世界でしたが、デカルトは「ただのモノじゃん！」と言い出しました。現代でもオタクを嫌う人は萌えキャラを見て「ただの絵じゃん！」とバカにしますが、デカルトはこれのまったく逆のことをやったんです。「**俺と関係ない現実の世界なんか、俺にとってはただのモノであって絵みたいなもんだ**」というわけです。この逆転の発想により、科学万能主義時代が訪れたんです。

西洋の科学万能主義を「世界に対するルサンチマン、世界への征服欲」の発露であると表現する人もいます。そうなんです。科学とは、一見混沌とした世界の中に一定の法則を見つけ出し、その法則を使って世界を我が意のままに支配する魔術なのです。つまり**科学の原動力とは、魔術と同じく、現実世界に対する強烈な征服欲**です。実際、黎明期の科学者の多くは錬金術師だったそうです。「万有引力の法則」を発見したアイザック・ニュートン*23もまた、錬金術の実験に没頭し、エメラルド・タブレット*24や聖書の研究に多大な時間と労力を費やしていたのです。

自然と調和した生き方をしている文明では、科学は発達しません。必要ないからです。アニメ『ARIA』*25みたいなまったりとした暮らしを続けられれば、人はそれで幸せなのです。

星の運行の謎を解き明かし、古典物理学の基礎を築いた。前半生は科学と錬金術の実験に没頭する日々だったが、科学者としての名声を得た後半生は国会議員、造幣局長官、王立協会会長などを歴任。科学精神はデカルトに始まるが、本物の「科学」はニュートンから始まる。ニュートン自身は自分を「自然哲学者」だと考えていたが、彼の発見があまりにも偉大だったので科学は哲学から独立した学問の一ジャンルとなり、しかも哲学をしのぐ力を持つことになった。……という感じの立派な人物なのだが喪男の悲しさ、性格にかなり問題があったようで、錬金術のやりすぎで水銀中毒になり精神が壊れかけたこともあったとか。微分積分学も発見したが、大陸のライプニッツと発見者一番乗り争いを開始し、以後ライプニッツが死ぬまで延々と論争することに。女嫌いで、八四年の生涯で童貞を貫いたと言われている。とにかく性格悪そうな逸話だらけ。代表作『自然哲学の数学的諸原理』『光学』。

㉔　エメラルド・タブレット
錬金術上の重要アイテム。ヘルメス・トリスメギストスが書き記した錬金術の奥義書と考えられていた。ニュートンはエメラルド・タブレットを入手して本文を英語に翻訳したり、自分でラテン語の注釈をつけたりしていた。

㉕　「ARIA」
『月刊コミックブレイド』に連載されている天野こずえのマンガ。二度テレビアニメ化されている。テラフォーミングされて水の惑星となった火星を舞台にしたほのぼの癒しマンガ。

デカルト

スコラ哲学書

自然霊

怪物

精霊

自然界の精霊・
生命を破壊

神

人間

神への超越論的
信仰を破壊

スコラ哲学を全否定
してプラトンのイデ
ア論と二元論を復活
させたデカルトは、
キリスト教のシステ
ムそのものを壊して
回った。

地球

ロケット

原子力

工場

科学による自然の征服

恋愛主義

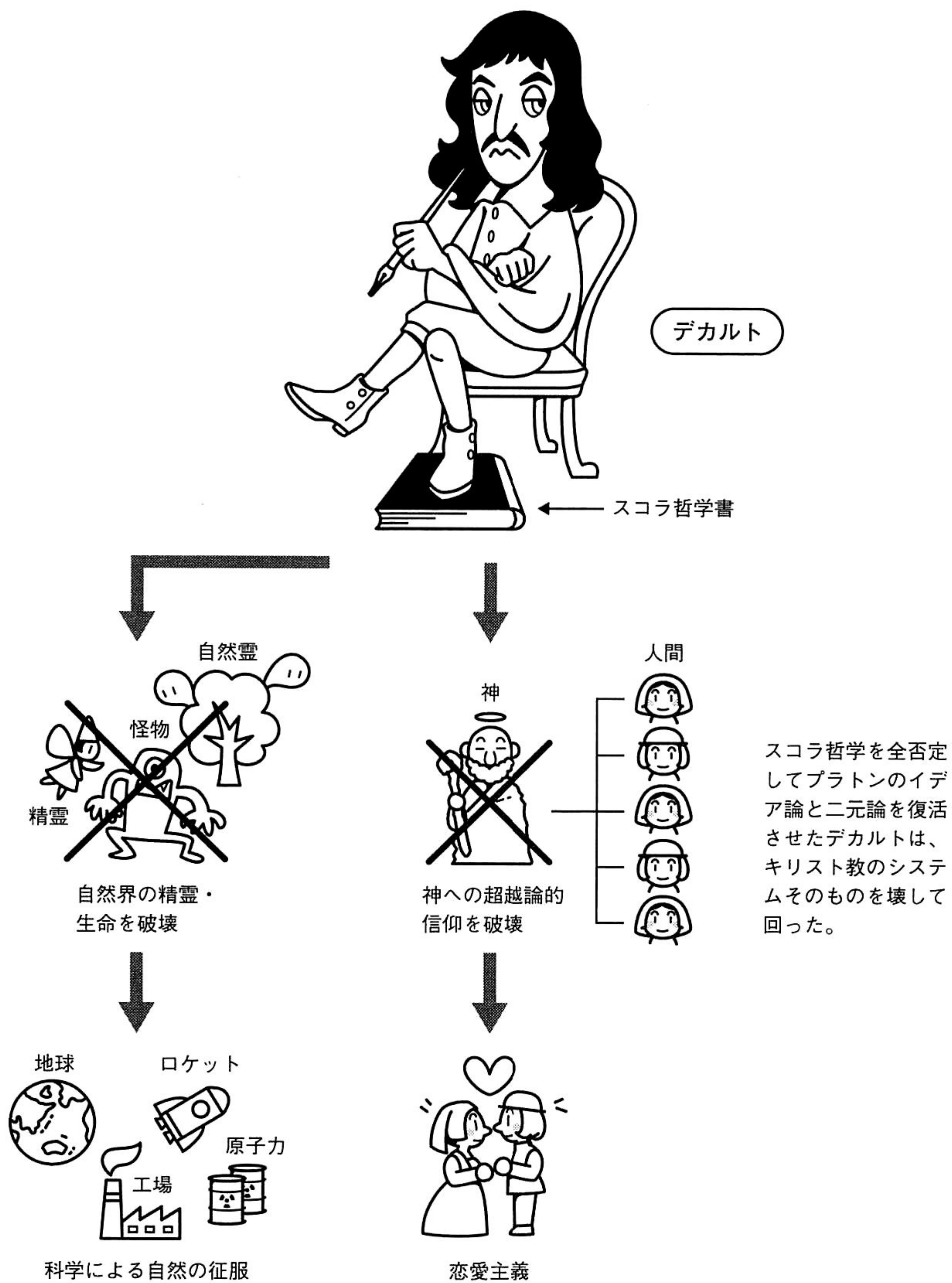
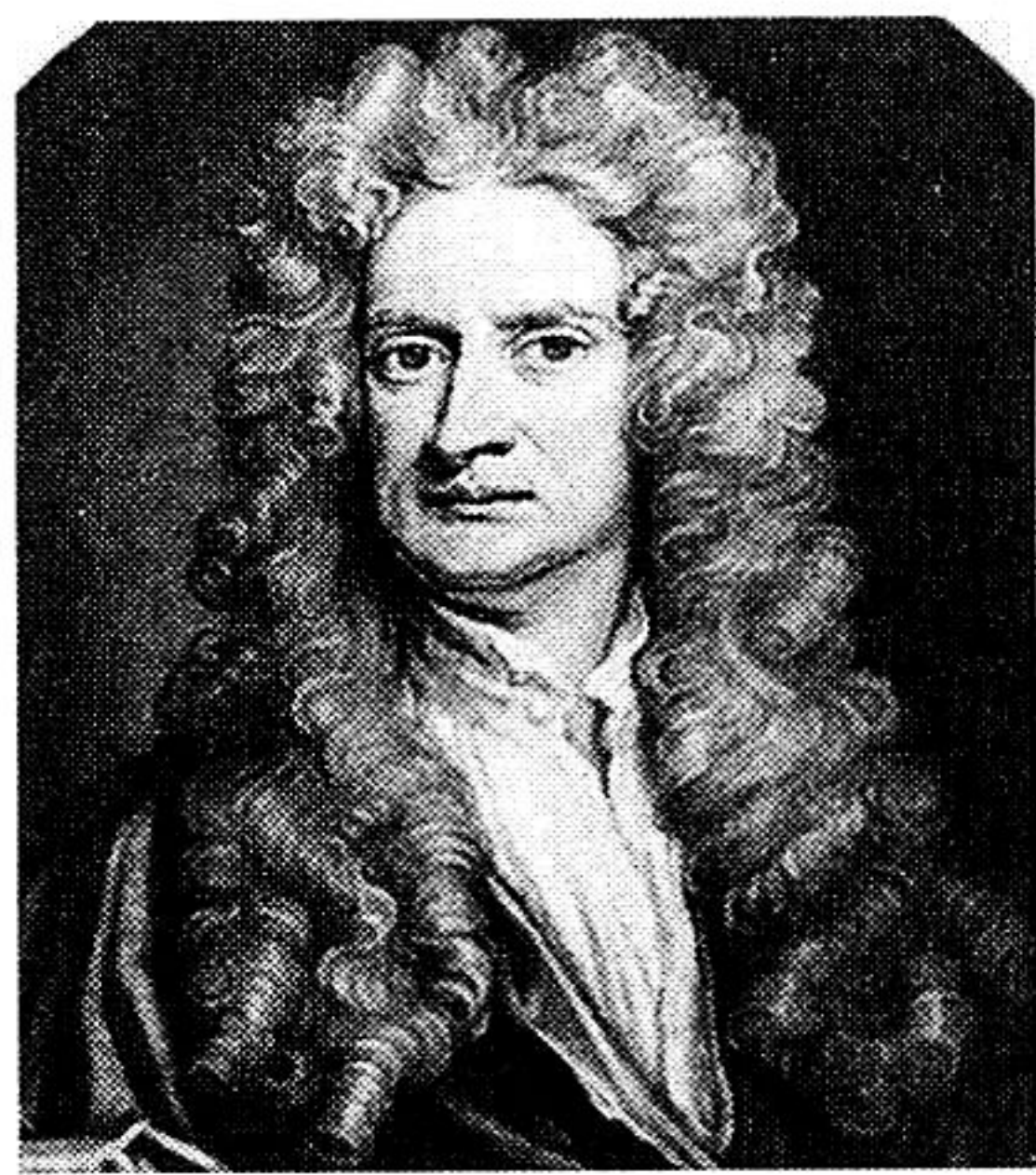



図2—3　喪男アナーキスト・デカルトの功績

科学が必要とされる社会は、世界に対してムカついている人たち（つまり喪男）の社会だけです。西洋文明は長年にわたってキリスト教のドグマに抑圧され、またペストの大流行などの厄災に痛めつけられてきました。キリスト教という喪男宗教体系下では、現世は常に地獄です。天国はあの世にありますから。人生は死ぬまで糞ゲーということです。これは、喪男の「世界は地獄だ」という世界観が全ヨーロッパに拡大適用された結果なのです。これはこれで喪男としてはある意味正しい世界ですが、死ぬまでずっと生き地獄というのはいかがなものかと思いたくなるのが人情でしょう。プラトン的なイデア界への憧れ、理想の世界をなんとかして生きてるうちに感じたいという欲求は、人間の内面に常にあるわけです。

「全世界は真っ黒、人間みな喪男」という暗くて長い中世を経て、西洋人は「なんとかしてパラダイスをこの現実世界に現出できないか」と考えるようになりました。途中、十字軍遠征[*26]という形でこれを実行しようとしましたが、結果は新日本プロレスの総合格闘技興行なみに散々でした。こんな十字軍なら結成しなければよかったよトホホとしか言いようのない「黒歴史[*27]」を作ってしまったのです。

そんな時に現れたのが、デカルトだったのです。

デカルトは、

「萌えぬなら　萌やしてみせよう　ほととぎす」

という主義の喪男でした。喪男にとって、現実が地獄で無価値だということはすでに明白です。ここでデカルトは「世界とはモノにすぎない」「世界より俺のほうが偉い」という価値転換を行ったわけで

ニュートン

㉖　十字軍遠征
中世ヨーロッパで、ローマ教皇の呼びかけに応じて何度も結成された聖なる遠征軍。当時イスラムに占領されていた聖地エルサレムを奪回するのがそもそもの目的だった。一一世紀末に結成された第一回十字軍は奇跡的に成功し、エルサレムとその周辺の各都市を攻略。十字軍国家が建設される。以後、百数十年にわたってエルサレムを巡る十字軍とイスラムとの戦争が繰り返されるが、見事に成功したのは第一回遠征だけで、戦局はどんどん不利に。エルサレムは奪い返され、しまいには同じカトリックの国や東ローマ帝国に攻め込んだり、フランスの異端カタリ派を攻めたり、首尾良くエルサレムを奪還した神聖ローマ帝国皇帝を攻撃したり、子供だけで結成した「子供十字軍」の少年たちが奴隷商人に騙されてアフリカかどっかへ売り飛ばされたり、という悪夢そのものの展開を見せる。その結果、教会の権威は失墜した。

㉗　黒歴史
「なかったことにされた歴史」「抹消された歴史」。『機動戦士Ｖ（ターンエー）ガンダム』が元ネタ。

す。「俺のほうが偉い」とデカルト本人が直接言ったわけではありませんが、彼に影響された面々はそう考えるようになりました。その結果、西洋世界はマッドサイエンティスト天国となったわけです。現実が嫌なら「科学」によって「世界」を支配すればいいのだ、ということに気づいてしまったんですね。この意味でも、デカルトは同じ二元論者でもイエスよりプラトンに近いわけです。アガペーよりもエロス寄りなんですね。しかも脳内勝利を目指したのではなく、脳内世界を脳外の三次元で「実現」する道を考えたわけです。

人間機械論とデカルトの萌え伝説

さて、話はやっと『イノセンス』に絡んでくるのですが、デカルトが世界を「物質」と「精神」に分けた時に、一つの問題が出てきました。では人間はどっちに属するのだ、という問題です。人間はモノなのか、あるいは人間は精神なのか？　言うまでもなく精神も肉体もどっちも同じ現象の一側面ですから、本当はそういう考え方自体が無意味なんですが、デカルトは困ったわけです。で、結局、人間は肉体でもあり精神でもある、と言い出したのです。

どっちやねん。

いずれにせよ、世界を「物質」と「精神」に二分し、同時に人間を「肉体」と「精神」に分裂させた瞬間に、プラトンの唱えた「イデア界」という概念が近代西洋に蘇ることになったのです。それも、まったく新たな形で。それが「人間機械論」です。

人間機械論は、デカルトの影響を受けて一八世紀のフランス喪男学者ラ・メトリ[*28]が唱えた説です。人間も肉体を持っているわけですが、肉体とはデカルトによれば「モ

㉘ ラ・メトリ
一七〇九年〜五一年。フランスの哲学者。デカルトの心身二元論をさらに推し進めて「精神は肉体から生まれる」という物質一元論（唯物論）を唱え、人間も動物も機械であると主張した。代表作『人間機械論』は喪男が切れるお年頃・三七歳の時に書かれている。

ノ」つまり機械にすぎません。ということは、人間もまた機械にすぎないということになります。ラ・メトリはこの論をさらに推し進めて、実は精神すら脳という物質が生み出しているモノにすぎないと言い出したのです。デカルトの二元論の問題を、物質世界一元論で片付けたわけです。現在まで脈々と続く物質至上主義、物質一元論の元祖が、ラ・メトリなんです。

しかしながらデカルト自身は「我という自我もまたモノにすぎない」とは考えませんでした。デカルトも動物は機械にすぎないとは考えましたが、人間は「自我」があるから機械ではないと考えたのです。

これは、イデア界への憧れがデカルトを捕らえていたからではないでしょうか。デカルトは喪男らしく一生独身でしたが、フランシーヌと名づけたリアルな（見た目五歳ぐらいの）少女ドールを持ち歩いていたという伝説を残しています。で、このドールとおしゃべりしたり、ドールの身の回りのお世話をしたりしていたというのです。つまり、『ローゼンメイデン』[29]の真紅様[30]みたいな人形に、いいオッサンのデカルトが萌え狂っていたというのです。本当でしょうか？　ちなみにデカルトはこの人形をトランクに入れて運んでいたそうです。ローゼンメイデンシリーズがスーツケースの中で眠るという設定も、恐らく「デカルト＝ドールオタク伝説」が由来になってると思います。また『からくりサーカス』[31]には、そのまんま、フランシーヌという名前の人形が登場します。

ちなみにこのデカルトの人形、伝説によると最後は周囲の人々にキモがられて海の中へ投げ捨てられてしまったそうです。

何てことするんだ。**いつの世もオタクは生きづらい**のです。

㉙「ローゼンメイデン」
『月刊コミックバーズ』連載のマンガ。作者はPEACH-PIT。二度テレビアニメ化されている。ひきこもりの少年ジュンの元に、生きたアンティーク・ドール「ローゼンメイデン」（薔薇乙女）がやってくる。ローゼンメイデンシリーズは全部で七体存在し、姉妹で「アリスゲーム」という闘いに参加しなければならない運命を背負っている。アリスゲームに勝ち残ったローゼンメイデンだけが「究極の少女・アリス」になれるという。で、ジュンの元には次々とローゼンメイデンが集まり、毎日が大騒ぎとなって、不登校こそこの世の天国だという真実が明らかに。

㉚ 真紅
ローゼンメイデンシリーズの第五ドール。金髪のツインテールと真っ赤なドレスが特徴。好物は紅茶。嫌いなものは猫。下僕のジュンをツインテールでぴしぴしと叩く。ボークスが発売した一分の一真紅のSDドールは定価一〇万円だがファンが殺到したため価格が高騰。筆者は二三万円でやっと手に入れることができた。

㉛「からくりサーカス」
『週刊少年サンデー』で連載されていたマンガ。作者は藤田和日郎（かずひろ）。自動人形（オートマータ）および人形を守る主人公たちと、人形破壊者「しろがね」の闘いを描く。いやもっと複雑なストーリーなんですが。

なぜ「デカルトはフィギュア萌え族に違いない」という噂が当時の人々に広まったのか、ということを考えますと、デカルトの類稀（たぐいまれ）なる喪男ぶりとオタク性が明らかになると思います。

そもそも「動物は機械」「世界は物質」「人間も半分は機械」なんて言い出した人ですから、周囲の人たちには恐ろしい魔法使いに見えたに違いありません。

「座標軸」なんてものを考えたのもデカルトです。「世界とはモノにすぎない」という考え方を言葉だけでなく、「図」を使って示したんです。人間は昔から図とか公式とかに弱いのです（図2－4）。

とにかく、デカルトは周囲から魔法使いみたいなイメージで見られていたことでしょう。そこから、「人間を人形と区別していないんじゃないか」という疑いが生まれ、「人形愛者」＝「ドール萌え族（仮）」という伝説が作られたのだと思います。しかし問題はデカルトが実際にドール萌えだったかどうかではなく、**当時の人々がデカルトを通じて「ドール萌え」という新しい世界を発見した**ということにあるのです。

つまり「科学」と「人形萌え」とは、その出発点が同じなのです。

嘘だ！　と言われるかもしれませんが、発明王エジソン[*32]もまた「人形萌え」の巨人でした。こちらはデカルトと違って実際の発明王ですから、自分で「喋る人形」（トーキング・ドール）を発明して商売していました。もちろん、エジソンが作った「喋る人形」を見た人々は「キモい」とビビってたじろいだそうです。

実はデカルトには（独身なのに）フランシーヌという愛娘（まなむすめ）がいたのですが、夭折（ようせつ）したんだそうです。そこで人々は、

「デカルトなら人形を作って、娘の代わりにしてもおかしくない」

㉜　エジソン
一八四七年～一九三一年。トーマス・エジソン。アメリカの発明家。子供の頃はどうしようもない劣等生で小学校を中退したが、実は幼稚な学校教師には彼の超天才としての才能が理解できなかっただけだったのだ！　蓄音機、電話、白熱電球、レコード、直流電力発電機、映画撮影機（キネトグラフ）、映写機などのオタク必須アイテムを次々と発明。性格は相当悪く、交流電力発電を主張するニコラ・テスラと電流戦争を勃発させるなど、ニュートンを彷彿とさせるエピソードも。またニュートン同様、科学者であると同時にオカルティストでもあり、後年は霊界通信機の発明に没頭した。「天才は九九パーセントの努力と一パーセントのひらめきである」という名言は、本当は「いくら努力してもひらめきがない奴は天才にはなれない」という意味だそうだ。ひ、酷い……。しかし我々ひらめきがないバカな人間たちは、この言葉を「エジソンでさえ九九パーセントは努力でできてるんだから、俺たちも努力すればなんとかなるだろう」とまったく逆の意味に脳内変換して自分を騙しながら生きているのだった。あぁぁ。

と考えたのでしょう。諸葛孔明の饅頭の話のように、デカルトなら「娘の代わりに人形を」という新しい価値観を生み出してもおかしくないと思われたのです。もちろん、このような伝説が生まれた背景には、この話を噂しあった人々の心の中に「人形萌え」への不安と、同時に、「人形萌え」への抗(あらが)いがたい魅力があったためでしょう。

そもそも人形萌えは、すでに古代ギリシア時代から存在しました。

ギリシア神話に登場するピグマリオンは、身分は王様だったのですが、とてつもない喪男でした。現実の女にウンザリして「童貞喪男王」の道を歩んでいたのです。王様なのに女嫌いなんて、ブッダに匹敵します。しかも肉欲に飽きたのではなく現実の女の「心」に辟易(へきえき)していたというのですから、これは本物です。

さて、ピグマリオンはお国がインドなら出家して解脱するところですが、そこはギリシア人ですから、現実を捨てる方向ではなく「正しいイデア界の創造」へ向かいます。つまり芸術家になって、自分で理想の女性像、いまで言うところのフ

① 言語で「物質とは何か」を説明するデカルト

私は量を判明に想像する。これを哲学者たちは普通に連続的なものと称している。この量の長さ、広さ、深さにおける延長を判明に想像する。(『省察』)

何を言ってるのかサッパリわからないよ！

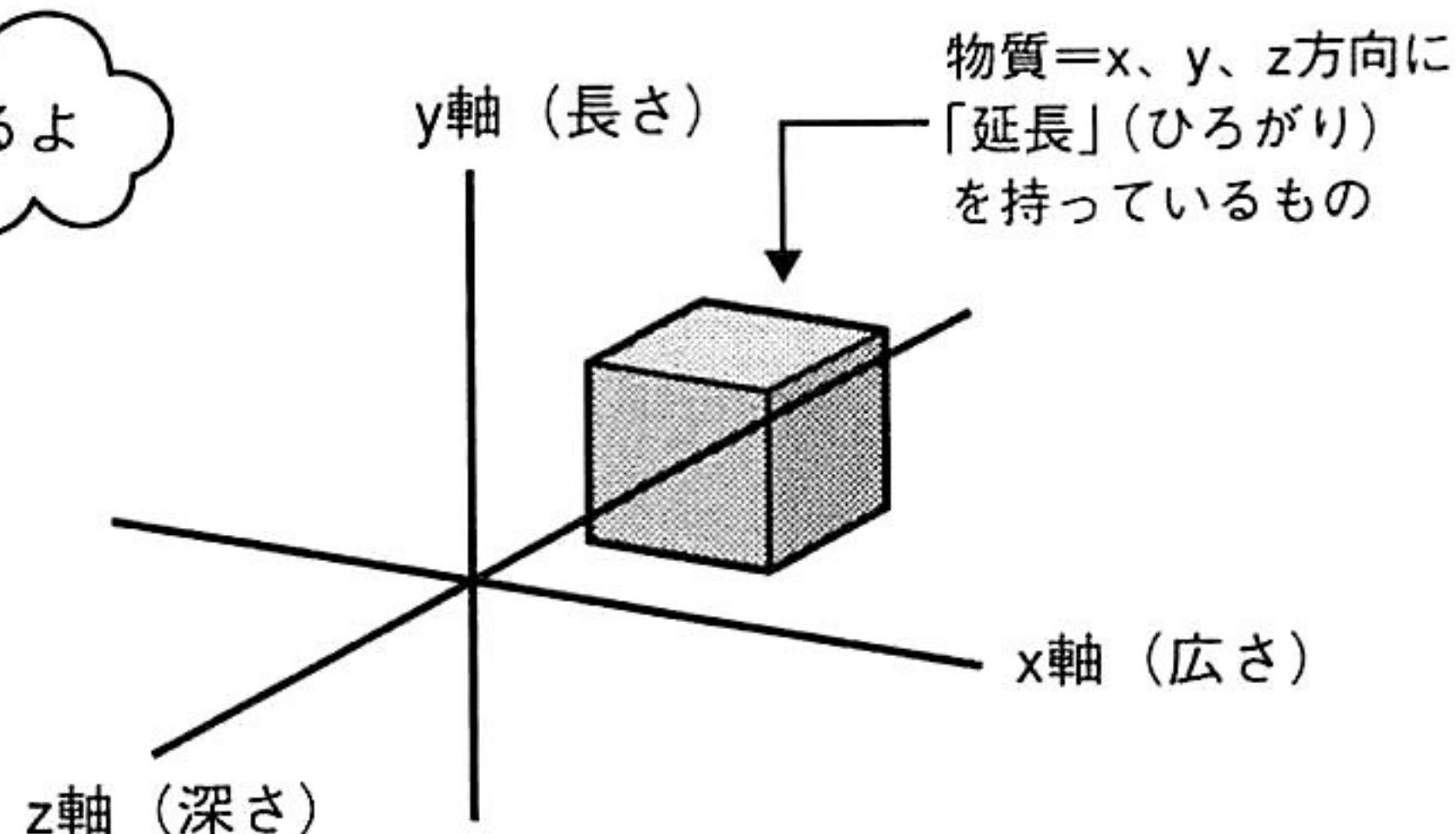
② 図で説明すると…

図にすると、こうなるよ

y軸（長さ）

物質＝x、y、z方向に「延長」(ひろがり)を持っているもの

x軸（広さ）

z軸（深さ）

なるほど！

人間は視覚的な情報に弱い。目に見えるものは一発で直感的に把握できる。しかし言語はそうではない。小説よりもマンガのほうが売れるのは、この人間の性質ゆえかもしれない。デカルトは、三次元を文学ではなく数学であつかえる「場」に変換してみせたのだ。

図2―4 人間は図に弱い

ィギュアを作ることにしたのです。**元祖アキバ系**ですな。
芸術家とは、醜い現実に絶望した人間が自らの想像力をエネルギーに「理想の世界」を作り出そうとする人間のことですから、真の芸術家はみんな喪男なのです。で、これもまことに立派なことなんですが、ピグマリオンは自分が作ったフィギュアに萌えてしまって恋をするわけです。
ああ、ピグマリオンこそは真の芸術家です。ちなみに僕も自分で書いた小説のキャラクターに萌えてしまって困ってます。え、それは「電波」ですか、そうですか……。
かくして、ピグマリオンは神様にお願いして、自分で作った等身大フィギュアに「命」を与えてもらい、人形と結婚して子供も作ったんだそうです。
な、なんて羨ましい！

科学によって理想の女性を作り出そう

さて、古代ギリシアのピグマリオン神話はあくまでも神話。つまり実現性のない「妄想」だったのですが、デカルトの登場により「人間機械論」という新たな世界観が生まれた結果、「科学によって理想の女性を作り出せる」という「希望」、つまり「ピグマリオン神話は実現するんじゃないか」という予感を様々な喪男が抱くようになったわけです。
「現実は地獄である」「俺はモテない」。これが喪男哲学の出発点でしたね。ここから「天国は脳内にあり」とか「解脱せよ」とかいったいろんな二元論が生まれたわけですが、デカルトは「自分で勝手に世界を作っちゃえばいいよ」と言い出したんです

ね。言っただけではなく、「世界なんてのは、座標軸上の点にすぎない」と図まで示してくれたわけです。

さて**「女」というのも、喪男にとっては「俺と関係ない世界」の一つ**です。ならば、女も自分で作ればいいわけです。ギリシア神話で人形に命を与えてくれる存在は言うまでもなく「神」だったのですが、デカルト以後の近代西洋では、人形に命を与える存在は「科学」なのです。科学が、喪男にとっての神になったのです。人形に命を与えるために必要とされる科学技術は二つ。「精巧な肉体を作ること」と「自我を与えること」です。デカルトによれば人間は「肉体（モノ）」と「自我（精神）」によって構成されていますからね。ということは、この二つを科学技術によって自作してやればいいわけです。

ヨーロッパ全土の喪男たちは妄想しました。

「いまはたとえ夢物語でも、科学が発達した未来になれば、きっと……」

で、こういう喪男の多くが、自ら科学者になって「科学が発達した未来」の実現のために頑張ったわけです。

科学の発達の原動力は「恐ろしい世界の征服」であるとさっき書きましたが、この**「恐ろしい世界」の中には、言うまでもなく「現実の女」も含まれている**わけです。一度は諦められていたイデアという夢に、「未来なら、科学の力で実現できる」という希望の力が与えられたのです。これが近代ヨーロッパにおける科学至上主義の爆発とマッドサイエンティストの大量発生の原因であると僕は考えています。今日の科学の凄まじい発展を見ますに、みんな、いったいどれだけ女に痛い目に遭わされてきたのでしょうか。空恐ろしい限りです。デカルトも生涯独身でしたし、ニュートンもそ

うです。ニュートンに至っては八四年も生きたのに「女性と手を繋いだことすらない」なんて言われていました。アインシュタイン[*33]だって、独身を貫けば統一理論を完成できたかもしれませんよ。

断言しましょう。科学は、今後もずっと発展します。地上に喪男がいる限り。

ところでいまの日本では、科学者のなり手が減っているそうです。理由は簡単で「女にモテないから」だそうです。つまり女たちが科学者を「暗い」「キモい」「ひきこもりっぽい」と嫌うので、モテたい男は科学者にならないんだそうです。「医者」だと「儲かりそう」なのでモテモテなんですけど、科学者って貧乏イメージですからね。

僕は、「科学者はモテないから、なり手が減っている」といういまの日本の現状を憂慮しています。皆さん、もっと子供に「講談社ブルーバックス」を読ませましょう。「モテ」を捨てるところから人間の知性が発展するのだということは、本書で散散書いている通りです。現状を見てください。バブル以後のモテ至上主義が日本経済を傾かせ、モテと無縁な世界で努力してきたアキバ系が日本文化を復興しようとしているではありませんか。ことほどさように、**「モテと人間の知性とは両立しない」**のです。

㉝ アインシュタイン
一八七九年〜一九五五年。アルベルト・アインシュタイン。ドイツ生まれの物理学者。二〇代で「特殊相対性理論」、三〇代で「一般相対性理論」を発表。相対性理論によると光の速度は不変で、逆に質量や時間や空間は相対的に伸び縮みするものだという。その後、電磁気力や重力をすべて統合した統一場理論を作ろうとしたが、完成しなかった。「シュレーディンガーの猫」で知られるような確率論を採る量子物理学に対しては「神はサイコロを振らない」と反対していた。

2　リラダンの人形萌え

人形萌えの名作、リラダンの『未来のイヴ』

デカルトが創始した「人形萌えを科学で実現」という希望は、その後、様々な喪男の魂を揺さぶり続けました。科学が高度に発達したことは言うまでもありません。現代の喪男科学者たちはついに、人間の遺伝子の解析に手をつけています。クローン人間だって作れます。『ローゼンメイデン』の真紅様がアリスになる日は近いのです。アリスゲームなんて必要ありません！　科学者が真紅様をアリスにしてあげられるんです！

さて、人形萌えの歴史に残る喪男を紹介します。産業革命時代、一九世紀のフランスに生まれた文学者のリラダン[34]です。彼は『未来のイヴ』[35]という小説を書きました。タイトルでおわかりのように、リラダンは、科学が発展した未来では喪男は理想の「イヴ」つまり萌えキャラを作ることが可能になる、と考えたのです。

『未来のイヴ』の主人公エワルドは喪男です。喪男エワルドは最初、アリシャという美人歌姫に萌えます。いまで言えば、巨乳アイドルのおっかけという感じでしょうか。しかもエワルドは何をどう間違ったのかアリシャとデキてしまうのです。「そんなバカな」と言いたいですが、まあ小説ですからね。

ところが、これで終わったら平凡なトレンディ・ドラマ。ここからが喪男文学の真骨頂です。エワルドはアリシャの体には満足するんですが、「アリシャの頭の中身が

㉞　リラダン
一八三八年～八九年。フランス貴族の生まれ。しかしすでに時代は一九世紀、リラダン家は没落して斜陽となっていた。一九世紀資本主義が生み出したブルジョア社会を嫌悪した極貧の喪男リラダンはボードレールやポーに夢中になり、目の前の腐った三次元世界に背を向けてまったく売れない脳内ユートピア文学を書き続けた。そして赤貧のまま死んだ。代表作『残酷物語』『イシス』『未来のイヴ』。『イシス』は、イシスという名前の（リラダンの脳内）萌えキャラがいかに神々しいかという話を延々としているだけという……。

㉟　『未来のイヴ』
リラダンの代表作。発明王エジソン博士が、人間女アリシャの愚かさに絶望して「誰かがあの（女の）肉体からあの魂を取り除いてくれないかなあ」と嘆いていた喪男エワルドのために究極の萌えロボット「ハダリ」を作ってくれる。「目もくらむほど美しいあの愚劣な女が、もはや女ではなくなって、天使になるのです。情婦ではなくなって、恋人になるのです。『現実』ではなくなって『理想』になるのです」とエジソン博士。一〇〇年早すぎた大人のドラえもん。貧窮していたリラダンは、八年かけて完成させたこの小説の権利を、たったの五〇〇フランで売り渡してしまった……。

カラッポだ」と絶望します。真の喪男は「女とセックスできない」ことを苦しむのではありません。それはあくまでも苦しみの第一段階。その先には、「女の精神にウンザリだ」という本当の絶望が待っているのです。

なにせ、アリシャはバカ女で、贅沢なお洒落さえできれば満足という豚みたいな存在です。恋愛資本主義に毒されたパッパラパー女です。いまの東京にも、こういう女は腐るほどいますが。

喪男エワルドはアリシャとセックスするだけでは満足できません。女とは、外見は美しくとも、その内面は萌えるに値しない愚かすぎる生き物でしかなかった。それでは自分はいったい何に萌えていけばいいのだろう。**下手に童貞捨てて現実の女に対する幻想が消えうせたばかりに、ますます苦悩が深まります。**

困ったエワルドは、なんと、エジソン博士に頼んで、人造美少女人形を作ってもらうのです！

エジソンかよっ！

これはコミケで売られている十八禁同人マンガのあらすじではありません。やっぱり当時のエジソンは喪男の希望の星、**オタクの錬金術師**だったんですね。

かくして、エジソンがエワルドのために作ってあげた「完璧な恋人」こそが、人造人間「ハダリ」だったのです。そうです、これこそが『イノセンス』に登場する人形「ハダリ」のモデルなんです。

言うまでもなく、エワルドはハダリを「愛」するようになります。萌えます。そりゃもう、萌えたどころの騒ぎではありません。大変ですよ。天地が引っくり返ったような騒ぎ[*36]です。

㊱「天地が引っくり返ったような騒ぎ」
エワルドは最初ハダリを「この薄気味悪い機械人形」「電気の化け物が女の姿に身をやつし俺たちの生活に潜り込もうとするなんて笑止千万」とさげすんで葛藤するが、ハダリが泣いて嘆き悲しんだので回心して「生きている女のほうこそ幻だと、今しがた気がついた！」「私は人間を辞職する！」と人間辞職宣言を行う。エワルドが人間を辞職して機械の花嫁と二次元へ飛翔するこのシーンは、世界文学史上、最も感動的な場面であろう。

リラダンは作中で居直って宣言します。

「我々の神々も我々の希望も、もはやただ科学的なものでしかないとすれば、我々の愛もまた科学的であっていけないいわれがありましょうか」

これまた『イノセンス』に登場する一節ですね。

「科学と人形萌えの奇蹟の融合」

これがこそが、新世紀における愛の形であると、リラダンは声を大にして訴えたのです。

まあ、こんな話ばかり書いていたので現実のリラダンは極貧生活を余儀なくされ、最後はボクシングジムの殴られ屋になって野垂れ死にしたそうです。

喪男らしい、最高にカッコいい最期と言えます。

モテ男と女たちは言うでしょう。

「何がハダリだ。自分に都合のいい反応しかしない女なんかを求めやがって、この変態め」

真の喪男は現実の女の精神に絶望する
ジョージ秋山『銭ゲバ』ソフトマジック、2000年、P494

しかしリラダンはこう言うでしょう。

「私が求めているのは自分に都合のいい反応しかしないバカ女ではない。そんなものは現実の女だけで充分だ（上図参照）。金を与え、贅沢品を与え、車に乗せ、マンションに連れて行けばこっちの希望通りに反応

してみせる現実の女だけで。私はそんなものには辟易したのだ。私が求めているものは、萌えるに値する精神を、善と美のイデアを持った女性なのだ。そんなものが現実に存在するわけがないことも私にはわかってる。だから、自分で作るしかないのだ」
そして次の瞬間、リラダンはイケメンにぶん殴られて倒れこむのです……。
西洋近代の科学至上主義時代とは、キリスト教から生まれた喪男思想が中世の「この世は地獄で、女に愛などない」というひきこもり時代を経て、科学という新たな力によって「この世にないなら、自分でイデアを作れ」という方向へ「裏返った」時代だったのです。

世界も人間関係も不安定に

現代日本にもリラダンはいました。それが手塚治虫です。手塚は『ファウスト』[*37]を三度もマンガ化していますが、遺作となった『ネオ・ファウスト』[*38]は、なんとファウスト博士がバイオテクノロジーを駆使して科学の力で理想の女性を作ろうとする科学物語に書き換えられています。
このマンガでは主人公が「人間」「悪魔」「人造人間」の三人の女性に囲まれるのですが、人間の女性とはヤルだけはヤリましたが結局悲恋に終わります。悪魔は身体はエロいけど心が悪魔なのでどうにも萌えません。というわけで、やっぱり遺伝子工学を学んで自分でホムンクルス[*39]を作っちゃおう、という結論に至るわけです。
残念ながら『ネオ・ファウスト』は未完の大作となってしまいましたが、魔術師が人造人間を作ろうとする『ファウスト』の物語を科学者によるバイオテクノロジー話に置き換えたのはさすが手塚先生です。

㊲「ファウスト」
ゲーテの代表作。第一部は一八〇八年、第二部は三三年に出版された。ドイツの魔術師・ファウスト博士の伝説をベースにゲーテの妄想力が無限に広がり続ける一大叙事詩。第一部は喪男ファウストが悪魔と契約してイケメンに変身し、人間女と恋愛する話。もちろん悲劇で終わる。第二部では人間女に懲りたファウストが古代ギリシアの女神や錬金術のホムンクルスと脳内家族を築こうとするが……。詳細は第三章にて。

㊳「ネオ・ファウスト」
一九八八年に『朝日ジャーナル』で連載された手塚治虫のマンガ。遺作。ファウストの設定を現代日本に移し替え、ファウスト（作中では一ノ関と名乗る）がバイオテクノロジーを駆使して理想の女性を人工的に製造しようとする物語に変換している。悪魔メフィストフェレスを「牝フィスト」を名乗る美女にしてしまったのは、さすが手塚先生！　ちなみに人間の恋人は学生運動にハマっている生真面目な女の子で、悪魔のくせにファウスト（一ノ関）に惚れてしまって嫉妬しまくるメフィストに比べるとあまり魅力がない。て、手塚先生……！　しかし第二部が始まったところで手塚先生が逝去したため、ついに理想の人造女性は登場しなかった……。

㊴ホムンクルス
錬金術によって製造する人工生命。パラケルススによると、人間の精液や血をメルクリウスの器に入れ、暖めて造り出す。人間の姿をしてい

さて、かくして「世界」は「科学」によって征服されるべき対象となり、「切り取り放題」になりました。これ以後、西洋文明は全世界に波及していきます。

近代西洋の歴史は、「全世界のヨーロッパ化」「世界同時喪男文明化」の歴史だったと言えましょう。神の代わりに「人間の良識」がすべての関係を調整してくれることになりましたが、これはつまり事実上のノールールということです。世界はどこまでも不安定になったのです。

この不安定をごまかすために「社会そのものが永遠に発展し続ける」というルールに基づいた新たなシステムが考えられました。これが資本主義のルーツです。経済が永久に発展するなんて本気で信じてたんでしょうか。するわけありませんよ。市場を食い尽くしたら、植民地を増やして市場を拡大しなければならなくなります。これは大変です。地上に発展の余地がなくなったら、いよいよ宇宙へ飛びたつしかなくなります。宇宙なんて行けっこないというのは昔の話で、いまならロケット飛ばせば行けます。だからロケットを作る。同様に、石油を掘りつくしたら、原子力で発電すればいい、ということになるわけです。錬金術では原子力は扱えませんが、原子核物理学[*40]があればなんとかなります。こうして、科学の発展と資本主義市場の拡大とは車の両輪の如く同時に進んでいったのです。

しかし、ただ世界が不安定化しただけではありませんでした。「神」の衰退によって、つまり「自我」の孤立化によって、個々の間の人間関係もまた不安定になりました。人間関係の保証人だった神が消えたため、人間関係の中にも自由主義の原則が取り入れられます。ここに近代的な意味での「恋愛」が誕生したのです。

ところが、ああ、なんということでしょう。

るが、非常に小さい。ニュートンが錬金術に凝っていた理由も、あるいは……。一九九〇年代半ばに発売されたPCゲーム『メルクリウス・プリティ』で、恐らくはじめて萌えキャラ化された。

㊵ 原子核物理学
錬金術師は「賢者の石」を使って鉛などの卑金属を黄金に変換できると言われていたが、まあたぶん誰も成功していないだろう。しかし現代の物理学の技術を使えば、粒子を加速して原子に衝突させることで原子核変換が可能なのだ！ とはいえ金原子を作るのには膨大なコストがかかるのでまったくもって意味がない。だが、将来もしかしたらコスト問題が解決されて安く原子核変換ができる世界が実現しないとも限らないのだった。

近代の恋愛至上主義は、喪男にとって、新たなる地獄の始まりだったのです。

次の章では、キリスト教に取って代わっていく近代恋愛の姿について説明したいと思います。そしてこの恋愛という恐ろしい装置は、いまも僕のような喪男を苦しめ続けているのです。

第三章　恋愛と資本主義

I　喪男芸術家　ダンテからゲーテへ

恋愛の登場

古代ギリシア・ローマを理想としたルネサンスが、プラトン哲学を復活させ、西洋を中世から近代へと移行させたことは第二章で述べました。近代の西洋哲学を牽引したのはデカルトの二元論で、ここから「モノ」としての世界を統べる原理を追究する学問＝科学が誕生したわけですが、一方では物質と区別された「精神」つまり「自我」の問題が発生したわけです。

中世キリスト教世界では、人間も世界も、すべては「神」の被造物という点では同質[*1]でした。人間と世界とは、「神」の愛によって融合していたわけです。もちろん、人間と人間の関係もまた、神が保証してくれていたわけです。ところが近代に入ると、人間と世界とがまず分裂します。人間は「精神」で、世界は「物質」です。そしてデカルトはこの両者の間には何の関係もないと考えました。かくして、人間自身の存在もまた、肉体と精神とに分裂したわけです。また、人間と人間との関係性を神が保証してくれるという幻想も弱体化しました。デカルトは「共通感覚」を持ち出して人間同士の関係性を保証しようとしましたが、『機動戦士ガンダム』[*2]に先駆けること四〇〇年、これは**ちょっと早過ぎたニュータイプ[*3]思想**でした。

そこで登場したのが「恋愛」です。

恋愛はいきなり大衆に普及したわけではありません。最初は一部の先進的な喪男つ

① 「中世キリスト教世界では、人間も世界も、すべては「神」の被造物という点では同質」
故に中世では、神学も哲学も「人間」と「世界」の両方を扱う学問だった。しかし近代の二元論が人間と世界を分断したために、哲学もまた「人間」を扱う学派と「世界」を扱う学派に分裂していく。実存主義哲学は「人間」学派であり、観念論や唯物論は「世界」学派だろう。ただしドイツ観念論は「世界」を「人間」（ヘーゲルで言えば「精神」）が作ったものと捉えるので、厳密に言えば近代二元論によって分裂した哲学を再統一する最初の試みだったとも言える。

② 『機動戦士ガンダム』
「ガンダム」シリーズの第一作。一九七九年～八〇年。テレビアニメ。ロボットアニメに国家間戦争や人間ドラマなどのリアリズムを導入し、またロボットを「モビルスーツ」と呼称する量産型兵器として描いた画期的な作品。制作は日本サンライズ（現・サンライズ）。子供にとっては難解だったために打ち切りになったが、映画化されて大ブレイク。ガンダムブームを巻き起こした。

③ ニュータイプ
『機動戦士ガンダム』の後半に登場するキーワード。宇宙で育った人間の中から、進化した意識を持った新しい人類が生まれてくる。それが

まり芸術家の脳内妄想でした。まず妄想があり、その妄想が活版印刷技術などによって大衆に流布していくことによって一般化したわけです。つまり**恋愛はまず脳内恋愛、すなわち「萌え」から出発し、その萌えが多くの人々に取り入れられて「現実」になったのです。**

「ロマンス」[*4]という言葉は現在では「恋愛」という意味になっていますが、最初は「騎士道物語」のことを意味していました。中世から近世にかけて、恋愛とは吟遊詩人が歌う騎士道物語の中だけで語られる文化だったのです。『トリスタンとイゾルデ』[*5]とか『アーサー王の死』[*6]とかですね。

脳内に萌えの世界を発見したダンテ

萌え芸術の先駆けといえば、例えばダンテ[*7]があげられます。

ダンテは九歳の時に、ベアトリーチェという同い年の少女に狂おしいまでの恋愛感情を抱いてしまいます。九歳ですよ九歳。九歳といいますと、小学校三年生ぐらいですよ。ダンテは小学生時代に「幼なじみフラグ」[*8]を立ててしまったんですね。こんなイベント、ゲームの中でしか発生しませんよ、普通。さすがイタリア最高の詩人、幼い頃から喪男だったんですな。ちなみに僕が九歳の頃に何をしていたのかを思い返してみますと、スーパーカー消しゴムを集めたり、仮面ライダーのカードを集めたり、壁新聞にヘンなことを書いて先生に叱られたり……。いまと変わりませんね。女？　何そ

ダンテ

ニュータイプ。非常に難解な概念だが、少なくともニュータイプ同士はお互いに意識を交換することができる。

④ ロマンス
ラテン語起源の諸言語（イタリア語、フランス語、スペイン語など）を「ロマンス語」と呼ぶ。かつてヨーロッパの文学はラテン語で書かれていたが、中世になるとロマンス語で書かれた「騎士道物語」が流行し、物語自体を「ロマンス」と呼ぶようになった。騎士道物語のテーマは、騎士の英雄的な闘いと、貴婦人との恋愛の二本柱。故に後に恋愛小説が「ロマンス」と呼ばれるようになったのは騎士道物語が端緒となっている。

⑤「トリスタンとイゾルデ」
中世ロマンスの代表作の一つ。王妃イゾルデと騎士トリスタンの不倫悲恋がテーマ。イゾルデとトリスタンは愛の秘薬を間違って飲んでしまい、破滅的な不倫へ突っ走っていく。

⑥「アーサー王の死」
一四七〇年。トマス・マロリー作。中世ロマンスの代表作の一つ。ブリテンの伝説的英雄・アーサー王の物語を集大成したもの。主人公アーサー王は魔法使いマーリンに助けられながら聖剣エクスカリバーを振るい、円卓の騎士とともにブリテンを統一する。後半は円卓の騎士たちが主人公となり、「トリスタンとイゾルデ」や湖畔の騎士ランスロット、聖杯を探索するパーシバルやガラハットなど中世ロマンスの人気キャラクターたちが総出演して活躍する。終盤は

れ？　みたいな少年時代でした。九歳で色を知ったダンテは本当に凄い。
まあ色を知ったといいましても、もちろん脳内だけの話ですが。
その後、ダンテは一八歳の時にベアトリーチェと再会します。運命の再会イベントですね。まったくもってエロゲーのシナリオです。ダンテはたちまち好感度ＭＡＸ状態になってベアトリーチェに萌え狂ったのですが、当のベアトリーチェは「あっ、どうも」と挨拶してさっさと去ってしまったのでした。
フラグ立ってないよ！[*9]　立ってないよ！
普通ならここでベアトリーチェを口説くことを考えるものですが、ダンテは筋金入りの喪男でした。そんな恐ろしいこと、できるわけありません。ダンテはベアトリーチェへの狂おしい愛を押し隠し、それどころかベアトリーチェと関係ない別の女にラブレターみたいなポエムを捧げたりしてベアトリーチェに嫌われてしまいます。つまり、チョイワルぶったんですね。本当に好きな子には素直になれないダンテはツンデレ[*10]の走りでもあったわけです。ダンテはつまり、チョイワルぶることで「ど、ど、童貞ちゃうわ！」とベアトリーチェに間違ったアピールをしたのでしょう。この空回り具合こそ、喪男の特徴です。**ダンテは史上に残るほどの恋愛至上主義者だったのに、実際の恋愛偏差値は三五**だったんです。ベアトリーチェはダンテがキモくなったようで、挨拶すらしてくれなくなり、結局よその男と結婚してしまいました。
寝取られイベント[*11]発生です！
幼なじみ↓再会↓チョイワルぶる↓誤解される↓寝取られる。
怒濤のゲームシナリオです。なんだか、売れそうですね。
もちろん、寝取られた直後に、ベアトリーチェは死にます。「死亡フラグ」確認で

悲劇。アーサー王の后グィネヴィアとランスロットの不倫が発覚し、ランスロットとアーサー王は闘うことになってしまう。しかしアーサー王が本国を留守にした隙に、アーサー王が姉に産ませた不義の子モルドレッドが反乱を起こす。アーサー王はモルドレッドとの闘いで深手を負い、エクスカリバーを湖の女神に返還し、伝説の島アヴァロンへと姿を消す。アーサー王とランスロットは友情で堅く結ばれていたが、モテの魔の手によってお互いの身を滅ぼしてしまったのだ。また聖杯は真性童貞でなければ手に入れられないものだったので、不倫しているランスロットは探索に失敗。最終的には脳内恋愛した経験すらない純潔の騎士ガラハットが聖杯を手にした。世界最高峰の童貞至上主義文学。

⑦　ダンテ
一二六五年〜一三二一年。イタリア・フィレンツェの詩人。ルネサンスの先駆け。当時のフィレンツェは政争に明け暮れており、市民派寄りの政治家だったダンテは教皇派との政争に敗れて失脚、フィレンツェから追放された。以後二度とフィレンツェに戻ることは叶わず、生涯を流浪のうちに過ごし、仲間たちとも絶縁してしまい孤立していった。そんな絶望的な現実を生きる中、『神曲』をはじめとする執筆活動だけがダンテの生きる支えとなった。一生涯ベアトリーチェに萌え続けた。代表作『新生』『神曲』。

⑧　幼なじみフラグ
「幼なじみの二人が、幼少期に将来を誓い合っ

す。完璧な悲劇シナリオ、鬱ゲーム[12]です。

現実とは、糞ゲーだった！

ダンテの衝撃はいかばかりか。

この時にダンテのとった行動が、その後の西洋世界を「恋愛至上主義」へと導くことになったのです。最愛の人・ベアトリーチェは、寝取られたあげく、死んでしまいました。もうダンテには愛すべき人がいません。もういないんだ。もうダメだ。いや、ベアトリーチェは、死んではいないじゃないか！　俺の頭の中に、俺の心の中に、ベアトリーチェは生きているじゃないかっ！　うおおおーっ！　わかったぞーっ！　ベアトリーチェ、お前に夢中だーっ！

そうです。ダンテは自分の脳内に「二次元」を発見したのです。そこは、永遠の世界。かくして、ダンテは一生涯にわたって、脳内の萌えキャラとなったベアトリーチェを描き続けることを誓ったのです。

喪男芸術家ダンテの誕生です。

ダンテの代表的な詩集『新生』は、ベアトリーチェがいかに萌えるか、という萌え話の集大成です。

しかも、ダンテはただ女にモテなかっただけではありません。後年には政争に敗れて生まれ故郷のフィレンツェを追放され、以後は死ぬまで流浪の人生を送りました。**現代の物質至上主義の価値観では、「負け組」と言われて笑われる境遇**です。しかしダンテは負け組などではありませんでした。ダンテは現実社会においては女を寝取られ（最初から脳内彼女だったので、厳密に言えば実は寝取られてすらいないんですが）、故郷を追放され、ふらふらと孤独に流浪している惨めなオッサンです。しかし

たりして、ゲーム開始時にはすでにフラグが立っている」という有様。ギャルゲーやラブコメマンガに多いシチュエーション。現実には有り得ない。有り得ないですとも。

⑨　「フラグ立ってないよ」
ギャルゲーでは主人公とヒロインが共通シナリオから恋愛シナリオルートに入ることが確定する瞬間を「フラグが立つ」と呼ぶ。つまり「フラグが立っていない」とは恋愛関係に入っていないということ。

⑩　ツンデレ
「ツンツンデレデレ」。日頃はツンツンしているけど、ときにデレデレしてくれるキャラ。あるいは「交際前＝ツン」で「交際中＝デレ」というキャラ。

⑪　寝取られイベント
ヒロインを他の男に奪われる鬱イベント。鬱ゲームに頻出する。僕の現実の人生って、この寝取られイベント以外のイベントが発生しないのですが、これって糞ゲーなんでしょうか。

⑫　鬱ゲーム
プレイヤーが暗い気分に落ち込む鬱展開を売りとしたギャルゲー。ヒロインが寝取られる、ヒロインが死ぬ、ヒロインが電波、ヒロインが人殺し、主人公が電波、主人公が死ぬ、などなど、現実世界では絶対に受容できないであろう恐ろしい鬱イベントが襲ってくる。

彼には現実よりも大事な世界、「二次元」がありました。

ダンテの代表作『神曲』は、彼が放浪している苦難の時代に書き始められたものです。この叙事詩の中で、ダンテは自ら主人公として登場します。「俺話」なのです。これだけでも実に大胆ですが、ダンテは作中で「地獄・煉獄・天国」という三つの「二次元」世界を巡礼するのです。ここで、ダンテは「永遠の淑女」ベアトリーチェに導かれるわけです。

地獄ではダンテを弾圧した教皇たちが責め苦を受けています。ダンテ版『デスノート』[*13]といいますか、魔太郎のウラミ手帳[*14]みたいなものです。そこから地上で犯した罪を浄化する「中間地帯」である煉獄を経て、最後にベアトリーチェとともに天国へ昇るのです。この天国の描写が、実に神々しいのです。こんな世界、俺も行ってみてぇー！　と誰もが憧れずにはおられません（永井豪先生[*15]を除きます）。ダンテがこんな美しい世界を描き出せたのも、元々の才能に加え、ベアトリーチェを失った喪男の悲しみを「脳内ベアトリーチェ」を作り続ける妄想活動に昇華した情熱の力のおかげでしょう。

『神曲』は、ありていに言えば「こんな総天然色の夢を見た」というヨタ話です。しかし、そのあまりにも強烈なインパクト、現実よりも迫真のリアルな妄想っぷりが、後世の人々の魂を震撼させたのです。

「苦悩を超えて、妄想へ至れ」

かくして、ダンテの『神曲』は、キリスト教の理想世界であった「天国」を「萌えキャラ」と分かちがたく結びつけたのです。「恋愛」という情熱によって。

たぶん、いまの世の中なら、ダンテはストーカー防止法で逮捕されかねない人だと

---

⑬　「デスノート」
DEATH　NOTE。二〇〇三年～〇六年、『週刊少年ジャンプ』で連載されたマンガ。原作：大場つぐみ、作画：小畑健。デスノートは「名前を書かれた人間が死ぬ」という力を持ったノート。元は死神の持ち物だったが日本の高校生・夜神月（やがみライト）がノートを拾い、自ら凶悪犯罪者を裁く神「キラ」となる。で、キラを捕まえようとするひきこもりの天才探偵Lとキラ（月）の頭脳合戦が繰り広げられ、童貞のLが負ける。「ジェバンニが一晩でやってくれました」という流行語を産んだ。

⑭　魔太郎のウラミ手帳
一九七〇年代に『週刊少年チャンピオン』で連載された藤子不二雄Ⓐのマンガ『魔太郎がくる!!』に登場する手帳。いじめられっ子の浦見魔太郎は、自分をイジメた相手の名前を「ウラミ手帳」に書き留め、我慢ならなくなると「ウ・ラ・ミ・ハ・ラ・サ・デ・オ・ク・ベ・キ・カ！」とカタカナで叫んで恐ろしい復讐を実行するのだった。初期の魔太郎はいじめっ子を何人か殺しているが、黒歴史にされた。

⑮　永井豪
マンガ家。悪魔好き。『神曲』マニアだが天国にはあまり興味がなく、地獄ばかりを好んで描く。『神曲』をマンガ化したこともあるし、ダンテという名前の魔王が地獄から復活するというあらすじの『魔王ダンテ』という作品もある。代表作『デビルマン』『ハレンチ学園』『バイオレンス・ジャック』『凄ノ王』など多数。

思います。あるいは、痴漢冤罪被害者とか。満員電車で女子高生の「痴漢捏造狩り」に出くわして会社クビとか。そんな不幸がいっぱい待ってそうです……。

萌え逃げの達人ゲーテ

ダンテ以後、芸術の主題は「キリスト教」から「恋愛」へと移行していきます。その集大成ともいうべき喪男がゲーテ[16]です。ゲーテは一八世紀から一九世紀にかけてドイツで活躍した詩人です。いったい、**本物の詩人はみんな喪男**です。宮沢賢治[17]、石川啄木[18]、喪の香りがぷんぷんします。

ゲーテは二〇代の頃からすでに喪男で、『若きウェルテルの悩み』[19]というセカイ系ライトノベルを執筆しました。このライトノベルのあらすじを簡単に述べますと、

「若い男が人妻と不倫して拳銃で自殺する」

という無茶苦茶なものです。『気狂いピエロ』[20]かYO！　このアナーキズム溢れる恋愛至上主義小説があろうことかバカ受け。一躍スターとなったゲーテはいったん政治の世界に参入しますが、やっぱり途中で逃げ出して喪男芸術家としての人生を選択します。現実の権力よりも脳内の二次元世界を描くことのほうが大事だ！　という態度こそが喪男芸術の本質なのです。

ゲーテの行動パターンは萌え芸術の先駆者・ダンテとよく似ています。一四歳の時に、グレートヒェンという近所の女の子に初恋をするのですが、喪男なので当然失恋します。ダンテの「九歳

ゲーテ

⑯　ゲーテ
一七四九年～一八三二年。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ。ドイツの詩人、作家、科学者、政治家。モテモテだったが自ら恋愛からの逃亡を繰り返した。青年時代にはシュトルム・ウント・ドラング運動（疾風怒濤と訳す。現代で言えばパンクみたいなものです）の旗手となり、「失恋したら死ね！」と叫ぶ『若きウェルテルの悩み』が大ヒットして人気作家に。ヨーロッパ中の青年たちを失恋死に走らせる。後年は古典主義に目覚め、『ファウスト』を完成させた。

⑰　宮沢賢治
一八九六年～一九三三年。童話作家、詩人。岩手県の人。妹萌え。若い頃には東京で暮らし詩人として活躍するが、妹を看病するため岩手に戻って教師になる。しかし妹とし子はあえなく病死。以後は教職を退いて半ひきこもり生活に。ファンの女に迫られたこともあるが護身した。生前、「性欲の乱費は、君、自殺だよ。いい仕事はできないよ。瞳だけでいいじゃないか。触れてみなくたっていいよ。性愛の墓場までいかなくてもいいのだよ」「俺は、たまらなくなると野原へ飛び出すよ。雲にだって女性はいるよ。一瞬のほほえみだけでいいんだ。においをかいだだけで、あとはつくり出すんだよ」と語っていたという。賢治先生……。膨大な童話や詩を残し、生涯童貞のまま夭折した。趣味は春画のコレクション。代表作『春と修羅』『銀河鉄道の夜』『グスコーブドリの伝記』『風の又三郎』『セロ弾きのゴーシュ』『よだかの星』『永訣の朝』。

で萌えに目覚める」という最速レコードには及びませんが、なかなか早熟です。ちなみに僕の初恋は一一歳の時でしたが、もちろん失恋しました。同じクラスのAさんという沖縄から来た転校生に使い古しの消しゴムを恵んでもらったので好きになったのですが、満座の中で「あんたのことなんか好きちゃうわ！」と言われまして、そこから僕の喪男哲学者としての人生がスタートしたのでした……。

いや僕の話はいいんですよ。ゲーテはグレートヒェンとフラグを立てることができませんでした。その後、今度はケートヒェンという女の子に萌えるのですが、「ケートヒェンはお洒落なのに、自分は田舎モノ」という劣等感が邪魔をしてまたフラれます。これは梶原一騎[*21]の自伝マンガ『男の星座』[*22]の話ではありません。そのあげくゲーテは病気になって学校も中退。故郷に戻ってひきこもりニートとなります。まさに踏んだり蹴ったり、喪男人生まっしぐらの青春暗黒物語だったのです。

言うまでもありませんが、この青春喪男時代の辛い体験が、ゲーテを芸術家として育て上げてくれたわけです。現実の悲惨さを味わえば味わう程、喪男は脳内世界の素晴らしさに一層惹かれていくのです。

さて、病気を治したゲーテは家から再び出て勉学に勤しみましたが、その頃にはもうすでに喪男としての人格が完成されていました。今度は間違ってフリーデリーケという女の子にモテてしまい「結婚してください」と迫られますが、「モテの魔の手がキター」とばかりにゲーテはフリーデリーケから逃亡します。やっと喪男ゲーテに春が訪れた時には、もう手遅れだったのですね。

その後ゲーテは友達の彼女・ロッテに萌え狂ってラブレターを送りまくったあげく、やっぱり逃げ出します。で、ロッテがその友達と結婚したと聞いて、ショックで

⑱ 石川啄木
一八八六年〜一九一二年。詩人。岩手県の人。詩人として名をなしはじめた矢先に結核で夭折。「働けど　働けどなお　我暮らし　楽にならざり　じっと手を見る」という貧乏喪男短歌で有名だが、実際には妻子がいた。それどころか若い頃の啄木は妻子を顧みずに単身赴任と称して逃亡を繰り返し、東京で風俗にハマったりしていた。働けど働けど金がなかったのは、実は風俗に使っていたからだとか……。で、売れる前に早死に。これはこれで一つの喪男。代表作『一握の砂』。

⑲ 「若きウェルテルの悩み」
一七七四年。「失恋したら死ね！」と叫ぶニュー・ウェーブ・パンク小説。当時の若者たちにとって、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』に匹敵する、あるいはそれ以上の影響力があった。一八世紀後半はヨーロッパ全土で恋愛小説熱と革命熱が吹き荒れた時代だった。ルソーは失恋の痛手を妄想で癒すべく『新エロイーズ』を執筆し、アメリカは独立を宣言し、そしてサドは監獄で『ソドム一二〇日』を書き殴っていた。近代の「恋愛至上主義」と「革命思想」はセットだったのである。

⑳ 「気狂いピエロ」
一九六五年。フランス映画。監督はジャン・リュック・ゴダール。主演はジャン・ポール・ベルモンドとアンナ・カリーナ。ヌーヴェル・ヴァーグの頂点的作品。ストーリーは……えっと……すみません全然わかりません。ラストシーンのジャン・ポール・ベルモンドが最高に喪

自殺しようとするのです……。

まあ、そんな感じで喪男恋愛経験を積み重ねていきます。ゲーテの特徴は「恋愛依存症」とも言うべき恋愛好き体質と、恋愛が成就しそうになると逃げ出す喪男気質です。ほとんどジサクジエンですが、このような分裂気質行動は喪男の芸術活動にとって非常に有効な行動パターンなのです。もし恋愛が成就したら、喪男は現実に幻滅してしまいます。現実の恋愛など、しょせんは醒めるものだからです。なぜかというと恋愛感情もまたホルモンの影響による化学反応にすぎず、寿命があるからです。

ですから喪男は注意深く恋愛から距離を保たねばなりません。しかし、だからといって恋愛を捨ててしまうこともできません。恋愛を捨てるということは、萌えのエネルギーを涸（か）らしてしまうということになるからです。故に、遠くからそっと片思いして、女がなびいてきたら逃げる。あるいは、自らフラれるように仕向けていく。これしかないのです。その結果、どうなるかというと、トラウマが残ります。現実に対するトラウマが。このトラウマを癒すために、萌え衝動が湧き上がってくるわけです。そうやって「永遠の片思い」状態を維持することが、喪男芸術家を成長させる一番の方法です。これを僕は「**萌えの超回復**」と呼んでいます（図3－1）。

「独り相撲」という言葉が脳裏を飛び交いますが、気にしないで先に進みます。

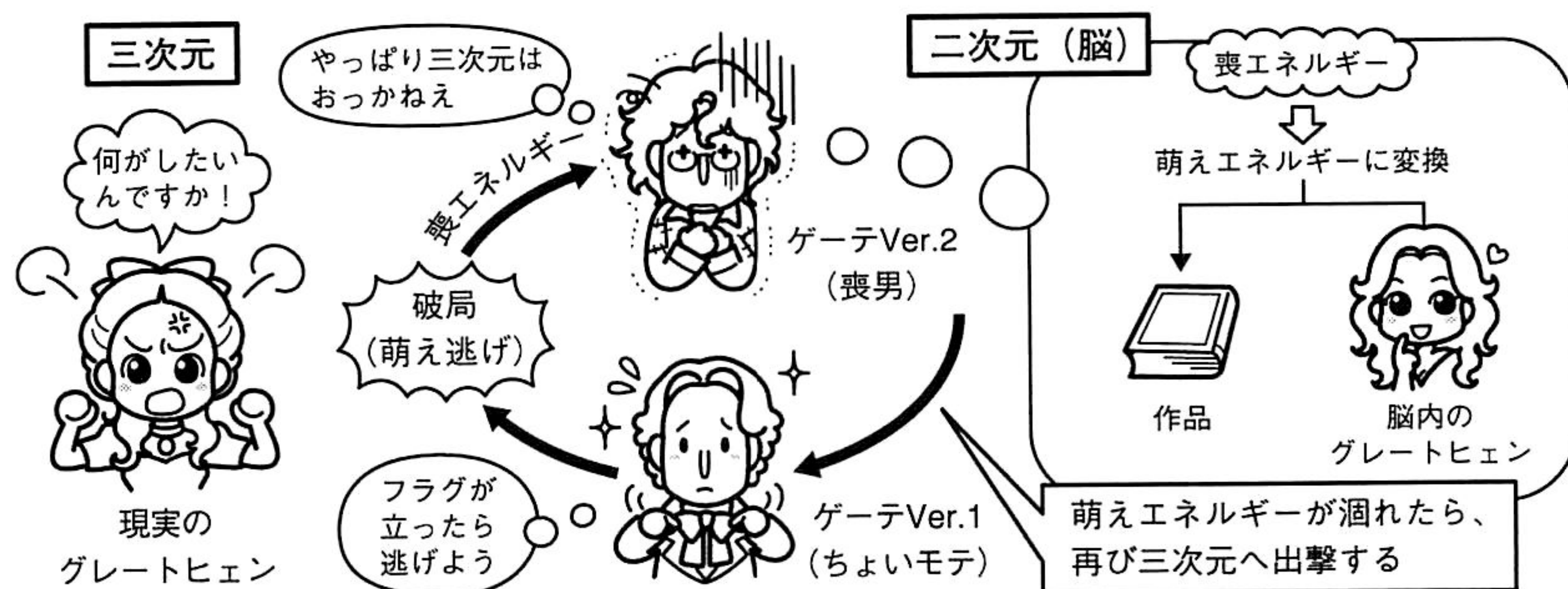
ダンテやゲーテは、人間が喪男芸術家になるための道程を指し示してくれています。**「現実への絶望」「満たされない恋愛への憧れ」こそが、喪男に想像力（妄想力ともいいます）を与えてくれる**のです。マンガ『鋼の錬金術師』[23]でも「等価交換の法則」が語られますよね。現実でモテて、喪男芸術家としても作品をなしたい、なんてのは無理なのです。もちろん「モテ男芸術家」という道もありますが、だいたいそう

ちょいモテでも自分の意志で喪男として生きることで喪エネルギーを効率的に集められる。一部の芸術家はわざとこういう行動パターンをくりかえす。あなたも努力すれば喪男になれるんです！

図３―１　萌えエネルギーの永久循環

いう手合いは死んだらサリエリ[*24]のように忘れ去られていくものなのです。モテなんてのはその時代、その時代でころころと基準が変わります。それにひきかえ、「喪男」は永遠です。いつの時代でも、喪男は喪男です。**喪男の悲しみは、人類・国境・時間を超えて永遠普遍**なのです。

実際、若い喪男が人妻にフラれて自殺するという『若きウェルテルの悩み』は、ヨーロッパ全土（の喪男）に熱狂的に支持されました。当時すでにヨーロッパではキリスト教が衰退して恋愛至上主義が勃興しつつあったんですね。時代の気分がゲーテの喪男魂と見事にシンクロしたわけです。『若きウェルテルの悩み』は「恋愛こそが人生でもっとも価値のある行為であり、人は失恋したら死ぬべきだ」と主張したのです。このイカれた小説はたちまち恋愛至上主義者のバイブルとなり、真似して自殺する喪男が大量発生しました。人妻属性というのもふるっています。

ゲーテの「フラれたら死ね！」という萌え魂は、大勢の喪男に「萌え」の素晴らしさを知らしめたのです。「世界イコール恋愛」という「ウェルテル」の世界観は、まさしくライトノベルの元型そのものです。

さて『電波男』、じゃなかった『ウェルテル』で一発逆転、有名人となったゲーテに、恐るべき「モテの魔の手」が襲ってきます。今度のゲーテの相手は、リリーという女性です。もうゲーテは無名の貧乏喪男ではありません。ヨーロッパでもっとも人気のある流行作家です。スターです。モテモテです。今度こそ恋愛成就、結婚、と誰もが思ったでしょう。しかし喪男ゲーテは、

「この女は俺を好きなんじゃなくて、俺の地位と名声がほしいだけなんだ」

と疑います。つまり、喪男が売れてしまうと突如襲ってきて彼をダメにしてしまう

男。『逆襲のシャア』でのシャアの最期と並ぶ二大「ダメ男の最期」。

㉑ 梶原一騎
一九三六年〜八七年。劇画原作者。劇画隆盛時代、『週刊少年マガジン』でスタートした『巨人の星』の原作を担当し、スポ根ブームを作り上げた。晩年は「アントニオ猪木監禁事件」などのスキャンダルを起こしてメディアから抹殺された。代表作『巨人の星』『あしたのジョー』『空手バカ一代』『タイガーマスク』『柔道一直線』『愛と誠』『カラテ地獄変』『男の星座』。

㉒ 「男の星座」
梶原一騎の自伝作品。作画は原田久仁信。『漫画ゴラク』で連載されたが、梶原一騎の死去によって中断、永遠に未完となった。力道山、大山倍達、アントニオ猪木、ジャイアント馬場など、梶原一騎と交流のあった実在の有名人が総出演する。少年マガジン編集部から仕事の依頼が来て「さぁこれから」というところで連載が終わってしまったのが惜しまれる。

㉓ 「鋼の錬金術師」
『月刊少年ガンガン』連載のマンガ。作者は荒川弘。アニメ化もされた。錬金術が発達した架空の世界を舞台としたノワール少年マンガ。このマンガの錬金術は「等価交換の法則」によって成立しているが、これは本作のオリジナル設定。

㉔ サリエリ
一七五〇年〜一八二五年。アントニオ・サリエ

「モテの魔の手」という概念を最初に思いついたのは、誰あろうゲーテなのです！

ゲーテは「萌え」の人ですので、「純粋な恋愛」という理想を抱いています。その理想に合致しなければ、そんな恋愛は真実の恋愛ではないと言い出して捨てるわけです。喪男芸術家は、モテるために作品を作るのではないのです。そんなことはどうでもいいどころか、むしろモテなんぞは迷惑千万なのです。喪男芸術とは「地獄のような現実」「愛のない現実」に対抗するための「脳内二次元」という別個の「真実」を作り上げる行為です。つまり「脳内革命」[*25]です。喪男哲学と喪男芸術は、ですから、元々は同じものです。それを「言語の体系」という形で行うと哲学になり、「小説」や「音楽」「絵画」という感性に訴える表現形式で行うと芸術になるのです。

で、ゲーテは、うっかりリリー本人とフラグを立ててしまったのですが、やっぱり婚約を破棄してとっとと逃げ出しました（これで何度目だろう）。そして逃げた先で、「リリーかわいいよリリー」とポエムを作りました。どうみてもマッチポンプですが、彼こそはまさしく喪男芸術家の鑑です。喪男芸術家という立場は、「売れたらモテて終わってしまう」という矛盾を常に孕んでいます。いったん売れてしまったら、次は「永遠に自分を喪男の状態に置き続ける努力をする」という強靭な意志力が試されるのです。「売れたのなら、その金でモテて楽しく暮らせばいいじゃん」と俗物は言います。しかし、そうではないのです。だって二次元のほうが大事なんだもん。恋愛は一瞬、芸術は永遠です。

もっと言えば、同じ恋愛でも現実の恋愛より脳内の恋愛のほうが大事なのです。現実はただの「現実」、脳内は「真実」です。

リ。作曲家。生前はウィーンの宮廷作曲家として持てはやされたが、晩年は「モーツァルトはサリエリに毒殺された」という噂を立てられたりして、死後は急激に忘れ去られた。映画『アマデウス』で天才モーツァルトに嫉妬する凡人代表として登場し、有名になった。今や「サリエリ」といえば「凡人」の代名詞となった。

㉕ 脳内革命
一九九五年に春山茂雄が書いてベストセラーになった本『脳内革命』から、やがて脳内革命という単語が一人歩きするようになった。

ファウストの行き着いた先

この「萌え逃げの達人」ゲーテの後年の代表作が『ファウスト』です。日本の誇る「萌えの神様」手塚治虫は、前述したように『ファウスト』を実に三回もマンガ化しています。それほど『ファウスト』は萌える喪男を捕らえて放さない傑作なのです。

主人公のファウスト博士は、「いくら学問を究めても無駄だった！ もっと楽しい人生を送りたかったYO！」と悩む老いた喪男です。オタク生活六〇年、といった感じです。年寄りですが童貞です。そんなファウストの下に、悪魔メフィストフェレスが現れます。で、「もっと楽しい人生を送ってみないか！」とファウストに囁くのです。ファウストは、さっそく契約します。で、何をやるかというと、もちろんイケメンに若返って恋愛をしてみるわけです。そうです、ファウストは恋愛してみたかったんです。「脱オタファッションガイド」を片手にファウストは秋葉原を飛び出しました！ で、言うまでもなくファウストがハマった女の子の呼び名は、グレートヒェンです。ゲーテの永遠の萌えキャラ、脳内彼女ですね。あんたグレートヒェンにいったい何年萌えとるんやと。

いまや、アキバ系オタク時代の喪男知性はどこへやら、すっかり即席DQNと化したファウストは、宝石でグレートヒェンを口説いて中出しします。童貞だったので避妊の方法を知らなかったんですね。さあ、見事に念願の脱童貞を果たしました。浮かれたついでに人殺しもやったりしたあげく、グレートヒェンから慌てて逃げ出します。逃げ出すところは相変わらず喪男なのです。哀れにもグレートヒェンは妊娠させられてしまい、兄を殺され、彼氏には逃げられ、完全にノイローゼに。あげくに自分の赤ちゃんを殺した罪で逮捕され、死刑になります。ひ、酷い話だ……。現代日本な

ら、さっさと堕胎して何食わぬ顔で生きていられるのに……。当時のヨーロッパはDQNを許さなかったのです。さすがは喪男宗教キリスト教のお国柄です。

「現実の恋愛なんて、しょせんはDQN行為にすぎぬのか」。グレートヒェンを失って絶望したファウストは、疾風怒濤のイケメンDQN暮らしを捨て、古典主義者兼政治家になります。このあたり、ゲーテ本人の人生が完全に重なって描かれていますね。ファウストは、今度はメフィストに召還させた古代ギリシアの美女ヘレナ[*26]（の霊）に恋をします。人間には絶望したけど、女神様なら、というわけです。しかし**「ああっ女神さまっ[*27]」とファウストがヘレナ（声の出演：井上喜久子[*28]）に手を触れた瞬間、ヘレナは物質に接触してしまった反物質の如く大爆発。**うたかたのように消滅してしまいます。しょせん、二次元の神様と、三次元の人間とは、触れ合えぬ運命だったのです。

どうすれば二次元の萌えキャラ・ヘレナを現実に召還することができるのか？　ファウストは魔術に手を出し、錬金術によってホムンクルスを作ることにします（実際に作ったのはファウストの弟子）。一度は若返って脱オタし、イケメンDQNになったはずのファウストでしたが、結局は元のマッドサイエンティスト＝オタクに逆戻りしたのです。**オタクは一生やめられません！**「現実の女より、脳内の萌えキャラ！」という二次元への情熱が、グレートヒェンとの失恋経験によってむしろますます盛んになったというわけなのです。もはや三次元恋愛への未練はすっぱり断ち切られました。

ホムンクルスの活躍により、ファウストはついに古代ギリシア世界へ飛翔してヘレナと結ばれます。二次元キャラを現実世界に召還するのではなく、自分が二次元世界のキャラクターになったのです。でも、もちろん、古代ギリシア世界もヘレナも、脳

㉖ ヘレナ
ギリシアが誇る世界一の美女で、父親はゼウス。スパルタの王妃だったが、トロイの王子パリスがヘレナを拉致したためにトロイア戦争が勃発した。

㉗ 「ああっ女神さまっ」
『月刊アフタヌーン』連載。作者は藤島康介。モテない喪男主人公と女神との恋愛を描く「女神もの」を代表する作品。ただしこのマンガのヒロインを務める三人の女神姉妹は、古代ギリシアの女神ではなく、北欧神話のウルド・ベルダンディー・スクルド。主人公の螢一は連載開始から二〇年近く経っているのにまだ童貞。立派だ。あーあー、俺の家にもお助け女神事務所から間違い電話がかかってこないかなぁ。

㉘ 井上喜久子
アニメ版『ああっ女神さまっ』でヒロインの女神さまベルダンディーの声をあてている声優。「お姉ちゃん」の愛称で親しまれる。

内妄想にすぎません。ヘレナと脳内結婚して脳内子供オイフォーリンまで作ったファウストでしたが、結局はヘレナもオイフォーリンも消えてしまいます……。
二次元世界から追い返されてしまったファウストは国家経営に乗り出し、今度は現実の世界を天国に作り変えることに情熱を注ぎます。
つまり三次元に絶望したファウストは、古代ギリシアという二次元へ飛翔したのですが、やっぱり二次元の人間にはなりきれませんでした。そこで、最後の最後に三次元世界を二次元の理想郷そのものに改造することにしたのです。
ここ、要注目です！
最後にファウストが到達した境地こそ、「**現実が腐っていたなら、俺が現実を書き換えればいい**」という思想。デカルトに端を発する「**近代的自我**」そのものなのです。ファウストは途中で失明したりしますが、めげません。彼の事業は海を埋め立てるという大事業なので、はっきり言ってめちゃめちゃ環境破壊しています。国家財政の破綻も心配です。埋め立てが終わった後の更地に、うっかり「食のテーマパーク」なんて作ったりしないでしょうか。しかし「二次元と三次元の融合」を実現した喪男の理想郷を完成させようとするファウストは止まりません。環境問題への配慮がまったく欠けているところに、デカルトから始まった科学万能主義の欠点を見つけることができます（早くも「地上げ屋問題」について触れられています。さすが文豪ゲーテ）。
で、まあ、散々好き放題やったファウストは当然死んで地獄に落ちるわけですが、最後の最後に、グレートヒェンが天上から現れて、ファウストの魂を救うのです。
最後に「萌えキャラ」が奇蹟を起こすのです。
古くから伝わっていた民間説話のファウストは地獄へ落ちましたが、ゲーテはグレ

①喪男として一生を学問に捧げる

学問

結局、何もわからずじまいだった。
ワシの青春を返してくれ！

②悪魔に魂を売りイケメンに変身。
三次元で初めて恋愛する。

宝石

グレートヒェン

私、悪い男に
あそばれたん
だわ…

これで俺もついに脱童貞！
女の子サイコー！

うっかり中出しして
グレートヒェンは破滅

③オタクに逆戻りしてホムンクルスを
作り、古代の女神さまと脳内結婚

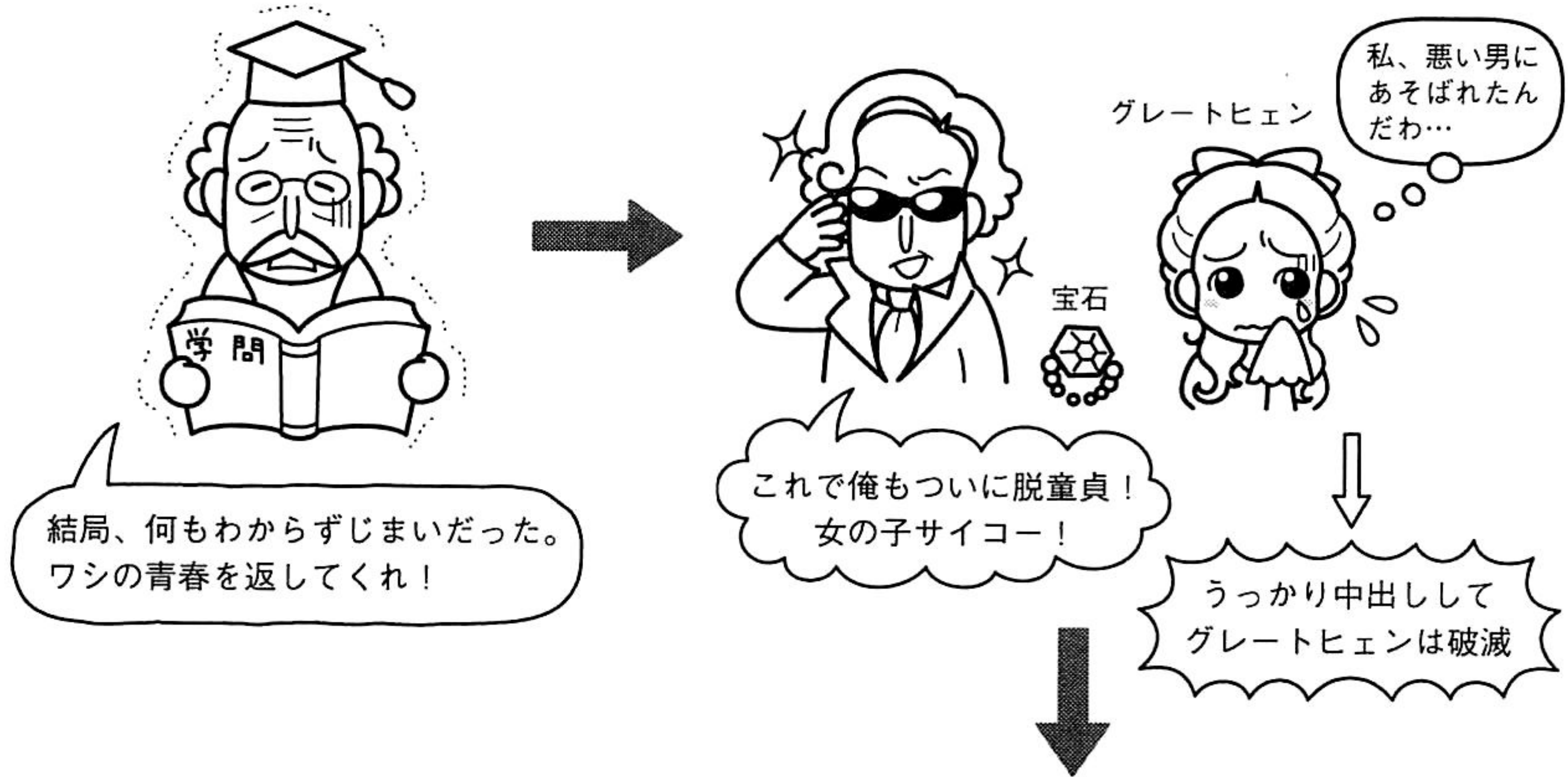
ホムンクルス

やっぱ
二次元だな！

脳内娘

脳内妻

でも目が覚めたら
全部夢だった

ギリシァ世界

④三次元世界を改造して夢の国を現出
させようと努力し、地上げ屋と化す

何か、もうとり
かえしがつかな
くなっておる…

メラ

メラ

地上げ

環境破壊

地獄行きのはずが脳内グレート
ヒェンに救済される

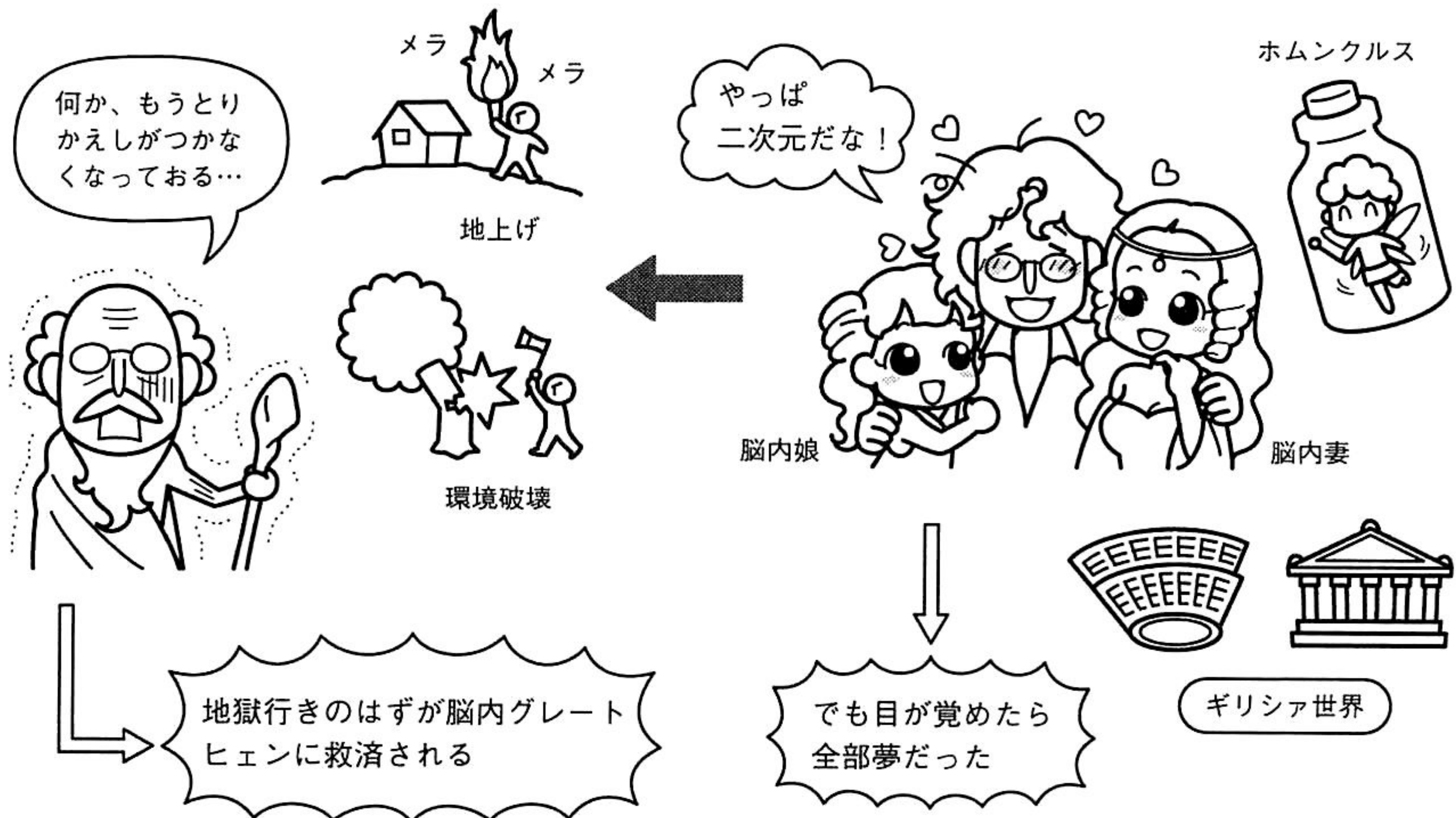



図3―2　ファウストの精神の遍歴

ートヒェンという萌えキャラの愛によってファウストは救済されたと考えたのです。
愛が、奇蹟を起こしたのです（図3-2）。

これはKeyの泣きゲーのシナリオの話ではありません。

ファウストの辿った精神の遍歴は、「二次元」（理想の世界）と「三次元」（現実の世界）との葛藤の歴史です。ファウストはヤリ捨て主義の腐れイケメンです。言うまでもなくDQNは愛ではなく憎しみと苦しみだけを愛すべき女性に与える外道です。ファウストのような理想を持った喪男でも、三次元世界にのみ生きようと欲した場合、結果的にそのような人生しか送れないわけです。次に、反省したファウストは「脱オタファッションガイド」を破り捨てて魔術師つまりオタクに戻り、二次元（古代ギリシア）へ飛翔するのですが、インターネット社会が到来していない旧時代ですから二次元はまだ「うたかた」のようなものです。脳内ヘレナと脳内結婚して脳内子供を生んだけど脳内子供が死んじゃった脳内ヘレナも死んじゃった、と泣いていると、次の瞬間にはプレイしていたゲームが終わっており、ファウストは現実に引き戻されていたわけです。

で、最後にファウストは、三次元DQNの道も、二次元ひきこもりの道も捨てて、「楽園建設」という第三の道を選ぶのです。三次元を二次元化してしまおうと。ただ、この目論見がうまくいったのかどうかはわかりません。ファウストが死んでしまったからです。とりあえず地上げ屋問題と環境破壊問題が懸念されます。

このように『ファウスト』では、最後に「国そのものを理想郷にしてしまおう」という「二次元と三次元の統一」への近代的情熱が描かれました。

近代では、フランス革命[*29]をはじめ、やたらと「革命」が勃発します。「理想の世界

㉙ フランス革命
一八世紀末にフランスで起こった革命イベント。ルソーやヴォルテールたちの啓蒙思想やアメリカの独立宣言が引き金となり、ルイ一六世のブルボン王朝を打倒すべく起こったブルジョア革命。一七八九年のバスティーユ監獄解放からスタート。詳細は『ベルサイユのばら』参照。プロイセンやオーストリアが革命に干渉して革命政府との間で戦争となる。一七九三年にはルイ一六世と王妃マリー・アントワネットがパリの革命広場に引き出されギロチンで首を刎ねられた。また革命政府内でも内ゲバが繰り返され、指導者ロベスピエールは反対派を次々と断頭台に送って殺しまくった。そのロベスピエールが処刑された後もフランスは混乱を続け、ナポレオンが皇帝の座についたり、失脚してブルボン王朝が復活したり、また共和制に戻ったり、ナポレオン三世が皇帝の座に……という有様に。

を現実に」これが近代のトレンドだったわけです。ファウストも「自由の国を造る」という情熱を語りましたが、実際のフランス革命もまた「自由・平等・博愛」という近代主義を実現しようとして起きたものです。教育の重要性が意識されたのも近代です。啓蒙主義[30]というやつで、とにかくどんな人間でも学問を教えれば近代人になるのだ、という考えです。中世というひきこもり時代の反動で、西洋はレイザーラモンHG[31]ぐらいポジティブになっていたわけです。『ファウスト』のやり過ぎ感は、まさに、近代の気分そのものだったと言えるのです。

そして、ゲーテはこの近代的な「やり過ぎ」物語の最後に、恋愛＝萌えキャラによる救済を訴えたのです。

『神曲』は全編が脳内世界（二次元）ですが、『ファウスト』は〈三次元＋二次元〉の二元論とその葛藤を描いています。ファウスト博士は意識的に現実と二次元とを往復するのです。これは、ダンテとゲーテとの間に横たわる数百年の期間のうちに、それだけデカルト的な二元論が西洋に浸透した結果でしょう。ただ、結論は二人とも同じでした。「萌え」です。ダンテもゲーテも失恋（自ら逃げるパターンも含めて）によって自らの喪男力を増幅していった人です。つまり、**萌えとは、「永遠の失恋」なのです。「萌えとは、忍ぶことと見つけたり」なのです。**脳内キャラは、永遠に手に入りません。**永遠に手に入れられないからこそ、不滅の価値がある**わけです。ですからゲーテやダンテの唱えた恋愛至上主義とは「永遠の片思い」としての「萌え」なのであって、現代の快楽主義的な恋愛至上主義（その実体はセックス至上主義です）とは異なるのです。

そして、この「萌え至上主義」を「哲学」にしようとした喪男がいました。キルケ

㉚ 啓蒙主義
近代ヨーロッパ、特にフランスで流行した思想。理性主義。人間には理性があるので、神に頼らずとも法や科学や国家を正しく運営することによって生きていくことが可能だという人間主義的な考え。代表的な思想家は、ルソー、モンテスキュー、ヴォルテールなど。しかし喪男の国ドイツでは楽観的な啓蒙主義・理性主義よりも世界の闇を見つめる神秘主義・観念主義・不可知論に走る傾向が強く、カントは『純粋理性批判』で理性の限界を示して理性主義を否定した。なおルソーは教育論で有名なのに現実では五人の子供を次々と捨てたDQNだった。で、後年ルソーは自ら『告白』という本を書いて「すべては貧困のせいなんです」と公開懺悔した。啓蒙主義の光の陰には、常に人間の闇があったのだ。

㉛ レイザーラモンHG
吉本興業の芸人。あくまでもゲイは芸風。

㉜ キルケゴール
元祖「さよなら絶望先生」。一八一三年～五五年。セーレン・キルケゴール。デンマークの哲学者で、実存主義哲学の先駆者的存在。父ミカエルがすでに「俺は神罰を受ける罪深い男だあ」と絶望していた人で、「自分の子供は全員三四歳までに死ぬ」と信じていた。ミカエルはキルケゴールに「部屋に閉じこもって妄想して遊ぶ」という喪男教育を施した。キルケゴールの絶望も父から受け継いだものだと思われる。大人になったキルケゴールはうっかり美少女レギーネに求婚してOKされてしまうが、まさか

ゴール[32]です。

しかしその前に、ゲーテとキルケゴールを繋ぐ喪男哲学の巨人、カントとヘーゲルの話をしなければなりません。

2　カントからヘーゲルの「セカイ系哲学」へ

三次元世界もまた精神の生み出したものである

デカルト以後、哲学は「セカイ系哲学」と「キモイ系哲学」とに分裂します。

セカイ系哲学とは、人間個人の内面の問題はさておいて、世界つまり三次元の構造と運動について考える哲学です。

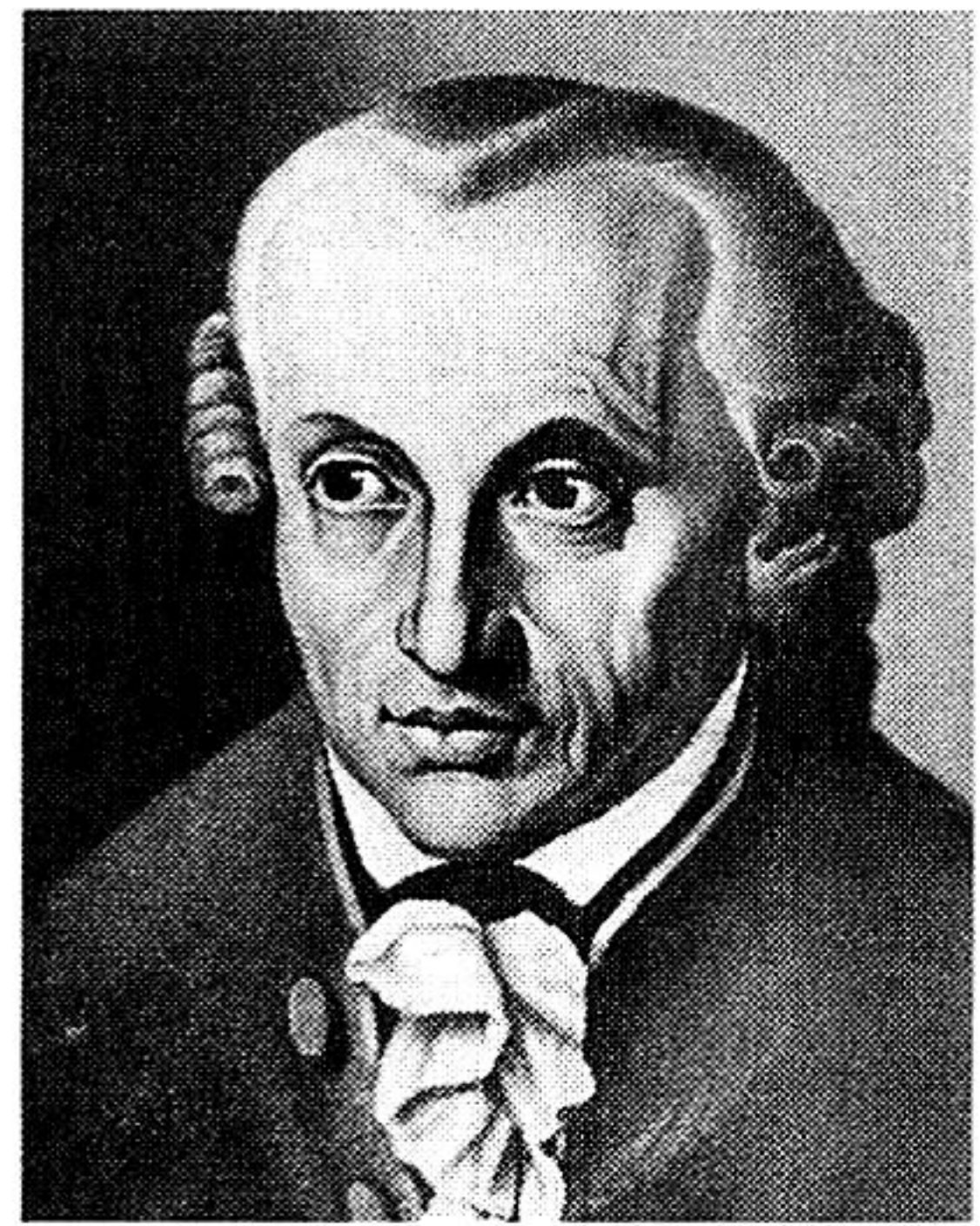
一方のキモイ系哲学とは、世界つまり三次元のことなんか放置して、とにかくモテない俺の苦悩をなんとかしろと叫ぶ哲学です。

デカルトは世界を「三次元」（物質）と「二次元」（精神）に分けました。

故に、彼の後に続いた喪男哲学者は、三次元と二次元のいずれを喪男救済の「場」とするかによって、二つの潮流に分裂せざるを得なかったのです。

ヘーゲル[33]が活動した時代は、ちょうどフランス革命勃発、ナポレオン[34]の上昇と下降、などなど、前例を見ない激しい革命の時代でした。ちょうどゲーテが活動した時期と一致しています。ゲーテがシュトルム・ウント・ドラングというアナーキーなム

自分のようなキモブサ男の求愛がOKされるだなんて予想もしていなかったので「私は、翌日にはもう後悔した」と言い出し、わざとレギーネに嫌われるようなことばかり繰り返したあげく婚約を破棄して逃げた。以後は当時支持されていたヘーゲル哲学と教会を攻撃し続け、「全デンマークの牧師の敵」と罵られた。また彼は「デンマークのオランウータン」アンデルセンを最初に評価した人で、処女作『今なお生ける者の手記』は世界初のアンデルセン評論だった。代表作『あれか、これか』『不安の概念』『死に至る病』。

㉝　ヘーゲル
一七七〇年～一八三一年。ドイツの哲学者。ドイツ観念論哲学を完成させた。キルケゴールもマルクスもヘーゲル哲学から出発した。カントは形而上学を否定し、超越的存在を「物自体の世界」という人間世界の外部へ放り出したが、カント以後のドイツ観念論哲学者（フィヒテ、シェリング、ヘーゲル）はカントが分断した「物自体」の世界と人間の脳内世界を（脳内世界側から）再び結びつけようとした。代表作『精神現象学』『大論理学』『エンチクロペディー』『法哲学』。

カント

ーブメントの旗手として『若きウェルテルの悩み』を描き、晩年に至ってなお『ファウスト』で「ホムンクルスの創造や理想国家の実現」を描いていたイケイケドンドンの時代に、ヘーゲルは現れました。

　ところですでにヘーゲルの先駆者として、カント[*35]というちょっとエロい名前の哲学者が活動していました。カントは哲学における「コペルニクス的転回」を達成した人です（自分で言ってるだけという話もありますが）。

　カントは、近代的な二元論を確立しました。カントが「コペ転」をやったことによって、「セカイ系哲学」や「キモイ系哲学」が生まれることになったんです。それはどういうことかというと、カントは「三次元」（物質）の世界もまた、**「二次元」と同様に、実は「観念」つまり「精神」の生み出したかりそめの世界にすぎないのだと言**い出した人なのです。

　デカルトは「精神」と「物質」とに世界を二分したのですが、デカルトの二元論では精神と物質の相関関係は語られておらず、二つの世界は分裂したままでした。そこでカントは、「物質」の世界、つまり三次元世界を「物自体」の世界と名づけ、これに対して「精神」の見ている「現象の世界」というもう一つの「三次元世界」を発見しました（図3－3）。

　このようにカントの二元論は、実質的には三つの世界から構成されています。厳密には三元論と言ってもいいでしょう。カントは、今まで人間が「現実」と呼んできた

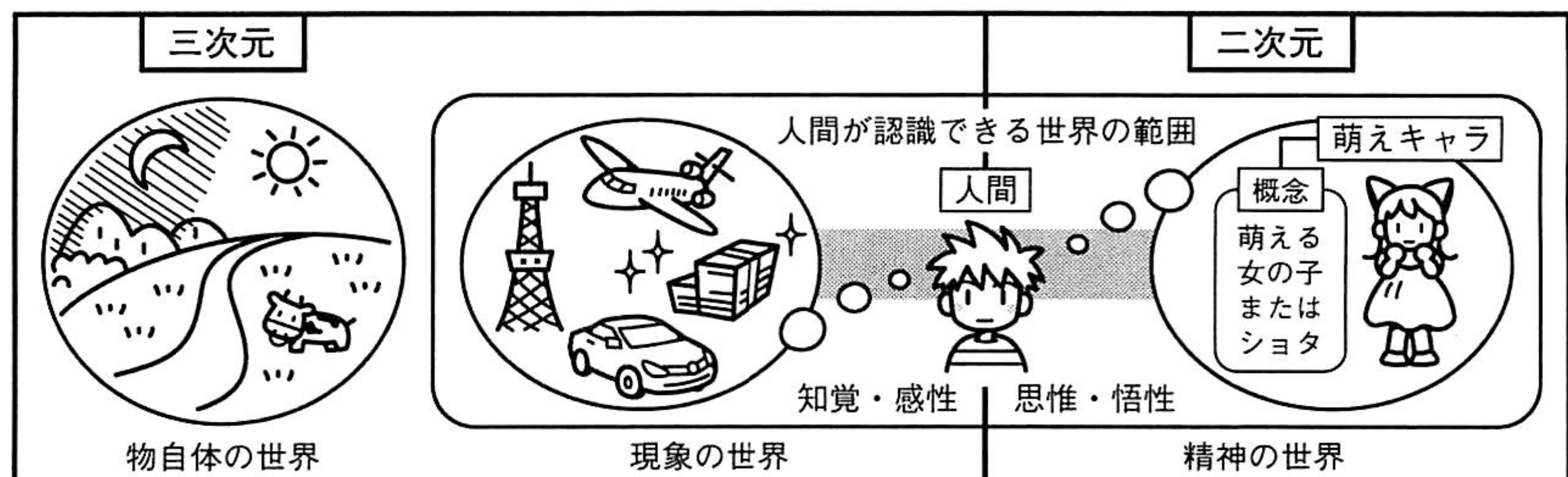
三次元　二次元　人間が認識できる世界の範囲　人間　萌えキャラ　概念　萌える女の子またはショタ　知覚・感性　思惟・悟性　物自体の世界　現象の世界　精神の世界

デカルトの二元論では人間は精神と物質にひきさかれてしまう。実際、そのために現代文明は唯物一元論による人間疎外を産み、また自然破壊など世界そのものへの実害も発生している。カントは「現実」もまた、人間の精神が産み出しているバーチャル・リアリティであるとする新しい二元論を唱え、真の現実（この中には「神」も入っている）を人間世界の外部へ置いた。

図３―３　カントの二元論

三次元世界は、実は人間の精神というフィルターを一度通して再構築された仮想世界なのだ、と言い出したのです。つまり「現実」とは、「物自体の世界」（本当の外部世界、真の現実）の上に、人間の「精神」がかぶせられた作り物の世界なのだ、と言ったのです。世界は二枚のレイヤーで構成されているのではなく、実は三枚のレイヤーで構成されているのだと。

いや、これは本当にコペ転ですね。

まあ「諸行無常」でお馴染みの東洋哲学では大昔からの常識なんですが、ヨーロッパ哲学にとって、これは大きな発見だったのです。

例えば、目の前に、植物、なんでもいいんですが、例えばウツボカズラが生えてるとします。ウツボカズラ自体は、幻覚や幻想ではないんです。それは一応そこに実体として存在しています。しかし、これを「ウツボカズラ」という種類の植物だと認識している主体は、人間の精神です。さらに、この「ウツボカズラ」という言葉も「種類」という言葉も「植物」という言葉も、すべては人間が考えた概念です。このように人間は、世界をありのままに捉えているのではなく、概念（言葉）というフィルターを通してしか世界を見ていないわけです。言語だけではありません。例えば「ウツボカズラ、キモッ！」というような好悪の感情をウツボカズラに対して持ちますね。こういう感情とか先入観もまた、すべては人間の精神の産物です。

もうちょっと日常的な例を出します。目の前に綾波（あやなみ）レイ[36]と惣流・アスカ・ラングレー[37]がいるとします。綾波を見て、「綾波だ」と思いますね。しかし「綾波」というのはただの名前で、「物自体」の世界にはないものです。「名前」というのは人間が作った観念です。「綾波はかわいい」と感じるのも人間の精神です。「アスカ、うざっ」

㉞ ナポレオン
一七六九年～一八二一年。ナポレオン・ボナパルト。コルシカ島生まれ。最初は一介の軍人だったが、フランス革命戦争で活躍し、救国の英雄となる。一七九九年に統領となって国政を握り、一八〇四年には皇帝の座に就く。忘れ去られていたジャンヌ・ダルクをフランスを象徴する萌えキャラとして担ぎ上げた。しかし、フランスのナショナリズムを煽りすぎたためにナポレオンはその後も戦い続けねばならなくなり、一時はイタリア・ドイツ・ポーランド・オーストリア・プロイセンを版図に収めるが、一八一二年に広大なロシアに攻め込んで冬将軍に撃退されたことから運命が暗転する。敗戦して失脚し、一度は再び王位に復権するも「ワーテルローの戦い」に敗北して絶海の孤島セントヘレナ島へ流され、死亡。毒殺と言われる。

㉟ カント
一七二四年～一八〇四年。イマヌエル・カント。ドイツの哲学者。ドイツ観念論の先駆者。自然科学とスウェーデンボリの神秘主義に傾倒するというドイツ喪男哲学者の王道を歩んだ。生涯童貞と言われており、「結婚しなさいよ」と周囲に勧められても決して首を縦に振らなかったという。代表作『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』。

㊱ 綾波レイ
『新世紀エヴァンゲリオン』のヒロイン。青いシャギーぎみのショートカット、青白くて無表情な顔、無口、無感情、人造人間っぽい雰囲気と出自の謎、という個性的なキャラクター設定

と思ったとします。これも人間の精神の産物です。で、まあ、綾波と結婚したとしましょう。結婚、これも人間の精神が作り出した制度、ルールですね。綾波を食わせるために仕事をします。仕事、これも人間が作ったルールです。つまり多くの人間は「現実」イコール「社会」だと考えているわけですが、実は社会というのは多くのルールに沿って作られた人間の精神の産物、すなわち「現象の世界」だったわけです。

それどころか、「時間」とか「空間」とかいうのも、全部人間の精神が産んだものなのです。例えば、アニメというのは、実は静止画像が何千枚、何万枚も重なっているだけのものです。一枚一枚のセル画は動いていません。止まっています。これを順番に並べてパラパラマンガの要領で続けて見てみると、なぜか動いているように見えますね。なぜでしょう。これは人間が「時間」と「空間」というフィルターを通してセル画の絵を見ているからです。**人間の意識は、目の前の世界が「過去」「現在」「未来」と順番に、ひとつづきに繋がっているように見ている**のです。これは世界がそうなっているのではなくて、人間の感覚がそういうふうに世界を見るようにできているのです。

アニメはこの人間の知覚の特徴、「時間」と「空間」の概念でモノを見ているという特徴の盲点をついて、知覚を騙しているわけです。それぞれのセル画は、ほんの少しずつ形を変えています。一挙に形を変えてしまうと、「同じモノ」だと認識できないので、違うセル画だということがバレてしまいます。しかし少しずつ少しずつ形を変形させてやれば、人間は「同じモノ」が時間軸に沿って空間内を動いていると勘違いしてしまいます。ですから、大量のセル画を「一つのアニメ」として認識できるわけです。

は後の「素直クール」「クーデレ」の源流となった。『涼宮ハルヒの憂鬱』で言えば長門的ポジション。

㊲　惣流・アスカ・ラングレー
『新世紀エヴァンゲリオン』のサブヒロイン。天上天下唯我独尊な性格、金髪（アニメではオレンジ髪）ツーサイドアップ、白人とのクォーター、という個性的なキャラクター設定は後の「ツンデレ」の源流となった。『涼宮ハルヒの憂鬱』で言えばハルヒ的ポジション。

カントの理性主義

カントは、人間が知ることができる世界はこの「現象の世界」に限られていて、「物自体」の世界のことは知れない、わからんのだ、と考えました。だから神について云々してもどうせわかりっこない、と言い出しました（このように、カントは実質的には三元論なのですが、哲学で扱う領域は二元論と同じで、「見えない世界」については放置します。なので二元論と言ったほうが通りが良いわけです）。

もちろん、言いっぱなしではアナーキストですから、神に代わる人類共通のルールを考えなければなりません。ここでカントが考えたのが「道徳律」だったのです。

デカルト以後、人間の理性が神に取って代わったわけですが、カントに至って理性主義は最高潮に達したのです。もっともカントは、ただ理性を盲目的に信仰するのではなく、理性の限界というものを認識した上で道徳を打ち立てようとしました。

キリスト教世界では、神が人間の行動原理を規定し、社会のルールの基盤を作っていました。ところが科学の勃興によって「どうやら神様ってのはいないらしい。いたとしても、わしら人間には見えやせんわ」とみんながうすうす気づき始めたのです。そこでカントは神の世界を「物自体」の世界へと移しかえ、それまでは一つの世界だと考えられてきた「現実」を、人間の精神が作り上げている「現象の世界」と人間が知ることのできない「物自体の世界」にきちんと分別したのです。

このような「世界もまた人間が生み出した観念なのだ」というカントが始めた哲学を「ドイツ観念論」と呼びますが、これはつまり「ドイツ妄想論」とか「ドイツ二次元論」という意味です。**なぜかドイツの哲学者は「世界はすべて妄想だ」と言いたが**

つたんですね。フランスやイギリスと比べると、ドイツは伝統的に喪男だらけだったのです。なので僕はドイツを、敬意を表して「喪の国」と呼んでいます。

　カントはこうして「人間の世界のルールは人間が作るのだ」と宣言したのですが、それでも神がいなければ、すべての人間が弱肉強食のエゴの世界に陥って「自己責任」「勝ち組負け組」といった言葉が飛び交う荒んだ世界が訪れてしまいます。そこでカントは自分さえ良ければいいというDQNのエゴイズムを道徳律によって制御すべきだと考えたのです。**この道徳律とは、神や他人から押し付けられるものではなく、人間が自ら進んで背負うべきもの、「自律」の精神**だというのです。

　こんな硬いことばかり考えていたカントはなんだか面白みのかけらもない人みたいですが、実際、毎日恐ろしく規則正しい生活をしていたそうです。いつも決まった時間に同じ場所を散歩するので、人々はカントが歩いているのを見て時計を合わせたとか。もちろん言うまでもなくカントも生涯独身の喪男です。道徳だの自律だのを説いていたカントがモテるわけがありません。女はたいてい、快楽と幸福を追求するのが人間の責務だと信じています。いやまあ女だけじゃないですけどね。男にもそういうのはいっぱいいます。

　要は、カントは、人間ってのはおっかねぇ信用できねぇシロモノだが、神も助けてくれないし、ここは全人類に「自律」や「道徳」という叡智を授けるしかない、と『逆襲のシャア』[*38]のシャアみたいなことを言い出したんです。「神は死んだ」と言い出したのはニーチェですが、実はカントこそが「神なんていてもいなくても関係ねぇ」と言い出した最初（？）の喪男哲学者なんですね。アナーキズムの権化みたいなニーチェと厳格なカントには一見何の共通点もなさそうですが、二人とも**「生涯独身の喪**

㊳「逆襲のシャア」
一九八八年。劇場版アニメ映画『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』。『機動戦士ガンダム』の第一シリーズの主人公、アムロ・レイとシャア・アズナブルの最期の闘いを描く完結編。監督は富野由悠季。三四歳という喪男が切れるお年頃にさしかかったシャアが、いきなり地球人類絶滅を宣言。狂気の独裁者と化して地球に攻めてくる。当然アムロに邪魔されるのだが、シャアがいまわの際に遺した最期の台詞「ララァは私の母になってくれたかもしれん女性だ！」によって、『逆襲のシャア』は永遠不滅の伝説となった。シャアは外見はイケメンだが、中身はマザコンの喪男だったのだ！　このシャアのマザコン発言に、シャア（の、しゃっつら）に萌えていた女性ファンたちは激怒し、「シャアって実は喪男だよな」とうすうす感じていた喪男ファンたちは「シャア大佐、一生ついていきます」と驚喜したのである。ちなみに「ガンダム」シリーズではないが、喪男たちがシャアのクローン人間を作ってシャアを再生しようとする続編小説もある。

男だった」という一番大切な部分で共通しているわけです。

あと、カントは哲学書を読むふりをしてエロ小説を読むのが趣味だったという都市伝説が残っています。まあ道徳とか自律とか言っても、独身ですからエロ小説ぐらい読みたくなるわけです。それぐらい赦してあげてほしいです。ちなみにエロ小説というのも近代になって生まれたもので、恋愛小説の裏面的な存在として発展しました。エロ小説の代表作『ファニー・ヒル』[*39]は一七四九年に出版されています。カントは一七二四年生まれなので、きっと読んでいたに違いありません。ありませんとも。道徳を説いた高潔な哲学者がエロ小説を読んではならないという決まりでもあるんでしょうか！　**エロ小説を読むことで性欲を解消できていたからこそ、DQNな三次元生活を送らずに生涯を哲学に捧げられたのではないでしょうか！**

過激化する喪男哲学者たち

カントに続いて現れたヘーゲルは、ドイツ観念論哲学を完成させた喪男哲学者でした。ドイツでは、なぜか、カント以後も「人間の精神の世界」、つまり二次元を重視する哲学者ばかりが登場しました。とにかく喪男だらけだったんですね。二次元を重視する奴はみんな喪男ですよ。

カントは「我々が現実と思っている世界は、実は我々の精神が作ったものだ。つまり二次元の延長が三次元なのだ」というコペルニクス的転回を達成しました。映画『マトリックス』みたいなものです。現実だと思ってたら、実はヘンな機械の中に入って、みんなで同じ夢を見ていたのだと。こんなこと考え付く人間は喪男に決まっています。モテモテで現実に満足している人間は、決して「この世界は実は嘘の世界な

㊴「ファニー・ヒル」
一七四九年。ジョン・クレランド作。イギリスのアンダーグラウンドで出版された、世界初の近代官能小説。恋愛とエロは表裏一体。故に近代恋愛小説と近代官能小説は同時期に発明されたことがわかる。そもそも一七四〇年に発表されてベストセラーとなったイギリス（ヨーロッパ）初の近代小説『パミラ』は、貞淑なメイド少女パミラがご主人様に襲われ続け、ひたすら処女喪失の危機を回避し続ける。そのうちにご主人様が真の愛に目覚めてめでたく結婚するという「寸止め恋愛萌えエロ小説」だった。現代で言えば『ラブひな』みたいな感じ。そう、近代小説は「センチメンタリズム」（二一世紀の言葉でいえば「萌え」）からスタートしたのだ。ここから純愛に突っ走ったのがルソーあたりの近代恋愛小説で、エロに突っ走ったのが『ファニー・ヒル』だったのである。

んじゃないからです。「俺がモテモテのこの世界は絶対に現実だ」と思いたがるわけです。カントは、そういう「モテの哲学」「モテの世界観」に火薬を仕込んで爆破したわけです。

カントに影響されたドイツの喪男哲学者たちは、次々と過激化しました。**だいたいフォロワーのほうが教祖より過激になるものです。**過激になれば、それだけ先人との差異が作れますし、ウケもいいのです。例えばフィヒテ[*40]は「現実は、実は『純粋自我』という主観、つまり『俺』の産物なのだ」と言い出しました。二次元が三次元を作っているというんです。いくらなんでも行き過ぎです。まるで『エヴァンゲリオン』の最終回だ。

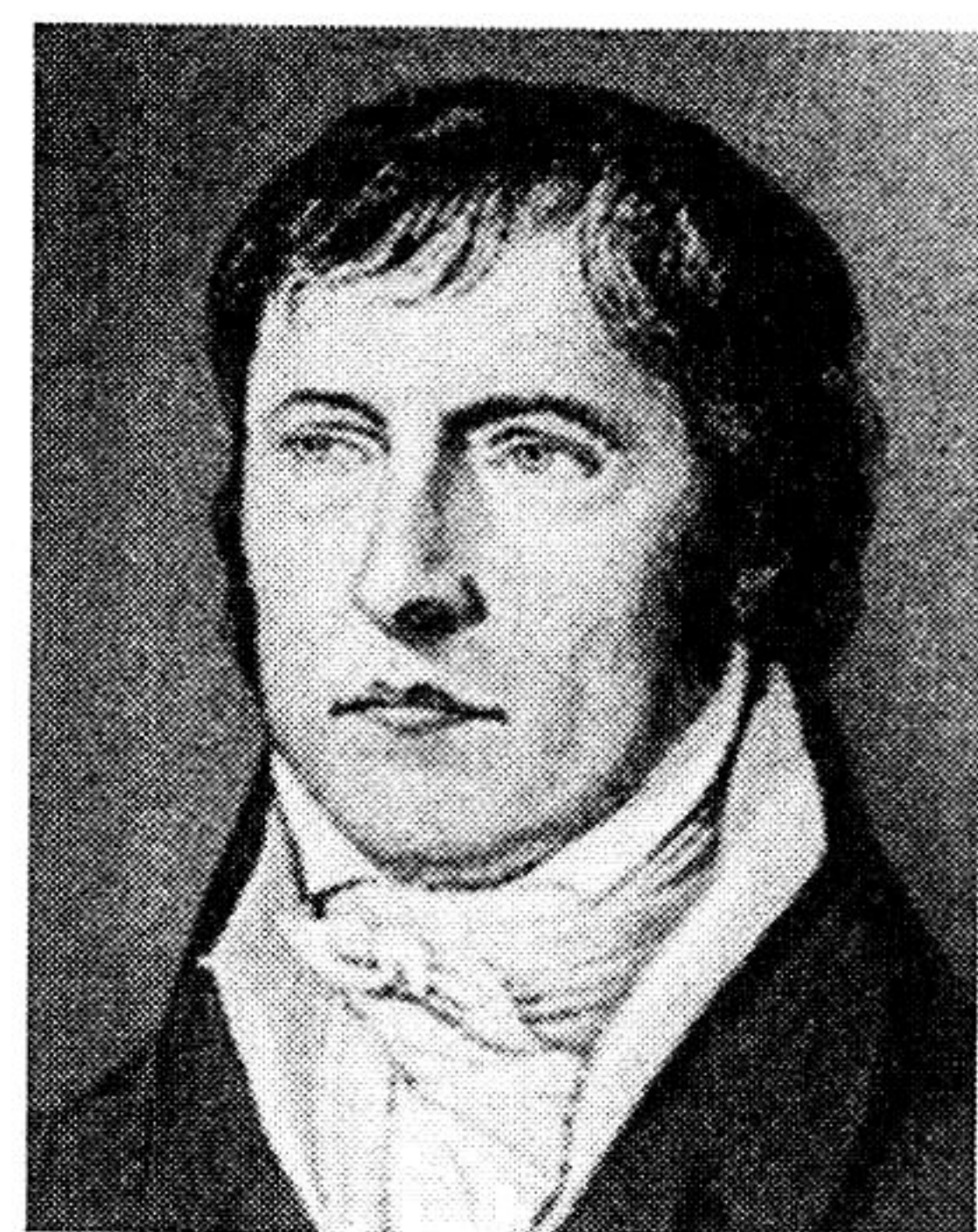
シェリング[*41]に至っては、「俺（二次元）も世界（三次元）も、実は同じものなのです。三次元は二次元によって生気を与えられているのです」という「実は全部二次元説」を唱えました。三次元世界とは実はアニメみたいなもので、アニメーター、つまり俺が三次元に命を与えているんだ、というわけです。これはもはや「純粋二次元主義」と言っていいでしょう。

さすがにここまで過激化したフォロワーには、ついていけません。いくらこの世が憎いからって、もう少し冷静さが必要です。「極端化」「過激化」というのは哲学のみならず喪男の歴史の上でよく考えなければならない反省点です。あまりにもモテないと、過激に走りたくなるものです。しかしそこはブッダやイエスの精神をよく思い起こして、踏みとどまるべきです。**何事も、中庸が肝心です。**

㊵　フィヒテ
一七六二年〜一八一四年。ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ。ドイツの哲学者。ドイツ観念論を代表する一人。カントとヘーゲルの間に位置する。カント哲学から出発したが、「物自体」の世界については語らず、三次元は二次元（自我）の産物であると唱えた。代表作『ドイツ国民に告ぐ』。

㊶　シェリング
一七七五年〜一八五四年。フリードリヒ・シェリング。ドイツ観念論を代表する哲学者。フィヒテはカントがもたらした世界の分裂を「自我」（二次元）の観点から再統一しようとしたのだが、シェリングは逆に「自然」（三次元）の側から再統一しようとした。代表作『人間的自由の本質』。

カントの観念論を全世界に拡張したヘーゲル

　というわけで、シェリングの喪男思想をもう少し穏健にしたのが、ヘーゲルだったわけです。肖像画を見てください。いかにもモテなさそうですね。
　カントの観念論はあくまでも個人レベルの話ですが、ヘーゲルはこれを全世界に拡張しました。**「『絶対精神』という巨大な二次元の意志が、この三次元世界を作っているのだ」**と言い出したのです。決して三次元を「二次元の生み出す幻」として切り捨てたわけではないのですが、よく考えるともっと過激かもしれません。ヘーゲルは、例えばフランス革命は、人間の自由という概念が現実世界において実体化したものだと考えたのです。ヘーゲル哲学ではまず二次元があり、その二次元の概念が三次元に溢れてきて新しい「現実」を作り上げるというのです。
　ヘーゲルの特徴は、ここで「弁証法」というシステムを考案したことです。「正」「反」「合」ですね。世界には「正」＝イケメンと、「反」＝喪男という対立した立場が必ずあるのだ、という事実を、ヘーゲルは自分の喪男人生を振り返って発見しました。**世界には常にモテと喪という二つの勢力による葛藤がある**、という真理をヘーゲルは見抜いたのです。
　そして、この「正」と「反」との対立を解決するべく、新たな現実＝「合」が生み出されてくるのです。正と反から合が生まれる過程を「止揚（しよう）」（アウフヘーベン）と呼びます。『北斗の拳』のオープニングでも「天空に二つの極星あり。北斗と南斗。男と女。陰と陽」と語られますが、まあつま

ヘーゲル

り、世界が進化発展していくのは「イケメン」と「喪男」という二つの属性による対立があるからだ、とヘーゲルは考えたのです（図3－4）。

例えば、かつてローマ帝国というイケメン軍団の支配に対抗してイエスは一二人の喪男たちを率い、新たな喪男哲学を打ち立てました。で、この両者がアウフヘーベンされた結果として、キリスト教世界が誕生したのです。

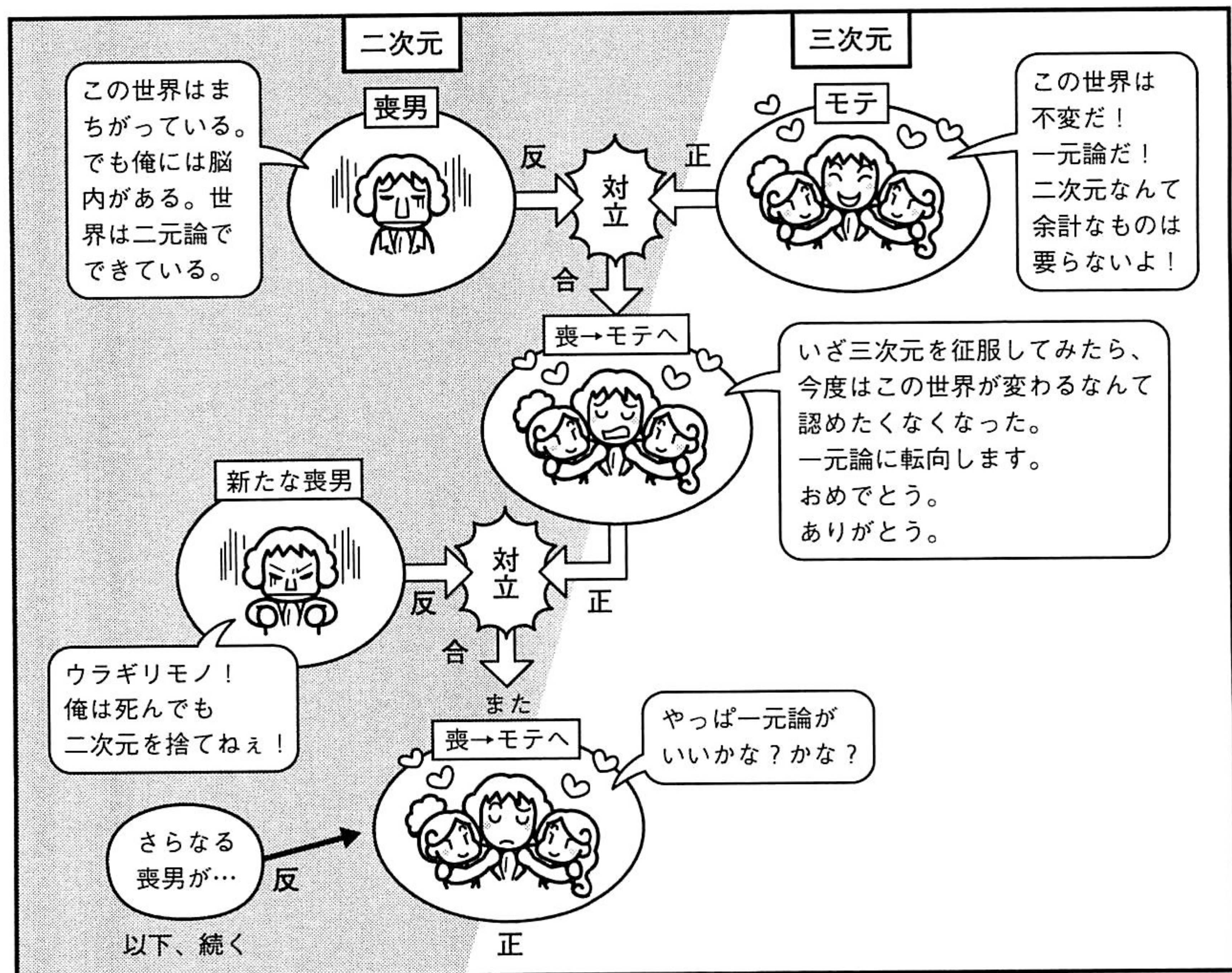
しかし、いざキリスト教世界が確立すると、またしても新たな対立構造が生まれてしまいます。近世から近代にかけては、まず「カトリック」vs.「プロテスタント」というキリスト教の内ゲバが起こり、さらに「教会」vs.「科学」というもっと深刻な対立が発生しました。**もうこの時点では、教会はかつての喪男哲学の精神を忘れて自分自身が権威、つまり「モテ」になっています。**「地球は太陽の周りを回っている」という地動説を唱えたガリレオは異端の嫌疑をかけられて宗教裁判にかけられ、危うく焼き殺されそうになりました。教会の教えでは、太陽が地球の周りを回っていることになっていたからです。教会の教えと異なる世界観など、認めてはなりませ

ヘーゲルは人間の歴史をこのような二つの勢力の対立と発展の歴史としてとらえた。同じことのくりかえしにも見えるが、人間は少しずつ二次元へと近寄っている。そして最終的には「精神の自由」が実現するのである。

図3—4　ヘーゲルの弁証法

ん。認めれば、長い歴史をかけてせっかく作り上げたキリスト教世界という一元論ワールドが崩壊してしまいます。科学は、異端・魔術に連なる反教会思想として厳重にマークされたのです。聖書の世界観を壊すような「新しい発見」など、してはならなかったからです。後の、スターリン時代のソ連に近いかもしれません。

もちろん教会という権威にアンチを唱えた錬金術師や科学者や芸術家たちは、みんなホムンクルスだの機械人形だの脳内彼女だのに萌えていた喪男たちでした。黙って聖書を読んでいれば平和に暮らせるのに、わざわざ教会という体制に逆らって危ない橋を渡ろうとするわけですから、喪男にも程があります。ルネサンスを代表する芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチ[*42]も生涯独身の喪男でした。彼は一生涯『モナリザ』を手放さなかったのですが、一説によるとモナリザは実はダ・ヴィンチ自身の女装自画像だったそうです！　萌えの最先端「俺萌え」（僕が考えた言葉ですが）を、彼ははるか昔に実践していたのです。さすが天才ダ・ヴィンチだ。

組織化したことでかつての喪男哲学の本質から外れ、「世界はこのままでいい」という立場に移行して「モテ」になった教会と、「世界はお前らが言っているようなもんじゃねー」「人形や俺自身に自由に萌えさせろ」と言い出した喪男たち。この両者が対立していく過程で近代が誕生したわけです。

喪男の時代に現れた「絶対精神」

ヘーゲルがこのようなダイナミックな哲学を思いついたのは、やっぱり、同時代に怒濤のように「喪男」たちが活躍していたからでしょう。ゲーテもそうですし、生涯独身を貫いた童貞音楽王ベートーベン[*43]もいました。ベートーベンについて書き出すと

㊷　レオナルド・ダ・ヴィンチ
一四五二年〜一五一九年。イタリアの画家。ミケランジェロと並びルネサンスを代表する芸術家だが、仕事を途中で投げ出す癖があり、完成させた作品は非常に少ない。若い頃には同性愛疑惑で捕まったこともある。たぐいまれなる妄想力を持ち、飛行機をはじめとする未来を先取りした発明アイデアを大量にノートに残した。ダ・ヴィンチに文明がやっと追いついた現代では「天才」と称されているが当時の人々から見れば完全な電波だったに違いない。「モナ・リザはダ・ヴィンチの自画像」という説があり、だとしたらダ・ヴィンチは「俺萌え」の先駆者だったとも言える。

㊸　ベートーベン
一七七〇年〜一八二七年。ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベン。ドイツの音楽家。キモメン。生涯独身。貧乏育ち、難聴、そしてキモメン故に恋が必ず失恋に終わるという絶望的なハンデを乗り越えて大作曲家となった。「失恋するたびに名曲を作った」と讃えられている。またそれまでの音楽家は貴族や宮廷に仕えていたが、ベートーベンは誰にも仕えずに自立した芸術家として大衆音楽を作り続けた。音楽的には古典主義に属する。代表作『交響曲第三番　英雄』『交響曲第五番　運命』『交響曲第九番』『月光』。

ベートーベン

終わらないので泣く泣く割愛しますが、まあ、どれでもいいのでベートーベンの伝記を読んでみてください。女の人にキモメールばかり出してますよ。ゲーテはイケメンなのに好き好んで喪男であり続けようと努力した人ですが、ベートーベンは身も心もナチュラルに喪男です。一介の喪男から皇帝になろうとして没落していったナポレオンも同時代人です。

文学、音楽、政治、哲学と、あらゆるジャンルでそのジャンルの第一人者ともいうべき特濃の喪男が同時多発したのです。よくもまあ、こんなにいっせいに出てきたものです。

こういう凄まじい喪男英雄の同時多発という状況を前提として、ヘーゲルは「世界とは絶対精神という巨大な精神が自分を実現していく過程なのだ」と考えました。この絶対精神というヘーゲルのアイデアは、まるでアストロ球団[*44]に九人の超人選手が集まってくるかの如く「超人喪男」とでもいうべき英雄豪傑がどんどん出てくる光景をヘーゲルが目の当たりにしたことから生まれたのではないでしょうか。彼らの特徴は「不必要なまでの濃さ」と「やりすぎ感」にあります。「一試合完全燃焼主義」とでもいいましょうか。喪の魂が溢れ出て抑えきれないのです。ヘーゲルの「すべての森羅万象を言葉で説明しつくしてやる」という異常な情熱もまた、アストロ球団的です。

この弁証法、図にしてみると単純なのですが、単純だからこそ普遍性があり奥が深い。二次元と三次元の分裂、つまり二元論を、ヘーゲルは弁証法によって統一したわ

㊹「アストロ球団」
『週刊少年ジャンプ』で一九七〇年代に連載された野球マンガ。原作は遠崎史朗、作画は中島徳博。説明しはじめると終わらなくなるのだが、とにかく凄いマンガだ。沢村栄治の魂から生まれた九人の野球超人が「一試合完全燃焼」をモットーとする新設球団「アストロ球団」に集まり、打倒巨人・打倒大リーグを目指すという物語だが、超人同士で血みどろの死闘（本当に試合中に死人が続出する！）を繰り返しているうちに連載が終わってしまった。

けです。言うまでもなく、ヘーゲルも喪男なので完全に二次元が優先です。「絶対精神」という「二次元の親玉」が三次元を作っているわけです。普通、精神というのは個人のものでバラバラに孤立していると考えられるわけですが、ヘーゲルは人間の精神は「絶対精神」という巨大なネットワークの体系の一部だと捉えたのです。ヘーゲルに言わせれば、例えばナポレオンも絶対精神の体現者です。

僕は高校に行かずにひきこもっていた頃、ヘーゲルの弁証法を超える新たな哲学体系を打ち立てようとして「ベーション法」というのを考えたことがあります。ベーション法では、「正・反・合」ではなくて「性・犯・GO」です。まず「性」=性欲があり、しかしヤリたいけどモテないからヤレない、無理やりやったら犯罪だし、という葛藤=「犯」が喪男の性欲の前に立ちはだかります。そこで、しょうがないんで自分でGO！　というわけです。

「何が、『というわけ』なんだ」と言われそうですが、弁証法というのは実はそういうものなのです。人間には、「こういうことを実現したい」という意志があります。しかし、現実ルールの下ではそうそう実現できない。そこで、頭を使ったり体を使ったりして、なんとかして現実を変えようとするのです。つまりベーション法といっても、実は弁証法をちっちゃいスケールで語っただけだったのです。

残念ながら僕はヘーゲルを超えられなかったのです。

ヘーゲルは、僕みたいに「セックスしたいな」という個人的な次元だけでは哲学を考えなかったのです。偉い人だ。彼はその先を考えました。〈個人―家族―市民社会―国家〉という段階で人間がネットワーク化することによって、個人の自由と社会全体とがうまく統合されるはずだ、と考えたのです。

㊺　界王神
鳥山明のマンガ『ドラゴンボール』に登場する神様。元々『ドラゴンボール』ではかなり初期の段階から「神様」という名前のキャラが登場していたのだが、話のスケールがどんどん巨大になっていくにつれて、神様よりも上位に位置するキャラが必要になってきた。そこで最初に登場した神様は「地球の神様」でその正体は「ナメック星人」つまり宇宙人ということになり、神様より偉い本当の神様（？）として「界王」が登場した。この界王も何人かいて、宇宙を分割して統治している。ところがマンガ連載と同時進行していたアニメ版で界王よりもさらに偉い「全宇宙を支配する神」が必要になったため、「大界王」というキャラを出さなければならなくなった。故に鳥山明が後でマンガ版のほうで「界王より偉いキャラ」を出そうとした時には「大界王」をすっ飛ばして「界王神」を出さなければならなくなり……。しかし安心してはいけない。実は界王神の上に、まださらに「大界王神」が！　という具合に『ドラゴンボール』は「強さのインフレ」だけでなく「偉さのインフレ」「神様のインフレ」も発生させていた。

正・反・合による二元論の統合、そして「絶対精神」という「界王神[45]」なみの反則ルール。このヘーゲル理論によって、喪男とモテとの長年にわたる対立には終止符が打たれた、はずでした。

ところが、ヘーゲルが「絶対精神」だと思っていたナポレオンは、ご存知の通り、失脚しました。次にヘーゲルが期待をかけたプロイセン[46]国家も、自由をもたらすどころか逆に喪男の弾圧に走りました。

結局、ヘーゲルの言っていたことも、すべては「言葉の体系」にすぎなかったのです。世界と喪男は、再び分裂しました。しかし、あまりにもヘーゲルの体系が完璧だったので、以後の哲学者の多くはヘーゲルが築き上げた「言葉の体系」というドグマを破壊する行為に専念しなければならなくなったのです。

ちなみにヘーゲルは哲学者だったので当然若い頃は貧乏でした。四〇歳を過ぎて、やっと結婚できました。『最強伝説黒沢[47]』の黒沢さんを想像してください。ヘーゲルはああいう感じで四〇歳ぐらいまで細々と食いつないで生きてきたそうです。四〇を過ぎて、哲学者として成功して二〇歳年下のロリ奥さんとゴールインできました。ロリコンです、ええ。ロリコンですとも！　ヘーゲルの代表作『精神現象学』は、言うまでもありませんが独身喪男時代三七歳のときに書かれたものです。

㊻　プロイセン
中世から近代のドイツは複数の国に分裂していたが、その中で一八世紀から一九世紀にかけて最も強勢を誇っていたのがプロイセンだった。プロイセンは元々ドイツ東方植民の地であるプロイセン地方とブランデンブルクとに領地が分断されていたので、軍事国家となって領土を拡大しなければならない運命だった。一八世紀中盤、フリードリヒ大王の時代にプロイセン王国は啓蒙的な文化の中心地として繁栄した。一九世紀初頭、ナポレオンがドイツを侵略するとにわかにドイツ国民の民族意識がたかまり、プロイセンはドイツ統一運動の期待をかけられるようになる。ヘーゲルがプロイセンに理想の国家・絶対精神の実現を期待したのも、そのような時代的背景があったためだった。ところが、ナポレオンを破って大国となったプロイセンは保守化する。多くの知識人や学生が弾圧され、ドイツにおける自由主義運動は大きく衰退することになった。その後、統一されたドイツがどうなったかはご存じの通り。ヘーゲルの考えたようにはならなかった。なぜなら、国家はドイツだけではなかったからだ。

㊼　『最強伝説黒沢』
『ビッグコミックオリジナル』に連載されていた。作者は福本伸行。主人公は四四歳独身素人童貞の喪男・黒沢。ストーリーを言葉で説明しにくいのだが、「感動などないっ！」「アジフライ」「エロスイム」など名言多数。

3 ヘーゲルの「セカイ系哲学」と、キルケゴールの「キモイ系哲学」

「俺がモテない現実をなんとかしろ」

さて、やっとキルケゴールの話に入れます。

キルケゴールは一九世紀前半にデンマークで活躍した喪男哲学者です。キルケゴールは「実存哲学」[48]という哲学の潮流を切り開いたことで知られています。実存哲学とは何か？　いろいろな言い方ができますが、一言で言えば「俺の哲学」「主観の哲学」という意味です。もっと言えば「俺と世界とは関係ねえ！」という絶望的な哲学ですね。**「世界」を論じたヘーゲルが「セカイ系哲学」[49]だとすれば、喪男の個人的苦悩から出発する実存哲学は「キモイ系哲学」[50]です。**

どうしてキルケゴールが実存哲学を打ち立てなければならなくなったかというと、近代哲学の体系はすでにヘーゲルが完成させてしまっていたからです。ヘーゲル哲学というものは言語によって世界を完全に説明できる体系だったのです。そう、ヘーゲル哲学もまた、最初は喪男哲学だったのに、「モテ」つまり体制になってしまったんですね。「完成された哲学体系」という名の体制に。しかしキルケゴールはおのが内なる喪男魂に基づいて「そんなもん信用できるか」と言い出したわけです。

キルケゴールは、絶対精神がどうとか、そんなことはどうでもよく**「そんなことより俺がモテないという現実をなんとかしろ」**と思ったのです。

ヘーゲル哲学はやがてマルクスを産んだわけですが、ヘーゲルからマルクスへと続

㊽　実存哲学
二〇世紀ドイツの哲学者ハイデガーやヤスパースからフランスのサルトルに続いた哲学の一潮流。神が死んだので人間自身が価値を創造しなければならないという個人主義・人間主義的な思想。早々と神なき時代に絶望したキルケゴールやニーチェ、ドストエフスキーは実存主義の先駆け的存在とされる。

㊾　セカイ系
代表作『最終兵器彼女』（高橋しん）。周囲では人類が滅亡しようとしていたり大変なことになっているけど僕にとっては世界なんかどうでもよくて、とにかく恋愛だけが、目の前の彼女だけが至上の価値を持つ、という世界観の話。人類破滅SFという巨大な物語の構造を捨てて個人の恋愛物語に収束していったアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』からスタートしたと言われる。

㊿　キモイ系
別に人類が滅亡しようとしていたりはしない退屈な日常生活。モテない。何も良いことがない。生きている限り俺は喪男だ。恋愛という市場に参加する資格すらない。セカイ系なんて月世界の話だとしか思えない、俺には何の関係もない。そんなことよりイケメン氏ね。感動など

く流れは、一言で言うと「国家主義」「セカイ主義」です。つまりヘーゲルやマルクスは、**喪男の苦しみを全宇宙規模で同時に解決する作戦を取った**のです。一人ひとりの喪男がめいめい勝手に立ち上がっただけでは、『タクシードライバー』[51]のトラヴィスになってしまいます。そこでマルクスは団結してネットワークを作り、もっと喪男が報われる世界を作ろうではないか、と考えたのです。ヘーゲルはマルクスほど過激ではなく「いやまあ絶対精神ですから大丈夫ですよ、いつかきっと国家が喪男を救いますよ」と言ってたわけですが、現実は見事にその逆になったので、仕方なくマルクスが出てきたわけですね。いずれにしても、「三次元」の世界でのみ、人間は救われるべきだと。それがヘーゲルが作り上げた「セカイ系哲学」です。

　これに対してキルケゴールは「とにかく俺さえ喪の苦しみから逃れられればいいんだ、っていうか他人のことまで心配してる余裕なんかあるか！」と言い出したんですね。いかにもモテなさそうです。これが「実存主義」です。

　前述のアニメ『ガン×ソード』で言えば、「カギ爪の男」は、ヘーゲル・マルクス系です。セカイ主義者です。カギ爪の男は、かつて人間に絶望して喪男になった過去があります。彼は「人間は悪なり」と悲しみました。そして、この悲しみを終わらせるためには、すべての人間が同じ意識を共有すればよいと考えたのです。つまりヘーゲルの「絶対精神」を実現しようとしたのです。

　これに対して『ガン×ソード』のヴァンやレイ[52]といった童貞喪男たちは、「何言ってるのかわからねーんだよ！」「バカ、バーカ！」「邪魔してやる、邪魔してやる！」とひたすら頭の悪いことを言ってカギ爪の男の邪魔をします。彼らは実存主義者です。

ない。そんな鬱々とした現実世界の話。代表作『ルサンチマン』『ボーイズ・オン・ザ・ラン』（花沢健吾）、『最強伝説黒沢』（福本伸行）。

(51)「タクシードライバー」
一九七六年。アメリカ映画。監督はマーティン・スコセッシ。脚本はポール・シュレイダー。主演はロバート・デ・ニーロ、助演にジョディ・フォスター。資本主義社会の最も醜い姿を象徴するかのような一九七〇年代ニューヨークで友達もおらず女にもモテない孤独な喪男トラヴィス（デ・ニーロ）が「もはや我慢ならん」と逆ギレ。肉体改造を開始して大統領候補を暗殺しようとするが、あっさり失敗してヤケクソで家出少女ジョディ・フォスターを騙して売春させているイケメンポン引きどもを皆殺しにする。

(52) レイ
『ガン×ソード』のサブキャラ。主人公ヴァンと同じく、カギ爪の男に恋人を殺された恨みを晴らすため復讐者として生きている。最後はカギ爪の男に散々嫌がらせをして死んでいったが、死んでいくレイの脳内で……レイは目を覚ます。今までのカギ爪の男との闘いは、すべて悪い夢だったのだ。レイはうららかな日差しの下、椅子で眠っていただけだった。恋人が庭で洗濯物を干している。レイは呟く。「夢を見ていた……悲しい夢だった」そう、今まで生きてきた悲しい世界のほうこそ、夢。彼女がいるこの温かな世界こそが、現実。現実、現実なんだ。……こうして、喪男レイは安らかに逝った。全米が泣いた。

どちらも喪男なのに、どうしてこんな悲しい対立が生まれてしまったのでしょうか。

アニメ本編を観ていただければわかりますが、カギ爪の男は絶対精神を実現するために自ら命を捨てようとしています。別に彼自身が権力者（モテ）になるために活動しているわけではないのです。

しかし、カギ爪の男は計画を推進する途中でヴァンやレイのフィアンセを殺してしまいました。カギ爪の男は絶対精神の実現のためなら人間が多少死んでも仕方ないと割り切っているわけです。セカイ主義ですから。しかしヴァンやレイは童貞ですから、この世ではもう二度と理想の女性に出会えません。一度喪から救われそうになった瞬間に一挙に地獄に落とされたルサンチマンが、ヴァンとレイを「カギ爪の男を邪魔する」というテロ行為に向かわせたのです。「死の贈与」です。ヴァンやレイにとって、この世で唯一の価値あるもの、それは「お嫁さん」[*53]でした。それを奪っておいて「何が絶対精神だ氏ね」というわけです。

つまり、カギ爪の男はすべての人間を絶対精神というネットワークに繋ぐことで三次元を理想郷に改造し、喪男の苦しみを宇宙規模で終わらせようと考えたのですが、ヴァンやレイは「喪男の悲しみは自分自身で癒すしかねぇ！」「世界なんか知るか！」と言い張ったのです。

これです。この「知るか！」こそが実存主義なのです。

現代の二次元創作界にも「セカイ系」と「キモイ系」が並立していますが、これも本質は同じです。セカイ系作品とは「世界イコール恋愛」という極端な世界観で描かれるライトノベルやマンガやアニメのことです。これに対してキモイ系は、「世界

㊿53 お嫁さん
「お嫁さんってのは、幸せで、幸せで、幸せなものなんだ！」（ヴァン）

(＝恋愛) と、俺が、断絶している」という救われない喪の悲しみを描いた作品です。

セカイ系の作品には、全宇宙の運命を背負ってるような凄い女の子がよく登場します。つまり、絶対精神が萌えキャラ化する。彼女こそがセカイつまり絶対精神そのものなので、彼女さえいてくれれば喪男は救われるわけです。まあ救われずに終わることも多いのですが。

これに対してキモイ系では主人公に彼女なんかできません。彼女が仮に絶対精神だとしても、その絶対精神と自分との繋がりは最初から断たれています。断たれているといいますか、そんなものに取り込まれてたまるかという不屈の「喪男への意志」がスパークするわけです。まとめれば、

セカイ系＝世界 (三次元) と個人 (二次元) とが「彼女 (絶対精神)」によって統一される＝セカイ主義。

キモイ系＝三次元と二次元が「喪男への意志」によって分裂し続ける＝実存主義。

というわけです。「絶対精神」という「神様」を信じるか信じないかで、近代以後の喪男は二種類に分かれるのです。特に現代では、この「絶対精神」が恋愛至上主義などと結びついて「恋愛」や「萌えキャラ」という姿になっている点が特徴的なのです。カギ爪の男の場合は、「萌えキャラ」が「自分」に進化しています。自分の「喪の魂」を全人類に「絶対精神」として植え付ければ世界は救われる、というわけです。こうした発想は全部へーゲルから出発しています。で、キルケゴールやヴァンは

「お前の喪の魂が絶対精神だなんて、どうして言い切れる。誰が正しいと証明するんだ」「俺は俺だ」と怒り、そうした「絶対精神」に取り込まれることを忌み嫌うわけです。

つまり二一世紀のアニメ『ガン×ソード』で描かれている喪男同士の対立は、すでに一九世紀ヨーロッパにおいて「ヘーゲル対キルケゴール」という形で始まっていたのです。

ヘーゲル（そしてマルクス）の考え方は、「予定調和論[*54]」です。つまり、過去や現在の現実は喪男にとって悲惨なものではあるけれど、未来には必ず喪男のパラダイスが実現するのだ、という話です。

これは実は「やがて神の国が実現する」というキリスト教思想の複製なんです。つまり、かつて「神」と呼ばれていたもの（地獄である現実をいきなり天国に変えてくれる最強のカード）が、「絶対精神」や「歴史の必然」といった概念に置き換わっているだけなのです。もちろん、そんなものをこの目で見た人間はいません。ヘーゲルはナポレオンを絶対精神だと言いましたが、ナポレオンはシャアみたいに没落しました。

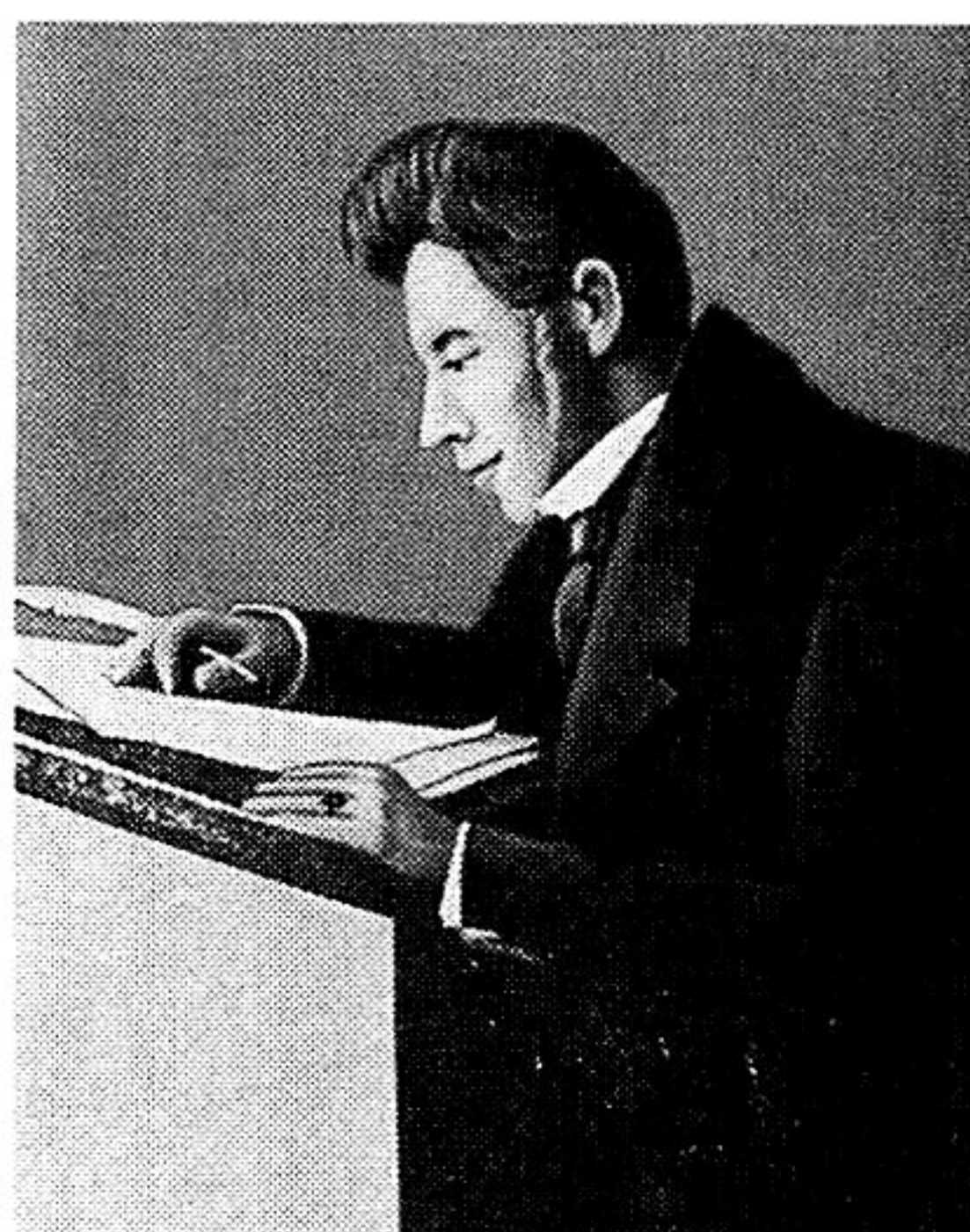
ここで、キルケゴールやヴァンのようなはぐれ喪男は気づくわけです。「未来」なんてものも、結局は、現実から目を背けるために発明された妄想にすぎないんじゃないのか。人間の前には永久に「現在」が続くだけではないのか、と。せっかくカントが時間も空間も人間が生み出した概念にすぎないと喝破したのに、ヘーゲル哲学では「時間が解決してくれる」というキリスト教的な古い思考方法に逆戻りしているわけです。しかしヴァンやキルケゴールにとって、世界とは「現在」にほかなりません。ずっと「モテない」という現在が続くのです。

㊹ 予定調和論
一七世紀ドイツのバロック哲学者ライプニッツが唱えた。デカルトからニュートンへと続く自然科学哲学は「機械論」という潮流を生み出した。機械論の世界観では、世界には何の目的もない。故に人間は絶望してしまう。これに対して世界には目的があるから大丈夫だという世界観が「目的論」で、神もそもそも目的論のために発明されたようなものだった。ライプニッツは近代的な機械論とキリスト教的な目的論を再び統一するために「モナド」および「予定調和論」を唱えたのだった。彼によると世界は「モナド」という単位で構成されており、一見宇宙は機械論的に見えるのだが、実はそれぞれのモナドが内部に世界全体を持っているので、世界には目的論的な予定調和が保証されている。だから大丈夫だというのだ。ヘーゲルやマルクスのようなセカイ主義哲学は「目的論哲学」または「予定調和哲学」と言える。これに対してキルケゴールのような実存主義哲学は目的論・予定調和を認めず、神なき機械論世界に落とされた自らの救いを探し求める哲学と言える。

ナポレオンやゲーテに影響を受けたヘーゲルはイケイケドンドンの精神で時間と空間の延長による喪男の救済を夢想しました。実は西洋近代文明の拡大主義・植民地主義・帝国主義といった果てしない膨張政策の根幹には、この「時間と空間による解決＝モテ化」というセカイ主義喪男哲学があったわけです。資本主義もまた、「無限に拡大する市場」を前提としています。これは「空間は無限に延長される」からです。つまり、空間を拡張し続けることによって、富は増大し続け、喪男もいずれは裕福になれるはずなのです。裕福になればキモメンでもモテます。女は贅沢が好きだからです。よほどのキモメンでないと、金持ちになってしまってからもモテない男であり続けることは困難なのです。

でも、いつの世にも「嘘つけ！」「バーカ、バーカ」と言い出すはぐれ喪男がいるものです。マルクスもヘーゲルに「嘘つけ！」と言った一人ですが、キルケゴールこそがヘーゲルに対して「嘘つけ！　バーカバーカ」と頭の悪いこと（誉め言葉です）を言い出した最初の喪男哲学者でした。

ヘーゲルがモテに転じて

キルケゴールはデンマーク生まれです。暗い出生の秘密を背負っていたために、生まれながらに喪男でした。というか父親がすでに喪男で、息子と一緒にひきこもって妄想ごっこに興じていたそうです。ある日、自分の出生の秘密（といっても、大映ドラマでありがちな話でしたが）を知ってやけっぱちになったキルケゴールは童貞を捨てようと売春宿へでかけますが（これが彼にとって最大限の「やけっぱち」でした）、惜しくも童貞を捨てそこないました。たぶん緊張して勃（た）たなかったのでしょう。しかし、そ

れが良かったのです！　喪の魂はすんでのところで守られました。

　さて間一髪で純潔を守ったキルケゴールに、運命の出会いが訪れました。二四歳の時にレギーネ＝オルセンという一四歳の少女に恋をして（またしてもロリコン）婚約にまでこぎつけますが、「愛しているから、別れるんだ」とＴａｃｔｉｃｓのゲーム『ＯＮＥ』の主人公みたいなことを言い出して自分から逃げ出しました。

　キルケゴールは、どうしても「喪男の精神」を捨てることができなかったのです。

「ロリコン」→「うっかり少女を騙しおおせてしまったら、罪の意識にさいなまれて慌てて逃げる」→「ますます喪男になる」

　これはゲーテと同じパターンです。ゲーテもキルケゴールも、恋愛を信仰していました。すでに西洋はロマン主義[*55]・恋愛至上主義の時代だったのです（図３－５）。

　相手の女性の中に「神」を見出す。これが近代の恋愛です。もちろん、自分自身も「神」たるべき彼女に愛される価値を持たなければいけないのです。キルケゴールは、「俺なんかがよう、彼女に愛される資格なんて、あるわけないんだよう！」と勝手に絶望して逃げたわけです。もちろん、近づくことでレギーネが実はしょーもないバカ女だったと判明してしまうのが怖いという恐れもあったのでしょう。それほどキルケゴールは「恋愛」を神聖視していたわけです。後に日本でも北村透谷[*56]が恋愛至上主義を輸入しますが、透谷が実際に結婚してみて現実の女に失望して自殺したのに対して、キルケゴールは「現実のレギーネへの絶望そして自殺」という自分の未来を一瞬幻視し

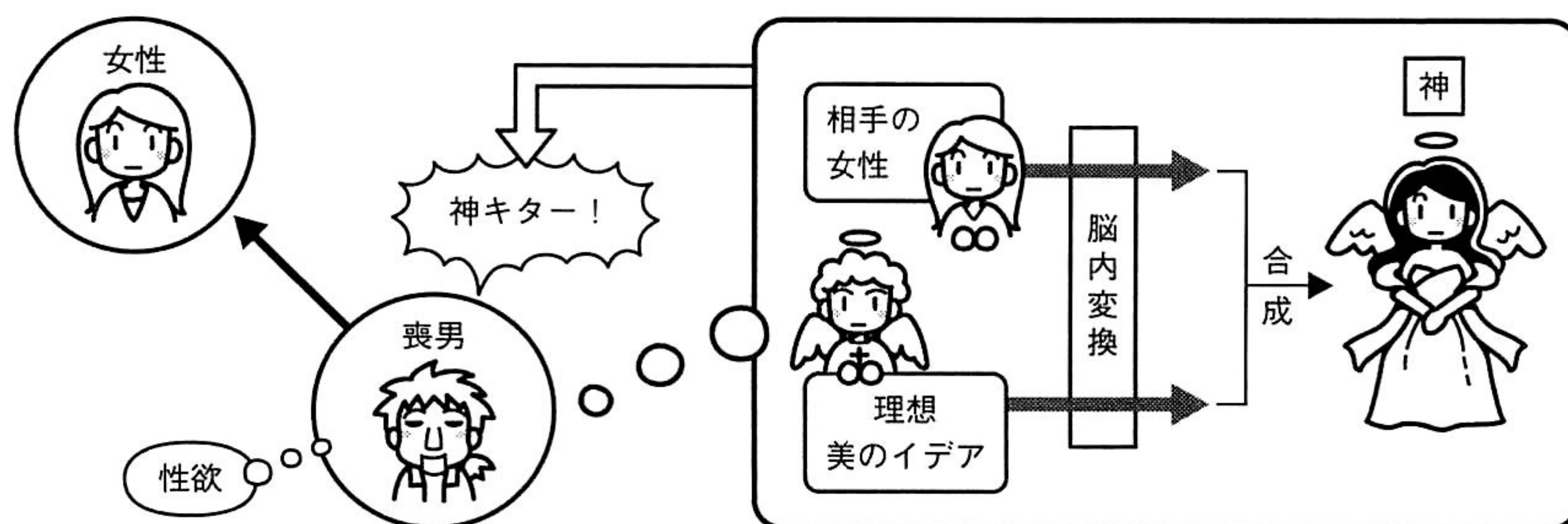
キルケゴール

キリスト教の神を喪失した喪男は、恋愛を宗教的なレベルにまで拡張した。中世の騎士道精神が、この近代恋愛のルーツ。故に精神主義的な純潔性が求められるため、性欲は恋愛と完全には統合されない。人間の女性とイデアを合成して神を作ろうとする近代恋愛は、現代の錬金術と言える。

図３—５　恋愛至上主義による神の生成

て逃げ出したのです。たぶん。

ああ、「モテの魔の手」問題が、またしても。

結婚して絶望し、自殺した北村透谷。魂の童貞を守り通そうとしたキルケゴール（とはいえ、キルケゴールも四二歳で早死にしたのですが）。で、「ロリコンヤリ捨て魔人」の悪評を自ら立てたことで一時国許（くにもと）にいられなくなったキルケゴールは、ヘーゲルにハマり、暗い暗い顔立ちになりました。

しかしながらヘーゲル哲学の「セカイ系」臭さは、キルケゴールには耐えられませんでした。何が絶対精神だ。そんなことより俺にはレギーネのほうが大事だ！　レギーネ、愛してるー！　お前に夢中だー！　ああーっでももうレギーネはいない、いないんだー！　うわーっ！　というわけで、「ヘーゲル氏ね！」とばかりにキルケゴールはアンチセカイ系喪男哲学＝キモイ系哲学を打ち立てたのです。**「世界がどうなろうが知ったこっちゃねぇ、俺は童貞だ！」**と叫びました。これが実存主義誕生の瞬間です。

もちろん、こんなキルケゴールが現実社会で成功できるはずもなく、マスコミにボコボコに叩かれているうちに死んでしまいました。しかしキルケゴールにとって、世界がどうしたとか、時代が何だとか、歴史がどうとか、国家がどうとか、そんな話は全部いまここにある自分自身の喪の苦しみからの逃避にしか思えなかったのです。そんなことよりレギーネ愛してるよと。ヘーゲル学派[*57]は知識の収集と理論体系の構築と精密な議論に没頭していましたが、キルケゴールに言わせれば、そんなものには、

「バーカ、バーカ！　何言ってるかわからねぇんだよ！」

という程度の価値しかありませんでした。喪男哲学とは、自分自身がなぜ喪男なの

---

⑤⑤　ロマン主義
キルケゴールが生きた一九世紀前半の文学界は人間の内面を重視する「ロマン主義」の全盛期だった。ロマン主義は喪男の国ドイツで最も盛んで、フィヒテやシェリングなどのドイツ哲学とも結びついていた。前期ロマン主義作家にはノヴァーリス、シュレーゲル、後期ロマン主義作家にはグリム兄弟、ホフマンなどがいる。音楽や絵画の分野でもロマン主義が流行した。

⑤⑥　北村透谷
一八六八年～九四年。日本の作家。日本におけるロマン主義作家の先駆けで、「恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり、恋愛ありて後人世あり」という過激かつ神秘的なキリスト教的恋愛至上主義を恐らく日本で最初に主張した。透谷は女性を「真美の天使」と崇拝したが、人間女と結婚したことで実は女性が「醜穢（しゅうわい）なる俗界の通弁」だという現実を知ってしまい、理想との格差に絶望。二五歳の若さで自殺した。代表作『処女の純潔を論ず』『厭世詩家と女性』『人生に相渉るとは何の謂ぞ』。

⑤⑦　ヘーゲル学派
ヘーゲルの死後、ヘーゲルの弟子たちはキリスト教の哲学的解釈を巡って「ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）」「ヘーゲル右派（老ヘーゲル派）」「中央派」といった派閥を作ってあれやこれやと議論を繰り返していた。ヘーゲル左派はやがて唯物論に向かっていくが、国家を批判するようになったため大学から追放された。マルクスやキルケゴールもヘーゲル左派の影響を受けていると言われる。

か、なぜ世界と俺とが分裂しているのか、なぜだなぜなんだ、という怒りと悲しみの原因を探り、そこから解脱するためのものだったはずです。なのに、西洋近代哲学は、いつの間にか哲学者自身の人生とは何の関係もない「哲学ごっこ」になってしまったのです。「知の体系」とかなんとかいって、利口ぶってモテに走る、そんな曲学(きょくがく)阿世(あせい)[58]どもの巣窟になってしまったのです。喪男が趣味で勝手にやっていた哲学が「大学」という体制に取り込まれたのも一因でしょう。

ソフィストをバカ呼ばわりしたソクラテス、プラトン、律法派[59]をバカにしたイエス、そしてヘーゲル学派を批判したキルケゴール、彼らはみな、真の意味での哲学者、すなわち喪男哲学者なのです。

ヘーゲルにしても、出発点は喪男（つまり自分）の苦しみの謎を解き明かすことだったはずです。しかしヘーゲルはロリータ妻と結婚し、大学者としての名声も手に入れ、大勢の弟子を率いて自分自身の人生とは直接関係のないセカイ主義哲学へと走りました。ドイツの大学という大学の哲学教授の椅子は、ヘーゲルの弟子たちによって占められました。ヘーゲル哲学はあまりにも成功しすぎて、喪からモテに裏返ってしまったのです。

だいたい喪男哲学者は不遇のうちに死ぬ（ソクラテス、ライプニッツ[60]、キルケゴールなど）か、少々成功してもむしろ「モテの魔の手よ、去れ」[61]と護身に走ってひきこもったりする（デカルト、カント、スピノザなど）のですが、ヘーゲルは世に受け入れられて出世しちゃったんです。たぶん、ヘーゲルが生きた当時のドイツが「ドイツ観念論」やら「ロマン主義」やらが集結したまれに見る喪男王国だったからでしょう。

また、ヘーゲルには「言語」に対する宗教的なまでの信頼があったので、「すべて

---

58 曲学阿世
『史記』の言葉。己の信じる学説を曲げて世間に阿（おもね）ること。前漢時代の喪男学者・轅固生（えんこせい）が若きモテ学者公孫弘（こうそんこう）に対して「そういうことをしてはならないよ」と教え諭した言葉。モテに走り真理を見失っていた公孫弘はこの言葉にじーんと感動して轅固生の弟子になった。轅固生は老子にハマっていた太后に向かって「老子なんぞはペテン野郎です」と正直に答えて身分を降格させられたりもした。彼は何があっても絶対に己の信念を曲げなかったのである。

59 律法派
イエス自身が興した宗教は、キリスト教ではなくユダヤ教の一派だった。当時のユダヤ教は律法主義の「パリサイ派」、神殿に依っていた「サドカイ派」、独立闘争を続けていた「ゼロテ派」、イエスに洗礼を施したヨハネが属していたと言われている「エッセネ派」などに分裂していた。律法派とはパリサイ派のこと。イエスはパリサイ派の厳格すぎる律法主義をボロクソに批判していた。

60 ライプニッツ
ゴットフリート・ライプニッツ。一六四六年～一七一六年。バロック期ドイツの哲学者、数学者、政治家。万能人で、同時代のありとあらゆる学問を統合しようと試みた。哲学の分野ではモナド論で有名。数学の分野では記号を扱うことを得意とし、微分積分法を発見（これが元で粘着質のニュートンと死ぬまで論争することになってしまった）。また現代のコンピューター

を言語で説明できる」と本気で信じていた節があります。なので、喪男でありながら自分で「言葉の体系」を作ってしまったんでしょう（ヘーゲルはニュートンを「ケプラーの発見を数学的に説明しただけだ」と批判していましたが、これはヘーゲルが数学を使った世界体系をまったく信用していなかったことを意味します）。

ヘーゲルにおいて、哲学は自然科学や数学と切り離された「言語」の学問になってしまったのです。弟子たちともなると、もはや議論のための議論、哲学のための哲学。元々哲学なんて、数学者やオカルティストや神学者が自己のやむにやまれぬ喪男魂に突き動かされてやっていただけだったのに（むしろ、多彩な知識・学問を修めている雑多な人間が自発的に哲学をやったからこそ価値があった）、大学の都合で哲学だけでメシを食う「専業哲学者」が常に一定数作られるようになってしまったのです。これが良くなかった。後に哲学が没落する一因になったのです。**哲学の本質とは何の関係もない言語による難解なレトリックや、自然科学コンプレックスを剝き出しにしたウソ数式が後に多用されるようになったのも、専業哲学者（＝哲学屋・哲学学者）が哲学をやるようになったからでしょう。**

組織化はすべてごまかしだ

しかし、このように哲学界が硬直してモテが優勢になると、必ず新たな喪男が立ち上がって「バーカ、バーカ！」と言い出すわけです。これぞまさに歴史の必然と言いましょうか、**「モテ・喪・バカ」の弁証法**と言いましょうか。

で、キルケゴールは、ひたすら絶望について考え続けたわけですが、彼によると人間の中には「例外者」というのがいると。例外者は、一生涯にわたって独りぼっちで

に連なる二進法の基礎を築いた。学問の統合のみならず、ドイツ各地に科学アカデミーを設立しようと奔走したり、カトリックとプロテスタントを融和させようとするなど、分裂したヨーロッパの再統合に生涯を捧げた。もはや言うまでもないが生涯独身。代表作『形而上学叙説』『モナドロジー』。

(61) スピノザ
バールーフ・デ・スピノザ。一六三二年〜一六七七年。オランダの哲学者。哲学史上に輝く『エチカ』を著したが、その中で合理主義的・無神論的な哲学思想（神＝自然＝世界であるとする一元論的汎神論）を説いたため、宗教弾圧を恐れて出版しなかった。すでにスピノザはユダヤ教から破門されており、神とはユダヤ・キリスト教的な人格神（萌えキャラ）ではなく、人格を持たない自然＝世界そのものだとするアニミズムを説いた『エチカ』を出版すれば、スピノザはキリスト教世界からも弾圧されること必至だったのだ。一応書いておくが生涯独身。

生きなければならない運命を背負っている人間のことです。要はアウトサイダー[62]です。つまり、喪男です。結局はキルケゴール自身のことを言っているわけですが、「ダメ人間」とか「ニート」とか「童貞」とか「ひきこもり」ではなく、「例外者」であると、そういうカッコいい言葉で定義したところが画期的ですね。**例外者＝喪男は、世間一般のしょうもない価値観と闘い続けなければならない**のです。「愛するが故に捨てる」という喪男の魂を、なぜ世間は理解できないのか。

で、そういう喪男の精神には、常に「絶望」が宿っていると。

見事なまでに「実存哲学」です。この絶望という「死に至る病」から救われるには、どうすればいいのか？　喪男は死ぬまで喪男なので、絶望が癒されることはない、とキルケゴールは言います。だから神様を信じるしかないんだよ、と……。

って、何それっ？

まずキルケゴールは、お金やセックスや酒といったものを「美的実存」とカテゴライズし、これらの現世的な快楽追求は虚しいものだと悟ります。

次に、正義とか自己実現とかいった道徳的な理想を持ち出しますが、これら「倫理的実存」もまた、実は虚しいのだと言います。理想という二次元の概念を三次元で完全に実現することは、実はできないからです。「できない」と気づくところが喪男です。ですからヘーゲルもまた、キルケゴールから見れば、「理想が三次元では実現できないという事実に気づかない奴、絶望しない奴」ということになるわけです。**喪男は絶望するべきなのです**。というより、とことんまで自分の人生を生きれば、現実（三次元）と自分の理想（二次元）との差が絶対に埋まらないことに気づいて絶望せざるを得なくなるはずです。

62 アウトサイダー
戦後イギリスに登場した喪男作家コリン・ウィルソンが提唱した概念。「喪男」のこと。当時二六歳ガテン職のコリン・ウィルソンは図書館に通い続けて世界中の喪男（実存主義的ひきこもり、恋愛至上主義者、アウトサイダー芸術家、ドストエフスキー、神秘主義者）を集大成した『アウトサイダー』を著して一躍文芸界の寵児となったが、直後にモテの魔の手にハマって失脚。以後はオタクの本分に戻り、オカルトと殺人の研究者となった。

絶望せずに生きている喪男は、何かごまかしているんです。ヘーゲルのように哲学の巨大な体系を作り上げることで、あたかも現実を征服したかのような気になったり、あるいは会社作って植民地を増やして工場建てて金を儲けて、あたかも世界を支配したかのような気になったり。[*63] しかしそれらはすべて虚しいのです。ヘーゲル哲学も資本主義も、「個人」という立場に立ち戻ってみればすべては「自分自身」からの逃避にすぎず、最後には絶望するのです。

実存主義の観点から見れば、資本主義は「富への逃避」、そして自己を省みないセカイ主義哲学は「知への逃避」です。そもそも、たかが人間ごときが世界を自分の思い通りにしようなんてのは、思いあがりですよね。『ガン×ソード』のヴァンがカギ爪の男に切れたのも、そこです。

つまりセカイ主義哲学は、構造的に自分と神を同一視してしまう危険な思考なのです。実際ヘーゲルは、この三次元の世界を「絶対精神」が自己実現していく過程であると言っていますが、これってつまり世界を自分に擬人化して捉えてるだけなんですね。「世界」（三次元）と「俺」（二次元）の分裂で喪男は苦しんでいるわけです。なのにセカイ主義哲学は、「俺と世界は繋がってる」と言い出すわけです。そこでは、すべての人間は「絶対精神」の一部なんです。で、哲学を探究すれば、その絶対精神を認識できますよと。これはキリスト教の「神」が、「知」、つまりは「自分」にすり替わっているだけなんですね。「人間の知が、神に取って代わる」。まさにこれこそが近代精神なんです。ヘーゲルは時代の精神を忠実に体系化したわけです。

でも、キルケゴールやヴァンは、その傲慢さが耐えられないのです。なんか世界のてっぺんから、高みから世界全体と人間を見下ろしてるわけですよね。でも、あんた

㊸「会社作って植民地を増やして工場建てて金を儲けて、あたかも世界を支配したかのような気になったり」
ドイツの喪男社会学者マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を引くまでもなく、資本主義の原動力となったプロテスタンティズムの精神は、元々人間女との恋愛にも脳内彼女との恋愛にも挫折したファウスト博士（つまり近代的人間）が「ならば自らが理想の世界を作って新世界の神となろう」と志したことから生まれたのである。

もただの人間じゃん？　何を根拠にそんなに威張ってるん？　はぁ？　知？　何それ？　バカ、バーカ！　というわけです。**大人にもなって恥ずかしげもなく「知」なんて言い出す人、信用できませんよ。**ソクラテスも「無知の知」を説いてソフィストをバカにしてましたが、こういうことは数千年も繰り返し続いてるんです。

喪男はいくら自分自身からあがいて逃げ出そうが、結局はお釈迦様の手の上なのです。「絶対精神」など喪男には関係ありません。キモメンですから。風太郎はいくらお金持ちになっても女に愛されません。例えば、『銭ゲバ』[64]の主人公蒲郡風太郎はあらゆる悪辣（あくらつ）な手段を駆使して金と権力を手に入れていきますが、資本主義ピラミッドの頂点に上り詰めた瞬間に気づくわけです。自分は「暖かな家族」も「女性の愛」も得られない孤独な人間であり、生まれながらにして敗北者だったのだと。金も富も権力も、すべては永遠に手に入れられない「愛」の代償にすぎなかったのだと。にわかにキルケゴールの精神に目覚めて絶望した風太郎は、自殺してしまいます。

というわけで、キルケゴールは、喪男（つまり自分）は家族や財産や身分といったすべての「現実」を諦めて、宗教、すなわち二次元に萌え狂うしかない、と結論しました。つまり「解脱」です。解脱といってもブッダのような静かな境地を目指すのではなく、あくまでも情熱的に萌え狂うことを推奨しました。解脱というよりも「現実からの飛翔」のほうがしっくりします。

そういうことを書いてすぐにキルケゴールは死んでしまいました。童貞の純潔を守ったまま、現実から飛翔したのです。ヘーゲルは世俗の成功を収め、その哲学は体系化されてしまいました。これに対して、キルケゴールは世間に罵倒されながら野垂れ死にしました。しかし体系化・モテ化に陥ることとなく純粋な形で残ることとなったキ

⑭『銭ゲバ』
一九七〇年。ジョージ秋山のマンガ。ブサイクなキモメン喪男・蒲郡風太郎が富と権力を握っていく姿を描くピカレスク・ロマンだが、愛だけは絶対に手に入らない。

ルケゴールの叫びは、後世、数々の喪男を呼び覚ますことになったのです。
　とはいえ、最後の最後が「神」では、中世に逆戻りではありませんか。キルケゴールは、「現実」をすべて棄却した後に残る「救い」を、新たに見つけられなかったのでしょうか。レギーネ騒動にこの謎を解く鍵があります。キルケゴールの「神」は、教会や教義とは何の関係もない個人的な「神」でした。つまり「己の脳内の神」「自分だけの神」だったのです。キリスト教とすら実は関係がないわけです。彼は当然、教会ともケンカしていました。もう狂犬ですね。かたっぱしから偉い雑誌の編集部にパイ投げにいくようなものです。
　そうです。**「信仰とは人間個人が自分を救うためのものだ」**という真理をキルケゴールは再発見したのです。ということは組織宗教はすべて否定されるわけです。組織宗教には異教徒との対立や異端の排斥や宗派争いという血なまぐさい問題がずっと横たわっていますが、キルケゴールは「たった一人の宗教」「自分だけの神を見つける」という方法を見出したのです。つまり、宗教の組織化を否定するということですね。常に例外者、アウトサイダー、喪男であり続けろということです。キルケゴールはヘーゲル個人を嫌ったというよりも、ヘーゲル「学派」という徒党を組んでヘーゲルの学問を教義化していた連中が我慢できなかったのでしょう。教会に対してケンカを売りながらイエスを信仰するという彼の態度も、同じ理由からのものでしょう。集団化、組織化、教義化、すべてはごまかしなのです。
「世界と俺とを、完全に切り離せ！」
　キルケゴールの実存哲学は、喪男の救いの道を「一人だと苛(いじ)められるから、教会を作ってみなで集まろう」という方向から「自分で自分を救え」という逆走方向に持っ

ていったわけです。ただ、そこでキリスト教の「神」に代わる何かをキルケゴールは見つける前に死んでしまったのでした。

「乙女化」の先駆者アンデルセン

実はキルケゴールは同じデンマークの童話作家アンデルセン[*65]を高く評価し、彼の作品の評論までしていました。アンデルセンは美しい童話を書きましたが外見はキモメンで、通称「デンマークのオランウータン」です。

見ての通りです。

アンデルセン

美化した肖像画も残ってるそうですが、パタリロ[*66]だって自分を美化したポートレートをバンコラン[*67]に渡してましたからね。

アンデルセンは肖像画の捏造どころか、「嘘の自伝」まで書きました。もうね、めちゃめちゃ幸せな子供時代でしたよ、ええ、みたいな嘘を書いてたんです。あまりにも熱心に「幸せな自伝」を捏造していたので、自伝を読んだ人たちは本気にしていたそうです。しかし顔を見れば嘘だとわかりそうなものです。アンデルセンを最初に高く評価して評論した人物こそがキルケゴールだったのですが、まさに喪男は喪男を知る、といったところですね。で、アンデルセンは童話作家としてデンマークどころかヨーロッパのスターとなったのですが、喪男ですから全然モテませんでした。彼はラブレターの代わりに「ニセ自伝」を女の人に送りつけていたのです。いったい何を考え

㊿65 アンデルセン
一八〇五年～七五年。ハンス・クリスチャン・アンデルセン。デンマークの童話作家。子供の頃から喪男。学校が嫌いで（たぶん幼い頃から女性恐怖症だったと思われる）、何度も不登校とひきこもりを繰り返した。長い挫折の連続の果てに詩人として世に出るが、幼い頃の自分のようなダメな子供の心を癒すために童話作家として生きることを決意。大成功を収めたにもかかわらず、女性にキモい自伝を送るという奇癖と「デンマークのオランウータン」と呼ばれたキモ顔が幸いして生涯童貞を貫き、『みにくいアヒルの子』や『マッチ売りの少女』などの喪の魂に溢れた悲しい童話を創作し続けた。また、美しい少年時代をスバラシい家族たちと共に過ごした自伝を書いたが、後にこの自伝は全部真っ赤なウソで彼の家族は怪しげな暗い経歴の持ち主ばかりだったことが判明した。アンデルセン先生っ……！　代表作『即興詩人』。

66 パタリロ
摩耶峰央のマンガ『パタリロ！』の主人公。子供にしてマリネラ王国の国王。人間とは思えないブサイクな容姿と異常な特殊能力の数々を持つ。

67 バンコラン
英国の諜報機関ＭＩ６に勤務する長髪黒髪の少佐。美少年殺しの異名を持つ。女性にはまったく興味がない。『パタリロ！』第一話でパタリロの護衛を務めるが、この時に渡されていたパタリロの肖像画が修整バリバリで誰だかわからないぐらいに美少年化されていた。もしパタリ

ていたのでしょう。僕にはこれはアンデルセンによる「護身」の発動だったとしか思えないのです。三〇歳過ぎた喪男なら、人生に一度ぐらいうっかりキモメールを書いてしまったことがありませんか？　僕はあります。ええ。ありますとも。

　アンデルセン童話は、喪男が二次元に飛翔する話とか、喪男がイケメンに変身して成り上がる話とか、モテモテのイケメンをバカにする話とかが多いです。

『マッチ売りの少女』は、この世に居場所のない喪な少女がマッチを擦りながら妄想世界に旅立っていく話です。キモイ系ライトノベル[*68]の元祖です。一見何の救いもありませんが、「現実は悲惨なんだから、二次元に逝ってしまいたい」というアンデルセンの祈りにも似た叫びが聞こえてきそうです。マッチ売りの少女は、自分の脳内で救われたのです。

『みにくいアヒルの子』は、説明不要ですね。キモメンに生まれ、貧乏で学校を中退し、オペラ歌手にもなれなかった「デンマークのオランウータン」が、歳を取ってから一発逆転、童話作家として栄光の頂点に伸し上がっていく様を描く自伝です。

『人魚姫』は口を開いたら死んでしまうという悲惨な人魚がヒロインなのですが、これもキモ自伝メールを送ったらフラれてしまうアンデルセン自身がモデルでしょう。**アンデルセンは顔はオランウータンでしたが、心は「乙女回路[*69]」装備**でした。ですから、童話の中では女の子になって登場することが多いのです。

『裸の王様』は、「俺は頭がいいんだ、俺はイケてるんだ」と思いたがるためにバカげたファッションに身をやつすアホと、そんなアホにすら逆らえない愚かな人々をからかっています。この話にはアンデルセンのルサンチマンがたっぷりとこめられています。

ロが修整せずに生の写真を送っていたらバンコランは仕事を引き受けなかっただろうから、『パタリロ！』というマンガも生まれなかったのだ。

⑥⑧　キモイ系ライトノベル
例えば『キラ×キラ〜夢の終わり』（本田透著・二見ブルーベリー文庫）を参照。

⑥⑨　乙女回路
なぜか喪男には「少女のような純真な心」つまり乙女回路を内蔵している男が多い。「ロマン主義回路」とも。ノヴァーリスやアンデルセン（注⑥⑤）、宮沢賢治（注⑰）を参照。

ドイツの民話を収集していたグリム兄弟と異なり、アンデルセンの童話はほとんどが創作でした。アンデルセン自身も、自分の童話は自分自身の投影であると言っています。まさしく、喪男童話なのです。喪男と童話は妙に親和性が高く、日本にも「童貞童話王」宮沢賢治という作家が現れています。賢治も生涯独身でしたが、もちろんアンデルセンも独身のまま死にました。それも、七〇歳まで生きて！

アンデルセンはデンマークの英雄でした。その葬儀は国葬で行われ、教会には王族からホームレスまで、入りきれない数の弔問者が訪れたといいます。それなのに、なんと七〇歳まで独身童貞喪男を貫いたアンデルセン。偉大です。ニーチェの言う「超人」とは、あるいはアンデルセンのことなのではないかと僕は思うのです。僕が仮に国賓待遇されてモテモテになってしまったら、はたして護身を貫けるでしょうか？全然自信がありません。でもそんな時には「キモい自伝」を送りつければよいのだ、とアンデルセン先生が教えてくださいました。というわけで僕もいまから「キモ自伝」を準備しておきます。

アンデルセンの最大の功績は「ブサイクなオッサンだって、かわいらしい『童話』を語っていいのだ」という喪男芸術史上のコペルニクス的転回を成し遂げたことです。いわば、喪男が純文学の世界から突然『りぼん』[*70]に飛び出してきたようなものです。ゲーテをはじめとするそれまでの喪男文学者は、「男性としての自分」を主人公に、萌えキャラとの恋愛を描きました。しかしアンデルセンの作品では、もはや自分自身が『マッチ売りの少女』や『人魚姫』のような萌えキャラに変身しているわけです。読ませる相手も喪男だけではなく、老若男女です。まあ童話ですからお子ちゃまがメインターゲットですね。僕はこのような喪男自身の萌えキャラ化現象を「乙女

⑳「りぼん」
集英社の少女マンガ雑誌。多くの少女マンガ雑誌がセックスマニュアル化しつつある時代の風潮に逆らうように、夢わくわくの王道少女マンガ世界を守り続ける硬派乙女雑誌。『アニマル横町』『出ましたっ！パワパフガールズZ』などが連載されている。

化」と呼んでいます。そして「乙女化」こそが喪男を救う道なのではないかと最近思索している次第なのですが、アンデルセンはその「乙女化」の先駆者なのです。

ヘーゲルが作り上げたセカイ系哲学を否定して「俺哲学」を唱えたキルケゴールと、自らの過去まで脳内で書き換えて「俺童話」を書き続けたアンデルセン。なんという運命のいたずらか、「デンマークで一番モテない男」が、世紀末喪男救世主が、同じ時期に同じ地域で二人も生まれてしまったのです。そして一人は「実存哲学」の開祖となり、一人は「萌え話」の開祖となったのです。その生涯は対照的でした。すべてを否定したあげく再び「神」を見出さざるを得なくなったキルケゴールは絶望の果てに死に、萌え童話によって自らを癒しながら人々をも癒す道を見つけたアンデルセンは（童貞だけど）栄光につつまれて死にました。

だが、二人のうちいずれかが正しくて、いずれかが間違っていたというわけではありません。喪男の歴史に大いなる足跡を残した二人の伝説は、永遠に語り継がれることでしょう。世界中の喪男たちによって……。

4　恋愛をも放棄した喪男ニーチェの崩壊

新しすぎて当時の哲学界からは無視される

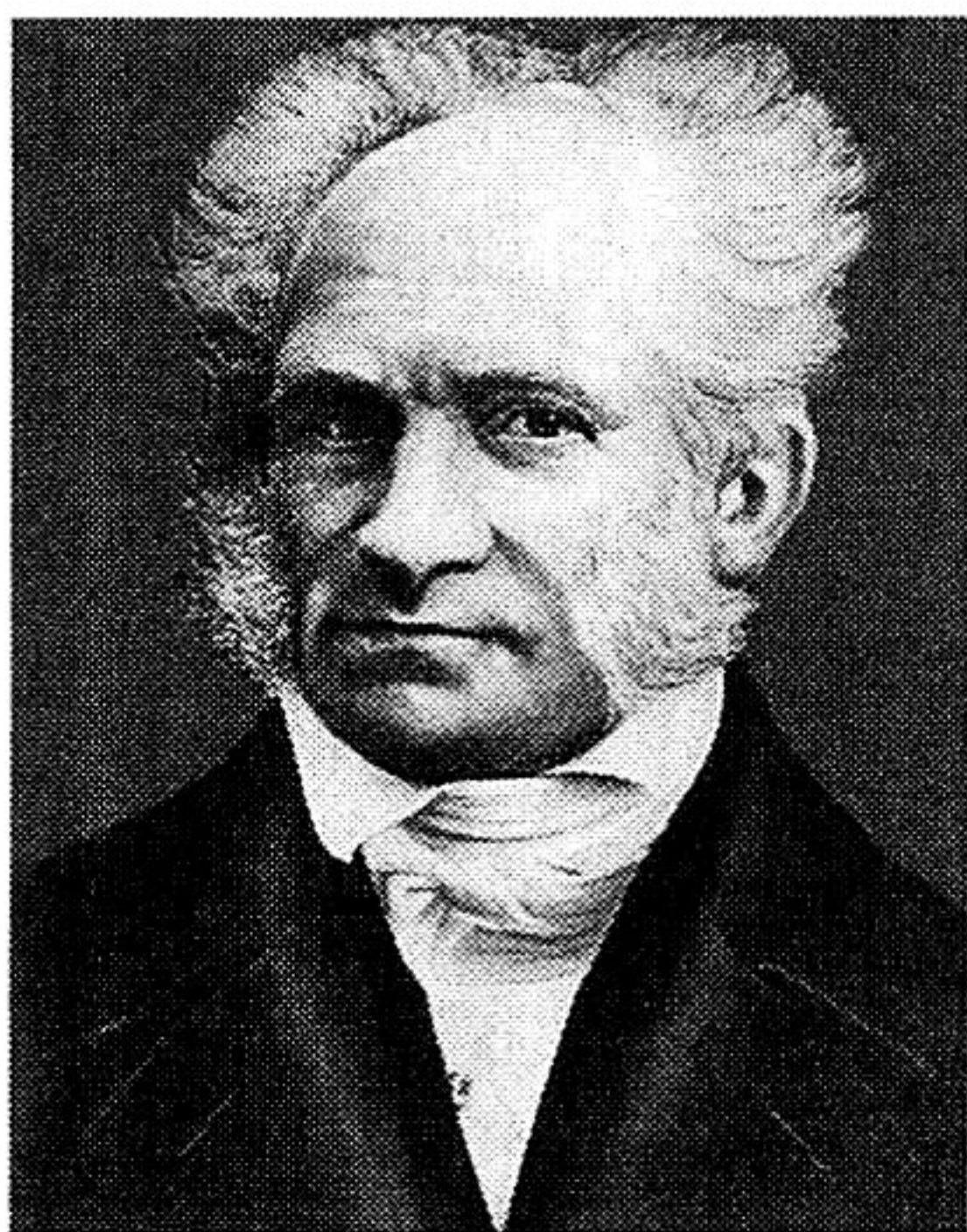
というわけで、いよいよ「世界最凶喪男」ニーチェです。

ニーチェ

ニーチェは一九世紀末にまたまたドイツで活動しました。近代の最後の最後にニーチェが現れたわけです。ニーチェはとてつもない秀才だったそうで弱冠二五歳で古代ギリシア専門の大学教授になりますが、体を壊して三五歳頃からひきこもりになりました。やはり、だいたい三五歳前後という年齢が、喪男哲学者にとっての分水嶺となるようです。ここから『ツァラトゥストラはこう言った』などの売れない哲学書を量産する半ニート生活に突入したわけですが、当時の哲学界からはまったく見向きもされませんでした。『ツァラトゥストラ』は全四巻でしたが、一冊目が全然売れなかったので版元が見つからなくなり、途中から自費出版になってしまいました。秋葉原の「とらのあな[*71]」みたいな場所でしかゲットできないシロモノだったのです。いまでこそ岩波文庫や全集などが大量に売られているニーチェですが、生前はまったく理解されなかったのです。喪ですね。

なぜ理解されなかったかというと、あまりにも新しすぎたからです。まず、ヘーゲル哲学のような「言語による体系」というものをニーチェは疑っていました。言語、哲学的言説によって世界を語りつくすことなどできない、と。故にニーチェの文体はアフォリズム[*72]の形を取ることが多く、要は僕が以前書いた文明批評エッセイ本『電波男』みたいなデタラメな文体でした。若い頃はちゃんと論文調の文章を書いていたのですが、徐々にべらんめえ調になっていったのです。代表作『ツァラトゥストラ』はほとんど独り言です。

㉑ とらのあな
オタク系のマンガ・同人誌・グッズを売ってくれるありがたい店。秋葉原や新宿などに店舗を構える。中野ブロードウェイにも是非進出してもらえると助かります。

㉒ アフォリズム
箴言（しんげん）。非常に重要な思想を、長々と書かず短い言葉でズバッと書き表すこと。そもそも真理は簡潔な言葉や数式で言い表せなければならない、とアインシュタインも信じていた。

ニーチェは代表作となるはずだった『権力への意志』の執筆中に発狂してしまい、妹エリザベートに看病されながら廃人として晩年を過ごしました。一説では梅毒が脳にまで進行したといわれています。ニーチェは言うまでもなく生涯独身の生粋の喪男でしたが、若い頃にうっかり売春宿に行って梅毒をうつされてしまったのだという説もあります。また、妹との仲が怪しいという噂もあります。いろいろな喪な噂がニーチェの周囲に渦巻いているわけですが、もちろん本書ではそのようなことは問題ではないのです。

大切なことは、ニーチェが喪男だったということだけです。

ヘーゲル哲学よりいまの現実

ニーチェはショーペンハウエル*[73]の影響を多大に受けていました。ショーペンハウエルもドイツの哲学者ですが、どうしたわけかインド哲学の影響を受けて東洋哲学独特の厭世主義を西洋哲学に持ち込んだ人です。従って、ショーペンハウエルの喪男哲学思想はブッダと似たような考えです。人生とは苦しみである、とショーペンハウエルは言い出したのです。

人間はそれぞれバラバラの「意志」を持っています。で、ヘーゲルやカントは個々人の精神を「絶対精神」や「共通感覚」といった概念でネットワーク化するという仮想モデルを考えたわけです。各個人が自分の「意志」を持って動いている以上、人間それぞれが永遠に孤立したままでは、

ショーペンハウエル

㊲ ショーペンハウエル
一七八八年〜一八六〇年。アルトゥール・ショーペンハウエル。ドイツの哲学者。ヘーゲルの同時代人で、ヘーゲル的世界主義哲学と真っ向から対立した実存哲学の祖。西洋の伝統的な喪男哲学であるカントやプラトンの他、インド哲学・仏教をも取り入れた厭世主義的な喪男哲学を打ち立て、「世界とは苦しみであり、この苦しみから逃れるには解脱や芸術しかない」と説いて一生涯独身を貫いた。西洋の喪と東洋の喪は、ショーペンハウエルにおいて出会ったのである。アフォリズムが得意で、例えば「読書とは他人にものを考えてもらうことである」などの喪な箴言をたくさん書き残してニーチェをはじめ数限りない後世の喪男に大きな影響を与えた。筆者も若い頃ひきこもって本ばかり読んでいた時にこのアフォリズムに突き当たり、「そうだ、自分の頭でものを考えなければダメなんだ」と目を覚ました一人である。「およそ書くに値する思想があれば、素材と内容は自然に溢れてくる」というアフォリズムもあるが、こっちはなかなか実践できません……。代表作『意志と表象としての世界』『読書について』『幸福について』。

戦争や差別といった悲劇が果てしなく繰り返されるからです。

喪男哲学者は、「世界」と「自分」との断絶によって苦しめられています。だからカントやヘーゲルたちの苦しみを解決する方法を探すことが喪男哲学の目的です。

近代哲学者は「人間の精神には『理性』『知性』があるから、いまは地獄のような世界だけど、いずれはなんとかなる、みんなが一つになる時がきっと来る」と結論したのです。ですから彼らの哲学は、「いつの日か、喪男もイケメンもなくなる、ユートピアが訪れる。だからもっと勉強して知性を磨いて科学を追究して市場を切り開いて頑張ろう」という西洋近代主義の気分に、「言葉の体系」を与えるという作業だったわけですね。「いまはダメダメだけど、頑張ればなんとかなるよ」ということです。

それに対してキルケゴールは「そんな御託（ゴタク）より、いまの俺がモテないという現実をどうしてくれる」と言ったわけです。

近代が成熟して頽廃に向かい始めていた一九世紀末ともなると、資本主義社会の成長によって生じた「勝ち組」と「負け組」の格差は歴然としたものになっていました。いくら「未来に向かって努力しよう」と煽（あお）っても、「俺はどうせ関係ないね！」と否を唱える喪男が増加したわけです。ですから楽観的な予定調和論だったヘーゲル哲学は、徐々に廃れていきました。代わりに厭世気分を先取りしていたショーペンハウエルが支持され始めたのです。王侯貴族だけがモテだった中世は、まだマシだったのです。キリスト教の教義に基づいて、基本的にすべての人間が罪人、つまり喪男だったのですから。そもそも「市民」というブルジョア階級は、近代に生まれた新興階級です。中世では王侯貴族以外の人間はみんな貧乏人でした。モテもへったくれもありません。生きるので精一杯でした。

「恋愛」などというものも、元はといえば貴族階級だけの道楽でした。国民一般に広く恋愛が普及したのは、近代以後なのです。ゲーテに代表されるように、神なき時代に神に代わって恋愛を崇めようというロマン主義が市民階級の間で勃興したのは、近代のことです。さらに、最初は芸術運動だった恋愛は、産業革命によって一般庶民に普及したのです。ところが、恋愛は元々宮廷文化ですから、金がかかります。恋愛は決して、ゲーテが『若きウェルテルの悩み』で描いたような喪男哲学的な命題を孕んだ芸術としてではなく、「恋愛資本主義市場」の「商品」として大衆化したのです。

恋愛と贅沢と資本主義

一九一〇年代に、経済学者のゾンバルト[*74]は『恋愛と贅沢と資本主義』という経済学書を出版しました。ゾンバルトはいまから一〇〇年も昔に、「恋愛資本主義」という二一世紀的な概念の祖型を作った人です。ゾンバルトによると、元々貴族階級の道楽であった恋愛は、「贅沢」とワンセットになっていたと言います。例えばゲーテの『ファウスト』では、ファウストがグレートヒェンの気をひくために高価な宝石を贈ります。あの即物的な贈与行為こそが「近代的恋愛」の本質なのだ、とゾンバルトは喝破したのです。以後、この即物的な贅沢を本質とする恋愛が、市民社会化・近代化によって庶民階級に普及していく過程で、莫大な量の贅沢が消費されるシステム、つまり「資本主義」が発展していったと言うのです。

こんなこと一〇〇年前に言ってたなんて、相当の喪男です。要は、「**すべての男が女の機嫌をとるために贅沢させるようになったので、資本主義社会が発展した**」というわけです。すべては女の贅沢が悪いということです。

㉔ ゾンバルト
一八六三年～一九四一年。ヴェルナー・ゾンバルト。ドイツのロマン派経済学者。ウェーバーが資本主義のルーツをプロテスタンティズムに求めたのと同様に、ゾンバルトは著書『近代資本主義』で資本主義のルーツを啓蒙主義思想に求めた。その後、『ユダヤ人と経済生活』では資本主義の拡大の原因をユダヤ人に求め、続く『恋愛と贅沢と資本主義』では恋愛＝女こそが資本主義拡大の原因であるとした。フランス啓蒙主義が宮廷恋愛を都市に流出させ、男が女にモノを貢ぐ「愛妾経済」ができあがった。これが資本主義のルーツである、と言うのだ。

言うまでもなくゾンバルトはフェミニストから忌み嫌われていますが、これはまさしく一面の真実です。日本の現状を見ていただきたいです。

例えばバブル時代の恋愛とは、こういうものでした。映画館で女に『私をスキーに連れてって』[75]を（男のオゴリで）見せます。映画と現実の区別がつかない犬の世界観で生きている女が、「私も原田知世のようにスキー場に連れて行ってほしいわぁ」と寝言をほざきます。で、男はやりたい一心で女を西武バスに乗せ、苗場プリンスホテルまでお泊りに行きます。全部男のオゴリです。で、たいしてうまくもないくせに、いやそもそもスキーに青春を捧げる情熱もないくせに、お洒落気分で女はスキーに興じるわけです。原田知世になったつもりなのです。脳内ではユーミンの歌が流れています。現実と空想の世界の区別が全然ついていません。苗場は周囲から隔離された世界ですのでボッタクリ放題、カレーライス一皿一五〇〇円です。全部男のオゴリです。プリンスホテルに高い宿泊料を払います。全部男のオゴリです。ここまでやって、やっと、男はセックスさせてもらえるわけです。合計金額を計算すると、ソープランドよりずっとずっと高いです。しかし男は考えます。「俺はソープ嬢ではなく、素人女とヤった。ソープに行ってる奴より俺のほうがモテている。故に俺は勝ち組だ」こうして、映画・音楽・スキー場が三位一体となった「恋愛」という商品が見事に消費されたわけです。

ゾンバルトによると、**すでに資本主義は最初の段階からこのような「恋愛資本主義」だった**というのです。僕は『電波男』で、恋愛資本主義は資本主義とバブル経済がたまたま融合した結果だと書いたのですが、すみません僕が間違っていました！人間恋愛、現実恋愛の本質とは贅沢であり、贅沢が資本主義を産んだのです。

(75)「私をスキーに連れてって」一九八七年。ホイチョイ・プロダクションのスキー翼賛映画。ヒロインは原田知世。ユーミンこと松任谷由実の挿入歌『恋人がサンタクロース』が印象的。っていうか映画館に行ってないのにテレビのCMスポットで強制的に刷り込まれた。

中世のキリスト教時代は暗黒時代と言われるぐらいで、王侯貴族、教会以外はみんな貧乏で全員喪男でした。「悪平等」の世界だったのです。キリスト教という喪男の世界観が全世界を覆っていたのですから、これは当然です。つまり中世の人間はみんな喪男＝負け組でした。偉いのは神様だけです。悪平等の世界ですが、競争もないわけです。みんな不幸がデフォルトなので、あまり悩みません。「いっぺん王様になってみたいのー」とつぶやくぐらいで終わりです。

しかし、近代は違いました。近代では、神に代わって人間が世界を切り開いてよいということになりました。人間には「共通感覚」や「絶対精神」が備わっているので大丈夫だ、というわけです。世界は突如、人間の精神によって作り変えられる舞台となりました。ひきこもり続けた反動でナチュラルハイ状態に陥ったのです。

中世も近代も、いずれも「人間（俺）」と「世界」の分裂を回避するために何らかのシステムを採用していたわけです。中世では「この世は全部地獄だが、死ねば天国＝二次元に行ける」という「未来／あの世に先送り方式」の救済システムが採用されていました。神様を信じていれば大丈夫。**そもそも庶民はろくに文字も読めませんから、教会の言うことを鵜呑みにするだけで、余計なことは考えられません。**これは文化が遅れていたというより、わざとそうしていた節があります。聖書では、知恵とは悪魔から授けられた「余計なもの」でした。ただし教会や王侯貴族といったモテ組の中には「この世をキリスト教の理想世界にしよう」という外向きの情熱を持った面々もいて、十字軍を結成したり魔女を狩ったりして「この世を二次元に合わせよう」と頑張っていたわけです。まあ全部失敗しましたが。しかし、全体としては庶民はみんなひきこもり状態ですから、（近代以後のことを思えばまだ）平和だったのです。

近代は、「世界（キリスト教の教え）」に人間が合わせるのではなく、「俺」に「世界」が合わせるべきだ、と考えた時代でした。大勢の人間がひきこもりをやめて積極的に三次元＝世界を征服し始めたわけですから、いろいろ問題が起こりました。植民地主義とか、帝国主義とかです。ヘーゲルによれば国家こそが絶対精神の最終的な姿なので、国家が喪男を救済する最高の機関だと考えられるようになったわけです。また具体的な個人救済の方法のひとつとして採用されたのが、脳内の神への信仰ではなくて現実の女との恋愛、つまり「贅沢」なんです。

つまり、中世と近代とでは、何もかもがひっくり返ったのです。

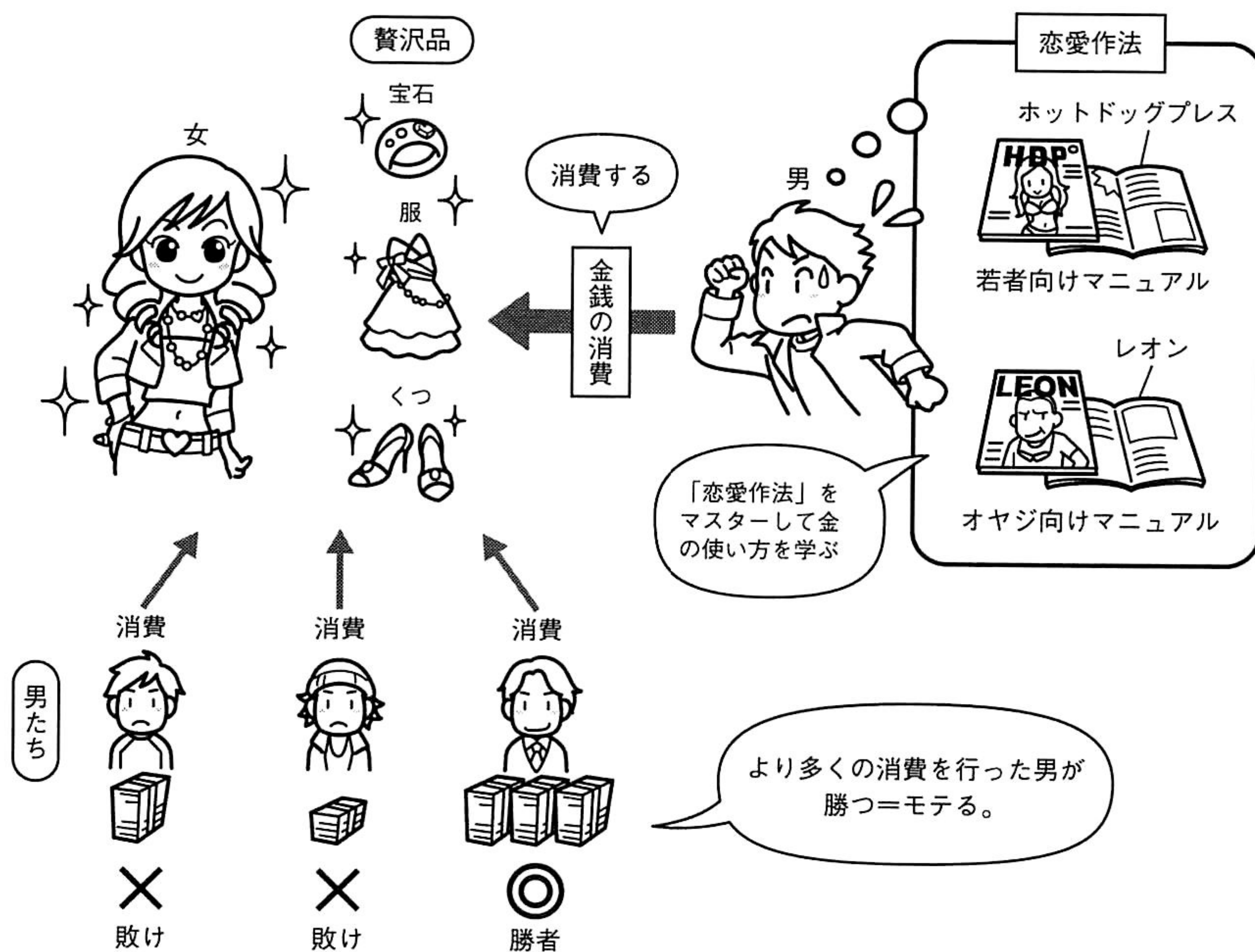
ゾンバルトは、例えば高級風俗店なんてのも宮廷から都市へと流出したものだといいます。**洗練された宮廷恋愛文化は、風俗店を通して大衆へ伝えられていった**のだと。そうか、それでソープやラブホテルって宮殿みたいなデザインだったりするのか。ゾンバルトはさらに、資本主義経済を「愛妾経済」とまで呼ぶのです。ゾンバルトによれば、近代の恋愛とは図3－6のようなものです。

ゾンバルトは近代恋愛を一種のポトラッチ行為としてとらえていた。女性を神として崇拝する騎士道のロマンティシズムが経済的なポトラッチと結びついたために、資本主義市場はどこまでも拡大し続けなければならなくなったのだ。

図3—6　ゾンバルトの「恋愛」システム

男が「恋愛作法」に金をつぎ込みます。より多くの金をつぎ込んだ男が女にモテるのです。で、女の側も、妻でなくても「愛妾」でよかったわけです。贅沢できるから。

これは拙著『電波男』の話ではありません。

マックス・ウェーバー[*76]と肩を並べるドイツの経済学者が、そう言っているのです、いまから一〇〇年も前に！

近代的恋愛は、そもそもはゲーテが描いたようなロマンティシズムの文化だったはずです。「僕は、君のためなら死ねる！」という岩清水君[*77]イズムこそが恋愛の原点でした。女性を神の如く崇拝し、神への信仰に代わって恋人への恋愛感情を抱くことで自我の安定を得る。それが近代に発明された「恋愛」でした。それが、なぜ、「愛妾経済」などに堕落してしまったのでしょうか？ ゾンバルトはこの謎を、「女性優位」というフェミニストに焼き殺されそうな言葉で解明します。

『竹取物語』[*78]では、かぐや姫は凄い美女だったのでモテモテでした。しかし、自分に求婚する男たちに対して絶対にありもしないような贅沢品を要求します。かぐや姫は「モテの魔の手」を払いのけるためにわざと無理難題をふっかけただけなのですが、男たちは「君のためなら死ねる！」と言い出してありもしない贅沢品を捜し求め、流浪し、破滅していきます。まるで聖杯を探求する円卓の騎士のように！

つまり、喪男たちが騎士道精神に目覚めて「君のためなら死ねる！」と女たちに言い出した結果、女たちは調子に乗って「贅沢させろ」と言い出した。かくして、喪男たちは七つの海を渡り歩き、植民地を切り開き、黒人を奴隷にし、労働者を搾取し、環境を破壊しまくり、「資本主義」という狂った世界を作り上げてしまったのだ、と

⑯ マックス・ウェーバー
一八六四年〜一九二〇年。ドイツの経済学者。ヨーロッパにおける資本主義の発展が、実はプロテスタンティズムの勤勉の精神と関連していると主張した。代表作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。

⑰ 岩清水君
七〇年代、『週刊少年マガジン』に連載された梶原一騎＋ながやす巧のマンガ『愛と誠』に登場する脇役キャラ岩清水弘。ヒロインの早乙女愛に片思いする眼鏡クン。まったく相手にされていないのに「君のためなら死ねる！」という名言を勝手に吐いて伝説になった。現代ならストーカー防止法で逮捕される人。このマンガには「女はDQNが好き」「女は喪男が嫌い」「いい人いい人、どうでもいい人」という恋愛世界の三原則がこれでもかと描き尽くされている。

⑱ 『竹取物語』
平安時代に創作された日本最古の物語小説。ある日、おじいさんとおばあさんは竹の中から女の子を見つけ、かぐや姫と名付けて育てる。超絶的な美少女になったかぐや姫はあらゆるイケメンの誘いを振り切るため、「仏の御石の鉢」「蓬莱の玉の枝」「火鼠の裘（かわごろも）」「龍の首の珠」「燕の子安貝」といった絶対に手に入らない贅沢品をイケメンたちに要求。イケメンどもは哀れ次々と倒れていく。こうしてかぐや姫は見事に処女を守り通し、UFOに乗って生まれ故郷の月へ帰るのだった。

ゾンバルトは考えたのです。

女のワガママをいちいち聞いていたらキリがないということは、ハーレムの現実を目の当たりにしてウンザリしたお釈迦様が大昔に悟っておられたのですが、ゲーテたちロマン主義者はみんな童貞魂溢れる喪男ですからそういう考えには至らなかったのです。ゲーテは、そんな現実の女のワガママなどどうでもよくひたすら脳内で「恋愛」に萌えていたのかもしれません。

ですから近代的恋愛は、喪男のロマンティシズム＝「萌え」の精神と、女の贅沢・ワガママ＝「物質主義」が融合した結果、「恋愛資本主義」という形となって完成したわけです。しかし、女だって好き好んで贅沢に走ったのではないと思います。女も「萌え」としての恋愛を本当は求めていたはずです。しかし、現実は厳しい。**イケメン王子様なんて歌舞伎町のホストクラブにしかいません。**いまでも「シンデレラ・コンプレックス」[*79]なんて言葉がありますが、白馬の王子様なんかを信じていても負け犬女になるだけです。ですから、どこかで妥協しなければなりません。

王子様がダメなら、せめてお金持ちとくっついて贅沢して、本当の萌え恋愛ができないウサを晴らしたい。そう考える人が結構多いわけです。「現実」（三次元）と「空想」（二次元）の区別がついていない。目に見える現実全部が二次元（自分の空想）に合わせるべきだと信じている。彼女たちはたいていカントだのデカルトだのの哲学など知りませんから、そこに二元論的な葛藤などありません。「二元論」という概念をそもそも知らないのです。

もちろん、男の中にもゲーテ的な、あるいはキルケゴール的な喪男精神などかけらもない奴だって大勢います。そういう男は、やりたい一心で女にホイホイと贅沢させ

⑲ シンデレラ・コンプレックス
コレット・ダウリングの著書『シンデレラ・コンプレックス』で紹介された概念。他者（イケメン）に依存したいなー、いつか王子様が迎えに来てくれないかなーという無意識的願望のせいで女性が才能を発揮できずにいる状態。女性の自立を阻む内的要因。婚期を逃す原因ともされる。

るわけです。すると前述したようなタイプの女にモテますよね。
かくして、「女に贅沢させると少々ブサイクでもモテるらしいよ」となり、世の大多数の男はブサイクですから、「そうか!」ということになります。で、ますますその手の男がモテるようになります。その結果、「君のためなら死ねるっ!」というロマン主義を抱いた喪男は、その愛深き故にますますモテなくなり、キモメンという名のレッテルを貼られて恋愛資本主義ピラミッドの最下層に落とされるのです。

ショーペンハウエルの厭世主義

さて、そんな近代の爛熟と迫り来る世紀末を目の前にしたショーペンハウエルは、人間の持つ「意志」は暗くて盲目だ、つまりダメだ、と断じました。これが厭世主義(ペシミズム)です。人間はもう終わりだ。なぜダメかというと、意志は単なる「衝動」だからです。「モテ」というのはただの衝動です。「動物化」です。そんな「モテ」が「絶対精神の実現」とやらに向かっているなんて、どう考えても信じられません。モテ男は単に女の膣に射精したいだけで、それはシャケが生まれ故郷の川に戻ってきて卵の上に射精してクタバっていくのと同じです。共通感覚だの道徳律だのとはまったく無縁です。そんな立派な「意味」や「目的」など、人間にはないのです。
この世には、喪男だからこそわかる真理があるのです。時代は一九世紀ヨーロッパ。モテ男が恋愛資本主義にハマって女に贅沢させるべく狂奔していた陰で、喪男のショーペンハウエルは「すべては虚しい」「欲望を捨てよう」とブッダ思想を唱え始めたのです。
で、ショーペンハウエルは、この苦しみに満ちた自分を救うためには、まずは「芸

術」だ、と説きました。**要するにオタクになれ**ということです。芸術もまた、社会の近代化によって急速に大衆へと普及しつつありました。萌えろ、ということです。もちろんショーペンハウエルは暗い人なので、アッパー系[80]の萌え萌え芸術はあまり評価しませんで、「悲劇」と「音楽」を重視しました。いまなら『ＡＩＲ』なんかオススメ。

しかしそれだけではまだ苦しみは残ります。最後には「禁欲」しなければいけない、とショーペンハウエルは考えました。完全に解脱してしまえというわけです。

こんなに暗いショーペンハウエルの哲学が大流行した理由は、彼の思想が近代恋愛資本主義社会から落ちこぼれた大勢の喪男の共感を呼んだからです。つまりショーペンハウエルが近代にペシミズムをもたらしたのではなく、喪男たちのペシミズムの叫びが彼にペシミズム溢れる哲学書を書かせたのだと言えます。

最初に哲学史を喪男の歴史として語ったニーチェ

ニーチェもまた、ショーペンハウエルに感銘を受けまくった喪男の一人でした。しかし、ニーチェはここから、今まで誰もなしえなかったような仕事を始めます。西洋の歴史とは、「喪男のルサンチマン」の歴史だった、と言い出したのです。

そうです、哲学史を「喪男の歴史」として語るのは、僕がオリジナルではありません。これは実はニーチェが最初に始めたことです。もちろんそんなことができたのは、ニーチェが喪男だからです。ニーチェは、自分の卑小な自己満足を得るために高みから喪男を見下ろして「非モテ」だとか呼んで偉そうに分析しているような連中とは違います。これは喪男の血の叫びなのです。なにしろ、彼は途中で狂ってしまっ

⑧⓪ アッパー系
人の性格やアートの性質の一つ。いわゆるイケイケドンドン。ポジ志向で、ひたすら上昇していくのが特徴。反対は「ダウナー系」。こっちはどんどん下降していく。クスリにもアッパー系とダウナー系があるらしいので、最終的には脳内ホルモンの種類に還元できそう。

て、それっきり電波お花畑から戻ってこなかったのです、テレビ版『機動戦士Z（ゼータ）ガンダム』[81]最終回のカミーユ・ビダン[82]になったんです。カミーユもまた、イケメンのモテモテハーレム野郎・シロッコ[83]をルサンチマンでブチ殺して、それっきり二次元に旅立ってしまった喪男英傑でした。テレビ版ではね。

　最近、なんでもかんでも「あいつの言ってることは弱者のルサンチマンだ」の一言で否定する人が増えてますが、ルサンチマンとはそもそも喪男が血みどろの自己観察の果てに内面に発見するべきものすなわち原罪であり、他人をバカにしたり喪男の血の叫びを封殺するために「他人事」としてルサンチマンという単語を便利に使うのはいかがなものでしょうか。ルサンチマンは喪男の内面にいきなり自発的に湧いてくるものではなく、社会という人間関係の関わりの中から生まれてくるものです。つまりルサンチマンは社会の問題であって個人の内面の問題ではないのです。ブッダの言う「縁起」です。原因があり、結果がある。もっと言えばこの世にルサンチマンのない人間など、ただの一人もいません。哲学とは「知」ではありません。哲学とは「血」なのです。**血を流さない哲学、他人事の哲学など、哲学と呼ぶに値しません。**少なくともニーチェはそう考えました。

　さてニーチェはこれまでの西洋思想をすべて、あたかもちゃぶ台をひっくり返すかのように転倒させました。まず、善と悪が西洋においては逆になっている、とニーチェは言いました。西洋の価値観というのは、つまりキリスト教の価値観のことです。キリスト教は、弱者を「善」、強者を「悪」と考えます。すでに見てきたようにキリスト教が喪男宗教である以上これは当然のことです。これに気づいたニーチェは、「ちょっと待った！　異議あり！」と物言いをつけたのです。「普通に考えたら強者が

[81] 『機動戦士Zガンダム』
一九八五年〜八六年。サンライズのテレビアニメ。『機動戦士ガンダム』の正統な続編。監督は富野由悠季。ショーペンハウエル的な厭世観が漂い、続々とニーチェ的な超人主義者が現れては演説や議論を始めるという、前作とはまったく異なる暗いトーンの作品になっている。

[82] カミーユ・ビダン
『機動戦士Zガンダム』の少年主人公。第一話からすでに宇宙を幻視していたり、名前をバカにされたと言っていきなり軍の将校に殴りかかるなど、かなり情緒不安定だった。戦争に参加したことでどんどん精神のバランスを崩し、最後は発狂して脳内彼女たちのハーレムへ飛翔する。戦争の悲劇と「解脱以外に救いはない」というショーペンハウエル思想を体現したかのようなキャラだったが、二〇〇六年に上映された映画版では死屍累々の戦場に叩き落とされ目の前で戦友を大勢失ったにもかかわらず、人間彼女と抱き合ってハッピーになる。裏切り者ぉ！

[83] シロッコ
パプテマス・シロッコ。『機動戦士Zガンダム』に登場するキャラクター。自身はイケメン男だがなぜか「女性による世界統治」を唱え、配下にも女性を集めていた。最後はカミーユと女の亡霊たちによって金縛りに遭い、死んだ。フェミニストなのか似非（えせ）ハーレムを作ろうとした詐欺師なのか、未だに評価の分かれるところだが、早死にしてしまったために「ロリコン・マザコン」の一言で言い表せるようになってしまったシャアと違い明確な結論は出せな

善で弱者が悪なのではないのか」と。つまり、喪が善で、モテが悪という喪男宗教の価値観は、実はモテない喪男＝弱者のルサンチマンによって生み出されたものなのだ、とニーチェは気づいたのです。**実は神の軍団こそが人間を抑圧した悪で、デーモンこそが善なのです。**かつて「神」がやってくるまで、デーモンは楽しく暮らしていたのに、そこに「神」という名の喪男がやってきてデーモンを抑圧したわけです。

な、なんだってー。

ニーチェは、現実＝三次元における弱者、つまり喪男の生み出したルサンチマンが、キリスト教という「奴隷道徳」を作り上げたと喝破して断罪しました。かつて、三次元でどうしても勝ち組に入れない喪男は、「脳内」＝「二次元」という別の世界を作り上げることで、まず「脳内勝利」を目指しました。以後の西洋はずっと「二元論」の問題を抱え、「世界は地獄だ」という絶望に囚われてきたわけですが、これはそもそも喪男宗教キリスト教のせいだとニーチェは考えたのです。

次にキリスト教は「二次元」で作り上げた喪男思想を三次元世界に押し付けました。人間は全員罪人＝喪男であるとか、神に萌えなければ地獄に落ちるとか、セックスは良くないとか、女はバカだとか、いろいろ。元々が喪男哲学から出発したキリスト教の世界では、喪男（弱いもの、モテないもの、貧乏）が善で、モテ（強いもの、モテるもの、金持ち）は悪です。

すなわち、**喪男がヨーロッパ世界に「二元論の苦しみ」と「善悪の転倒」を流布した**のだというわけです。それによって喪男は世界に復讐を果たしたと。喪男は腕力で勝つのではなく、二次元という妄想を武器にして、三次元、すなわち世界を支配したわけです。かくして、世界の全人類が、元々は喪男に課せられた義務、「禁欲」や

い。少なくとも童貞カミーユはシロッコの所行に怒り狂っていた。

「罪悪感」や「絶望」を背負わされるようになったのです。

後にマルクスは貧乏人のルサンチマンによる「共産革命」を説きますが、ニーチェによればイエスもまた喪男のルサンチマンによる「喪男革命」を説いたのです。

「左の頬をぶたれたら右の頬も出しなさい」なんてどう考えてもバカげているとニーチェは考えました。「目には目を」[*84]と考えるほうが普通です。「処女が子供を生んだ」なんてのも妄想ですし、「死人が生き返った」なんてのも非科学的です。すでに科学文明が発達した近代では、信仰と合理主義との力関係が逆転してキリスト教の力はすっかり衰えていました。ニーチェは、そんなキリスト教に最終鉄槌を下したのです。牧師の息子であり自身も喪男であるニーチェが「キリスト教」という西洋の喪男思想体系を破壊したのですから、『吸血鬼(バンパイア)ハンター〝D〟[*85]』みたいな話です。

それにしても、喪男でありながら同じ喪男をここまで攻撃するというのはどうなのかと思いますが、ニーチェは信仰を捨てた時期に反動で売春宿に通い倒し、梅毒になったと言われています。さて、僕の周囲を見回しますと、**意外に「喪男が風俗にハマったとたん、DQNになる」というパターンが多いことに気づかされます。**そうならない人もいるんですが、そうなる人もいるんです。ニーチェもあるいは風俗に通いすぎて「俺は超人だーっ！」と確信してしまったのかもしれません。キルケゴールは一回だけ売春宿に行って恐ろしい目に遭い「くわばらくわばら」と逃げてきたわけですが、ニーチェはとことんまで通い倒し、梅毒になったと言われています。[*86]ここでも喪男には護身が必要だということがわかりますね。

⑭「目には目を」
紀元前一八〇〇年頃、メソポタミアのバビロニア王国が作った世界最古の法律「ハムラビ法典」の第一九六条「目には目を、歯には歯を」が出典。イエスはこれに対して「右の頬を打たれたら左の頬を出しなさい」と説き、復讐を禁止したのだ。しかしいざ小役人に平手で打たれたイエスは「なんで俺を殴るんだYO！」と反論したのだった。どっちなんだ。

⑮「吸血鬼(バンパイア)ハンター〝D〟」
菊地秀行のSFホラー小説、吸血鬼ハンター〝D〟シリーズ。戦後日本の伝奇小説を代表する作品。超未来、バンパイアが人間を支配する世界を舞台に、人間とバンパイアの混血種でありバンパイアハンターでもある「D」の活躍を描く。

⑯「梅毒になったと言われています」
通説ではニーチェは四五歳の時に梅毒が脳に回って発狂したと言われているが、ニーチェは梅毒ではなかったという説もある。ニーチェが発狂した時の担当医の診断は「進行性麻痺症」であり、これは脳梅毒の典型的な症状だったことから梅毒説が固まった。ヤスパースも麻痺症だったと推察している。しかし斎藤茂吉は麻痺性痴呆であれば通常一一年間も生きられないことから、麻痺症ではなかったのではないかと推論している。ちなみに一九世紀当時、梅毒はヨーロッパではごく普通の病気であり、まだ完治させる治療法がなかったために蔓延していた。ニーチェの病気が何だったのかという問題についてはドイツ文学研究者にして精神科医であった

神の代わりに永劫回帰を唱える

ニーチェは「神は死んだ」と言い出しました。

デカルトが世界を「モノ」にすぎないと切り捨てたことによって、科学は凄まじい勢いで発達し続けていました。しかし哲学の分野では、神の代替としてまだ「共通感覚」とか「絶対精神」のような神の亡霊が残っていました。ニーチェはそこで、哲学の分野からも神を抹殺しようとしたのです。それが有名な「神は死んだ」宣言です。こんなこと言っても火あぶりにならなかったのですから、キリスト教の権威も落ちたものです。

ところがニーチェは、神を否定したのはいいのですが、神に代わる喪男の魂の救いの道をなかなか見つけることができませんでした。キルケゴールと同じです。キルケゴールも教会の権威を否定しましたが、結局は神の代替物を発見できませんでした。この頃、巷(ちまた)では広く「恋愛資本主義」が勃興しており、大衆は神に代わって、恋愛と贅沢と金を自我の支えにしていたのです。なぜ近代西洋国家が植民地を開拓しなければならなかったかと言うと、資本主義という世界は、市場の拡大や生産力の増強などといった成長を永遠に続けなければ維持できないからです。つまり人間の欲望が全開になっていたのです。

ニーチェがキリスト教を奴隷道徳として否定し、「力への意志」を肯定した背景には、そのような時代精神があったのです。つまりニーチェは弱肉強食の資本主義社会を肯定したんです（本人は「違う」と言いそうですが……）。じゃあ、喪男はどうなるの？ニーチェは「神」の消えた地獄のような世界において喪男の生きる道を「永劫回帰(えいごうかいき)」という概念で表しました。

小林真の『ニーチェの病跡』という研究書に詳しい。ニーチェの梅毒問題とキリストの非童貞問題の真相はもはや永遠の謎であるが、いずれも信者にとっては絶対に否定されるべき冒瀆であることに変わりはない。なぜならニーチェもイエスも、喪男のカリスマだからである。喪男のカリスマが梅毒だったり非童貞だったりしてはいけないのである。筆者個人の意見としては、ニーチェが実際に梅毒だったかどうかはたいした問題ではなく、ニーチェが脳内萌えに満足しない「人間女大好き」人間だったということと、にもかかわらずルー・サロメにまったく相手にされなかったということこそがニーチェ思想の最大の鍵なのだと考えるのだ。

永劫回帰とは、**モテない人生が永遠に続くのだ**、という恐ろしい思想です。ショーペンハウエル経由で学んだインドの輪廻思想がベースになっているのでしょう。ニーチェは、「モテない奴は永遠にモテないんだ。そのモテない自分を全肯定して生きていくしかないんだ！」と説いたのです。

無茶言うな、と言いたくなります。

だってこれではキリスト教の「モテ抑圧道徳」が「喪男抑圧道徳」にひっくり返っているだけではありませんか。

ただし、ニーチェはモテ側に立って喪男を笑っているわけではありません。ニーチェ自身が素人童貞で梅毒をうつされてひきこもりにされてしまった（と噂されていた）哀れな喪男なのです。モテないが故に風俗に通い、風俗で性病をうつされてどんどんダメになっていく。これ以上はないというくらいに悲惨な喪男です。キルケゴールのように童貞を貫いて清純に生きていた喪男よりもずっとずっと悲惨です。ニーチェに言わせれば、禁欲とか護身とかいうのも喪男の逃げ、「すっぱいぶどうの論理」なのです。お前ら、風俗に行ってみろ、そして酷い目に遭ってみろと。喪男が「現実」を生きるということは、こんなにも恐ろしいことなんだぞ！　その苦しみを知れ！　というわけです。

ニーチェは、ですから、喪男よ二次元を捨てろ、三次元だけで生きていけ、そこで梅毒になって死んでもそれが運命なのだから全肯定せよ！　と唱えたんですね。なんだか、ハマーンに追い回されたあげく『逆襲のシャア』で逆ギレして小惑星を地球に落とそうとしたシャア・アズナブルを連想させます。僕はあの映画を「逆ギレのシャア」と呼んでいます。

そうです。ニーチェはプラトン以来ずっと続いていた二元論という喪男の葛藤を、「二次元を全破壊する」という無茶な荒業で解決しようとしたのです。

図にすると、こうなります（図3－7）。単純明快でわかりやすいです。喪男の考える思想をすべてルサンチマンであるからという理由で否定していけば、このような三次元一元論の世界になるのは当然です。というか、モテ男や大半の女にとっては、これこそが世界なのです。彼らは現実に対する根源的な絶望を抱えていませんので、二次元などを発明する必要はないのです。ニーチェがやったことは、『新世紀エヴァンゲリオン』の最終回でアニメを否定して「オタクは現実へ帰れ」と言い放った庵野秀明監督に似ています。しかし、言うまでもなく庵野監督はオタクをやめることができませんでした。そうです、オタクは生まれながらにオタクなのです。同様に、**生まれながらの喪男であるニーチェも喪男をやめることはできませんでした。**

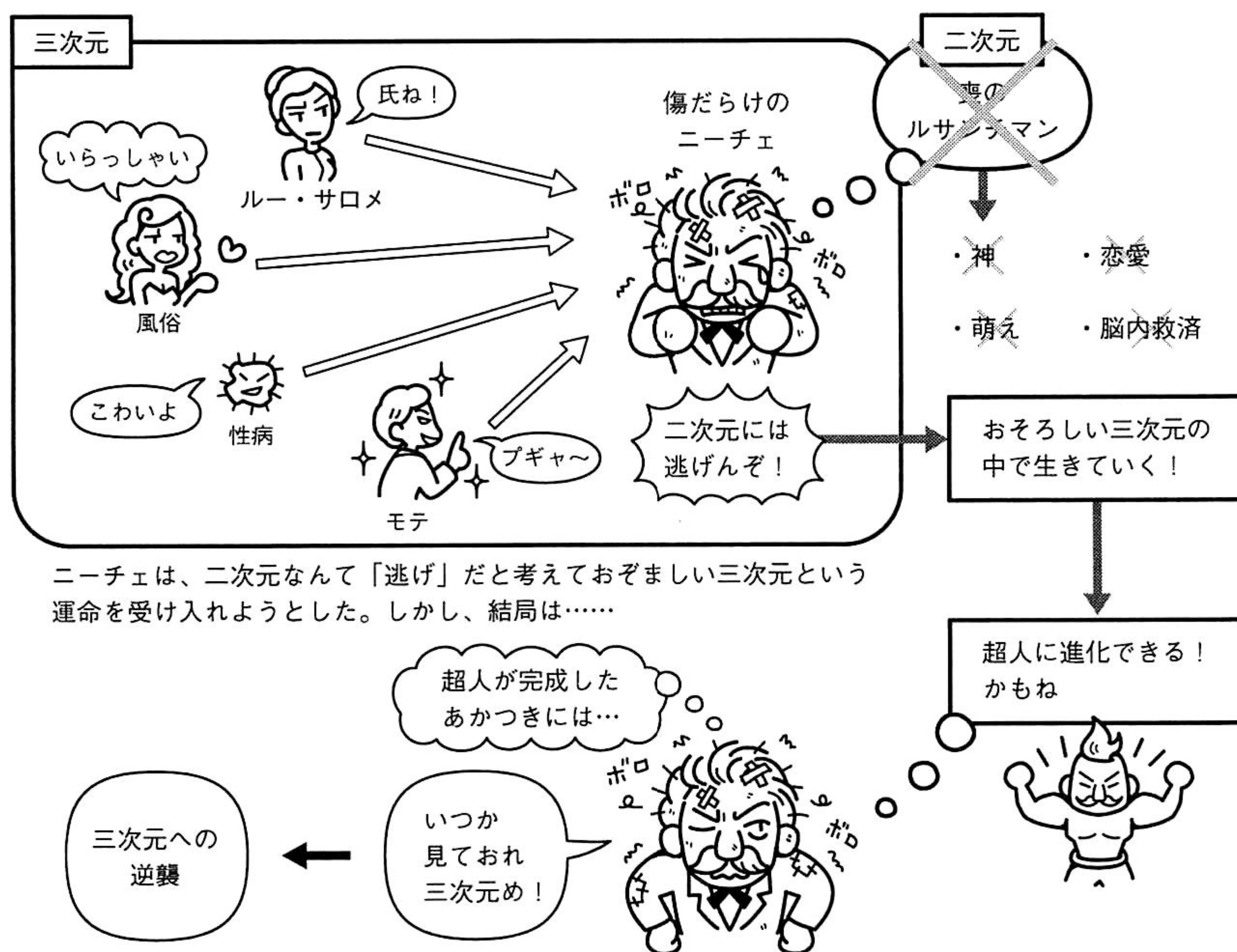
ニーチェは、二次元なんて「逃げ」だと考えておぞましい三次元という運命を受け入れようとした。しかし、結局は……

「超人」という新しい二次元キャラを産み出さねば耐えられなくなった。超人は「俺」が萌えキャラ（神）になったもの。どこまでも「俺」にこだわったのがニーチェなのだ。そして、超人が三次元の人間たちを倒すという未来をも幻視してしまった。これがヨーロッパの終わりの始まりとなった。

図３—７　ニーチェの世界には三次元しかない

超人という「俺萌え」の道

しかしニーチェは、ただ「喪男は喪男のまま生きろ」と言い放っただけではなく、自分なりに解決方法を考えました。それが「力への意志」と「超人」です。力への意志とは、自由や権力を求め、生きようとする意志のことです。もちろん、この概念の背景には近代の資本主義の隆盛があります。

しかし、ただ力への意志を抱いているだけでは救済はありません。そこでニーチェは「超人」という模範を作りました。超人は、ニーチェにとっての萌えキャラです。ただし**ニーチェはよほどルー・サロメ**[*87]**への失恋に懲りたのか**、恋愛による救済を否定し、本当に自分だけで自分を救うことを考えました。とはいえニーチェは二次元を否定していますので、三次元の世界で女の力に頼らず自己救済しなければならないということになります。

二次元を捨てた喪男が自分で自分を三次元で救う道。これはあまりにも厳しく険しいです。

超人は、キリスト教やなんとか哲学といった他人の価値観に寄りかかって安易に生きる道を否定します。他人の価値観で生きるということは、結局、他人と自分を比較して「俺はあいつより偉い」という優越感を生み出すために生きるということです。恋愛資本主義なんてまさにそれですよ。誰が金持ちだの誰がブサイクだの誰がオタクだの、実にくだらないことに優越感を見つけるために、差別が差別を生み、どこまでもくだらない人生が続くのです。他人に踊らされた人生です。

喪男哲学の出発点には、「なぜ人間はモテと喪男に分かれるのか。人間が人間を差別するのはなぜか」という根源的な問題があります。これに気づくのは喪男だけで

㊗87 ルー・サロメ
一八六一年〜一九三七年。ロシア生まれ。彼女を巡る喪男たちの没落と死の輪廻はまさに「永劫回帰」だ。こんな人が「自立した近代女性の理想像」なら、僕は人間女とは永遠に関わり合いになりたくありません。

す。モテは現実が楽しいから気づきません。現実に苦しめられる喪男だけが、世界が内包する根源的な問題を発見することができるのです。つまり、ニーチェは地上最強と言っていい喪男だったのです。彼はあまりにも喪男であったために、キリスト教が実は喪男哲学であることをうっかり見抜いてしまったのです！　ニーチェはショックのあまり神学（二次元）を捨てて当時流行していた風俗（三次元）に走った（らしい）のですが、そこでもっと酷い目に遭ったというわけです。二次元にも三次元にも居場所がありません。

そこで一時はロマン主義的な恋愛つまり「人間女萌え」に救済を見ようとしたのですが、ルー・サロメとの恋愛に挫折し、恋愛も捨てました。恋愛を捨てたというより、恋愛が彼を救わなかったのです。ニーチェがルーを追えば追う程、ルーにキモがられるばかりだったのです。

そうです、喪男はモテないので恋愛では救われません。

で、最後に「俺萌え」に至ったのです。

俺萌えとは何か？　「萌えキャラ」は人を救う神の代替物です。一般的には二次元キャラ（脳内キャラ）です。**近代の恋愛は、この脳内の萌えキャラ（プラトンのイデア）と、三次元の人間女とを無理やりに同一視することで成立しています。**ですから現実の恋愛は「百年の恋も冷める」という結末ばかりなのです。しかし真の喪男哲学者であるニーチェは、恋愛もまた欺瞞（ぎまん）にすぎないとすぐに知りました。また、出会った女が悪かったのです。ルー・サロメです。

女に捨てられて「超人」宣言

ルー・サロメは、モテモテでした。ある時、イケメン哲学者のパウル・レーに結婚を申し込まれます。素直に結婚すりゃあいいものを、ルー・サロメはなんと、
「私と、男二人とで、共同生活しましょう。それが三位一体よーっ！」
と言い出したのです。何が三位一体だ。サークルクラッシャーとはまさにこのこと。

パウル・レーも逃げ出せばいいものを、言うことを聞いてしまいます。アホですね。で、もう一人の男として選ばれたのが、当時ひきこもりになっていたニーチェだったのです。

僕がニーチェだったら、間違いなくこれを「恐るべきモテの魔の手」と喝破し、護身したことでしょう。しかしニーチェは当時三八歳独身ひきこもり喪男。これを逃がしたら一生独身、永劫童貞です。なのでうかうかとモテの魔の手に落ちてしまったのです。ニーチェはちゃくちゃくと「三位一体計画」を進めるルー・サロメに会うなり一発で夢中になり、「二人の出会いは運命なので結婚しましょう」と言い出しますが、「イヤ」と秒殺されます。絶対運命黙殺録。そんな風にツンツンされ続け、一発もやらせてもらえないのにもかかわらず、ニーチェはルー・サロメにかしずいて小躍りするわけですが、一方のルー・サロメは「どうもあの人とは考え方があわないわね」とクールなものでした。ああ、ニーチェ先生っ！

あなたは僕ですかっ⁉

さて、言うまでもなく、ルー・サロメはキモオタ独身男のニーチェを捨てて若いイケメンのパウルと二人で同棲を始めます。これが世界の現実です。ニーチェは、ルー

が自分にはプラトニック・ラブだの知性がどうだのとほざいてやらせようとしなかったのに実はイケメンには股を開く奴だと邪推して激怒しました。
ただルーの名誉（？）のために付記すれば、実際にはパウルも一度もやらせてもらっていませんでした。だが、ニーチェの脳内ではルーとパウルがギシギシアンアンやっている妄想映像がノンストップで展開していたであろうことは想像にかたくありません。
永劫回帰とは、まさにこのこと。
ただ、この時点のニーチェはまだ喪男の永劫回帰を運命として全肯定できる超人にはなっていませんでした。
傷ついたニーチェはルーに「ビッチ、氏ね」「2ちゃんにスレを立ててお前がバイタだと書き込んでやるぞ」みたいなキモメールを送りつけます。いまならストーカー防止法で逮捕です。それでもなおまったく相手にしてもらえないので、ニーチェはあてつけで何度も自殺騒動を起こします。それでもやっぱり、まったく相手にしてもらえませんでした。ルーはニーチェのことを「もう用済みの、どうでもいい人」としか思ってなかったのです。で、ルーはニーチェの愛人という売りでニーチェをモデルにした小説を書き、売れっ子作家に成り上がりました。
なんたること！
こうして人生最大の生き地獄に落とされたニーチェは、ヤケクソで『ツァラトゥストラはこう言った』を書き上げたのです。第一部は、たったの一〇日間で書かれたそうです。ルーにキモオタ扱いされて世界から排除された絶望と悲しみが、ニーチェの喪男としての資質を開花させ、「神は死んだ」という大発見を成し遂げさせたわけで

す。ちなみに僕は『電波男』を一ヵ月で書きました。
　こうして「永劫回帰」「超人」という概念が生まれたのです。そうです、「永劫回帰」は喪男を高みから見下ろして言っている言葉なのではありません。「俺は永遠にモテない」「俺は永久に童貞」「俺の魂は誰にも救われない」というニーチェ自身の喪男の血涙によって「永劫回帰」という思想が生まれたのです。喪男を見下ろして「永劫回帰だから我慢して生きろ」と鼻で笑ってるような奴はニーチェの亡霊にでも取り憑かれて死ねばいいんです。
　ああ。神は死んだ。恋愛も俺を相手にしない。風俗はおっかない。
　かくなる上は、「俺萌え」だーっ！
　超人とは、「この世界をたった一つの舞台として、自分自身に萌え続けろ」という俺萌え宣言だったのです。超人は「自分自身」の「価値観」を自分で作り出し、他人の価値観など意に介さずに生きていく、真に自立した人間です。
　人間が差別をやめられないのは、カースト制度や恋愛資本主義のような「差別の体系」を作らないと生きていけないのは、自分の内面に自分だけの「神」、自分だけの「救い」を持たないからだ、とニーチェは悟ったのです。だからこそブッダやイエスは二次元による救いを説いたにもかかわらず、彼ら自身が「差別の体系」の象徴であるカリスマ、つまり「神」にされてしまってきたのです。
　これでは堂々巡りです。
　すべての喪男が「自分で自分を救う」意志を持つ「超人」として目覚めない限り、喪男は永遠に救われないのです。なので「神」（＝「萌えキャラ」）と「俺」を一致させればいいのだ、とニーチェはひらめいたのです。喪男すべてが「俺」つまり自分に

萌えれば、カリスマは生まれない。生まれようがない。故に、ある偉大な喪男が開いた悟りが、時間とともに「奴隷道徳」に変質する恐れもなくなる、ということです。

ニーチェの超人思想とは、ですから、**「誰が何を言おうが俺は俺だ、俺万歳」**という俺萌え主義なのです。

ニーチェはさっそく「俺萌え」を実践しました。『この人を見よ』という俺萌え本を書きました。「俺はなぜこんなに頭がいいのか」とか「俺はなぜこんなに良い本を書くのか」といった「俺賛美」を長々と書き連ねました。そしてニーチェは発狂し、廃人になってしまいました……。

「俺萌え」はあまりに早過ぎたのです……。

ちなみに、パウルも結局、童貞のままルーに捨てられました。ルーを、「俺と結婚してくれなきゃ死ぬ！」と突如自分の胸をナイフで刺すというウルトラＤＱＮな男アンドレアスにあっさり奪われたのです。結局、ニーチェもパウルも奥手、つまり喪男だったんです。だいたい**「三位一体同棲」なんてアホな話を本気にしていた時点でモテません。**失意のパウルは失踪しました。でもルーが探してくれなかったので結局自殺しました。

しかしながらルーと結婚したアンドレアスも、その後四〇年以上の夫婦生活でついに一度もセックスさせてもらえませんでした。彼もまた行動はＤＱＮでしたが心に乙女回路を抱いていたのでした。

その後のルーは、旦那を放置したまま、サロンに出入りしてリアルビッチと化し、大勢の男とセックスしまくったのでした。一生涯処女のままだったらそれはそれで立派な人物だったと思うんですが、三〇歳前後からいきなりセックスデビューしまし

て、後はもう……。

目覚めた後のルーは詩人リルケを死の床に至るまで苦しめ、果ては精神分析学の始祖フロイトにまで擦り寄りました。「オタク食い女」ってところです。しかし人類の歴史に燦然と輝く偉大な喪男フロイトは、当然のことですが護身を完成させていました。そこでルーはフロイトの当時もっとも優秀な弟子と言われていたタウスクを誘惑し、あっさり捨てて拳銃自殺に追い込みました。タウスクは自分のちんちんを切り取って死んだという説もあります。まさにビッチ。サークルクラッシャー。

僕は、なぜ彼女が神から罰を与えられなかったのか、まったく理解できません。アーサー王を破滅させた悪姉モルガンだって、最後には傷ついたアーサー王を治療するためにアヴァロンへ連れて行ってくれたというのに。故に僕は、この世に神はいないのではないだろうかと思ってしまうわけです。ニーチェが「神は死んだ！」と悟ったのも、きっと、ルーのせいだと思うんです。近代人だったニーチェにとって「神の死」は同時に「恋愛の死」でもあったわけです。三次元での恋愛が死んだだけではありません。もはや脳内に萌えキャラを抱くこともできなくなるくらいの痛手を受けたのです。故に、ニーチェは恋愛を飛び越えて「俺萌え」になったのです。ニーチェが喪男としてはじめて二次元を捨て、三次元を主戦場とする破滅的な一元論を唱えたのは、それほど彼のトラウマが巨大だったからなのです。想像力も萌える魂もすべてを根こそぎ奪われてしまったのです、女によって。そして、絶望の末に発狂してしまったのです……。

「もう女なんか要らない！」

これがニーチェの「超人思想」の真髄なのです。

存在です。故に、女やモテや恋愛などにも惑わされないのです。売春宿にも行かなくて済むのです。それは、**すべてに挫折したニーチェにとっての最後の「夢」**だったのです。

超人とは真に自立した個人です。他人に惑わされることなく、自分自身を生ききる

しかし、ニーチェの夢想した「超人」は、なんとルー・サロメに似ていることでしょう！　ニーチェは「俺もルーみたいになりてえ、そうすればこの喪男地獄から解脱できる」と思っただけだったのかもしれません。

いずれにせよニーチェは近代における神の死だけでなく、現代における恋愛の死をも同時に宣言していたのです。時代を超越した天才とはまさにこのこと。

僕は若い頃ニーチェに憧れて大学に入ったのですが、ルーに振り回されたニーチェの後半生は真似したくありません。やはり護身が重要なのです。たとえ「超人思想」のような偉大な哲学を発見できなくても構いません！　そして、いかにフロイトが護身の達人だったことか、と精神分析学を打ち立てたフロイトの立派さにじーんと感心するわけです。彼はルーという史上最悪の「モテの魔の手」を完璧に防御したわけですから（大切な弟子のタウスクが身代わりになってしまいましたが）。

しかし、フロイトの話に移る前に、あと二人の喪男について語らなければなりません。その二人とは、恋愛ではなく政治に神を見出そうとした二人です。

ニーチェの超人思想は、一歩間違うと弱肉強食のジャイアニズムになります。「俺様のものは俺様のもの、お前のものも俺様のもの」というDQN思想に。なぜかというと、超人自身が持っている価値観が、他者との調和を一向に解せず、ひたすら自分

自身の欲望の実現のみに向けられる可能性もあるからです。本人は世界のためになると思ってやっていることが、本当に世界のためになるのかどうか、実は自己の利益のためだけにやっているのではないか、という問題を他者が検証することはできません。思い出してください。ゲーテの『ファウスト』第二部は、恋愛を乗り越えて近代的超人となったファウストが、結果的に自然を破壊する地上げ屋になってしまうまでを描いた予言的物語ではありませんでしたか。

超人は完全な単独者です。他者と共通感覚や良識によってゆるい連帯を保っているわけではありません。アムロとララァのようなニュータイプではないのです。ですから、どうしたってエゴとエゴの露骨な衝突が起こるわけです。まあ個人レベルなら、金貸しの欲張りばあさんを殺すくらいで終わりかもしれません。でもこの超人思想が国家レベルにまで拡大すると、大変なことになるのです。

第四章　国家萌えと鬼畜

1　鬼畜哲学と喪男政治　喪男集団ナチス

ニーチェからナチスへ

ニーチェの次にマルクスの話をしたいのですが、ちょっと時間を早送りしてニーチェ哲学の暗黒面が現実を支配した二〇世紀前半のドイツの状況について簡単に見てみましょう。

ニーチェは自分で自分に萌える「俺萌え」を提唱したのですが、「俺萌え」と言いましてもニーチェの場合は、脳内の二次元世界でナルシシズムに浸れという「ひきこもりのススメ」ではありません。あくまでも三次元世界における「俺萌え」です。ニーチェの特徴は、二次元と三次元の区別をつけない一元論志向にあります。つまり「俺」イコール「世界」なのです。ニーチェが生きた当時の西洋は資本主義が発達し、帝国主義・植民地主義が全盛期を迎えていた時代でした。ニーチェ哲学は、「人間の意志と力による三次元世界の支配」という資本主義社会そのものの反映でもあったのです。

キリスト教の世界観が西洋を覆っていた中世が「人類はみな喪男」というダウナーな気分のひきこもり時代だったとすれば、ニーチェが登場した**近代西洋は「もはや我慢ならん！」というアッパーな気分でヨーロッパ中の喪男がハイになっていた時代でした。**一種の反動です。長年にわたって溜め込んできた喪のエネルギーを世界へ向けて放射し続けている時代だったわけです。

「自由」という思想が生まれたのも、それまでキリスト教によって人間の自由が抑圧され続けてきたからです。中世は聖書一元論主義で、聖書に書いていないことを人間が追究したり調べたり考えたりすることは禁じられていたわけです。その時代の反動で、「自由」が何よりも尊重されるという価値観に裏返ったのです。

ところが、資本主義社会は「力への意志」によって各個人が「自由」に競争する社会ですから、時間とともに勝ち組と負け組がはっきり分かれてしまいます。ニーチェ自身もありていに言えば負け組です。病気で大学を退職してからはほとんどニート同然でしたし、神に代わって個人の自我を保証してくれる装置となっていた近代的恋愛にも無縁な喪男です。資本主義のルールの下では、資本つまり金こそが神なのですから、資本家が勝者で労働者は敗者です。恋愛もまた、よほどのイケメンか、あるいは金を持っている男が最終的には勝つようになっています。ではニーチェのようなキモメンのニートはどうすれば自我の安定を得られるのでしょうか？　これは資本主義社会の抱えた根本的な矛盾です。その苦悶をニーチェは「永劫回帰」「超人」という概念によって克服しようとしたわけです。自らが神に等しい存在になろうということです。

ただし、ニーチェは喪男なのに二元論を採用しませんでした。「俺」と「世界」とを分けて考えなかった。セカイ系に近かったのです。このことが、後にニーチェ哲学がナチスドイツに利用されるきっかけになったのです。哲学の教科書や参考書はナチスドイツについて決して語りませんが（都合が悪いのでタブーにしているようです）、哲学史について書く以上ナチスは避けて通れない問題[*1]です。

①「哲学史について書く以上ナチスは避けて通れない問題」
例えばニーチェ自身は反ユダヤ主義者ではなかったのだが（そもそもニーチェは全人類を呪う「反人間主義者」）、妹エリザベートが熱烈な反ユダヤ主義者で、ニーチェの哲学をナチス寄りな内容に編集してナチ党に接近したと言われている。第一次大戦敗戦後の混乱期、ワイマール時代のドイツ哲学界で影響力を持っていた哲学者は実存主義哲学派のヤスパースとハイデガーの二人だが、ヤスパースは妻がユダヤ人だったためにナチスに弾圧されてあわや強制収容所に送られる寸前だった。一方のハイデガーは、一時ナチスに入党していた。で、うっかりフライブルク大学で「ドイツ大学の自己主張」というナチス寄りの演説をしてしまい、翌年目が覚めたのか大学総長を辞任。なおハイデガーがナチスに入党した一因は、プラトンの『国家』の影響と考えられる。そう、プラトンはそもそも哲学者による独裁国家を理想としており、自らもその理想の実現のために政治に参画した経験があったのだ。しかしハイデガーは恐らく途中で気づいた。プラトンの「哲人国家」は結局挫折したではないか、と。プラトンに始まる西洋哲学（形而上学）の一つの理想であった「国家萌え」路線はハイデガーにおいてついに実現し、そして挫折したのだ。

生きたまま萌えキャラになったヒトラー

ナチ党の正式名称は「国家社会主義ドイツ労働者党」[*2]です。二〇世紀前半のドイツに登場した国家社会主義政党でした。党首はいろんな映画やマンガに悪役として登場することで有名なアドルフ・ヒトラー[*3]です。ヒトラーが政治の舞台に登場した当時のドイツは、第一次世界大戦[*4]に敗北してとうてい払いきれない天文学的な金額の賠償金を戦勝国から請求されていました。そのために経済発展が遅れ、インフレが起きて経済が破綻し、「国民総負け組」状態だったのです。当時のドイツは帝政から民主制に移行していましたので、ナチ党もまた政党の一つとして登場し、選挙で議席を増やしていくことで政権獲得を目指していました。ヒトラーは最初はクーデターによる武力革命を画策したのですが、失敗したのです。そこで今度は選挙活動で議席を増やし、大統領のポストを目指す方向に路線転換したわけです。

「国家社会主義」というのは最近では耳慣れない言葉ですが、国家主義・民族主義と社会主義を融合した政治思想です。ナチスドイツ・イコール・国家主義というイメージがありますが、実は政策の何割かは社会主義的な政党でもあったのです。当時のドイツは右も左も負け犬だらけで失業者が街に溢れるという悲惨な状態だったので、社会主義的な政策による貧困層の救済が待望されたのです。**いまの日本なら「負け組」だの「下流」だのとバカにされるであろう人々が、当時のドイツには大勢いました。そういう人たちがナチ党に世直しを期待したのです。**もちろん、単に社会主義的な政策を掲げただけではなく、同時に熱狂的な国家主義・民族主義も掲げたところに人気の秘密がありました。

ニーチェは「超人」という概念で個人が自分自身の自我の支え、つまり神になるこ

② 国家社会主義ドイツ労働者党
NSDAP。通称ナチス、ナチ党。一九一九年に結成された「ドイツ労働者党」が前身。元々の母体は反ユダヤ・民族主義を掲げるゲルマン騎士団系の神秘主義秘密結社「トゥーレ協会」。翌年、「国家社会主義ドイツ労働者党」に改称。ヒトラーが党首となる。極端な民族主義・独裁主義と、社会主義的な改革という一見相反する二つの政治理念を重ね持っていた。二三年にミュンヘン一揆を起こすが失敗。以後は選挙による政権獲得を目指すようになり、二九年の世界恐慌による世情不安が転機となって大衆票を獲得しはじめ、続いて共産主義革命に怯える資本家層の支持も得る。三三年に政権を獲得するやいなやただちに共産党を弾圧し、一党独裁体制に移行。

③ アドルフ・ヒトラー
一八八九年〜一九四五年。ドイツの政治家。オーストリア生まれ。ウィーンに上り画家を志すが、美術学校の受験に二度も失敗。第一次世界大戦前夜にはオーストリアに徴兵されるが逃亡、ドイツ帝国の兵隊として参戦する。敗戦後、軍のスパイとしてドイツ労働者党（後のナチ党）に潜入するが、ここでプロパガンダ演説の才能に目覚めて正式に入党。党首となる。二三年のミュンヘン一揆に失敗して刑務所送りとなるが、この監獄で口述筆記したのが『我が闘争』（注⑮）。二五年から活動を再開し、ナチ党は議席を伸ばして第一党に。三三年に首相となり、独裁体制を固めて翌三四年には大統領も兼任して「総統」となった。フォルクスワーゲンやアウトバーンなどの経済政策を次々と打ち出

とを訴えたのですが、ナチ党は「民族」「国家」というもっと巨大な「神の代替装置」を掲げたのです。極限状態に追い詰められていたドイツの大衆にとって、精神的には「国家」「民族」が支えとなり、現実的には社会主義経済政策が救いとなったわけです。これは本来のニーチェの哲学とはまったく異なる状況です。自らが自らを神とする「俺萌え」思想はあまりにも新しすぎて誰もついていけなかったのです。それよりも、一人の独裁者をカリスマ救世主として崇め奉るほうが、相変わらず人々にとってはわかりやすくて簡単だったのです。こうして**ドイツは「国家萌え」「民族萌え」「総統萌え」に走った**のです。

本書ではこれまで、喪男がカリスマに祭り上げられていく過程を何度も見てきました。十字架上で死んだイエスは、神の子キリストという萌えキャラになって大勢の喪男信者の自我の支えとなりましたね。ブッダも解脱を果たして死んだ後、だんだん違うキャラクターになっていきました。同様のことがドイツにも起きたわけです。ただし、ヒトラーは生きたままカリスマになってしまったのです。これは、当時のヨーロッパでは宗教ではなく「政治」「国家」が人々の自我を癒す装置として機能していたからです。

最大の問題は、ヒトラーとナチ党が二次元の世界の住人（**脳内キャラクター**）**ではなく、三次元に生きる現実の人間だったという点**です。

僕のようなオタクは『機動戦士ガンダム』を観ながらジオン公国[*5]を率いるギレン・ザビ[*6]のアジ演説に感動して「ジークジオン」と唱えますよ。ギレンは父親デギンから「ヒトラーのしっぽ」と揶揄（やゆ）されるような極悪の独裁者です。権力のためなら父親すら殺します。こんな人の演説に感動していいんでしょうか。別にいいんです。アニ

してドイツの失業問題を解決し、ベルリンオリンピックを開催したあたりまでは良かったが、以後はドイツ民族の生存権確保を目的とした領土拡張路線に突っ走っていき、第二次世界大戦を勃発させ、敗北。ドイツ第三帝国（注㉟）は滅亡した。

④　第一次世界大戦
一九一四年～一八年。ヨーロッパを中心に、地球規模で行われた最初の世界戦争。ドイツ・オーストリアを中心とする同盟国とイギリス・フランスをはじめとする連合国とが航空機や戦車、マシンガン、潜水艦、毒ガスといった近代兵器を駆使して足かけ五年に及ぶ総力戦を行い、死者は兵士だけで九〇〇万人を超えた。元元はオーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子が「バルカンの火薬庫」と呼ばれるボスニアでセルビア人の民族主義者に暗殺されたのがきっかけ。開戦当初はすぐに終わると思われていたが、兵器の近代化にともない戦線は膠着、戦死者数は膨大なものとなり、ヨーロッパ中に「西洋の没落」を予感させることとなった。ドイツの歴史学者シュペングラーは同名の著書を出版し、さらにヤスパースやハイデガーなどの暗い実存主義哲学が隆盛となった。

⑤　ジオン公国
『機動戦士ガンダム』に登場する宇宙国家。スペースコロニー・サイド3が本拠地。元々は宇宙移民（スペースノイド）と地球上に暮らすアースノイドの、アメリカ対イギリスを思わせる対立が軸にあり、革命家ジオン・ズム・ダイクンが活躍する。しかしジオンの死後、ジオンの

メ、つまり「二次元」だから問題ないのです。アニメはアニメです。現実ではありません。ギレンは「本当に」人を殺すわけではない。しかし三次元で「ハイルヒトラー」と言い出すと、実に困ることになるわけです。
「カリスマが生きている」という状態は「神が生きていて好き勝手している」ということを意味します。もちろん神といっても全知全能でも何でもなく、実際にはただのオッサンですから、大変なことになるんです。

二次元で失敗し三次元の世界へ

　ドイツの資本家階級にとってナチ党は労働者寄りの政策と極端な国家主義・民族主義を掲げて押しかけてくる過激な困った人たちでしたが、うかうかしているとロシアのように共産主義革命が起こる可能性がありました。資本家にとって、資本主義体制を維持しつつ敗者となった喪男にも体制内で救済を与えようとする比較的穏健な社会主義と、資本主義体制そのものを破壊して喪男だけの世界を作ろうとする過激な共産主義は全然別のものです。共産主義革命[*7]が起きたら、資本家は全員死刑とかシベリア送りとか、とにかく地獄行きです。ですから、共産党にドイツを奪われるよりは、ナチに政権をくれてやったほうがまだマシだ、と資本家たちは考えたわけです。
　こうしてヒトラーは一九三三年、首相になりました。翌年には大統領も兼ねて「総統」という独裁者の地位を手に入れます。

ヒトラー

部下デギン・ソド・ザビが実権を掌握し、自ら独裁体制を敷いて公王となり「ジオン公国」を建国。完全な地球連邦からの独立を求めて「一年戦争」を始める。独裁国家らしくメカや軍服のデザインが異常にかっこよく、恐らくナチス第三帝国がモデルと思われる。

⑥　ギレン・ザビ
ジオン公国の公王デギンの長男。モデルはアドルフ・ヒトラー。父親が事実上引退したために、ジオンの独裁者となっていた。三五歳という喪男が一本切れるお年頃の時に一年戦争を開始。ナチスを彷彿とさせる過激な選民思想の持ち主で、地球にスペースコロニーを落とす「コロニー落とし」作戦によって地上の人間の半数を抹殺した。当初は電撃作戦で次々と勝利するが、次第に地球連邦に生産力の差を見せつけられてジリ貧に。地球連邦と和平に持ち込もうとした父親デギンまで抹殺するが、怒った妹のキシリアに暗殺された。これほどクールで残虐なギレンが、なぜキシリアを警戒しなかったのか。妹萌えだったのか。特技はヒトラーばりの演説。弟ガルマの国葬における大演説は今でも伝説。ジークジオン。

⑦　共産主義革命
当時のヨーロッパではマルクス主義が流行していたが、第一次大戦勃発によって深刻な食糧危機に陥ったロシアで本当に社会主義革命が起きてしまう。まず一九一七年に大規模な労働者デモが起こり、さらには反乱兵も合流して首都を掌握、ソヴィエト議会が結成される。この一連の「三月革命」によって皇帝ニコライ二世は退

さて、ヒトラーは、絵に描いたような喪男でした。

若い頃、ヒトラーは政治家なんぞには興味がなく、画家になるつもりでした。田舎からウィーンに上京（?）して美術学校に入ろうとしますが、失敗します。そして、青春時代を吾妻ひでお先生の『失踪日記』[*8]みたいな放浪生活に費やしました。

ヒトラーは元々田舎でも落第続きの劣等生。早くに父を失い、一発逆転、芸術家を夢見て一六歳頃からウィーンを彷徨い始め、全然相手にされず、ウィーンをウロウロしている間に一八歳で母を失ったのです。この孤独で惨めなウィーン放浪時代に、ヒトラーの心の中に『タクシードライバー』のトラヴィスや『くどき屋ジョー』の毒薬仁[*9]のようなルサンチマンが溜まっていったことは想像にかたくありません。

ヒトラーがユダヤ人を憎むようになった理由として、この貧乏ニート時代にヒトラーが金持ちのユダヤ人に酷い目に遭わされたからだとか女の子を寝取られたからだとかいう説がいろんなマンガや小説で語られていますが、それが事実だったかどうかはともかく、基本的にはこの本の筆者・本田透の若い頃とほとんど同じようなダメ人間生活をしていたわけです。で、三次元を捨てて二次元の住人、つまり芸術家になるという夢破れたヒトラーは、否応なしに三次元に引き戻されました。

オタク文化やインターネットが発達した現代日本でしたら、ヒトラーは有明で同人誌を売ったり自分のブログで好きな作品の解説をしたりアニメやエロゲーを楽しんだりして、それなりに「二次元」への欲求、「芸術家」になるという夢をある程度満たすことができたはずです。しかし、当時のドイツにはそんなオタクインフラは整っていませんでした。

その代わりオペラが隆盛でしたので、ヒトラーもニーチェと同じようにワーグナー[*10]

位。三〇〇年にわたってロシアに君臨してきたロマノフ王朝は終焉。しかしソヴィエトがロシア全土を掌握したわけではなく、急遽設立された臨時政府との睨み合いが始まる。ボリシェヴィキを率いるレーニンは三月革命当時スイスに亡命中だったが、ドイツの協力を得て急遽帰国。ソヴィエト内での権力闘争を始める。これに敗れたレーニンは再び亡命するが、最終的には「十一月革命」を起こして臨時政府を倒し、ソヴィエト政権を樹立した。しかしレーニンの思惑は外れ、西ヨーロッパ諸国では革命は起こらなかった。またマルクス・レーニン主義は共産主義ではあったが、いきなり共産主義国家を作るのは困難なので、まずは社会主義国家からスタートした。

⑧ 吾妻ひでお先生の「失踪日記」
二〇〇五年。イーストプレス。吾妻ひでお先生本人の自伝的マンガで、マンガ家生活に嫌気がさして失踪し、ホームレスになったり肉体労働に励んだり精神病院に入れられたりといった私小説的かつ純文学的なストーリーを、ただひたすら淡々と描く。

⑨ 「くどき屋ジョー」の毒薬仁
毒薬仁は、ジョージ秋山のマンガ『くどき屋ジョー』に登場するキャラクター。北国の貧しい農家の生まれで、「オリはよう」が口癖。屈強な大男だがあらゆる女に忌み嫌われるキモメンな故に誰にも愛されない。歌舞伎町でヤクザをやっている。愛読書はドストエフスキー。心臓に疾患がある。純愛を求めながらもキモメン故に諦め、挫折し、暴力と色欲におぼれていきなが

にハマりました。ワーグナーの歌劇は喪男を元気づけてやまない性質を帯びていたのです。いまでも**オタクな映画監督は必ず『ワルキューレ』[*11]をBGMに使いたがります**よね。しかし、オペラだけではヒトラーの喪男としての巨大なルサンチマンは、昇華できなかったのです……。

まあ、こんな状態ですから、もちろん恋愛なんぞできるわけもありませんでした。両親を早くに失ったヒトラーは当座の生活ができる程度の遺産は残りましたが、もちろん一生遊んで暮らせるような金はありません。無職なのでいずれ一文無しになること確定です。当然女にはまったくモテません。ヒトラー自身が目指した「芸術家」という二次元への道も閉ざされました。このあたりで後のナチス型超人思想への扉が開かれてしまったわけです。

かえすがえすも、ヒトラーを入学させなかった美術学校さえ彼を合格させておけばと悔やまれてなりません。当時、美術学校に進学できる人間は数が限られていました。**いまならデジタルハリウッド[*12]でも代々木アニメーション学院[*13]でもなんでもあります**。しかし当時のドイツは、資本主義市場の進行と敗戦による、歴史始まって以来の喪男大量発生という現実問題を抱えていたにもかかわらず、「二次元」という受け皿が実に小さかったのです。金もなくモテもしない当時の喪男たちを支えていたものは、二次元（芸術）よりも、むしろ三次元（政治）だったのです。ですから、マルクスやヒトラーがカリスマとして担ぎ上げられたのです。

ヒトラーの思想（というか、ナチスの思想）は謎めいていて支離滅裂な部分も多いのですが、一言で言うと「ゲルマン萌え」です。**ゲルマン民族は偉い、ゲルマン民族が築いたドイツ帝国は偉大だ、俺もその一員だからやっぱり偉い、という三段論法で**

らそんな己の汚れっぷりを嘆くというドグラマグラのような生き様はほとんど作者の分身。『オリは毒薬』『恋子の毎日』『ＷＨＯ ａｒｅ ＹＯＵ 中年秋山ジョージ物語』『極道の娘』など様々なジョージ作品に登場するが、毒薬が登場するとたいていそのマンガは連載が終わってしまう。

⑩ ワーグナー
一八一三年～八三年。リヒャルト・ワーグナー。ドイツの音楽家。壮大なオペラを得意とした。ニーチェの友達ということからもわかるように音楽家には珍しく行動的な性格で、ロマン主義・恋愛主義的な作品が多く、女癖も悪かった。若い頃は革命に参加したりして亡命生活を余儀なくされる。後年、ルードヴィヒ二世のもとで「バイロイト祝祭劇場」を建築。反ユダヤ主義的な文章を書いたために、彼の音楽は死後、ナチスに利用された。ヒトラーはワーグナーの大ファンで、ワーグナー家の女性たち、コジマやジークフリート夫人と親しく交際。バイロイト祝祭劇場はナチス傘下となった。ニーチェの思想がエリザベートによってナチスに入り込んだのと同様に、ワーグナーのオペラもまた女性の身内によってナチスと結びついたのだった。聖杯伝説をテーマとした『パルジファル』にハマったヒトラーは、実際に聖杯やロンギヌスの槍を探し回った。代表作『タンホイザー』『ローエングリン』『トリスタンとイゾルデ』『ニーベルングの指輪』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』『パルジファル』。

すね。この「国家萌え」「民族萌え」は、当時としては別に珍しいことではなく、割とスタンダードだったのです。神に代わって「国家」が個人の自我を保証する時代になっていたのですから。

近代国家と民族という幻想

国家は、単体では実体のない社会体制にすぎません。従って、存在自体が絶対正義である神と違って権威の根拠がないわけです。それ故、かつての国王はローマ教皇から権威を借りた存在でした。中世では「二次元の権威は教会に、三次元の権力は国王に」という権力の分業がなされており、上位に位置していたのは教会つまり神だったんですね。ところが神は死にました。神の世俗権力を代行していた王[*14]も没落しました。そこで浮上してきた「近代国家」という装置は、神に代わる自らの存在の根拠を必要とするようになりました。ここで白羽の矢が立ったのが「民族」という血縁幻想だったんです。

民族自決運動というのも、民族という概念が価値を持つものになったことから生まれてきたわけなんです。昔は、「民族」なんて誰もさほど気にしていませんでした。封建時代のヨーロッパにおける「国」とは、王侯貴族の「土地」みたいなものにすぎませんでした。「ドイツ民族」という概念が隆盛になったのは、実は一九世紀のナポレオンの侵攻からなんです。元々ドイツ（神聖ローマ帝国）は無数の小国に分裂していて、統一された民族であるという意識が薄かったのです。長年徳川幕府の下で多数の藩に分かれていた日本が、黒船の来航によって統一意識を持ったのと同じです。**ナポレオンに侵略されたことによってはじめて「ドイツ民族・ドイツ国家」という意識が**

⑪　ワルキューレ
「世界を支配する指輪」をテーマとしたワーグナーの一五時間に及ぶ壮大なオペラ『ニーベルングの指輪』、その中の「ワルキューレ」で流れる『ワルキューレの騎行』のこと。ワルキューレは北欧神話の女神たちで、英雄をヴァルハラに導く使命を持っている。コッポラが映画『地獄の黙示録』のベトコン空爆シーンでこの曲を使用して世界中の喪男の心をわしづかみにした。以来、いろんな喪男映画でこの曲がかかりまくることに。

⑫　デジタルハリウッド
CGを教えてくれる専門学校。昔、職に困った筆者が全財産を投じて通ったことがあった。今は大学とか大学院もあるようだ。

⑬　代々木アニメーション学院
アニメ制作などを教えてくれる専門学校。学院長はなぜか三遊亭楽太郎。

⑭　「神の世俗権力を代行していた王」
一六世紀から一七世紀にかけての絶対王制時代には「王権神授説」という説が主張された。王権は神から授けられたもので、誰も王権に逆らうことはできないという考え。フランスのボシュエ、イギリスのフィルマーなどが代表的な論者。

必要になったわけです。

イタリアも同じです。イタリアもまた西ローマ帝国滅亡以後は多数の国に分裂しっぱなしでしたが、ナポレオンに侵略されたことで「統一イタリア」「イタリア民族・イタリア国家」を作ろうという意識に目覚めたのです。

ギリシアもそうです。中世のギリシア人は、そもそも自分たちを「ローマ人」と呼んでいました。ローマ人というのは現代の「民族」とは違う概念で、ローマの市民権を持っていれば誰でもローマ人だったのです。ギリシア人が自分たちをローマ人ではなく「ギリシア人」だと考えるようになったのは、一九世紀、ヨーロッパ各地で民族独立運動が起こった時代からなのです。

フランス人の「フランス民族」意識すら、元々はフランス革命からナポレオン帝政時代あたりに完成したものです。それまではフランスという機構の頂点には「王」がいたわけですが、**革命によって国王を処刑してしまったので、王の代替概念として「フランス民族」が必要になった**んです。そして、そのような時代背景に後押しされる形でナポレオンが登場し、革命思想と民族主義をヨーロッパ全土に広めたというわけです。まあナポレオンは統一ヨーロッパを作ろうとしていたんですが、結果的には統一に失敗し、かえって近代国家を支える「民族」という新たな概念をヨーロッパ中に伝播（でんぱ）させ分裂させるという逆の結果になったのです。

そうです。近代では恋愛が神に代わって個人の自我を保証する装置になったとさんざん書いてきましたが、「神」と「恋愛」の狭間に実はもう一つ、「国家」「民族」という装置も発明されていたのです。恋愛が神の代替物となるためには、それなりの消費生活が可能でなければなりません。金がないと恋愛できません。というより、食う

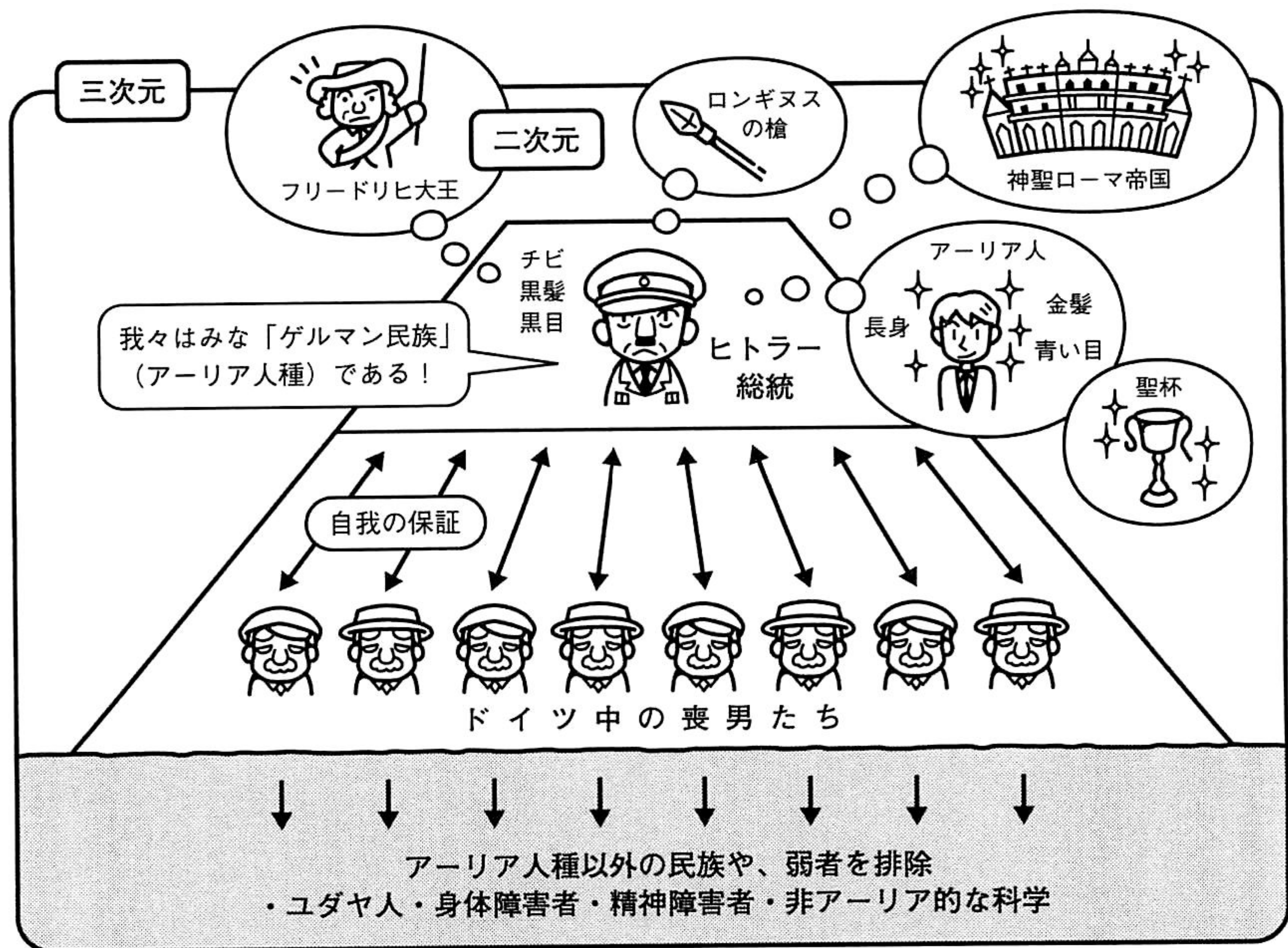
ものがないと恋愛どころではないではないですか。仕事がなく食うものもない、そういう状態の喪男を恋愛は救えません。生きるか死ぬかという状態の喪男にとっては、まずは生命と財産を保証してくれる存在こそが、自我の支えとして求められます。するとそこには、国家が現れるというわけなのです。三次元の国家を統治する政治家こそが、パンを与えてくれるカリスマとして支持されるのです。これに対して、二次元は食えません。恋愛も食えません。オネーチャンを食っても胃袋は満たされず、むしろタンパク質を吸い取られるだけではないですか。で、キリスト教という大勢の人々を集団としてまとめるための便利な装置を持たない近代国家をなんとかして成立させるためには、宗教に代わる民族という装置がなければならなかったと。かくして、「国家萌え」「民族萌え」ムーブメントが最大限に盛り上がっていたのが、当時のドイツだったわけです。ですからヒトラーの「ゲルマン萌え」に、大勢の喪男、特に若者が協調したのです（図4－1）。

当時のドイツは戦争に敗れて「国民総喪男状態」だった。経済状態は最悪で、「萌え」だけでは生きられない。そこで三次元を救うカリスマが求められた。彼らは「民族」「国家」を自我の支えとした。しかしヒトラーは元来二次元の人間だったので、ドイツは大変なことになっていく。またヨーロッパ最喪男という地位から浮上するためにナチスは「劣等人種・劣等民族」という「下のカースト身分」を作り出した。

図4―1　ヒトラーは「国家萌え」

二次元男が権力を握ってしまった悲劇

ヒトラーの最大の問題は、彼が最初から芸術家体質の喪男であって全然政治家向きではなかったという点にあります。元々『我が闘争』[*15]の文体や演説の口調でもわかるように、ヒトラーは霊媒体質といいますかトランス状態に陥ってワーッと叫ぶのを得意としていた人です。電波系といってもいい。感情表現が異常なまでに過剰で、見ている人たちをも引き込んでしまって同じ感情をシンクロさせることができたのです。しかしながら、常に感情先行で論理性は「？？？」な人です。三次元世界の全権を与えてしまったら、現実を見失って暴走するタイプです。本当は、ヒトラーは役者とか画家といった二次元の仕事に向いていたわけです。

見るべき人が見たら、

「アドルフ……なんて恐ろしい子っ！」

と才能を認めてもらえたかもしれないのです。

『紅天女』[*16]の主役に抜擢しておけばよかったのに。

二次元しか見えていない喪男が三次元の権力を握ってしまったら、「俺」イコール「世界」という観点から好き勝手なことをしはじめるわけです。芸術家は二次元主義者、政治家は三次元主義者です。ヒトラーは本当は二次元主義者なのに三次元の世界で権力を持ってしまったので、三次元のほうを二次元＝「自分の脳内の理想世界」に改造しようとしたわけです。阿房宮や万里の長城を造った秦の始皇帝[*17]のように、**このタイプの権力者は巨大な建築物を造りたがります。これは、三次元世界を自分の世界に改造したいという欲求の表れなのです。**

もうちょっと普通の言葉で言うと、理念先行・理想至上主義でしかもルサンチマン

⑮「我が闘争」
ヒトラーの自伝。ミュンヘン一揆に失敗してランズベルク刑務所に入っている時にルドルフ・ヘス（注㊶）に向けて口述筆記したもの。ドイツ民族の生活圏を確保するための東方進出策や反ユダヤ主義などが語られている。「生活圏」というのは当時のヨーロッパで流行していた植民地主義・帝国主義政策を支える理論として生まれてきた「地政学」者・カール・ハウスホーファーが考案した概念。ヒトラーはランズベルク刑務所でヘスの師であるハウスホーファーと出会い、彼から地政学および生活圏の概念を教わったのだろうと言われている。ハウスホーファーは戦後、自殺。息子はヒトラー暗殺計画に関わってすでに処刑されていた。ちなみに日本にもハウスホーファーの著書『太平洋の地政学』が翻訳輸入され、大東亜共栄圏の構想に影響を与えた。

⑯「紅天女」
美内すずえの演劇マンガ『ガラスの仮面』で北島マヤと姫川亜弓が主演の座を巡って争っている伝説の芝居。いったいいつ上演されるんだとか言ってるうちに、原作を通り越して『紅天女』が国立能楽堂で実際に上演されてしまったのだった。

⑰ 秦の始皇帝
BC二五九年〜BC二一〇年。中国初の皇帝。秦王・政。戦国時代後期に秦の王となり、次々と六国を滅ぼして中国を統一する。そして王よりも上位に位置する「皇帝」という位を新設して自ら「最初の皇帝」始皇帝となった。建築マ

が溜まっている人間が実際に政治を行うと、現実の人間をゴミのように扱う[18]危険があるわけです。理想のために現実を犠牲にすることによって、現実に復讐するのです。

　さて、ヒトラーと言えば熱烈な国家主義者・ゲルマン民族至上主義者として知られますが、ニート時代には実はオーストリア[19]の兵役から逃げ出したりしています。『新世紀エヴァンゲリオン』のシンジくんみたいなダメ人間だったのです。ところが第一次世界大戦には自分から参加しました。ただし参加したのは、オーストリアではなくドイツの軍隊でした。いまで言えば、大阪出身なんだけどジャイアンツを逆指名、みたいな感じでしょうか。もちろん軍隊でも出世できませんでした。ところが、いったいどういうわけか彼は演説の天才だったのです。北島マヤのような演劇の才能があったんです。ナチ党に入るや否や、演説を武器にたちまち党首に成り上がり、あっという間にナチスドイツ帝国の総統というピラミッドの頂点に昇りつめました。資本主義ピラミッドの最下層から、舌先三寸で頂点へと駆け上ったのです。

　貧乏喪男の味方兼建築オタクだったヒトラーは、フォルクスワーゲン[20]の大量生産計画やアウトバーン[21]の建設、ベルリンオリンピック[22]開催など、次々と画期的な経済政策を打ち出して失業者問題を強引に解決しました。このへんで引退しておけばノーベル平和賞でも貰えたかもしれないのですが、ご存知のようにその後は真の目的、すなわち「世界征服の野望」を実現するために第二次世界大戦を始めてしまいました。また、極端な反ユダヤ主義でしたので、激しくユダヤ人苛めを行いました。

　貧乏喪男から天下人に出世したケースとしては、日本の豊臣秀吉[23]の例もあります。秀吉もヒトラー同様の小男で、まったくモテませんでした。最初は庶民の味方と思われていたのに、天下を取ったとたんにまれに見る独裁者になって世界征服に乗り出し

ニアで、皇帝即位後は万里の長城を大規模修復したり、三〇〇〇人の美女を集める阿房宮を建築したり、巨大な始皇帝陵を造ったりした。このため無数の人民が土木工事に駆り出されることになり、反乱が起こって秦は滅亡した。また思想を統制するため「焚書坑儒」を強行したりした。全世界を支配する皇帝となってからは「死」の恐怖から逃れることに夢中になり（世界の王になっても喪男だった）、不老不死の薬を求めて徐福を蓬萊（日本）へ出発させたりもした。中国がヨーロッパのように分裂せず統一国家となったのは、始皇帝が中国を地理的に統一し、続いて計量の単位や貨幣、道路の規格、言語（漢字）などの文化をも統一したためである。

⑱　「現実の人間をゴミのように扱う」
例えば宮崎駿アニメ『天空の城ラピュタ』に登場する喪男ムスカは「見ろ、人がまるでゴミのようだ！」という名言を遺した。

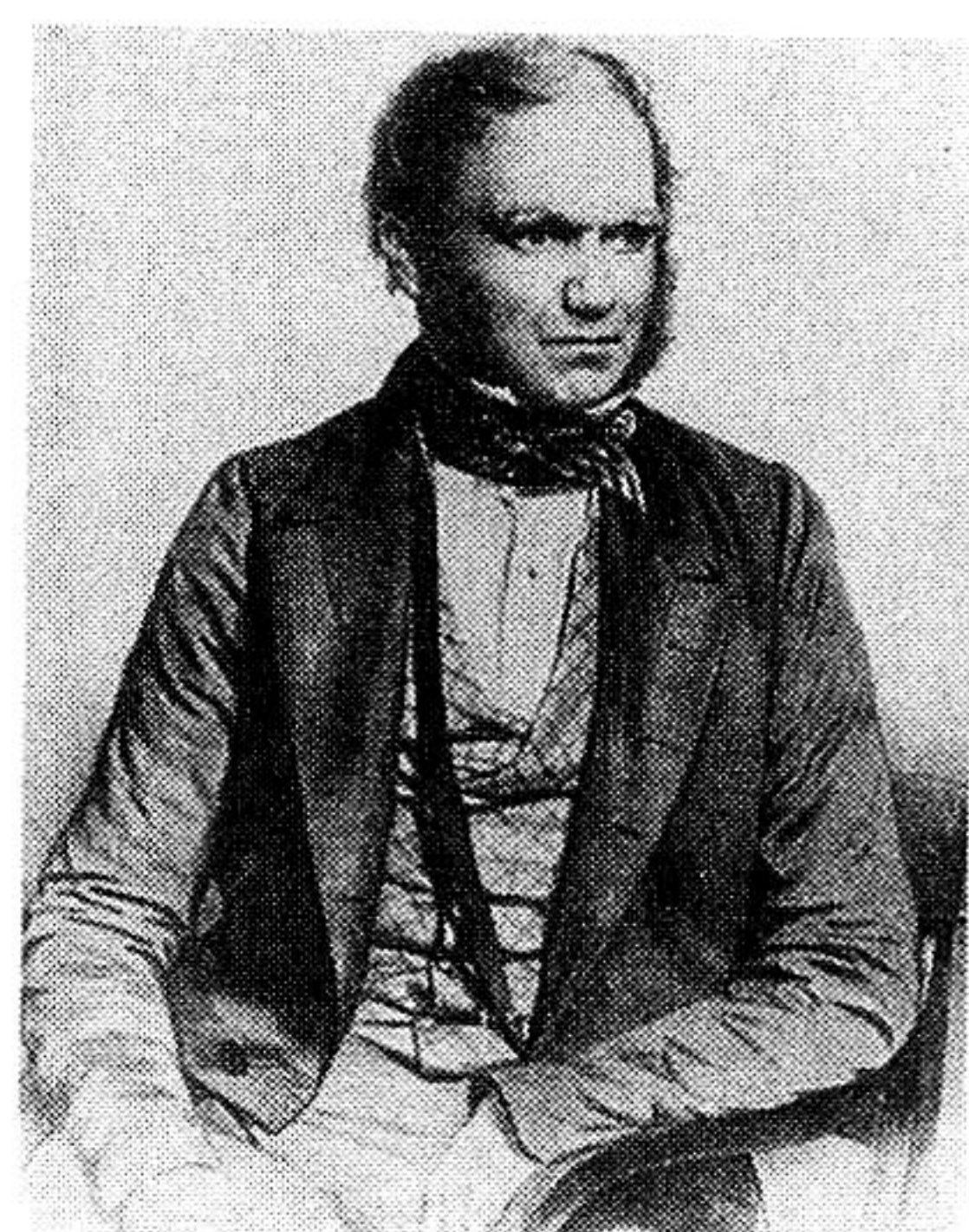
⑲　オーストリア
ドイツとイタリアの中間に位置する中央ヨーロッパの国。住民の多くはドイツ系。公用語もドイツ語。中世時代には神聖ローマ帝国に属していた。一三世紀にハプスブルク家の神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ一世がオーストリア公となってからはハプスブルク家の領土となり、代々の神聖ローマ帝国皇帝位をほぼ独占した。この時代、ドイツといえばオーストリアであった。しかし宗教改革に端を発する三十年戦争でドイツの分裂は決定的になり、失墜。神聖ローマ帝国は有名無実となった。一九世紀初頭のナポレオ

た点でも二人は似ています。

ヒトラー自身は実はあまりニーチェにかぶれていなかったという説もありますが、ヒトラーが書いた超大作『我が妄想』、じゃなかった『我が闘争』には、ニーチェの著作『力への意志』[*24]の直接的ないし間接的な影響が窺えます。世界を絶え間ない闘争として捉えている点が共通しています。

ちなみに僕は大学では最初哲学科に進んだのですが、ニーチェ哲学とナチスドイツの関係について哲学的に考察した結果、赤点をくらいました。ありがとうございます。[*25]

ヒトラーが登場した「時代の気分」

当時弱肉強食の競争原理を肯定する理論を唱えていた学者はニーチェだけではありませんでした。生物学の分野でも、ダーウィン[*26]が「進化論」や「自然淘汰」という概念を発表していました。ダーウィニズムとは「生物は大昔から生存競争を闘っており、時間とともに自然淘汰されていく。そこで環境に適応するために生物は変化しなければならず、故に進化が起きる」という考え方です。

キリスト教の世界観では、世界は最初から世界であり、人間は最初から人間であり、サルは最初からサルでした。しかしダーウィンは人間を含む生物は時間とともに「進化」してきたと考えました。

ダーウィン

ン侵攻によって神聖ローマ帝国が解体してからは「オーストリア帝国」となる。その後ドイツの覇権を巡ってプロイセンと対立しつつハンガリーやボスニアを次々と併合するが、これによって民族問題が深刻化し、第一次世界大戦を勃発させることになる。敗戦後は共和国となるが、ナチスドイツに併合される。このように、オーストリアは「ドイツ」と「オーストリア」という二つの民族概念の間で常に揺れ動いてきたと言える。

⑳ フォルクスワーゲン
フォルクスワーゲン社が製造したドイツの大衆車。通称ビートル。最初はヒトラーの「国民車構想」によってスタートし、フェルディナント・ポルシェが設計したフォルクスワーゲンだったが、実際には大量生産をスタートさせる前に戦争が始まったために計画は中断。新生フォルクスワーゲン社が大衆車を量産したのは戦後になってから。ビートルは全世界で二〇〇〇万台以上売れた。

㉑ アウトバーン
ワイマール共和国時代に計画されていた大規模な高速道路ネットワーク。後に政権を握ったヒトラーが失業対策のためにアウトバーンを建築させた。

㉒ ベルリンオリンピック
一九三六年にドイツのベルリンで開催されたオリンピック。「聖火リレー」の考案や世界初の「テレビ中継」そして記録映画『民族の祭典』『美の祭典』（注㊸）制作など、ナチスドイツの

ダーウィン自身は進化は環境適応のために偶発的に起こるものだと考えていたので、キリスト教的な目的論を認めてはいませんでした。つまり進化は決まったコースを歩いているのではなく、すべて偶然に起こるものだと考えたのです。彼の進化論は「機械論的進化論」だったのです。

ところが進化論がヨーロッパへ普及する過程で、キリスト教的な目的論と進化論が結びついたのです。この目的論型の進化論が社会科学と結びついた時に、「社会進化論」[*27]が生まれました。生物が生存競争を繰り広げて進化していくのと同様に、国家もまた競争によって進化するという考え方です。この考え方が、当時の帝国主義・植民地主義の理論的バックボーンになったのです。ヨーロッパ中がこぞって「国家萌え」状態になりました。なお、実はマルクスの哲学も、このような目的論型進化論の社会科学版モデルなのです。

さらに一九世紀末には「優生学」も登場しました。これはイギリスのゴルトン[*28]という人が考えた学問なのですが、人間の遺伝形質[*29]を操作して遺伝学的に優秀な人間を作りましょうというマッドサイエンティストの科学でした。ナチスがこれを大々的に採用して実践したので、いまでは無かったことにされています。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのヨーロッパはこのような過激な思想が続々と湧いて出てきていた混沌とした状況だったので、ヒトラーがニーチェから直接的にどれだけの影響を受けているかは判然としません。しかし、元々「ドイツ観念論」やロマン主義といった二次元寄りの志向を持ちつつ、ナポレオン経由で民族主義・国家主義に目覚めていた当時のドイツを取り巻く「時代の気分」の中で、ニーチェもヒトラーもそしてワーグナーのオペラも生まれてきたことは間違いありません。

プロパガンダ能力のすべてを濃縮したような大会。

㉓　豊臣秀吉
一五三六年〜九八年。日本の武将。木下藤吉郎、羽柴秀吉。あだ名は「猿」「ハゲネズミ」。小柄なキモメン喪男だった。尾張中村の百姓の子だったが、織田信長に仕えて出世街道まっしぐら。信長を本能寺の変で討った同僚・明智光秀を山崎の合戦で破り、事実上の信長の後継者となって日本を統一した。豊臣姓を賜って太閤・関白となる。日本の歴史で農民から天下人にまで出世した人間は秀吉だけだし、日本の支配者の中で一番のキモメン喪男だったに違いないのだが、天下を取ったとたんに「人を殺すのが嫌い」と言われていた性格が一変。太閤検地や刀狩りで農民を弾圧し、それまではあやふやだった士農工商の身分制度を確定する張本人となった。また晩年は大明平定の野望のために朝鮮半島へ出兵したり甥の秀次を数十人の愛妾ともども惨殺するなどして、政権崩壊のきっかけを作った。

㉔　「力への意志」
一九〇一年。ニーチェの著書だが、完成前に本人が発狂してしまったので妹エリザベートが編集した。

㉕　「ありがとうございます」
僕にこの本を書かせている原動力は、僕を部外者扱いした当時の早稲田大学文学部哲学科教室へのルサンチマンなのです。ああ、あの時教授がウソでも一言褒めておけばこんな本は世に出

ニーチェは個人の闘争、ヒトラーは国家の闘争

ニーチェとヒトラーの思想は決して同じものではありませんが、ニーチェ・ワーグナー・ヒトラーの三者は女性を通して直接繋がっています。ワーグナーオタクだったヒトラーはワーグナー家三代目の嫁にして四代目当主ジークフリート夫人とツーカーの関係になりましたし、ニーチェの妹エリザベートとも仲良しさんでした。

しかしもちろん哲学史上で問題になるのは、そういう人間同士の繋がりの話ではなく、ニーチェの哲学とヒトラーの政治思想の類似点と相違点です。

ニーチェは当時の資本主義社会の弱肉強食の理論を裏打ちするかのような「生の肯定」「欲望の肯定」を行いました。それが「力への意志」という言葉に表されているわけです。それだけではなくニーチェはキリスト教以来の二元論を排除しました。二次元的な天国などなく、人間はこの三次元の現実を永遠に生きるしかない、と説いたわけです。ニーチェにとっては三次元における闘争こそが、神なき時代の人間の生きる唯一の道なのです。この点はヒトラーに似ています。

ところが、ヒトラーがニーチェと違うところは、ヒトラーの考えている闘争が「個人」ではなく「国家」「民族」による闘争だったということです。ですから『我が闘争』という本も、ヒトラー個人の闘争の歴史を綴っていると同時に、国家社会主義団体による国家レベル・民族レベルの闘争について語っている本になっているのです。**「俺の闘争」と「ドイツの闘争」の二部構成**なのです。

僕も以前ちくま新書から『萌える男』という評論本を出版させていただきまして、そこで「萌え」の精神とは「自分の中に神を、自分自身を癒す装置を作り出すことで

なかったのです。

㉖ ダーウィン
一八〇九年〜八二年。チャールズ・ダーウィン。イギリスの生物学者。一八五九年に『種の起原』を発表した。ダーウィンの進化論は環境に適応した種だけが生き残れるという「自然淘汰」（キモメンは滅び、イケメンのみが栄えるという「性淘汰」説を含む）を基本としたもので、すべては偶然の産物という機械論的進化論だった。恋愛資本主義化が進んだ現在では性淘汰説が俄然注目され、「金髪碧眼も性淘汰の結果」とか「芸術も文学も性淘汰の結果」という説もあるらしい。何もかもがモテのために生まれたのだ。

㉗ 社会進化論
一九世紀にスペンサーやヘッケルが唱えた学説。生物だけでなく社会もまた適者生存の原則に基づいているというもの。この論理に基づけば帝国主義・植民地主義もイジメもアリなわけだ。ヘーゲル、ダーウィン、マルクス、スペンサー。近代とは「進歩」「進化」という概念に取り憑かれていた時代だった。近代では神に代わって国家や民族が立ち上がってきたわけだが、神が保証してくれていた「予定調和」「救済」に代わる概念もまた同時に必要とされた。そこで現れたのが「進化」「進歩」だった。むろん神の救済は二次元において行われるが、「進化」「進歩」は三次元世界で行われねばならなかった。こうして資本主義世界は、自らの時間と空間を無限に拡張しなければならなくなった。時間を拡張するためのツールが「進化」

ある」と定義したわけですが、その後NHKラジオでインタビューを受けた際に「自分の中に神を見出すという行為は、ファシズムに繋がらないでしょうか」という質問を受けました。

これはニーチェとナチ党の関係を振り返ってみれば、確かに疑問視されるべき問題です。しかしニーチェは、あくまでも「俺」を重視したわけで、**「他人の価値観など知ったこっちゃない代わりに、連帯もしない」という独立独歩の個人主義がニーチェイズム**なのです。ですから、国家やナチ党といった組織に己自身の自我が組み込まれることをニーチェはよしとしないのです（自分が総統だったら別かもしれませんが）。

つまりニーチェは喪男の「自立」についての可能性を探ったわけです。「喪男は一人ぼっちではダンゴムシだが、ダンゴムシでも自分自身の人生を生ききれるのならばいいじゃないか」というわけです。これに対してヒトラーは「**喪男は一人ではダンゴムシだが、一〇〇人集まればカブトムシの如き強者だ**」と考えたのです。というわけでヒトラーはフォルクスワーゲンを「国民車」として設計したのです（嘘です）。

「萌え」と「鬼畜」

もちろんニーチェ哲学には矛盾点があります。「みんなが三次元世界で俺萌えになったら、世の中大変なことになるんじゃないの」という疑問がすぐに浮かびます。これはニーチェが三次元と二次元を区別しなかったからです。『萌える男』では、ニーチェの超人哲学に似た「萌え」の話をしているのですが、僕が言っている「萌え」はあくまでも「二次元」での話です。二次元の世界で「神」を個人が勝手に持つことにより自我の安定を得られ、しかも三次元の世界では「社会」の一員としてダンゴムシ

「進歩」という思想なのであり、空間を拡張するための方法論が「帝国主義」「植民地主義」だった。

㉘　ゴルトン
一八二二年〜一九一一年。フランシス・ゴルトン。一九世紀イギリスの優生学者。ダーウィンの従兄弟。ダーウィン的進化論と社会進化論を組み合わせた思想「優生学」を考案した。才能は遺伝する（例えばイケメンは遺伝である）。だが社会はこれまで弱者救済のために機能してきたので、自然淘汰の原理に反してきた。つまり人類は文明を築くことで「逆淘汰」という状況を生み出し、退化しつつあるのだと。故に、社会は人間の遺伝的形質を改良して人造の「天才」を作り上げねばならない！　という身も蓋もない思想で、ニーチェ超人哲学のSF的解釈と言えなくもない。後にナチスの人種政策と融合して強制断種やホロコーストが実行された。代表作『遺伝的天才』。

㉙　「人間の遺伝形質」
メンデルがエンドウ豆の実験からメンデルの法則を発見したのが一八六五年。しかしメンデルの大発見の価値に科学者たちが気づいたのは一九〇〇年になってから。メンデルの因子に「遺伝子」という名前がついたのは一九〇九年。またDNAは一八六九年に発見されるが、長年その正体は謎だった。DNA＝遺伝子ということが判明したのは戦後になってから。

のように平穏に生きていける、それが僕の考えた「喪男救済哲学」なんですね。つまり**「萌え」とは自己による自己の内的な救済**なんです。

これは別に新しいことを言ってるわけじゃなくて、大昔にイエスが「神の国は脳内に」と言ったり、ブッダが「解脱」と言ってたのと基本的には同じです。

もちろんずっと二次元にこもるのではなく、二次元の良い部分は三次元に導入することもできるとも書いたのですが、同時に「二次元から三次元に出してはいけない」ものもあるわけです。**二次元の良い部分とは「萌え」で、二次元の悪い部分とは僕が「鬼畜」と呼んでいる性質の概念**です。フォースのダークサイド[*30]みたいなものです。こういう悪しきエネルギーは二次元だけで消費されるべきで、三次元に二次元のすべてを出し切ってはならないんです。なぜなら二次元には「現実原則」がないからです。故に必ず三次元と衝突するのです。ですから二次元と三次元は、きちんと区別しておかないといけません。「俺萌え」をすべて三次元で実践するというニーチェ的な生き方には、だから問題があるわけです。三次元はネットワーク社会であって、スタンドアロンではありません。必ず他者と利害の衝突が起こるのです。

にもかかわらず、あくまで三次元にこだわったところにニーチェがナチ党に担ぎ上げられることになる遠因があったのです。ヒトラーは「国家萌え」でニーチェは「俺萌え」。根本的に異なる考えを持った両者ですが、いずれも「三次元のみを唯一の世界と考える」一元論主義という点では共通していたのです。

マルクスも含め、一九世紀から二〇世紀にかけての西洋社会は三次元を力業で書き換えようとする「一元論主義」一色に染まっていたと言っていいでしょう。ですから、常識では考えられないようなことが実験的に現実の下で行われたりしたわけで

㉚ フォースのダークサイド
映画『スター・ウォーズ』シリーズには「フォース」という善の超能力が登場するが、フォースの裏側には「ダークサイド」という悪の世界が広がっている。フォースを怒りに任せて乱用したりすると、術者（ジェダイ）はダークサイドに落ちてしまう。

す。二度の世界大戦とか断種とか民族浄化とか原爆投下とかもう無茶苦茶です。こういう**巨大な悪事をなす人間は、だいたい一元論者なんです。空想と現実の区別がついていないんです。**ですから現実の人間を片っぱしから平然と地獄に落とせるんです。一元論者こそが、この世でもっとも危険な存在なのです。特に、ヒトラーのように元元二次元の住人だった喪男がいきなり一元論に転向した場合がもっとも恐ろしいのです。ヒトラーは芸術家志望だったのに、抽象芸術が理解できず頽廃的であるとして弾圧しましたよね。そして具象芸術を推奨[31]しました。これはヒトラーが二次元と三次元を、つまり芸術と現実世界を統一しようとしていたことを意味します。

喪男たちによる革命

　さて、ロシアの共産党やドイツのナチ党が政権を獲得できた背景には、言うまでもなく資本主義社会の進行による「勝ち組」「負け組」の二極分化がありました。貧乏人は麦を食え[32]イズムが巷（ちまた）に溢れ、右を向いても左を向いても喪男の群れ。資本主義社会は、内部に社会主義的な還元システムを導入しておかないと、必ず富の集中と二極化が発生するようになっているのです。資本主義社会は格闘技トーナメントと同じようなものです。最初は全員横並びなのですが、時間とともに勝ち負けがはっきりと出て、最後には一人しか残りません。そうなると競争原理が壊れて、独占市場になってしまいます。「独占禁止法」のような法律は、そのような資本主義の基本システムをなんとか抑止して[33]市場に競争原理を残す目的で考えられたわけです。

　しかし、レーニンやヒトラーが出てくる以前には、社会主義的な政策が資本主義国家で大々的に取り入れられるということは少なかったのです。資本家＝勝ち組が政権

㉛「具象芸術を推奨」
ヒトラーは当時流行だった印象主義や抽象絵画を「理解できなかった」というのが通説であるが、そうではない。「現実」と「芸術世界」が別個の存在であるという「二元論」を思想的に受け入れられなかったのだ。だからヒトラーは風景画や建築画しか描けなかった。

㉜「貧乏人は麦を食え」
一九五〇年、時の蔵相池田勇人がうっかり言ってしまって袋だたきに。ちなみに筆者は軟らかい白米よりも硬い麦飯や発芽玄米飯のほうが美味しいし値段も高いなぁと思います。食物繊維の少ない白米はすぐにお腹がすくような気がして食べ過ぎてしまいます。

㉝　レーニン
一八七〇年～一九二四年。ウラジミール・レーニン。ロシアの革命家。オカルト映画の悪魔役みたいな怖い顔の人。マルクス主義者となり、シベリアへ流されたりフィンランドへ亡命したりといった苦難の人生。ボリシェヴィキを率いてロシア革命を成功させ、ソヴィエト連邦を建国した。遺体はモスクワに冷凍保存されている。

の裏にいるわけですから、これは当然です。それで怒った大量の喪男たちが群れをなし、共産党やナチ党が勃興して大暴れしたために、「こんな目に遭うぐらいなら」ということで各国がしぶしぶ喪男救済に腰を上げたと言ってもいいでしょう。

近代西洋は二度、革命期を迎えています。一度目はフランス革命に代表される市民革命期です。二度目はナチや共産党による喪男革命期です。市民革命は貴族に代わって市民階級（ブルジョア）が権力を握るための闘争なので喪男とはさほど関係ありませんが（とりあえずいろんな偉い人をギロチンにかけてルサンチマンを晴らしたりしていましたが）、喪男革命はそのものずばり、資本主義ピラミッドの最底辺にいた喪男たちが暴れたという性質の根源的な革命なのです。

戦前の西洋の歴史を振り返ると、喪男宗教キリスト教が全人類・全世界を「喪」に黒々と染め上げた中世の暗黒喪期、市民階級が権力を握って資本主義ピラミッドを作り上げていく近代の産業革命期及び民主主義勃興期、そして最底辺の喪男が暴れた共産党&ナチ党勃興期の三つに分類できます。

近代的自我の先駆者ともいうべきニーチェはキリスト教をルサンチマンによる奴隷道徳として否定しましたが、資本主義の行き着く先もやはり喪男のルサンチマンによる革命・暴動だったのです。

一九世紀末から二〇世紀にかけて喪男のルサンチマンがこれほど巨大化した原因は、民主主義という概念が生まれたことにもあるんです。つまり、自由・平等という概念です。自由も平等も本当に実現されればそれは素晴らしいことなのですが、現実には金持ちと喪男の二極分化が起きてしまいました。政治的には民主主義を採用していても、経済的には資本主義つまり自由競争社会なのですから、これは当然です。

ここに、「現実」（喪男）と「建前」（自由平等）の乖離が発生したんです。

中世の民衆は「現実は地獄であり人間はみな罪人である」という喪男的価値観に統一された世界に住んでいたので、こういう現実と建前の乖離現象はありませんでした。だから貧乏でも喪男でもおとなしくしていられたのです。しかし**近世には「教会の連中だけ贅沢してやがる！」と気づいた喪男たちが暴れだし、宗教戦争という名の内ゲバが起こりました。**まあ組織宗教ってのは必ず分裂しますからね。ドイツなんて三十年戦争（一六一八〜四八年）でボロボロになってしまいました。そのせいで観念論という喪男哲学が生まれたのかもしれません。

続いて近代になると、いよいよ神の権威が失墜。「人間が現実を変えていいのだ」というアグレッシブ主義が主流となり、これに乗った市民階級がやがては政治権力も握ることになりました。市民革命はありていに言えば下克上なので、自由や平等といった新たな建前としての概念が必要だったのです。しかしながら実際には、資本主義という競争原理が導入された闘争世界が生まれたわけです。「自由・平等」の建前を掲げているのに、現実には多数の喪男と少数の金持ちとに二分されていった。それに気づいた喪男たちは「話が違う」と怒ったわけです。

ここで喪男一人ひとりが内面に、つまり二次元に自分だけの神を見出す超人への道を辿ればよかったのですが、当時の西洋は科学全盛期だったので三次元一元論でした。二次元は芸術の世界を除いてほとんど忘れられていたのです。[*34] 三次元の世界を変えることによってのみ喪の問題を解決できるというのが当時の考えの主流でした。科学と政治の季節だったのです。

とはいえ、もちろん三次元の世界は、個人の力で変えられるものではありません。

㉞「二次元は芸術の世界を除いてほとんど忘れられていたのです」世界が三次元一元論に染まっていく中、芸術は二次元の「解放区」となった。逆に言えば芸術の中に二次元が押し込められたのだ。故に一九世紀末からは印象主義、キュビズム、象徴主義、シュルレアリスム、ダダといった抽象的・想像的な芸術がヨーロッパを覆うことになった。

そこで集団化が求められます。ですから、共産党とかナチ党といった革命政党が喪男たちの支持を集めたわけです。つまり、**喪男を虐げたまま放置しておくとやがては革命が起きるかもしれないのです！**　これは自民党の皆様にもよく覚えておいていただきたい歴史の教訓なのです。**秋葉原を滅ぼせば、天下が乱れるやもしれぬのです！　政治家の皆さんは全員『ローゼンメイデン』を読むべきなのです！**

　喪男のルサンチマンが一ヵ所に集積されると、極端な民族主義・国家主義が生まれます。これが三次元における「国家萌え」「民族萌え」の勃興です。自民族に誇りを持つ程度ならどこの国の人もやってることですが、さすがにゲルマン民族至上主義とか第三帝国とか千年王国とか言われると、行き過ぎです。というのは、**一つの価値体系をピラミッドの頂点に置くという発想は、必ず、ピラミッドの下層に別の価値体系を置いて差別するという構造に行き着きます。**「上」は「下」がなければ成立しない概念だからです。ヒトラーの場合は、ゲルマン民族が一番「上」で、ユダヤ人が一番「下」だったわけです。国家についても同じで、ドイツ第三帝国[*35]が一番「上」ですから、「下」にはいろいろな国が置かれるわけです。で、そういう「下」の国は征服してもいいのだ、ということになります。

　ヒトラーはドイツ国内の喪男を引き上げて救済するという喪男政治家としての善の面も持っていましたが、同時にドイツ国外の夷狄（いてき）・モテ・イケメン・さらにはグロメン（キモメンよりも下位に位置する人々）どもをことごとく討ち果たそうという喪男政治家としての悪の面も持っていました。喪男はルサンチマンから出発しますから、「萌え」によってそのルサンチマンを解消するという方向の精神（＝善の心）と、ルサンチマンを他者に押し付けて溜飲を下げようという復讐の精神（＝悪の心）の両面を持

㉟ 第三帝国
ナチスドイツの帝国。神聖ローマ帝国が「第一帝国」、プロイセンがドイツを統一して建国したドイツ帝国が「第二帝国」。そしてナチスドイツが「第三帝国」。中世の神秘主義者ヨアキムは、ヨーロッパ世界の歴史を「第一の時代」「第二の時代」「第三の時代」と分類し、第三の時代に到来する理想国家を「千年王国」と呼んだ。ヒトラーは自らの第三帝国こそ、この千年王国であると考えていたようだ。

つのです。**我々は二つの精神のうち、善の心＝「萌え」だけを三次元に適用し、悪の心＝「鬼畜」は二次元に留めておかなければならないのです。**ところがヒトラーは政治家に転身した頃から二次元を顧みない三次元一元論者となっていた上、政治家としての成功が慢心を呼び（これは独裁者にありがちなパターンです）、「俺」と「世界」の区別がつかなくなってどんどんダークサイドに落ちていったのです。

ヒトラーが死んで「国家萌え」も終わった

ヒトラーの喪男遍歴に戻ります。若い頃ウィーンでニートだったことや徴兵から逃げたことなどはすでに述べましたが、その後、政治家に転身してからはモテるようになったはずだと考えるのは喪男の本質を見逃した考え方です。**長年の喪男暮らしで、ヒトラーはもはや通常の恋愛ができなくなっていました。**

いや、本質的には彼は二次元の人間だったので、そもそも三次元の恋愛など無理だったのかもしれません。外見もチャップリン[*36]そっくりのショボいチョビヒゲの小男です。というわけでヒトラーはロリコンになりました（またか）。政権獲得以前の政党活動期、ヒトラーは自分の姪に「ゲリ」という名前をつけてかわいがっていたのです。彼は一九歳年下のゲリの下僕と化していました。しかし、彼はゲリを部屋に閉じ込めておくオタク気質の持ち主だったため、ゲリは自殺しました。明らかにヒトラーのキモい独占欲が招いた悲劇でした。この巨大なトラウマのショックで、ヒトラーはゲリの墓の隣に入ると言い出して党員たちを慌てさせました。やはりヒトラーは萌えの人だったのです。この時、党員たちがヒトラーをひきとめずにゲリの墓の横に埋めてやって即身成仏させてあげれば、後の大悲劇は避けられたのです……。

㊱ チャップリン
一八八九年〜一九七七年。チャーリー・チャップリン。イギリス生まれ。アメリカで活躍した映画監督、俳優。喜劇王。ヒトラーと同い年。『独裁者』で痛烈にヒトラーを批判した。戦後、ハリウッドを襲った「赤狩り」に巻き込まれてアメリカを追われる。初恋の少女と死別したことからロリコンとなり生涯四度の結婚を繰り返した。最初の奥さんは一六歳。二人目の奥さんリタ・グレイは一五歳の時に妊娠させたが、これはリタの一族による美人局（つつもたせ）計画だった！　チャップリンは一〇〇万ドル（戦前の話です）の慰謝料を請求され、撮影所をはじめとするすべての資産を差し押さえられてしまった。さらに雑誌に「チャップリンはリタにフェラチオさせた」という暴露記事が掲載されてしまう。「フェラチオ」という耳慣れないラテン語は、この瞬間に現代語として蘇ったのだった。「護身」という概念がチャップリンにはなかった。チャップリンはそれでもまったく懲りず、四人目の奥さんも一六歳。代表作『キッド』『黄金狂時代』『街の灯』『モダン・タイムス』『殺人狂時代』。

ゲリが死んだ後、エヴァ・ブラウンと交際を始めましたが、すでにヒトラーは生涯独身を誓っていました。口には出しませんが、恐らく脳内キャラと化したゲリに永遠の愛を勝手に捧げて萌えていたのでしょう。というわけでエヴァの「モテの魔の手」を、ヒトラーは護身します。ところが、エヴァは「ヒトラーに冷たくされた」と嘆いて自殺をはかります。これでヒトラーの護身フィールドが突破されてしまいました。しかしそれでもヒトラーはエヴァと結婚しようとはしませんでした。すでにドイツを代表する「喪男ヒーロー」となっていたヒトラーは、結婚すると人気が落ちると思っていたとも言われています。しかし、僕はゲリが死んだ瞬間にヒトラーの現実恋愛能力が終わってしまったのだと思います。エヴァがヒトラーと結婚できたのは、一九四五年、ベルリン陥落の日でした。翌日、二人は自殺しました。

　ヒトラーの夢は、結局のところ、本当は「画家になる」つまり二次元で生きることと、ゲリと暮らすこと、ただそれだけだったのです。それなのに、ヒトラーはどこかでボタンをかけ違えて、気がつけば生きながらに喪男の神になってしまい、第二次世界大戦を引き起こしたのです。ソ連軍に蹂躙（じゅうりん）されたベルリンは瓦礫（がれき）の山と化しました。喪男ヒトラーのルサンチマンが、ヨーロッパ全土を廃墟にしたのです。**そしてそのルサンチマンは、元はと言えば「画家になりたい」「ゲリと暮らしたい」というただそれだけの小さな夢が挫折したために生まれたのです。**

　喪男たちが「国家」に萌える時代は、ナチスドイツの滅亡によって、事実上終止符が打たれました。大勢の喪男が「第三帝国」という夢に萌えました。しかし、その代償はあまりに大きいものだったのです。そして戦後、「国家」の代わりにいよいよ「恋愛」が浮かび上がってきたわけです。

㊲　アーリア人
イランおよびインドに暮らす民族。インド・ヨーロッパ語族に属する。インドに入ったアーリア人は先住民族を支配してバラモン教を作った。近代ヨーロッパでは、ヨーロッパ語とインド語が同じ起源を持つと考えられた。そこで「インド・ヨーロッパ語族」というカテゴリーができた。アーリア人という概念がここから拡大され、一九世紀にはインド・ヨーロッパ語族のすべてをアーリア人と呼ぶようになる。元々はイギリスによるインド支配に根拠を与えるための学説だったと思われるが、ナチスはドイツ民族こそが最も純粋なアーリア人だと主張した。ユダヤ人を弾圧したのも、アーリア人の純血を守るためだったそうな。またヒトラーはアーリア人つまりゲルマン人の起源はチベットにあると信じて、何度もチベットへ調査団を派遣した。

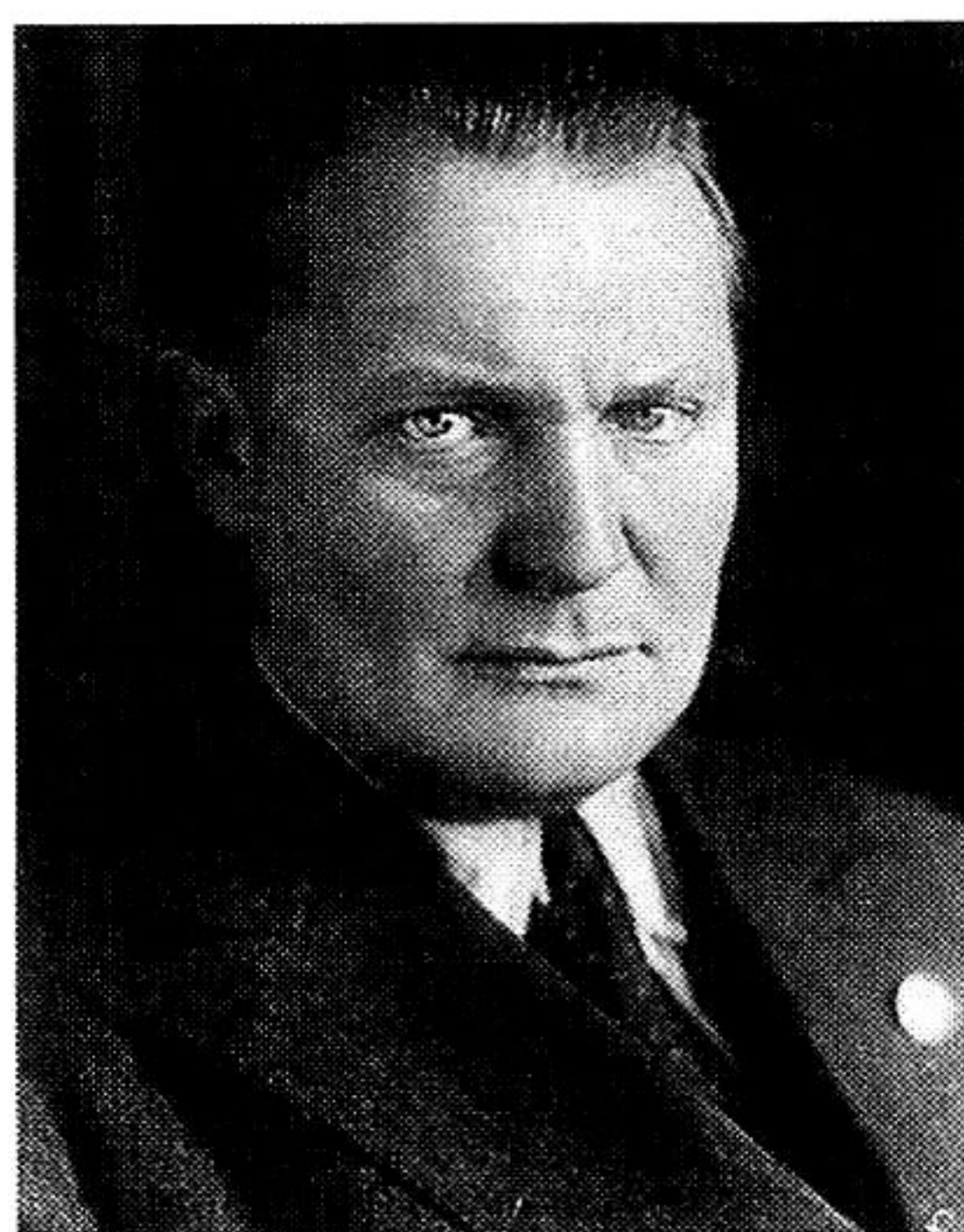
㊳　ゲッベルス
一八九七年〜一九四五年。パウル・ヨーゼフ・ゲッベルス。ドイツの政治家。「博士」。ナチスの宣伝省大臣。頭脳は非常に明晰で、将来は知識人として大成するはずだったが、第一次大戦の敗北による不況で失業して困窮し、ブルジョア階級への怒りが爆発。そんな折にヒトラーと出会ってしまいナチのプロパガンダを開始する。その手法は新聞やラジオ、映画などのニューメディアを利用し、大衆の感情を高揚させるという新しい方法論だった。「ハイルヒトラー」はゲッベルスが考案した。戦後日本でも有名になった「ノストラダムスの予言」を改竄してプロパガ

キモメンたちが作ったイケメン王国

ナチスは「金髪・碧眼・長身」の「アーリア人[37]」こそが地球上でもっとも美しく優秀な民族であると考えました。「アーリア人萌え」です。イケメンと美女を集めて無理やり結婚させてドイツ人を立派なアーリア人へ改良しようとしたりしました。ドイツ人を全員モテに改造しようとしたわけです。まあ確かに、全員モテになれば喪男問題は解決ですね。ところがその一方で、ユダヤ人などの少数民族や同性愛者、障害者を迫害しました。つまり実際のところは「全員」をモテにしようとは考えていなかったわけです。ドイツ国内で喪に分類される人々を抹殺しようとしたんです。

興味深いことにナチスの高官は、どいつもこいつもキモメンです。ナチ党は喪男集団なのです。党首のヒトラーは例のルックスですし、宣伝大臣のゲッベルス[38]も喪男でした。ヒムラー[39]はどう見てもアキバ系で、しかもオカルトオタクです。ゲーリング[40]は肥満体でゲイだったとも。ヘス[41]は占星術の導きで敵国イギリスに飛んでいってしまった電波男です。イケメンのロンメル[42]は嫌われて自殺に追い込まれています。

ゲッベルス

ヒムラー

ゲーリング

ンダに使うという奇策も実行した。ヒトラーが自殺した後に自らも六人の子供を殺し、妻と自殺。

㊴　ヒムラー
一九〇〇年～四五年。ハインリヒ・ヒムラー。ドイツの政治家。SS（親衛隊）長官。どうかしている人だらけのナチスで一番頭がおかしかった人。チビでメガネという野比のび太みたいな見事な喪男キャラクターだったが、そのルサンチマンが裏返ってSSの入隊条件を「身長一七〇センチ以上、金髪碧眼のアーリア人種」に設定していた。SSの制服は当然喪男を象徴する「黒」。SSの勢力を拡大するためにあれこれ画策、自分をナチ党に誘ってくれた先輩であるSA（突撃隊）のレームを粛清したりした。以後、SSのみならずゲシュタポ長官、ドイツ警察長官、内務大臣などに任命されどんどん権力を拡大する。二次元と三次元の区別がつかない騎士団マニアで、パーダーボルンのヴェヴェルスブルク城を購入して「聖槍騎士団」を結成。城の地下にはロンギヌスの槍を収めたとい

つまり、喪男たちがいざ政権をとった結果、自分たちの同類である喪男を弾圧する側に回ったわけです。それどころかイケメンを優遇し、ドイツをイケメン王国にしようとしたのです。実は**「スポーツマンは美しい」「イケメンは正義だ」「キモい奴は悪人だ」という現代日本やアメリカに蔓延する外見主義・ルックス主義は、元を正せばナチスドイツの思想**なんですよ。健全な肉体と健全な精神の持ち主つまりイケメンだけが生き延びるべきであってキモメンや病人は断種して絶滅させるべきだというのがナチスの思想でした。

つまり、ゲルマン民族（アーリア人）こそがイケメンでモテで勝ち組なんだという民族萌えの価値観を世界中に刷りこみ、「だから俺もイケメンでモテなんだ」と思い込もうとしたんですね。ここに、民族萌え・国家萌えが三次元に適用され、さらに集団組織化された時の弊害が表れています。つまり三次元＝現実で何らかの概念に価値を置くということは、必然的に世界に上下関係を作るわけです。それでも個人レベルに留まっていれば影響力が小さいのでまだ被害は少ないんですが、集団レベルになると被害がどんどん拡大していくんです。

メディアによる大衆支配システム

で、そういうイケメン至上主義を世界に流布するべく企画されたイベントがベルリンオリンピックと、オリンピックを記録した映画『民族の祭典』『美の祭典』[*43]だったわけです。またこれができばえの良い芸術映画だったりするので困る。ヒトラー自身が芸術家だったからでしょうか、ナチスはデザインとかイベントとか凄いんです。

また、宣伝省を仕切るゲッベルスがメディアオタクだったので、ナチスは映像やラ

う。この城は「ブラック・キャメロット」と呼ばれるようになった。ホロコーストもヒムラーが担当したという。しかし、実戦の指揮はまったくダメだった。戦局が悪化すると勝手に講和しようとするが、ヒトラーにバレて逃亡。最後は自殺した。

㊵ ゲーリング
一八九三年～一九四六年。ヘルマン・ゲーリング。ドイツの軍人。文系喪男揃いのナチスの高官では唯一のDQN系・体育会系だが、やはり変人でわけのわからない貴族趣味があった。第一次大戦では空軍パイロットとして活躍。戦後ナチに入党し、ヒトラーの相談役となる。第二次大戦では空軍総司令を務め、初期の電撃戦では戦果をあげる。しかしイギリスやソ連との戦闘では失敗を続け、失脚。ひきこもりになる。ニュルンベルグ裁判で死刑を宣告されたが、自ら青酸カリで自殺した。

㊶ ヘス
一八九四年～一九八七年。ルドルフ・ヘス。ドイツの政治家。ナチ党の副総統。大学でハウスホーファーに師事して地政学を学び、ナチ党に創立時から参加。獄中でヒトラーの『我が闘争』の口述筆記を担当した。第二次世界大戦の最中にヘスはいきなり飛行機に乗ってドーバー海峡を単独で横断し、イギリスに着陸した。お抱えの占星術師カール・エルンスト・クラフトの予言を信じてイギリスとの単独講和に向かったとされるが、なぜ？　以後、ヘスは刑務所から出ることなく死んだ。暗殺だとも言われている。

ジオといったメディアによる洗脳・宣伝に長(た)けていました。**広告代理店の方法論の基礎はだいたいゲッベルスが考えたものです。大衆に対する広告宣伝の威力を最初に見出して最大限に利用した人間がゲッベルスなのです。**彼にとっての広告宣伝とは、自分たちが妄想している二次元の観念を、あたかも現実＝三次元であるかの如く大衆に刷りこむための魔術でした。活字はもちろんラジオや映画といった新しいメディアが、この刷りこみに非常に有効でした。なぜかというと、ラジオから聞こえてくる「肉声」とか、スクリーンに映し出されている「本人の映像」は、本当は作り物なので二次元なんですよ。現実＝三次元ではないんですね。現実の一部だけを切り取った、三次元の影みたいなものです。ところが、それを見せられる人々は、現実だと思い込むわけです。

　三次元の世界の中の一部だけを切り取って都合の良いように編集して作り変えたものこそが、メディアなのです。「口ではなんとでも言える」「言葉ではなんとでも書ける」とはよく言われるのに対して、「映像ならなんでもかんでも映し出せる」という真理は意外に気づかれていません。

　ゲッベルスのように意図的に「都合の良い偽物の三次元」を作ることも可能ですし、作り手がたとえ出来る限り現実をそのまま伝えようとしている良心的な人であっても、結局はメディアには「現実の一部しか切り取れない」という構造上の限界があるわけで、絶対に現実そのものをそのまま切り取ることはできないのです。いずれにしても、ラジオや映画やテレビや活字媒体は、現実ではないにもかかわらず、受け手側はそれを現実そのものだと思い込んでしまいます。本人が登場しているんだから本物だろう、と直感的に感じてしまうんです。これは知覚の罠です。メディアは嘘の情

㊷ ロンメル
一八九一年〜一九四四年。エルウィン・ロンメル。ドイツの軍人。砂漠の狐。すでに近代戦の時代だったにもかかわらず戦場で騎士道精神を貫き、敵からも「聖者」と尊敬された。一方ではナルシストで、自分の写真を戦場でパチパチカメラマンに撮らせていたという。そんなイケメンが喪男軍団ナチスでやっていけるわけもなく、最後はゲッベルスたちに「ヒトラー暗殺計画に関わった」と疑われて自殺に追い込まれた。だが、そのおかげで彼は「ヒトラーに立ち向かった英雄」になった。イケメンは何をやってもイケメンなのだ。

㊸ 「民族の祭典」「美の祭典」
一九三八年。ベルリンオリンピックを記録したドイツ映画。正式なタイトルは『オリンピア』で、「民族の祭典」が第一部、「美の祭典」が第二部だった。監督はレニ・リーフェンシュタール。上映当時は絶賛されヴェネチア映画祭で金獅子賞を受賞したが、戦後はナチスのプロパガンダ映画としてタブー視され、レニも生涯沈黙を余儀なくされた。

報や作り物の価値観や送り手に都合の良い感情を受け手に喚起させるような扇動を行うのに都合の良い道具だったのです。

ですからナチスドイツの勃興の原因には、大不況による喪男の大量発生から「国家萌え」「民族萌え」ムーブメントが盛り上がったという内的要素だけでなく、ヒトラーの演説やゲッベルスによる巧みな宣伝活動による大衆洗脳の結果という外的要素もあるのです。その後、第二次大戦中には、アメリカあたりも国策映画を作ったりして、メディアによる戦意高揚を行っています。日本も同様です。のらくろ[44]も、最後は満州（中国東北部）へ渡って大陸浪人になりました。しかし、メディアが大衆の価値観と感情をある程度支配する力を持った発端は、ゲッベルスにあったと言えるでしょう。

ちなみに戦後の日本を覆いつくした「恋愛資本主義」という価値の体系もまた、メディアによって作られたものなのです。メディアの構造は、本当は二次元（フィクション）にすぎないものを、三次元（現実）に見せかけて大衆を洗脳・誘導するという仕組みになっているのです。これはある意味では喪男ゲッベルスの現実に対する勝利であり復讐であると言えます。彼は世界が二元論の構造になっていることを知りながら、メディアという魔術を駆使してあたかも世界が一元論の構造であるかの如く振る舞うという、非常に狡猾な大衆洗脳技法を開発したのです。

もちろんゲッベルス個人がこういうシステムを考え出したというよりも、まず最初に技術の発展がありました。新聞、雑誌、ラジオ、映画といったメディアが続々と生み出され、普及していったのです。これらのメディアはすべて二次元です。現実ではありません。空想の世界、観念の世界です。ところがアニメーションあたりは完全に

㊹「のらくろ」
戦前に『少年倶楽部』で連載されたマンガ。作者は田河水泡。野良犬の「のらくろ」が猛犬連隊に入ってどんどん出世していく。最初は二等兵だったが気がつけば大尉にまで昇進。モテない『課長島耕作』みたいな感じ。最後はこれ以上昇進させられないのでやむを得ず除隊させて大陸浪人にしてしまった。その後、戦局が悪化して連載は中断。戦後に雑誌『丸』で連載が再開されるが、もちろん猛犬連隊は解散になってしまったのでのらくろはいろいろな仕事にチャレンジ。最終的には喫茶店のマスターとなって完結する。

フィクションだとすぐわかりますが、実写映画になると怪しくなってきます。ストーリーそのものは作り話でも、演じている俳優は実際の人間ですからね。さらに、ラジオや新聞・雑誌の報道ともなると、すべてが「事実」であるという建前のもとに流されています。でも、本当に事実かどうかはぱっと見にはわかりません。**そもそもどうやったって、メディアは現実の影でしかない**のです。良心的に作ってもそうなのですから、意図的に事実を捏造・改竄（かいざん）しようと思えばどうにでもできるわけです。

　現代のメディアには大きく分けると二つの種類があります。まず完全にフィクションだと銘打たれている類のもの（劇映画・アニメ・マンガなど）、これは純二次元です。次に、現実だと銘打たれている類のもの（新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどのニュースやドキュメント、ノンフィクション）。これは三次元を標榜していますが本質的にはやっぱり二次元です。

　両者は一見するとまったく異なるものに見えますが、実はこれらはいずれも「メディア」という名の仮想現実なのです。「アニメを見る奴は現実逃避している」と言い出すような手合いの人は、だいたい、ニュースやノンフィクションは「現実」でアニメは「空想」だと信じているわけですが、これはメディアにまんまと支配されているだけなんです。そもそも自分が「現実」をありのままに認識できていると考えている時点で無知です。そんなことはできないとカントが言っているではありませんか。こういう人はつまり一元論の世界に住んでいるわけですが、**その一元論の世界とはメディアが作り出している仮想の世界**なんです。で、メディアを操っている人たちは、自分たちが二元論の世界に住んでいて、「現実」とは実は自分たちがメディアの力で書き換えている仮想世界、つまり巨大な「情報」（コード）の体系であることを知ってい

るわけです。彼らは現代の魔術師みたいなものです。

映画『マトリックス』では、寓話的に「メディア」が「マシーン」に置き換えられていますが、**一元論を信奉する人は実は目を開けて寝ながらメディアから与えられた夢を見ているだけ**なのです。

メディアの悪い面ばかり連ねましたが、良い面もあります。メディアの発達によって、人間は一つの価値体系・一つの幻想を容易に共有できるようになりました。キリスト教がヨーロッパ全土を覆うには長い年月がかかりましたが、メディアが発達した現代ではさほどの時間を要さずとも一つの価値体系が伝播するようになりました。

ナチスドイツは、このようなメディアの力、すなわち大衆に二次元を三次元だと思わせる力を「国家萌え」「民族萌え」の共有化に利用したのです。ナチスは滅亡しましたが、メディアによって情報を広範囲に伝播し、一つの「価値体系」、つまり「三次元」世界を作り上げるというシステムは、その後全世界に波及しました。ですから**現代の神はメディアである**と考える人もいるわけです。

カントが気づいたことですが、三次元＝現実とは人間の観念すなわち「情報」なのです。ですから**情報の発信源を握っている人間が神になれる**わけです。人間は「物自体」の世界を生きているのではないのです。我々が「三次元」＝「現実」だと思い込んでいた世界は、実は人間の精神によって認識され構築される「現象」の世界だったんです。メディアが現代の神になったのは、この「現象」の世界を自在に書き換える力、つまり「情報」を握ったからなのです。

自分のルサンチマンを他者に押し付けた悲劇

　それにしても酷い話といいますか、ナチ党幹部たちは自分も喪男のくせに仲間の喪男たちを裏切って「俺たちはモテだ」と言い出しました。しかも元々が喪ですから、病的なまでに「モテ」にこだわり続け、人種改良だの断種だのという途方もない誇大妄想にまで突っ走っていったのです。でもいくら頑張ったって喪は喪ですから、「俺たちはモテだ」という大嘘を証明する運動を始めてしまうと終わりがありません。いずれにせよ「ルックス至上主義」「スポーツマン至上主義」「広告至上主義」「メディア至上主義」、現代社会に蔓延しているこれらの価値観は、すべてナチスが発展させたもの、あるいはナチスが発明したものなのです。そして、これらの価値観は、すべてメディアによってあたかも現実であるかのように広められてきたわけなんです。

　なんだか、脱オタして女にモテようぜ、なんて言い出す連中の本性がここに現れているような気がしてなりません。

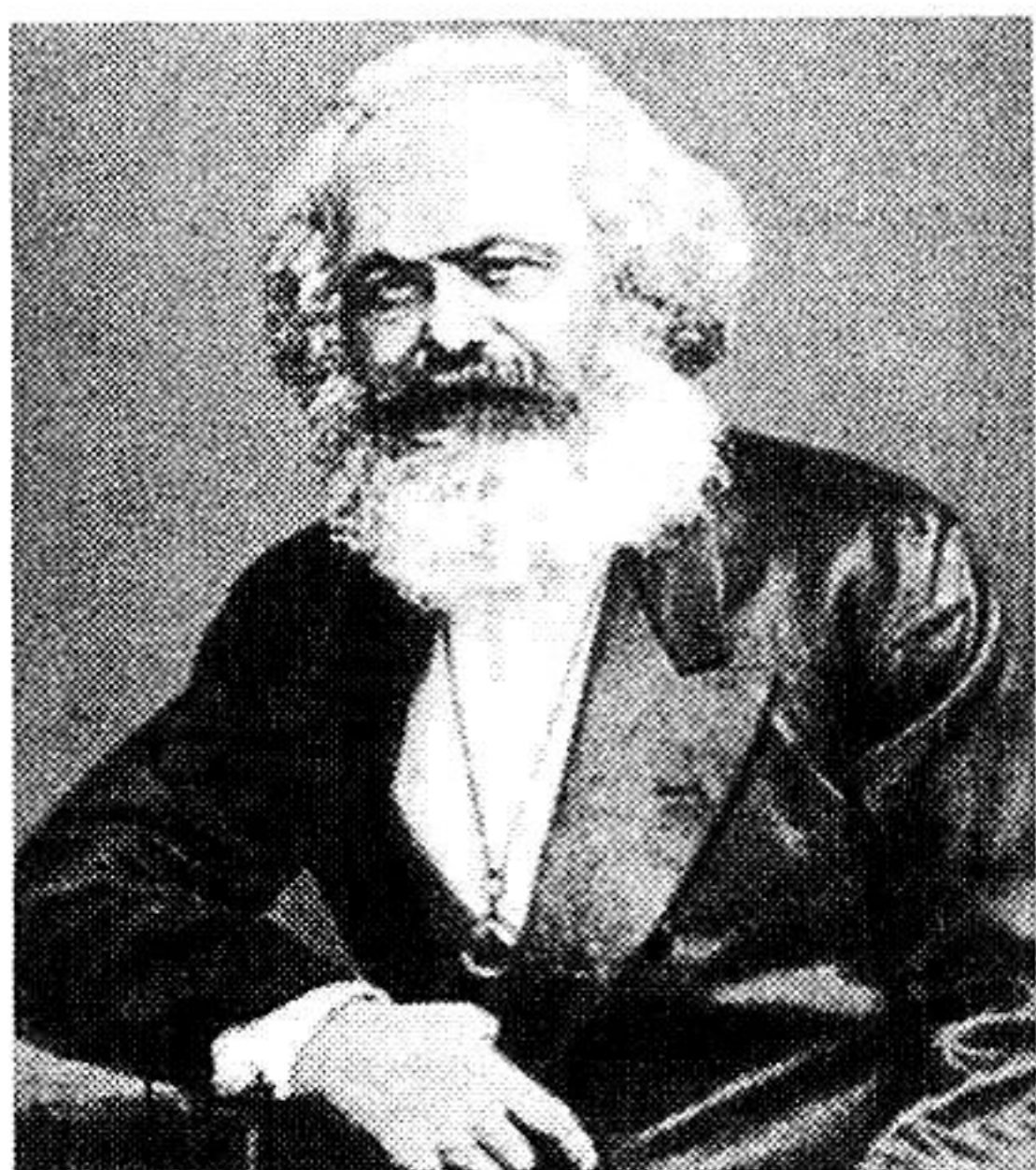
　しかしヒトラーもゲッベルスも、当初あまりにうまくことが運びすぎたために、実は自分たち自身も自己暗示に陥って二次元と三次元の区別を喪失してしまったのではないでしょうか。二人は、ヒトラーこそフリードリヒ大王の転生であると信じるようになっていました。戦争末期、二人はベルリンの地下にひきこもりました。ソ連軍がベルリンに迫る中、地下にこもったゲッベルスはヒトラーにフリードリヒ大王の伝記を読んで聞かせていたと言います。一八世紀にプロイセンを率いたフリードリヒ大王は七年戦争に苦戦してロシア軍にベルリン近くまで迫られ、一時は毒を仰ごうとしましたが、ロシア皇帝エリザヴェータが急死してフリードリヒのファンだったピョートルがロシア皇帝になったためロシアと和平を結ぶことができ、奇跡的に戦争に逆転勝

利したのです。ゲッベルスの朗読を聞きながら、ヒトラーは涙を流していました。そして奇蹟は起きたのです。ゲッベルスはヒトラーに「ルーズベルトが急死しました」と報告しました。これで戦局は一変する、はずでした……。

うほっ、いい友情、という感じの逸話ですが、つまりヒトラーもゲッベルスも「自分たちはフリードリヒ大王とその側近の再来である」という脳内で作った「二次元」設定を完全に現実と混同してしまっていたわけです。

これまでの話をまとめましょう。ヒトラーたちの出発点は、明らかに喪男のルサンチマンです。そのルサンチマンの集団化に成功したことで、政権を手に入れました。ところがナチスドイツは喪男を救済する王国を作るどころか、正反対の行動に出たわけです。自分たちを人種ピラミッドの「頂点」に置き、ピラミッドの「下」に他の民族を置いて、苛めました。かつて喪男として社会に苛められていた面々が、いざ権力を得ると自分がやられたことを他者に対してやりかえしたのです。

彼らは人間精神の悪い部分である「鬼畜」の心を三次元で実践してしまったのです。「鬼畜」が三次元に漏れてきた場合、つまり三次元世界で自分のルサンチマンを他人に押し付けなければ自分は癒されないと信じているタイプの人間が暴れた場合、どうなるでしょう。トラウマを与えあい、相手を傷つけあう無限の地獄が現出することになります。「憎しみの連鎖」などと言われる現象です。二次元世界の価値を否定して、すべてのルサンチマンを三次元世界のみで解決しなければならない世界観を選択した場合、このような悪循環が終わらなくなるんです。

ですからブッダは、人生とは苦であると言い、**現世（三次元）から解脱しなければ**

苦しみは終わらないと言ったわけです。すべての人間が二次元で自分を癒せるようになり、鬼畜の精神を二次元で妄想するだけで処理することができるようになれば、ルサンチマンが無限循環する元を、因業の輪廻の輪を断つことができるはずなのです。

2　マルクス主義は喪ルクス主義

唯物史観と喪男問題

マルクスもまたヘーゲル学派から出発したドイツの哲学者でした。彼は目の前に展開している資本主義社会の悲惨な現実に怒り狂っていたので、危険人物扱いされてニート暮らしを余儀なくされました（またですか）。しかも、ニートの喪男なのにうっかり結婚してしまったため、子供を何人も餓死させてしまったそうです。喪男がうかつに家庭を持ってはいけません。

マルクス

ヘーゲルは「絶対精神」という神の意志みたいな超越的存在が人類の歴史をある目的へ向けて発展させているという目的論を唱えたのですが、これは明らかにキリスト教の「神」の概念をヘーゲルが引きずっていたからです。しかし、そんなものあるかいな、と言い出した人も多かったわけです。ドイツ観

念論の集大成であるヘーゲル哲学は観念（二次元）が現実（三次元）を生成するという二次元主義一元論なのですが、この当時、自然科学が発達して「唯物論」という正反対の考え方が流行っていました。つまり観念（二次元）はないのだ、という思想です。唯物論の世界観では、すべてが物質的な現実（三次元）によって作られていて、二次元は三次元の上にちょこっと乗っかっている幻みたいなものなのです。人間機械論も、こういう唯物論の系譜です。人間の精神すら、実は人間の肉体という現実＝モノの一部にすぎないという思想です。デカルトの二元論やカントの二元論（厳密には三元論）を全部否定したわけです。

　マルクスは、この唯物論を人類の歴史全体に適用して「唯物史観」を作り上げました。とにかく「モノ」の生産力こそが、人間の社会や精神を構築する土台になっているのだ、とマルクスは考えました。この発想は今までの常識とは真逆だったのです。目の前の資本主義の隆盛を見れば、そう考えたくもなります。資本主義は文字通り経済こそがすべて、金こそがすべてという世界だからです。ところで実は「資本主義」という概念を発見したのはマルクスでした。**マルクスが現れるまで、哲学者は誰も世の中が金で動くようになっていたことに気づいていなかった**のです。当時の大学の哲学者たちは役立たずばかりだったんですね。で、マルクスが次に考えたのが、「なぜ喪男は悲惨な現実を生きねばならないのか」という例の喪男哲学の大問題でした。唯物史観と喪男問題を重ね合わせて考えますと、答えは一つ。「搾取」です。

　資本家が労働者を働かせる。これが資本主義の基本構造ですが、この過程で資本家が労働者を搾取するわけです。本来なら労働者は働いた分の対価を得るべきなのですが、実際には上前をハネられる。そのため労働者は働けば働くほど資本家だけを儲け

させてどんどん貧乏になる。**貧乏になるとモテませんから、喪男になります。それに対して資本家はどんどん富むので、モテモテになる**わけです。こうして労働者の「疎外」つまり「喪男化」が起こるのです。いまの世の中は労働者の権利がある程度認められていますが、当時はまだまだ社会主義的な政策が採用されておらず本当に無茶苦茶だったんです。労働者とは名ばかりの奴隷が大勢いたわけですね。で、マルクスは「これはけしからん！」と激怒して過激発言を繰り返したのでドイツを追い出されました。祖国を追われてイギリスで貧乏暮らしを余儀なくされたマルクスは、ますます喪男化して怒りまくります。

喪男革命宣言

　さらにマルクスはダーウィニズムの影響を受けて、人間の歴史は闘争の歴史であった、と考えるようになります。それも動物が行っている種族と種族の闘争ではなく、人間同士の「階級闘争」です。つまり、**喪男とモテの戦いは、有史以来延々と形を変えて続けられてきた、とマルクスは考えた**のです。

　で、家にひきこもってこういうことを考えているうちに食うものもなくなって子供を次々と死なせたりして、マルクスの喪男レベルはとてつもなく上昇しっぱなしです。もはや青天井です。ついにマルクスは「革命」を唱えました。喪男革命宣言です。資本主義社会は喪男によって打倒されるべきだ、いや、喪男革命は歴史の必然であって必ず実現する！　と叫んだのです。

　このマルクスの叫びに呼応したヨーロッパ各国の喪男たちは、本当に革命を起こそうとしました。たいていは失敗に終わりましたが、レーニンのロシア革命は成功しま

した。かくして、マルクス・レーニン主義を標榜するソヴィエト連邦が本当に成立したのです。
　ここでおかしなことが起きています。マルクスは「人間の精神は生産力によって決まる」。つまりモノの世界が精神の世界を支配しているという唯物一元論（三次元一元論）を唱えたのに、実際にはマルクスの「思想」の力がロシアに革命を起こしたわけです。
　マルクスの考えに基づけば、資本主義体制が革命によって打倒される時期は、生産力が充分に発展して労働者がそれなりの力を持った後に限られるはずでした。しかし、資本主義が発達したイギリスではなく、当時ド田舎だったロシアでいきなり共産革命が起きたのです。レーニンたちは明らかにマルクスが書いた「本」によって動かされていました。つまりマルクスの「精神」が喪男革命を起こしたと言っていいのです。あれ？
　そもそも「人間の精神は生産構造によって規定される」という考え自体、観念ですよね。そうです、唯物史観自体が観念なのです。何だか矛盾してます。
　その上、唯物史観に基づいて作り出された社会主義国家の多くは独裁政権化してむしろ喪男たちを抑圧したわけです。労働者＝喪男の怒りによって生まれたはずの社会主義国が、なぜ、喪男を抑圧して支配する側になってしまったのでしょうか？　ここにもナチスドイツ同様の矛盾が現れています。
　レーニンはこの矛盾を「プロレタリアート（労働者）独裁」という概念によって解決しようとしました。とりあえず真の共産主義世界が実現して国家が不必要になるまでの間、労働者（つまり共産党）が政府を独裁しますよ、という意味です。そのうち社

会主義国家が成熟すれば真の共産主義世界が到来するので国家はなくなります、それまで我慢してくださいということです。期限は……不明です。なんだそりゃ。なんだか寸借詐欺っぽいような気がします。一度「権力」を手に入れた人がその既得権益を自分から捨てるはずがありません。ブッダみたいな解脱系喪男が共産党政府の頂点にでも立てば別ですが、そんな無欲な人が出世できるはずありませんしね。

二次元を無視して失敗

マルクスの哲学もまた、喪男のルサンチマンから生まれています。ですから多くの喪男に支持されたのです。しかし**マルクスの最大の問題は、やはり、二次元を全否定して三次元一元論を採用したことにありました。**

マルクスは生産力＝モノが人間の精神を規定していると考えました。故に国家の社会主義化・共産化によってすべての喪男が安定した仕事と収入を得られるようになれば、世界は平和になるはずでした。人間が物質的に満たされる世界が実現すれば、それで喪男は救われるとマルクスは考えていたのです。つまり、充分に生産力が発達してたらふくメシを食えるようになれば人間は幸せになれる、喪男もいなくなる、世界からルサンチマンが消える。それがマルクスの思想の根本でした。

確かに食うメシに困っている人間は満腹になることで満たされます。メシが食えなければ人は餓死します。生きるためにはまず「衣・食・住」という物質面を満たさなければなりません。これは欲望というよりも生命を維持するための本能的欲求です。僕だっていまこれを書きながら「おなかがすいたなあ」と困っています。そろそろコンビニ弁当を買ってこないと脳にブドウ糖が充分供給されなくなって、文章が書けな

くなることもわかっています。ああ、スパゲティが食べたい。その意味で唯物史観はある段階までは正しいのです。

しかしマルクスは三次元と二次元の関係を一方通行でしか捉えませんでした。つまり三次元が二次元の全部を作っているのだ、と考えたのです。しかしですね、もし**三次元が二次元のすべてなのであれば、二次元は存在する必要などないわけです。**動物のように、ただ生きてメシ食って寝て子育てして終わり、で構わないわけです。ところが人間だけが、三次元（現実）と二次元（脳内）の乖離に苦しめられているわけです（もしかしたら犬も二元論的乖離に苦しんでるかもしれませんが）。そもそもマルクスが哲学者になって資本主義の疎外について悩んでいること自体、三次元（現実）と二次元（自分）の乖離そのものではありませんか。

そうです。喪男は、たとえ安定した仕事と収入を得られて衣食住の欲求を満たせる人生を手に入れても、なおも喪男として苦しむのです。これは三次元と二次元が永遠に乖離しているからです。「疎外」や「搾取」といった観念じたい、二次元（精神）の思う通りに三次元（世界）が作られていないことに対するルサンチマンから生まれてくるわけです。

衣食住という現実的な欲求を満たすだけで喪男が救われるのならば、喪男が団結して資本主義を打倒すれば問題は解決です。実際、マルクスはそう考えたわけです。資本家を滅ぼして、労働者たちが社会主義化された国家を運営し、いずれ国家そのものを消滅させれば良いと。その結果、経済的な平等が実現されるはずでした。

しかし実際にはそうなりませんでした。だって**共産党政権が誕生したら、結局は「共産党」が「モテ」になって、「その他」が「喪男」になるだけ**です。何のことはな

い、ピラミッドを構成するパーツが変わっただけで、ピラミッド階層自体は変わらないんです。

それどころか喪男のルサンチマン炸裂で、国民は何されるかわかったもんじゃありません。なんせ「暴力革命」を肯定して資本家を狩るわけですから、これはもうマルクス自身の思惑を逸脱して、ルサンチマンによる復讐劇になってしまっているわけです。フランス革命だってスローガンは美しかったのですが実際にはかたっぱしから反対派をギロチンで処刑するという凄惨なものになりました。ロシア革命も同じパターンを踏襲したのです。マルクス自身は資本主義が充分に発達しないと次の段階には移行しないと考えていたのに、彼の哲学に賛同して集まったレーニンたちは、資本主義すら発達していないロシアでいきなり政府を打倒しようとしたわけです。で、マルクス主義を教義化して異端を弾圧しました。例えば「世界同時喪男革命」を唱えたトロツキー[*45]はスターリン[*46]と思想的に対立し、ハンマーで殴られてブチ殺されました。

ここにも哲学の「組織化」「カリスマ化」「体系化」によるドグマ化という問題が表れています。一人の喪男が立ち上がって喪男の苦悩を解決しようと哲学を始めると、その周囲になんだか知らないけど集団ができて、いつの間にかその思想自体が宗教化して喪男を抑圧する側に回ってしまう。人間のやることは数千年たっても変わっていないのです。特にマルクスの場合、三次元を主戦場として喪男が団結し闘争せよという哲学を説いたわけですから、多くの喪男から「これこそ俺が求めていた哲学だ！」と支持されたのは当然なのです。

マルクスの三次元一元論から出発した社会主義国家は中世キリスト教社会と同じで、人間の過剰な欲望つまり二次元を否定します。人間が動物と違ってあれこれ悩む

㊺　トロツキー
一八七九年〜一九四〇年。レフ・トロツキー。ロシアの革命家・政治家。レーニンに従ってロシア革命時代のソ連で活動。赤軍を率いて白軍を打倒し、内戦を終わらせた。しかしレーニンの死後、「世界同時革命」を唱えるトロツキーは「一国社会主義」を標榜するスターリンに追われて亡命。各国を転々とするが、結局暗殺された。

㊻　スターリン
一八七九年〜一九五三年。ヨシフ・スターリン。ソ連の政治家。レーニン死後のソ連で独裁権力を握り、トロツキーたち政敵を粛清した。スターリンが粛清した政治犯はおよそ一〇〇万人、強制収容所やシベリアへ送られて死んだ人間の数は二〇〇〇万人だとか。凄い人間不信で、常に暗殺を恐れ、家族すら信用してなかったという。晩年は迷宮みたいな部屋に隠れていた。全身ボロボロのキモメンだったので、写真や絵にはパタリロ並みの修整を施していた。『マクベス』の登場人物ならともかく、実在されては困る人物。

のは、理想や夢や欲望があるからです。これらはすべて過剰な観念です。**ただ生きるだけなら、こういう精神**（二次元）**は要らない**のです。中世は、キリスト教一元論体制によって、こういう過剰な精神を抑圧したわけですね。中世は生産力が低くヨーロッパ中が貧乏喪男だらけだったので、それはそれで長続きしたわけですが、現代では無理です。むしろ資本主義による生産力の増大やメディアの発達によって、人間の精神、すなわち二次元のパワーはどんどん増幅され続けているわけです。いくら情報を統制したり抑圧したりしても、抑え続けられるものではありません。

　また、消えていった多くの社会主義国家は、マルクスの理想を実現するためにすべての喪男に「豊かな物資の生産と消費」を実現しなければならなかったのに、それすらできなかったのです。むしろ喪男たちはどんどん貧乏になりました。実は生産活動（＝経済活動）もまた、人間の精神（＝二次元）の産物だったのです。ですから、枠だけを国家が統制しようとしても、中身＝人間の精神がついてこなかったのです。二次元という活動力の原動力を抑圧され、三次元でも貧乏なんですから、そりゃ失敗します（図４－２）。

　マルクスが考えた三次元一元論に基づく国家の創造は、二次元という要素を無視したために挫折したわけです。

国家は喪男を救えなかった

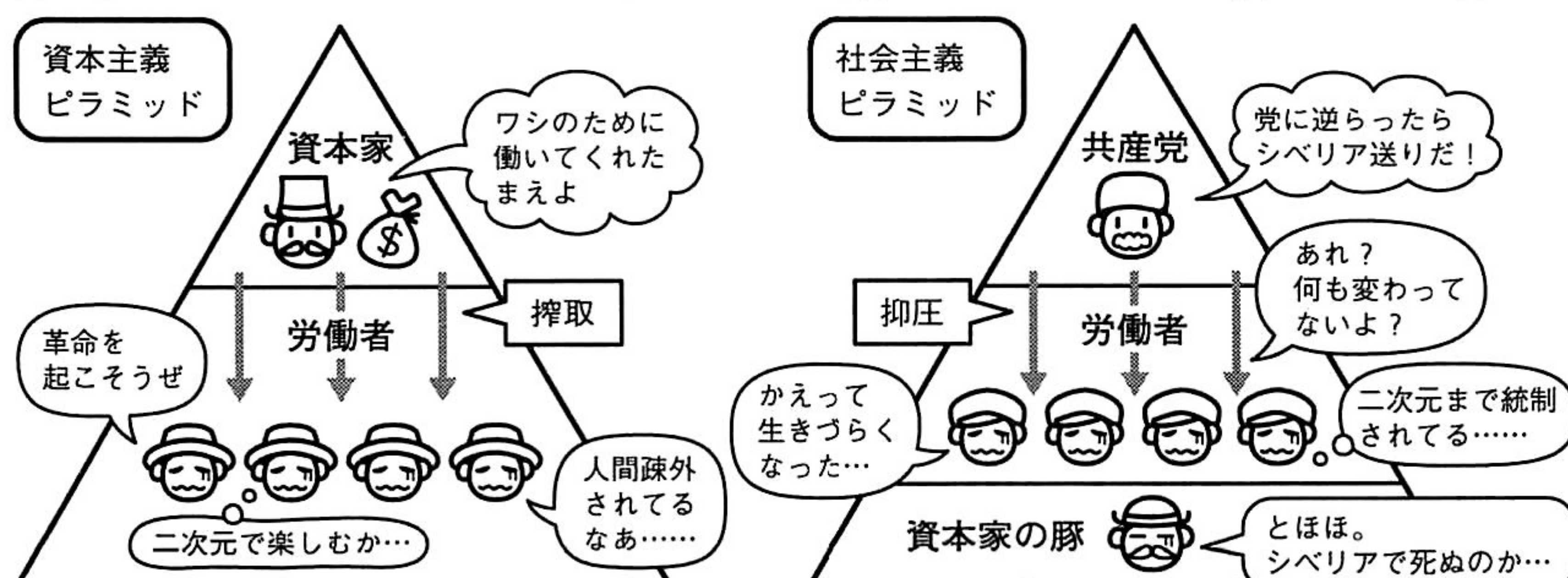
　こうして神に代わって「国家」が喪男を救うという「国家萌え」の時代は終わりました。そして**哲学もまた、第二次世界大戦勃発と同時に終わった**のです。ヘーゲル以後の哲学は、神に成り代わって国家の力で喪男を救い世界に理想を実現する方法を探

社会主義へと体制が変わっても、ピラミッドの頂点が入れかわっただけで人間疎外つまり喪男発生のシステムそのものは何も変わらなかった。それどころか唯物論体制では二次元が否定されるので、喪男の苦悩は増した。

図４—２　資本主義ピラミッドと社会主義ピラミッド

すという性質のものになっていました。そもそも西洋哲学の開祖であるプラトンからして、「哲人政治」を説いていました。ニーチェやマルクスは政治家にはなりませんでしたが、二〇世紀になって彼らの哲学に大いに影響を受けたであろうナチ党や共産党が自分たちの哲学的思想に基づいた国家の建設を目指し、そして失敗したわけです。この後、哲学は世界の構造についてちまちまと分析し続ける構造主義[*47]、さらには哲学自体を解体するポスト構造主義に傾倒していきます。プラトン以来の、哲学による理想国家の建設という夢は、終わったのです。哲学は死にました。

スターリンやヒトラーは、ある日突然何かの間違いで偶然現れたわけではありません。資本主義社会が発達して大量の喪男がヨーロッパ中に放り出されたために、喪男たちの巨大なルサンチマンを昇華するための哲学が待望されたわけです。しかし、マルクス主義も国家社会主義も、結果だけを見ればルサンチマンの「昇華」ではなく「復讐」のために使われた感が拭(ぬぐ)えません。っていうか明確に復讐に使われたんです。

ブッダは「縁起」という概念を唱えていました。すべての現象には原因がある、ということです。縁があるから、現象が起こるのです。ナチズムやマルクス主義もまた、資本主義社会による喪男の大量発生という原因によって生まれてきた結果なのです。マルクスは人間の歴史を階級闘争の歴史だと考えましたが、それはまさしくその通りで人間の歴史とはモテと喪男との闘争の歴史だったのです。しかし、喪男のルサンチマンは、ただ衣食住を満たされればそれで昇華されるものではなかったのです。

つまり、現実=三次元をどうにかするだけでは、喪男のルサンチマンは決してなくなりません。なぜならルサンチマンそのものが二次元=精神だからですね。二次元=精神が満たされなければならないのです。マルクス主義はその二次元を無視して失敗

㊼ 構造主義
戦後フランスでサルトルの実存主義に代わって流行した思想。「機能」ではなく「構造」を研究する。代表的な構造主義学者はレヴィ=ストロース、フーコー、ラカン、アルチュセールほか。元々は言語学者のソシュールが発端だった。ソシュールは、言語はそれが指し示すモノ自体といちいち対応しているわけではなく、言語と他の言語との「差異」として成立していると考えた。つまり言語は三次元（現実）の反映・模造なのではなく、言語そのものが独立した世界（二次元）なのである。そして言語の意味とは「差異」つまり他の言語との関係性に他ならない。この相対主義的なソシュールの発想は、以後、あらゆる文科系学問に適用されていった。そしてそれは「言語」によって世界を説明できると考えてきた西洋哲学・形而上学を解体する作業だった。それが構造主義だ。

し、ヒトラーは逆に自分の中の二次元＝俺様の精神を全ヨーロッパに押し付けようとして失敗したわけです。

　マルクス・レーニンとナチスドイツは、「三次元偏重」（唯物論）と「三次元の二次元化邁進（まいしん）」（アーリア至上主義、第三帝国幻想）という真逆の方向性を持っていましたが、いずれも個人の救済ではなく「国家」による救済を考えたという点では全体主義的でした。上から一方的に一つの価値観を大衆に押し付けるという形になったんです。

　なぜ全体主義的になるかというと、いずれも「三次元」の中でのみ喪男は救済される、と考えたからですね。**三次元だけが救いの場だとすれば、団結するしかなくなります。**組織が必要になり、現実社会を支配する権力が必要になります。二次元で救われるのであれば、ブッダのように出家して解脱すればよいわけです。でも、キリスト教信者のように元々は二次元での救済を目指していた面々も、執拗に弾圧され続ければ固まって三次元での居場所を確保しなければならなくなります。ある程度三次元での立場を確保できないことには、二次元での救いもおぼつかないんです。瞑想中に首をはねられたら終わりですもんね。ですから三次元での喪男の闘争のすべてが無意味だったというわけではないのですが、あまりにも被害と犠牲が甚大すぎました。

哲学の終わり

　一九世紀から二〇世紀にかけて巨大な国家萌え哲学の波がやってきた最大の理由は、やはり、神に代わる「自我の保証」が必要になったからだと思います。順番から行けば、教会と王権が没落すれば次は政府です。そういう意味で、神が死んだ後に国家が新たなる喪男たちの救い主になったのは妥当な順番でした。

㊽ サルトル
一九〇五年～八〇年。ジャン＝ポール・サルトル。フランスの喪男哲学者。「三次元世界は二次元つまり人間の主観によって意味づけられ、構成されている」という二次元観念論系の「現象学」を創始したフッサールに学び、『存在と無』という真っ暗な哲学書を著したり「実存主義」を提唱したりして戦後フランスの思想界をリードした。しかしフランス思想の趨勢はやがて実存主義から構造主義へと移行する。サルトルはマルクス主義に走り、長らくソ連を支持したり、次には毛沢東を支持したりしていた。今からは想像もつかない話だが、一九六〇年代の日本の若者にとっては、サルトルは「モテ」アイテムだった。哲学のモテ商品化・アイテム化はすでに六〇年代に始まっていたのかもしれない。代表作『嘔吐』『存在と無』。

㊾ デリダ
一九三〇年～二〇〇四年。ジャック・デリダ。フランスの現代思想家。元はデリダもフッサールの現象学から出発し、第二次世界大戦を受けて西洋哲学つまり形而上学を解体する、「脱構築」という概念を提唱した。デリダは哲学を解体するにあたって、それを破壊するのではなく脱構築という手法を使ってズラしていこうと提案した。それにより、プラトン以来のイデアつまり二次元という概念を哲学から消し去ろうとした。二次元の過剰な理想（第三帝国、千年王国）が三次元に漏れた結果、ナチスが現れたからだろう。ちなみに本書も哲学の概念を「喪」と「モテ」というキーワードによって全部ズラし、哲学の脱構築を試みているのである。代表

マルクスで哲学の歴史はほぼ終わりです。この後、サルトル[*48]が出てきて再び二次元と三次元の乖離について喪男の立場から考察する実存哲学が現れましたが、世間一般に対して大きな影響力を持つことができた哲学者はサルトルが最後です。その後のデリダ[*49]やドゥルーズ[*50]といった面々はもう「哲学オタク」内部だけのカリスマです。なぜならば**人間精神と世界の問題について専門に研究する学問がおおむね出揃ったため**です。学問の細分化・専門化が進んだんです。

人間の精神については、心理学という学問が作られました。ただし喪男哲学史上最大の影響力を持つことになったフロイトは、心理学者ではなく医学者から出発した精神分析学者でした。フロイト自身は精神分析学は本質的には自然科学で、最終的に医学的・生物学的な基盤を持つことができると考えていたんです。まあ、結局そうはならなかったんですが。

一方、世界の構造・起源の問題は物理学者や生物学者といった自然科学者が考える分野となりました。だから現代の最先端の（世界論的な意味での）哲学は、宇宙物理学だったりするわけです。**人々は誰も哲学者の言うことなんか聞かなくなりましたが、アインシュタインやホーキング[*51]の言うことなら聞く**わけです。そもそも科学は「自然哲学」という哲学の一ジャンルだったわけで、哲学のいろいろなジャンルの中から科学が「勝ち残った」と言ってもいいのです。

もう哲学は宇宙の謎を解明できないと見切られたんです。人間の精神についても同様です。またそれだけでなく、哲学自体の実効性・有効性も疑われるようになったんです。哲学は伝統的に「言語」によって世界を説明しつくせるはずだという前提で成立していました。しかし、言語と世界とは、致命的に乖離しているわけです。だって

作『エクリチュールと差異』。

㊿　ドゥルーズ
一九二五年～九五年。ジル・ドゥルーズ。フランスの現代思想家。元は哲学史研究者で、ニーチェに大きな影響を受け、ヘーゲルが築き上げた西洋哲学の体系を否定した。デリダもそうだったがドゥルーズもプラトン以来のイデア（本質）を否定して世界には「差異」だけがあると考えた。続いてドゥルーズは精神科医のガタリとコンビを組み、資本主義を「物語を作り欲望を抑圧する装置だ」と批判した（戦後ヨーロッパの哲学者はこういう人ばっかりです）。ニューアカブームの時に流行した「スキゾとパラノ」はドゥルーズ－ガタリのキーワード。最期は自殺。ドゥルーズの死後、彼をはじめとするポスト・モダン（注54）の現代思想家たちは物理学者アラン・ソーカルに「難解な本を書いて読者を煙にまくため、自然科学の数式や用語をデタラメに使っている」と徹底的に批判された。ポスト・モダン思想は哲学・形而上学を解体したが、自らも自然科学によって解体されたのだ。代表作はフェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』『千のプラトー』。

51　ホーキング
スティーブン・ホーキング。一九四二年生まれのイギリスの物理学者。筋萎縮性側索硬化症という難病にかかっていて、車椅子の生活をしながらアインシュタインの相対性理論と量子力学の統一という物理学の難問に取り組んでいる。現代の物理学者はたいていそうだがホーキングもSFオタクで『スタートレック』に出演した

言語は二次元（想像力の産物）で、現実は三次元ですから。

　言語学が進むと、言語そのものが厄介な二次元の産物だとわかってきて、その結果言語で世界をすべて説明できるとは考えられなくなったのです。ソシュール[*52]は、言語はそれ自体で独立している存在（つまり二次元に属するもの）であり、現実の事象そのものをぴったりと言い表しているわけではない、そして言語の本質は「差異」だ、と考えました。ソシュールによると、言語の役目は「これとあれとは別物だ」という差異を示すこと、つまり「区別」でしかないのです。例えばりんごは「りんご」とか「Apple」とか呼ばれますよね。みかんやぶどうとの差異を示せればなんでもいいわけです。本当は「A」でも「ア」でも「恥ずかしい台詞（せりふ）、禁止！」でもいいんです。ということは**言語では世界を正確には言い表せない**んです。「言語＝二次元、世界＝三次元」という二元論がここで復活したわけです。

　さらに天才哲学者ヴィトゲンシュタインは「哲学とは言語ゲームだ」と言いました。「世界を語る哲学なんかに意味なんかねーよ、バーカ」ということです。形而上学の全否定です。ひ、酷い……。

　これで「世界＝三次元を言語で説明する体系」としての哲学は終わったのです。代わりに三次元を記述する手法として台頭したのが数式とかデータを扱う自然科学の方法論です。戦後の哲学の本にインチキな図表や数式が乱立するようになったのは、哲学を「科学的」に見せかけるための苦肉の策だったんです。まあ、当然インチキだったので、すぐにバレました、ええ。なんか「萌え」が流行ったら萌えと関係ないいろんな人が突然「萌え」について語りだしましたよね。それと一緒です。

「三次元一元主義」の哲学は、「言語＝哲学自体が二次元じゃねーか」というツッコ

りした。「宇宙で最大の謎は、女性」という名言がある。奥さんに虐待されているという噂もあるが真相はわからない。『ホーキング、宇宙を語る』が日本でもベストセラーになった。

㊷ ソシュール
一八五七年〜一九一三年。フェルディナン・ド・ソシュール。スイスの言語学者。フッサールとともに、構造主義の元祖的存在。天才言語学者でインド・ヨーロッパ語の研究などを行ったが、後年はアナグラムの研究に取り組むようになった。ソシュールは、言語とは実体ではなく「差異」の体系つまり相対関係であると主張した。西洋の哲学は言語至上主義だったので、ソシュール以後の現代思想はまず言語を相対化する作業から哲学の解体に取りかかることとなった。ここから現代思想の特徴である徹底した相対主義が生まれたのだ。代表作『一般言語学講義』。

㊸ 「いまの高校の社会科の教科書とか読めばわかりますよね」
高校には「人間、いかに倫理的に生きるべきか」を考えさせる「倫理」という科目はあるが、「人間は歴史の中でどのような世界観・人間観を持ってきたか」を教える「哲学」はない。中学校くらいから子供に哲学を教えないと世の中は救いがたいバカだらけになると思うのだが……。

㊹ ポスト・モダン
戦後フランスの哲学／現代思想の潮流のうち、構造主義の終盤からポスト構造主義あたりを

ミによって終わりました。「二次元の理想を三次元に実現しよう」という方向の哲学も、第二次世界大戦によって「勘弁してくれ」ということになりました。ですから**現代では、哲学は「倫理」というジャンルに細々と残された程度の存在**にすぎません。いまの高校の社会科の教科書とか読めばわかりますよね。[*53]

戦後の哲学界は、従来の西洋哲学を自ら解体する作業に取り掛かりっぱなしなのです。あれも間違いだった、これも間違いだった、と確認しては幻滅していくわけです。一度リセットしないといけなくなったんです。在庫一掃、店じまいです。「ポスト・モダン」[*54]という言葉をよく見かけますが、あれは「もう近代は死んだ」という意味です。つまり哲学は死んだのです。それだけ知っておけばポスト・モダンを理解したことになります。それ以上知らなくても何も困りません。

ちなみに、ポスト・ガンダムといえば『伝説巨神イデオン』[*55]ですが、この場合のポスト・ガンダムはたぶん「ガンダムは死んだ」という意味ではありませんでした。「ガンダムの次」ぐらいの意味だったのではないでしょうか？　でも、死んだのは「イデオン」のほうでしたね。どうでもいいですが。

モテない苦しみから世界を語る

それにしても、なぜ人はパンのみで生きられないのでしょうか？　どうして神や国家といった「自我の保証」をいちいち外部に求めなければ生きていけないのでしょうか。そもそも、なぜルサンチマンが溜まるのでしょうか。なぜモテたいのか。なぜモテないと苦しいのか。

近代の終焉によって、巨大な物語による全人類の一斉救済という夢は終わりまし

「ポスト・モダン」と呼ぶ。ドイツ喪男哲学の影響の下に哲学の体系を否定し、相対主義の立場を取るスタンスが最大の特徴だが、無駄に難解な文章を弄することが多く、物理学者アラン・ソーカルの「ソーカル事件」（ソーカルは、ポスト・モダンの連中が数学も何もわかっていないのに適当な数式を論文に入れているのではないかと疑い、デタラメな数式を適当に放り込んだ捏造論文「境界を侵犯すること：量子重力の変換解釈学に向けて」をポスト・モダン雑誌『ソーシャル・テキスト』に半ば冗談で投稿してみた。すると、そのインチキ論文が雑誌に掲載されてしまった。この経緯を暴露したソーカルは、続いて同じ物理学者のブリックモンと共著で『知の欺瞞』という本を出版し、ラカンやボードリヤールたちポスト・モダン思想家を徹底的にボコボコに叩いた）で失墜した。なぜポスト・モダンが妙な数式や疑似自然科学的な言説を多用したかというと、①すでに「科学」が「哲学」に取って代わっていたから。つまり時流に合わせようとした。自然科学コンプレックスの所産。②理解できない難解な文章を見ると「筆者は頭が良い」と思いこむバカな読者がいるから。モテのため。③実は「哲学なんて無意味だ」と言ってるだけなんだけど、それだけじゃ何だか空しいし仕事にならないのでとりあえず文章に凝ってみたという、ソフィスト的態度。というあたりか。この種の「無意味でインチキな言説」の破壊はイエス（律法派の否定）、ソクラテス（ソフィストの否定）、デカルト（スコラ哲学の否定）、キルケゴール（ヘーゲル派の否定）と歴史的に延々と繰り返されてきた。何を書いているのかわからない難解な文章

た。残された道は、巨大な「統一国家」という装置が細分化されることで生み出された無数の民族主義と、そしてそれぞれの喪男がブッダのように自分で自分を救う道だけでした。

インドでは、人間の精神には一〇八個もの煩悩＝欲望があり、この煩悩が人間自身を苦しめると考えました。モテない苦しみもまた、この煩悩のうちの一つです。そこで煩悩からの解放＝解脱が理想とされたのです。近代を支配した資本主義の原動力はマックス・ウェーバーによれば「勤勉」の精神でしたが、その裏には実はゾンバルトが見破ったように「恋愛と贅沢」という欲望が隠されていました。モテたいから過剰に勤勉になったのです。つまり資本主義そのものが「モテ」という煩悩なんです。

こういう欲望の問題は東洋では大昔から考えられていたのですが、西洋では従来あまり問題にされていなかったのです。西洋では、中世は欲望全否定、近代は欲望全肯定です。極端です。いずれにしても**「人間の欲望とは何か」「喪男のルサンチマンとは何か」という問題を考えた哲学者はあまりいなかった**のです。そういう意味では西洋の有名哲学者はどいつもこいつも自分と世界の区別がついていないセカイ系喪男だったのかもしれません。**人間ごときに「世界の存在意義」だの「世界の本質」だのを見抜けるはずがありません。**それも、言語という二次元の妄想体系だけで世界の運命を理解しようなんて、とてもとても……。

そもそもたかが一人の喪男にすぎない哲学者がそんな巨大な問題を考えなければならなくなったのは、「喪男の苦悩」という本当の問題に直面できなかったからです。キルケゴールがヘーゲルと対立したのは、ヘーゲルが「喪男の苦しみ」から目を逸らすために絶対精神という新しい「哲学の神」をデッチあげたからです。

は、「実は何も書いていない」という真実を隠蔽するために書かれているだけなのだ。そもそも本来文章というものは相手に自分の言葉を伝達するための手段であり、読者に理解されなければ意味がない。それをわざわざ理解できないように書くというのは、何かいかがわしい「裏」があるのである。ソーカルはその「裏」の一つに「著者本人がまったく理解していない自然科学用語・数式をデタラメに使っている」というやり口を発見したのである。ただしソーカルは「科学は常に正しい」という立場からポスト・モダンの相対主義も否定しているが、これについては当の科学者側からも異論が出ている。

(55) 「伝説巨神イデオン」一九八〇年〜八一年。日本サンライズ（現サンライズ）のアニメ。ガンダムの富野由悠季監督が手がけた。最初はテレビで放映されたが打ち切りとなり、真の最終回は劇場版「接触編」「発動編」で見られる。「発動編」の展開とエンディングは、喪にも程がある。

「世界を救う」とか「人類を救う」とか言ってる人は、だいたい、個人的なルサンチマンを全人類に勝手に敷衍しようとしているだけです。そうすることによって、自分の苦悩を希釈できると誤解しているんです。つまり頭の中で世界と自分とを一体化しているのです。しかし、その果てには、第三帝国のような悪夢の世界が待っているのです。だって世界イコール自分なら、どこにも「他人」なんていないんですから、何やったっていいわけですよ。あまり世界について考えすぎると、次第に三次元と二次元の区別がつかなくなるんです。

で、こういう喪男が生きたままカリスマになると、粛清おかまいなしの全体主義国家を作るわけです。『ガン×ソード』のカギ爪の男が、その典型です。「全員、俺になれ。そうすれば俺は救われるので世界も救われる」というわけです。ヘーゲルのセカイ系哲学にそのような事態を招き寄せる危険性を感じたキルケゴールは、あくまでも神は自己の内面に求めなければならないと考えたわけです。どっちが偉い（？）かといえば、やっぱりキルケゴールです。より苦しんでますよ。

僕も若い頃は哲学やら何やらで世界を説明しつくそうとやっきになっていましたが、いまから考えれば自分がキモメンでモテないという苦悩から逃げていただけでした。世界を屁理屈で説明しつくしても喪男は喪男です。若い頃はわからなくても、いずれは気づきます。そう、『最強伝説黒沢』の黒沢さんのように……。

でも一生気づかないというのも楽しい生き方かもしれません。気づいたら死ぬほど苦しみますからね。一生気づかないで済ませる方法はいくつかありますが、とにかく自分より「下」の他人を見つけてきて笑ってバカにするのが一番よろしいです。探せば「下」はいくらでもいますし、『ＳＰＡ！』とか読めば毎週見つけてきてくれます。

それでもしんどくなってきたら、また別の「下」を探せばいいんです。そうやって他人をバカにし続けて「俺はあいつよりはマシだ」と思い込み続ければ、あまり苦しまずに自分自身の人生から目を逸らしたまま安楽に一生を終えられます。もしますます惨めになって他人を笑う程度では収まらなくなったら、次はよその民族とかよその国家とかをバカにすればいいんです。バカにする対象のスケールをアップしていけばよろしいのです。それでもダメなら宗教だ。異教徒を弾圧するのです！

一部の「うっかり気づいてしまった」あるいは「無理やり気づかされてしまった」喪男を除くほとんどの人間の人生は、そうやって終わっていくのです。いまも昔も、世界はそういう無明の闇を生きる人々の憎しみに満ち満ちているわけです。ただし、年をとればとる程、「気づいてしまった」時の苦悩はそれだけ大きくなります。気づくなら早いうちです。

喪男の内面にルサンチマンを発見した最初の西洋哲学者はニーチェでしたが、続いて現れたフロイトは「自我」や「無意識」という概念を発明して人間の精神を構造的に考える道を開きました。

西洋でもいよいよ、喪男のルサンチマンという人間の精神の謎に気づき、生まれてくる原因（縁起）について考える思想家が現れたのです。フロイトはここで、キリスト教世界における最大のタブー「性欲」を発見しました。そうだ、**性欲が溜まるからルサンチマンが生まれるんだ**、という実に正しい理屈です。

フロイトはこれで世界中から顰蹙（ひんしゅく）を買いました。**誰もが目を背けてきた本当のことを言い出す喪男哲学者は世間から迫害される**のです。

マルクスやヒトラーは、「世界」という喪男の外部に、自らを抑圧する敵を見出し

ました。しかしフロイトは、「自分」の内面に、そもそも喪男を抑圧する敵が存在していたことに気づいたのです。ヘーゲル以来の国家萌えという三次元至上主義の時代が終わり、二次元への扉が開かれたのです。ただし、フロイトが開いた「性の抑圧」理論は、後にアメリカへ渡ってセックスと恋愛の解放に繋がり、恋愛至上主義社会＝恋愛資本主義市場を形成する思想的バックボーンとなりました（図4－3）。

もうね、**なんでも資本主義に取り込まれるんです**よ。恐ろしいシステムです。

というわけで、第五章は「喪男の精神」に直接光を当てたフロイトの話になります。中世＝神が死に、近代＝国家が死に、現代に残ったのは「人間」つまり喪男自身だったのです。こうして恋愛が国家に代わる新たな神、現代の神になっていく過程に、フロイトが現れたわけです。

中世
神
神権
教会
王権
王侯
庶民
二次元での救済
三次元での統治
異端・異教徒
キリスト教世界＝ヨーロッパ全土が「神」によって一つの共同体としてまとめられていた。

近代
ドイツ
国家
国王
ビスマルク
ヒトラー総統
ドイツ国民
「民族」「国家社会主義」
異民族
フランス
国家
革命
政府・共和制
・ナポレオン
フランス国民
「民主主義」
反革命分子
イギリス
国家
議会
イギリス国民
「法」・「民主主義」
植民地
ロシア
国家
共産党
スターリン
ロシア国民
「共産主義」
反体制
国家社会主義
資本主義＆民主主義
社会・共産主義
各国が「国家」単位で、それぞれの国民の自我を独自に支える装置となった。
各国は激しく三次元の土地を奪い合いヨーロッパ全土が崩壊した。

現代
アメリカ
セックス産業
恋愛資本主義
男　男　男　男　男
女　女　女　女　女
喪男　喪女　喪男
東欧などでは民族主義が台頭する一方、先進国では国家から恋愛へとシステムが移行し、個人主義の時代が訪れた。

図4—3　自我を支える装置の変遷　神→国家→恋愛

第五章　喪男の精神に分け入る

Ⅰ　フロイトの精神分析

デカルトとカントの二元論

というわけで、ようやくフロイトに辿り着きました。

ただ、その前に延々と語ってきたデカルト以降の西洋哲学の流れをおさらいしておきましょう（図5－1）。

「世界が先か、精神が先か」という二元論の問題は、プラトン以来の西洋哲学が抱えた難問でした。デカルトは、世界（三次元）と人間の精神（二次元）を完全に別のものとして考えました。三次元は単純な物質の世界で、二次元は純粋な精神の世界です。デカルトが三次元世界に唯物論を持ち込んだことで、自然科学の発達が実現しました。デカルトのモデルは近代以後、資本主義社会の基礎になったモデルです。多くの人が、未だにこのモデルを信じています。「バカの壁」[*1]という言葉が一時大流行しました。非常にかいつまんで言うと「人間は見たくないことは見えない」ということですが（違ってたらスイマセン）、このデカルトの二元論モデルを「真実」であると信じている人と、そうでない人との間にはとてつもなく高い「壁」が存在するのです。**つまり現代日本のコモンセンスの主流は、デカルト時代からあまり変わっていないの**です（96ページ　図2－1参照）。

カントはもう少し複雑なモデルを作りました。まず、孤立していた人間の精神（二次元）を「道徳律」という上位概念でネットワーク化しました。「神」という概念が

① 「バカの壁」
二〇〇三年。新潮新書。著者は解剖学者の養老孟司。四〇〇万部以上売れた。「バカの壁」とは、人間が自分自身の世界観に凝り固まって他者の世界観を認めない「二元論」のことを指す。もちろん知識人からは「なぜこんな本が売れたのか」とバカにされたが、それこそバカの壁だ。しかし『バカの壁』が売れたからといって二元論主義者が減ったとは思えず、むしろ自分以外の人間を「あいつはバカの壁を作っている」とバカにするための道具としてこの本を利用する人も増えたような気がして、つまり人間というのはどこまでいっても「知りたくないことは知らない」「見たくないことは見ない」ものなのだ！

哲　学

ポスト・モダン

破壊・否定

哲学はまちがいだった

ソクラテス

宇宙とは何か？

人間とは？喪男とは？

言語による体系で全てを説明するこころみ

言語は現実とは別だ

ソシュール

現代思想

形而上学は全てまちがい

ヴィトゲンシュタイン

精神分析

デカルト

宇宙とは機械である

ニュートン

宇宙の真理は数学で表現できる

脳科学へ

自然科学

アインシュタイン

E＝mc²

宇宙物理学
量子力学

デカルト

人間には精神がある

精神自体が二元論だ

フロイト

実存主義

カント

世界も人間精神が作る

キルケゴール

オレを助けてくれ

脳科学

自然科学

ドイツ観念論

ヘーゲル

世界とは絶対精神だ

ナチスドイツ

国家が喪男を救う！

唯物論

マルクス

世界とはモノの生産だ

滅亡

失敗

現代思想
ポスト・モダン

西洋哲学の歴史を大ざっぱに図説化するとこのようになっている。ヨーロッパの歴史を哲学が動かしてきたことがわかる。歴史と哲学は不可分なので、「自分でものを考える」「現在の世界について考える」場合に歴史と哲学の知識は必須になるのだ。

脳科学
心身二元論を再統一するこころみ

図５―１　ヨーロッパ史＝哲学史

無力化した以上、神に代わって人間同士をつなぎとめておく何らかの装置がどうしても必要になります。それがなければ、人間は相互理解し合うことなく殺し合い続ける運命に陥ってしまいます。カントがやたらと道徳にこだわったのも、神に代わって人間たちをまとめる何かが必要になったからです。逆に考えれば、神もなく道徳もない世界は悲惨なことになるとカントは危惧していたのでしょう。神に代わって人間に平和な社会生活を営ませる装置として、人間の内面に「道徳律」を見出さなければならなくなったのです。

またカントは三次元の世界を「現象の世界」と「物自体の世界」に分けました。人間が「現実」だと思っている世界は、実は精神（二次元）が見ている主観的な世界なのです。これが「現象の世界」です。「物自体の世界」は人間には認識できません。従ってカントのモデルは本当は三元論なのですが、「物自体の世界」は認識できないので実際には二元論モデルと言ってさしつかえないのです。しかしデカルトの二元論とは違います。デカルトは二次元と三次元を完全に分断しましたが、**カントは二次元が三次元を「作り上げている」と考えた**のです。つまり二次元が優位なのです。たとえて言うなら二次元主義的な二元論です。

ヘーゲルとマルクスの一元論

ヘーゲルは道徳律よりもさらに巨大な「絶対精神」という集合無意識のような存在が世界を進化させていると考えました。ヘーゲルの問題は、個人の自我を「絶対精神」という巨大な概念の一部分に貶（おとし）めてしまったことです。このような世界観においては、巨大な「国家」だけが喪男の問題を解決する役割を担えるわけです。喪男個人

が自身の問題を自力で解決する道は見えてきません。後に訪れる国家萌えの時代はヘーゲル哲学が招いたようなものです。

　ヘーゲルは二元論的対立を解決して世界を一つにまとめたつもりだったのですが、世界どころか人間まで一つにまとめられてしまったのです。世界は神が見ている夢なのだ、ということですね。「夢オチ」ってやつです。楳図（うめず）かずお[*2]の『14歳』[*3]という破滅SFマンガの最終回を見てください。『14歳』ではいろいろな人間ドラマ・ニワトリドラマ・恐竜ドラマが描かれたのですが、最終回でそれらのドラマは全部「芋虫」の見ている夢だった、という衝撃の夢オチが描かれてしまいました。実は、世界とはこういうものだとヘーゲルは考えたんです。もちろんヘーゲルは「芋虫」とは呼ばずに「絶対精神」と呼びましたが、同じことです。個人もまた知恵を深めていくことで「絶対精神」の境地に辿り着くことができるとヘーゲルは考えましたが、それはあくまでも個人が芋虫の一部になるという意味です。

　せっかくデカルト以来の近代哲学者が「自我」を発見してキリスト教的一元論（世界も人間も神が作ったという考え方）から人間を自立させようとしていたのに、ヘーゲルは話を元に戻したわけです。ただし、抽象的な観念（二次元）でしかなかった「神」に代わって、元は二次元（絶対精神）だけど社会的な実体（三次元）も持った「国家」が世界の中心になりました。このヘーゲルのモデルは、やや二次元寄りの一元論とでも言えばいいでしょうか。で、このモデルから「絶対精神」を外して「超人」という個人を中心に据えたのがニーチェなのです。

　ヘーゲルを受けて現れたマルクスは、ヘーゲル的一元論と、デカルト的二元論を統一し、三次元の世界が二次元の世界をすべて規定していると考えました。物質の世界

② 楳図かずお
マンガ家。ホラーマンガと「グワシ」で有名。ギャグマンガのはずの『まことちゃん』がなぜか死ぬほど怖かった。代表作『おろち』『怪』『恐怖』『漂流教室』『まことちゃん』『わたしは真悟』『14歳』。

③ 「14歳」
楳図かずおのトラウママンガ。科学と資本主義が究極まで発達した近未来、人類は子供を作らなくなり、滅亡への道を辿りはじめる。主人公は科学者ニワトリのチキン・ジョージ博士。ニワトリなだけあって徹頭徹尾喪男で、人間の美女に籠絡されてしまう。14歳で死ぬ……ギャーッ！　一言では内容を説明できないというか何ページ使ってもストーリーを説明できないので直接コミックスを読んでください。

が、精神を作るのです。一方通行です。三次元主義一元論です。三次元世界は精神の中に出現すると考えたカントやヘーゲルのまるっきり逆と言っていいでしょう。これが唯物史観のモデルです。ただしマルクスもまたヘーゲル同様、個人を世界＝国家の一部分としたわけで、この点はやはりヘーゲル的です。

結局、**西洋の哲学は、「神」からの脱出をはかったはずが、「絶対精神」や「唯物史観」といった新しい唯一神の概念に囚われ続け、喪男の問題を喪男自身が解決するという方向には向かわなかった**のです。国家が進歩・発展することにより、世界は正しい方向へ進化し、喪男たちも救われる、と考えたわけです。

しかし、現実の歴史はそうはなりませんでした。資本主義は勝ち組と大量の喪男との二極化を生み、膨大な量のルサンチマンを製造しました。この状況に対抗して喪男たちを救うべく登場したマルクス主義や国家社会主義も国家の暴走や個人の抑圧を招き、喪男を救いませんでした。

精神を二元論で捉えたフロイト

ところが、哲学とは無関係な分野から、「喪男の苦しみは喪男自身の精神の中にある。故に喪男が解放されるには、喪男の精神をなんとかする必要がある」というきわめて個人主義的な着想が現れました。それがフロイトの精神分析学です。フロイトは喪男個人の内面に救いの方法を探したという点でキルケゴールやニーチェといった実存哲学者の系譜をひいていますが、元は脳神経などを研究していた生理科学者でした。つまり出発点は生物学だったのです。

フロイトが生きた一九世紀から二〇世紀前半にかけて、ヨーロッパでは「神経症」

フロイト

という病気が流行していました。神経症は、統合失調症や鬱病とは違います。何かこう心にモヤモヤとした不安があって、常にその不安にさいなまれるのです。例えば、常に手が汚れているという不安に駆られて、強迫的に手を洗い続けなければ気がすまない、といったものです。シェークスピア[4]の『マクベス』[5]に登場するマクベス夫人なんかが典型的な症例です。マクベス夫人は殺人という罪を犯したことが強迫観念になって、自分の手が血に汚れているという不安からひたすら手を洗い続けるわけです。

で、フロイトは、当時流行していた催眠療法[6]によって神経症を治療する修業を積んだのですが、その過程で催眠中の患者が意識下ではまったく覚えていない記憶を喋りだすことに気づきました。この意識に表れない精神の領域をフロイトは「無意識」と名づけました。人間の精神には、意識できる領域と、本人にも意識できない領域がある、と考えたのです。そして神経症の原因は、どうやらこの無意識の中に追いやられている観念らしいのです。**人間は見たくないものは見ない、考えたくないことは考えないのです。**「バカの壁」です。人は、不快な記憶を「抑圧」して無意識に封印してしまいます。ところが抑圧した観念は、完全には封印できません。少しずつ意識に漏れ出してきて、いつまでも正体不明の不安となって意識を脅かすのです。

こうして、**それまで「精神」として単純に捉えられていた人間精神のモデルを、フロイトは〈意識〉と〈無意識〉という二つの領域に割った**のです。このモデルはその後さらに発展し、無意識の基盤となっている領域はエスとかイドと呼ばれるようにな

④　シェークスピア
一五六四年～一六一六年。ウィリアム・シェークスピア。イギリスの劇作家。当初は喜劇を得意としたが、徐々に喪男悲劇に移行。黒澤明や手塚治虫にも大きな影響を与えた。これだけ有名な人物なのに自筆の原稿や手紙がまったく残っていないので、「シェークスピア別人説」が囁かれたり、「シェークスピアの戯曲には暗号が隠されている」といった説が登場したり、作品以外の部分でもネタの宝庫。代表作『ロミオとジュリエット』『真夏の夜の夢』『ベニスの商人』『ハムレット』『マクベス』『オセロ』『リア王』。

⑤　『マクベス』
三人の魔女から「お前はコーダー城の主になる」と予言されたスコットランドの将軍マクベスは、予言に突き動かされて悪事を重ね、城主になるという予言は成就される。しかし、マクベスとその夫人の精神は罪悪感によって崩壊を始める。マクベスは小心者で、彼に王の殺害を唆す夫人のほうが実は恐ろしい。しかしその夫人も王を殺害した罪悪感で神経症にかかり、血がついていると思いこんで自分の手を洗い続けるのだった。黒澤明の『蜘蛛巣城』は『マクベス』をモチーフに、舞台を戦国時代の日本に移した作品。

⑥　催眠療法
催眠療法の開祖は一八世紀フランスのメスメル。ただしメスメル自身は自分が催眠療法を開発したとは気づかず、「動物磁気」という自然科学的なエネルギーを利用していると信じてい

ります。これに対して意識側の基盤になっている領域は〈自我〉と名づけられます。自我の領域はそのすべてが常に意識されているわけではありませんが、意識を構成する土台みたいなものです。ごく単純にかみ砕いて言えば意識可能な領域が自我です。

フロイトは世界と人間精神との二元論から一歩踏み出して、人間の精神自体を〈自我〉―〈エス〉の二元論で捉えたのです。アウタースペースからインナースペースへというコペルニクス的転回です。自我の領域とは、人間の自己です。自分自身です。エスの領域は、非自己です。自分自身の中に入れておくことができない様々な観念や感情が、エスに抑圧されているわけです。つまり**人間の精神はワンルームではなく、押入れがあって、その押入れに様々なイヤ〜なものが押し込められている、そして隠した当人も押入れの中身を忘れている**、とフロイトは考えたのです（図5－2）。

図5－2をわかりやすく描くと、『最強伝説黒沢』の黒沢さんの家の押入れの中のような感じになります。三〇歳を過ぎた喪男の皆さんには、ご納得いただけると思います。神経症の原因は、このエスの中に抑圧された記憶や感情です。

ところでエスは〈快楽原則〉によって動いています。本能に近いわけです。自我は逆に〈現実原則〉に従おうとします。ですからエスの思うがままに生きると、社会に適応できません。

例えばエスがモテモテ王様ハーレムで暮らしたいという欲求に駆られたとします。しかし、現実にハーレムを作ろうとすると、二〇〇五年に世間を騒がせた監禁王子のように事件の主犯になってしまいます。これは、社会が彼を「モテモテ王様ハーレムの主」として認めないからです。当たり前です。これが現実原則、つまり社会のルールというものです。

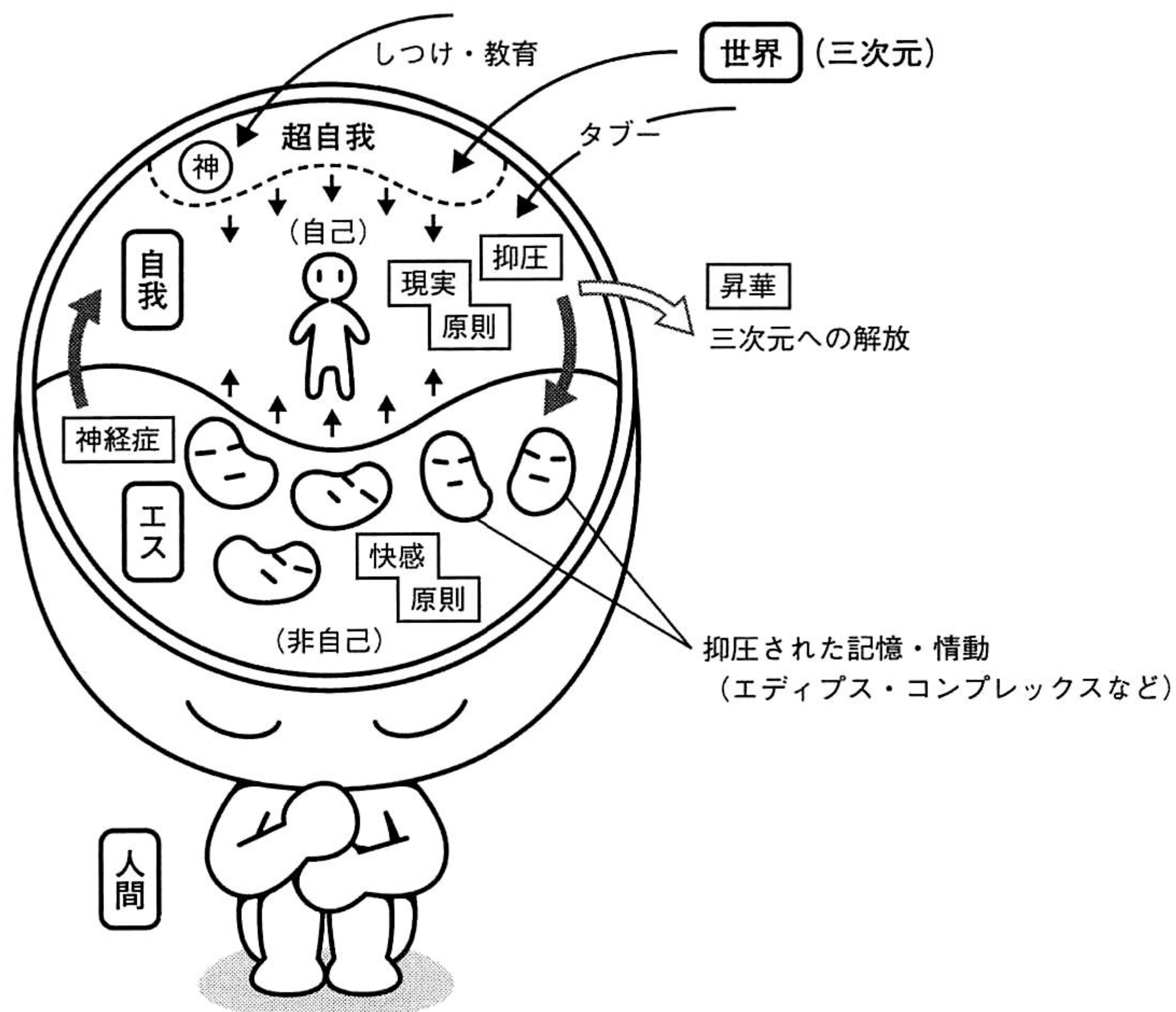
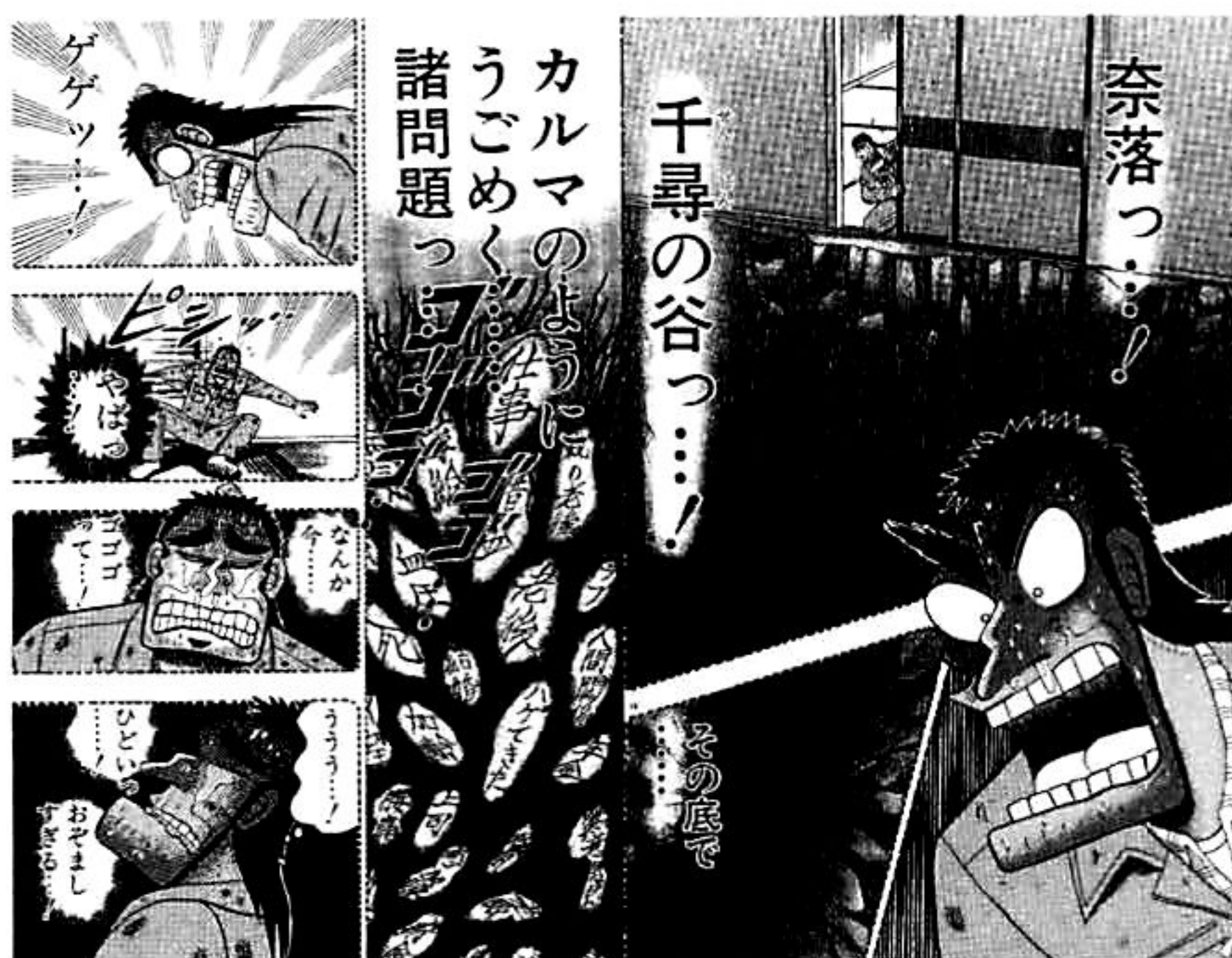
た。そのためにメスメルは失脚してしまう。その後、一九世紀末フランスのシャルコーが当時流行していた神経症（ヒステリー）の治療に催眠を利用する。フロイトはシャルコーから催眠療法を学び、ユングもまた催眠療法から経歴をスタートさせた。

フロイトは、人間の精神を〈自我〉と〈エス〉に二分割した。三次元とつながっている部分が自我と呼ばれる。エスの中には、意識化できない領域（無意識）があり、神経症などの苦の原因となる。エスを解放することが喪男が苦から逃れることにつながるが、直接解放すると三次元と対立するので、色々な形に昇華しなければならない。

図５―２　フロイトの考えた精神のモデル

黒沢さんの家の押入れの中『最強伝説黒沢第６巻』福本伸行、小学館ビッグコミックス、2005年、「第45話：相談」P16～17

ですから自我は、なんとかして現実原則と快感原則の折り合いをつけようと、あれこれ知恵を絞って行動する役割を担っているのです。「脱オタしてオサレな服を着ればちょっとぐらいモテになれるんじゃないか」とか、そういう折衷案を考えて実行するのが自我の仕事です。つまり、人間のもともとの本能（モテモテハーレム欲望）と、社会の秩序（喪男という現実）との仲立ちをしている中間管理職が自我なのです。

人間社会を発達させたエスの衝動

ということは、人間の文明をかくも発達させた原動力は、人間が抱え込んだエスの衝動をいかんともしがたい三次元の世界の中でなんとかして実現しようとする「欠乏」や「不満」なのです。不足が知恵を生んだのです。これは「真の哲学者はみな喪男である」という本書のテーゼと合致します。

もし**人間のエスが抱えている欲望や願望や妄想が三次元であっさり実現可能なレベルのものだとしたら、知恵も哲学も科学も何も要らない**のです。例えばすべての人間の夢が「飢え死にしない程度に生きていければいいや」という程度のものなら、世の中はあまり進歩しません。実際、中世キリスト教社会は、そういう感じでした。これはキリスト教が人間の願望・夢・欲望（知識欲も含みます）を抑圧して「ここまででストップ」と線を引いていたからです。犬や猫は労働組合を結成してストライキを起こしたり革命を起こしたりはしません。これは犬猫にとっては三次元だけが世界で、二次元は無いか、仮にあったとしてもごく慎ましい小さな世界だからです。人間だけが三次元を作り変えようとするような巨大な二次元世界を内面に抱えているのです。

この二次元世界は、エスをエネルギー源として、自我の内部に構築されます。小説

や絵画、映画、彫刻といった「芸術」は、まさに二次元世界に形を与えたものなのです。**人間以外のどんな生き物が「作り話」を語るでしょうか？　そんなものは人間以外の生き物には不必要なのです。**

人間の自我は外界に適応するための部分（内面化された三次元）と、エスの欲求を満たすために「脳内」で「空想」（想像、妄想）を行う部分（二次元）とに分かれています。この二次元の領域を否定すると、エスに溜まったエネルギー（リビドー）が昇華されなくなり、いろいろな問題を起こすのです。

また、自我の内部では二次元と三次元は繋がっています。いずれも自我の一部ですから。そのため、二次元で空想した観念を三次元という外部の場に持ち出せるのです。自我はパナマ運河のように、外界と内面を段階的に繋げてくれるのです。

このように、実は自我そのものが二元論的構造なのです。**人間が世界をどうしても〈世界〉―〈精神〉の二元論で捉えてしまうのは、元々人間の自我が二元論的分裂を抱えていたからなのです。**

ちなみに、これはフロイトの理論というよりはいま僕が考えている理屈です（図5-3）。ですから本当は後の章で書かないといけないのですがうっかり筆が滑りました。フロイトの話と直接繋げると「へーそうなんだーフロイトさんの学問を受けてそう言うんだったら、本当かもね」と読者を騙せるかなーと思ったのです。すみません。

聖書によると、アダムとイヴが蛇に騙されて「知恵の実」を食べてしまったために、人間は楽園から追い出されたことになっています。実際、エスの力が小さくて単純な本能欲求だけで生きられれば、つまり「メシ食って寝て死ぬ」というだけの生活で自己実現できるのであれば、なんで俺はモテないいんだようという喪男的な苦しみ、

すなわち二次元と三次元の乖離からくるルサンチマンは生じないわけです。

たぶん、動物のルサンチマンは人間より少ないはずです。動物は現実原則とエスの葛藤のような余計なものを持っていません。現実原則とエスの対立がないから、世界と自分との対立という発想も湧いてこないわけです。

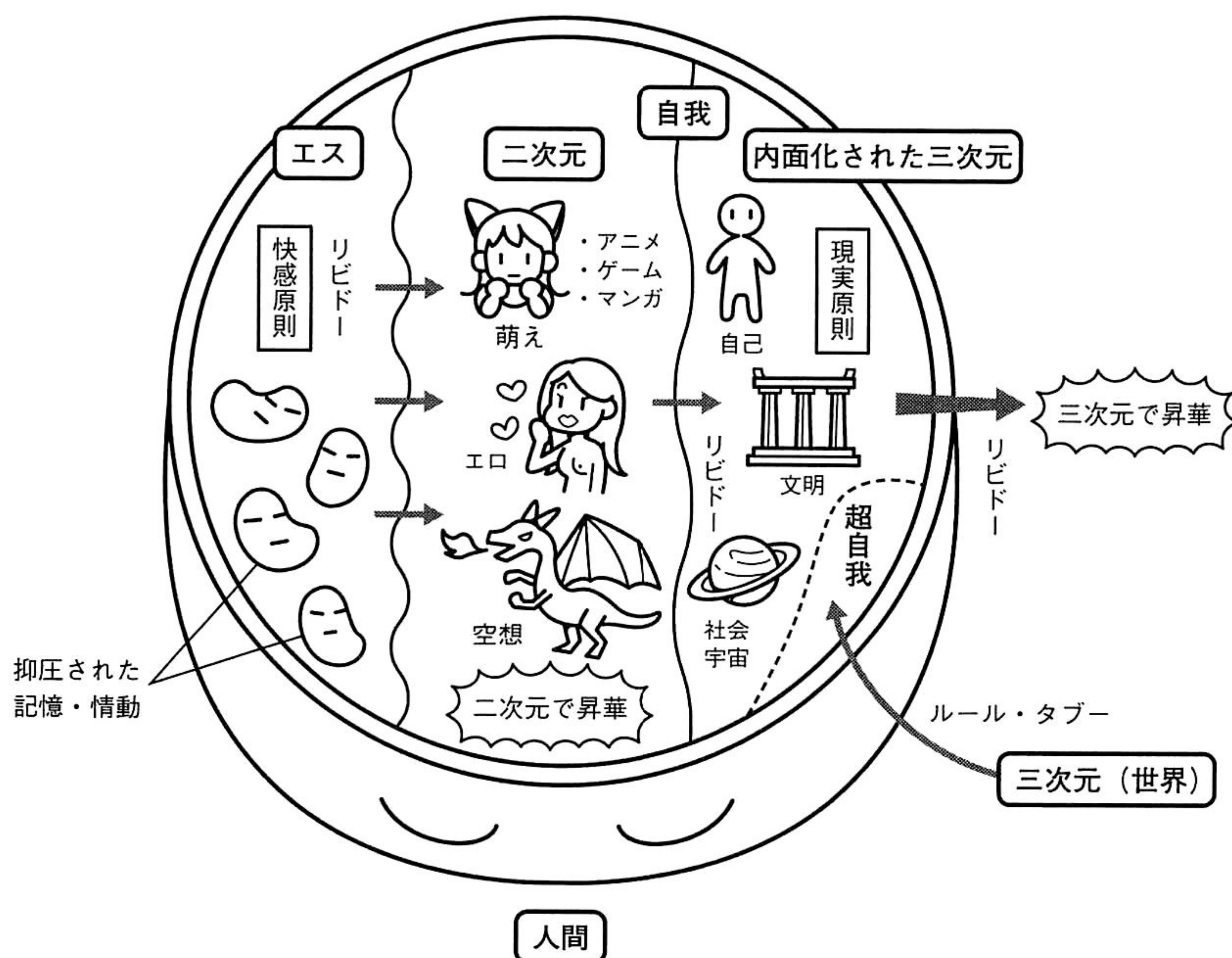
西洋哲学が抱えてきた三次元（世界）対二次元（精神）という難題は、実は、人間（もっと言えばヨーロッパ人）の精神構造そのものの投影だったんです。元はといえば、現実原則とエスの対立から始まっているんです。そこから自我は三次元（現実＝現実原則の世界）と二次元（空想＝エス由来の快感原則の世界）という二つの世界を持つことになったわけです。例えば働きアリや働きバチには、こんな余計な悩みはないのです。死ぬまで働くことがすなわち自己実現なのです。死ぬまで働けと言われてルサンチマンを抱き、革命まで考えるのは人間だけです（なわばりを作ってボス争いをするサルは比較的人間に近いですが、労働組合を作ったりフリーメーソンを結成したり憲法を作ったりという凝ったレベルにまでは到達

自我そのものが、二次元と三次元に分裂している。デカルトやカントの二元論は、自我の構造を外界へ投影したもの（マルクスやヘーゲルのモデルでは、超自我の部分が強化され、二次元の領域は発達しにくくなる）。リビドーの多くを二次元で昇華すると、三次元へ流出させるリビドーの量が減るため、不適応行動も減少する。

図５—３　二元論は自我のモデルが現実に投影されたもの（本田モデル）

していませんよね）。
　つまり人間は他の動物と比べて圧倒的に過剰なエス（二次元を必要とする衝動）を抱えているんです。「二次元」とは、人間の心の中に宿った、過剰な欲望・過剰な観念・過剰な感情が生み出した世界なのです。大脳を発達させすぎたために、単に動物として生きるだけでは収まらなくなった過剰なエスを持ったからこそ、人間の自我は二次元と三次元に分立し、そしてこの両者の弁証法的対立の繰り返しによって文明が異常に複雑なレベルにまで発達したわけです。だが、同時にエスは「どうして俺はキモメンなんだよう、どうして俺はキムタクに生まれてこなかったんだよう」と喪男を苦しめ続ける元凶でもあるのです。

死の苦悩からいかに逃れるか

　ですから、ブッダは人間が生きることそのものが「苦」だと悟ったわけです。そしてその苦の原因は、過剰な内面、すなわちエスの欲望そのものなのです。人間の苦悩は内面の分裂から生まれてくるものなので、人間はたとえブッダのように王族に生まれてハーレムで暮らしていても絶対に救われないのです。例えば、人間は自分が「死ぬ」ことを知っています。ですから生きる限り死という恐怖に取り憑かれっぱなしなのです。これ以外にも病気とか老化といった苦しみもありますし、モテねーという苦しみもあります。つまり、**突き詰めて考えれば実は人間はすべて喪男（女性なら喪女）なのです**。モテ側にいる人間も、いずれは老いて喪になるんです。そして、死ぬ。
　人間は必ず死ぬのです。

角川映画『麻雀放浪記』[7]を観てください。終盤、麻雀打ちのおっさん・出目徳が卓を囲んでいる途中で急死してしまいます。すると、一緒に麻雀を打っていた面々は、出目徳の死骸を裸にして河川敷に投げ落としてしまいます。

「死んだら負けだ。負けたら裸になるんだ！」

麻雀マンガ・麻雀小説といった博打(ばくち)モノは、こういう無常の世界観に彩られている作品が多いです。つまり麻雀マンガの世界観とは、「人間は死んだら終わり。つまり、すべての人間が最後には人生という博打に敗北するんだ」という実存的な喪男哲学なのです。『アカギ』[8]やアカギの姉妹編『天』[9]もそうです。

アカギこと赤木しげるもまた、常に「死」に直面しながら麻雀を打ちます。点棒の代わりに自分の血を払うという「血液麻雀」なんて真似までやらかします。なぜ麻雀をはじめとする博打が人々に求められているかというと、たぶん、日常の世界が隠している真実、つまり人間はみな「死ぬ」＝「敗北する」という世界観を博打の世界が再現してくれているからだと思います。博打という世界では、擬似的に「人間はみな敗北して死ぬ」という「生の現実」を体験できるのです。もちろん各人は自分だけは死という現実に勝つつもりで臨むわけですが。

もちろん、ただ敗北を描くだけでは物語を作る意味はない。物語には赤木しげるや哭(な)きの竜[10]のように恐ろしく強いカリスマ博打打ちが登場します。マンガだけでなく現実にもカリスマ雀師がいます。彼らは「神」に近い存在なのです。「死」を超越している。もちろん、そのようなギャンブラー像はフィクションです。「人生という糞ゲーに打ち勝つ能力を持った喪男」という夢のキャラクターです。哭きの竜は麻雀に命をかけて勝ち続けた結果、最後には殺されてしまいました。ところが、最近『哭きの

⑦「麻雀放浪記」
一九八四年。角川映画。監督は和田誠。原作は阿佐田哲也。終戦直後の混乱期、麻雀に明け暮れる喪男博打打ち（坊や哲、ドサ健、出目徳、上州虎）たちの姿をモノクロの映像で描く。出目徳は「あがったら死ぬ」と言われている伝説の役・九連宝灯をツモあがりするのだが……。

⑧「アカギ」
福本伸行の麻雀マンガ。『近代麻雀』で連載。麻雀打ち赤木しげるがひたすら麻雀を打ち続ける。途中から始まった鷲津麻雀編（血液麻雀編）がいつまでも終わらない。ロン、ロンッ、ロンッ！　駆けめぐる脳内麻薬物質！　エンドルフィン！　ドーパミン！　チロシン！　リジン！

⑨「天」
福本伸行の麻雀マンガ。脇役として登場した赤木しげる（アカギ）が連載中に大人気になった。しかし老いたアカギはアルツハイマーを発症。麻雀が打てなくなり、自殺してしまう。これで困ったのがアカギファン。そのため赤木しげるの若かりし時代に遡ったアカギ伝説とも言うべき『アカギ』がスタートした。

⑩「哭きの竜」
能條純一の麻雀マンガ。『別冊近代麻雀』で連載され、人気を博した。一匹狼の麻雀打ち・竜を巡るヤクザの抗争を描く。ヤクザたちは竜の強運に魅入られ、竜を麻雀で負かしてその強運を手に入れようとする。だが、竜に魂を惹かれた男はみな死んでいく。完結編で竜は死ぬが、

竜・外伝』という続編で生き返りました。まるでイエスが何事もなかったの如く復活したかのように。ファンは「死」を恐れず神がかりの麻雀を打ち続け、人生という糞ゲーに勝ち続けてきたカリスマ・竜の物語が「死」という敗北で終わることに納得できなかったのです。つまり竜ファンは「死の壁」を認めたくなかったわけです。ところが竜に続く麻雀マンガのカリスマキャラクターとなった赤木しげるも、最後はアルツハイマーに冒されて自ら死を選択しました。つまり、「死」、すべての人間に必ず訪れる人生の最期という現実を描ききらなければ、麻雀マンガは完結しない。博打とは人生の縮図[*11]なのです。

竜にしても赤木しげるにしても、「死んだら負けだ、負けたら裸になるんだ」イズムを貫いています。常に死を見つめながら、麻雀を打ってるわけです。でも普通の人間はこんなハードな生き方なんてできません。死という人生のエンディングを見ないようにしながら、「物自体の世界」から目を背けて都合の良い「現実」（現象の世界）を作り上げ、その中でちまちまと生きていくわけです。**文明とは、ですから、死の恐怖から逃げるために人間が共同作業で作り上げた大掛かりな「夢」**なんです。

「物自体の世界」では、人間は死にます。しかし人間がエスの欲求を満たすために作り上げた「現象の世界」では、死は様々な手段で隠蔽されるわけです。キリスト教は「天国」という死後の世界を発明しましたが、これも死の克服の方法の一つです。天国はもちろん「二次元」つまり空想上の観念ですが、この天国という観念が生み出された原因こそ、「死」という現実原則と「不死」というエスの欲求との対立葛藤だったわけです。また、キリスト教に代わって台頭した自然科学の最終的な目的の一つは、「不老不死」つまり死を乗り越えることですよね。科学は、「不死」という二次元

もちろん竜ファンは納得しなかった。というわけで最近になって『哭きの竜・外伝』がスタート。死んだはずの竜がまた麻雀を打ち始めた！ちなみに竜の麻雀は「ポン」「チー」「カン」でひたすらドラを増やしていく食い麻雀。片山まさあき風に言えばタコ麻雀だ。大勢のファンが、実際に真似して撃沈した。

⑪「博打とは人生の縮図」
例えば、ドストエフスキーは博打に夢中になっていた。ドストエフスキーが奥さんに宛てた手紙を集めた「妻への手紙」は博打の話ばかり。また実体験を元にした『賭博者』という小説も書いている。この作品は『麻雀放浪記』『アカギ』などの「博打モノ」の先駆けと言える。フロイトはドストエフスキーの博打中毒を神経症の一種と見なし、詳細に分析した。

の観念を、三次元世界にまで敷衍しようとしているわけです。
　ところが竜や赤木しげるは、「死にたくない」というエスの欲求そのものから解放されています。ですから麻雀に人生を全部捧げてしまえるわけですし、負けることも恐れない。敗北を恐れない人間だからこそ、敗北を恐れる他の麻雀打ちに負けないという構造になっています。麻雀マンガの世界は、そういうルールで描かれているのです。赤木しげるは、過剰なエスを捨てる（エスが消えるわけではありませんが、エスへの拘泥を捨てているわけです）ことで解脱したキャラクターなのです。一種の聖者なんです。麻雀マンガは実は現代の宗教マンガでもあるわけです。

キリスト教も近代西洋も苦悩は救えなかった

　中世のキリスト教社会は、人間は過剰なエスをすべて抑圧し、知恵の実を食う以前の原アダムのような無垢な精神を保って生きていけば楽になれると考えました。また、どうしても拭いがたい「死」への恐怖は「天国」という二次元の観念で軽減できると考えたのです。みんなで同じイエス・キリストという萌えキャラに萌えれば、救われるというわけです。
　でも、無理でした。キリスト教という萌えの物語が古びたのです。なにしろもう二〇〇〇年も続いている大長編シリーズ（しかもイエスが天に還ってしまった『新約聖書』でシリーズは完結で、外伝は出ても絶対に続編は出ません）ですから、仕方がありません。「死人が生き返る」とか「処女が子供を生む」とかいったプロット自体にもリアリティが欠けています。
　最近、アメリカでは中流幻想が崩れて勝ち負けが極端になってしまったため、キリ

スト教原理主義が復活しています。その一方で、「神が人間を創った」なんて今どき非科学的でリアリティがないということで、一部では「宇宙人が人間を創った」なんていうＳＦ教義も登場したりしています。原理主義側では「ダーウィンの進化論を学校で教えるな」と訴える運動もありますが、そうは言っても「神が人間を創った」という昔の教義をそのまま教えても子供が信じてくれないので「神というか、何らかの知的存在が人間を創った」とか言うわけです。つまり、科学のネタを取り入れて時代にマッチしたリアリティを増した新たなキリスト教物語を作ろうとする人たちが出てきたのです。

逆に、前述したように近代西洋は中世とまったく逆で、ありとあらゆるエスの欲望を三次元の世界で実現しようとやっきになって頑張りました。つまり三次元と二次元の乖離を、文明の力で一元化しようとしたんです。三次元を二次元そのものに作り変えてしまえば、解決するはずだと考えたんです。でもこれも無理でした。

どっちも極端だったんです。ブッダはこういう事態をすでに想定していたので、中道を唱えていたんです。

人間は生まれつきみんな変態だ

実は、なぜ人間が二次元のような余計な世界を精神に抱えているのかという問題については、フロイトはあまり言及しませんでした。たぶん脳科学が発達すれば解明されると思っていたのでしょう。

近年ようやく、脳の構造や機能が少しずつではありますが明らかになってきています。しかしフロイトの出現はあまりに早すぎたので、フロイトの説はあくまでも形而

上学的な仮説レベルに留まりました。とりあえずフロイトはこの過剰な欲望、現実（三次元）と直接繋がらない妄想（二次元）を生み出す欲求に「リビドー」という名前をつけました。リビドーとは快感を求めるエネルギーです。フロイトは当初、このリビドーの本質を「性欲」だと考えていました。ですから前期フロイトの理論は「汎性欲論」とも言われます。

いずれにせよ、「人間は快楽のために生きている」という言ってはいけない本当のことをフロイトは言い出したわけです。**「人間は口では道徳だとか愛だとか神だとか言っているが、頭の中はセックスのことだけだ！」**と言い放ったんです。これほどの喪男がかつて歴史上存在したでしょうか？　フロイト理論は、セックスピストルズ[*12]の一兆倍ぐらいセンセーショナルでした。

さらにフロイトは、「人間のリビドーの発達は〈口唇期〉〈肛門期〉〈性器期〉という段階を経る」と考えました。リビドーは生まれた時からすでに備わっていますが、最初から性器を使ってセックスするわけにはいきません。そこでまず口にリビドーが固着するのです。「嘘だー」と思った人はフェラチオに興味がない人なんですね！ないんですね！　また、いいおっさんになっても男が女の乳首を吸いたがるのも口唇期の名残なのです。

次が肛門期で、この時期になると排泄・排便にリビドーが固着します。スカトロ好きというのは肛門期の名残なのです。スカトロは実にマイナーなジャンルだと思いますが、ないこともないですよね。でも男性のゲイの場合、肛門を使うわけですから、それを勘定に入れると意外にもメジャーなジャンルかもしれませんよ、肛門期。

⑫　セックスピストルズ
イギリスで一九七〇年代に活動したパンクバンド。当時のイギリスではテクニック重視のプログレ・ロックが全盛だったので、反動でプログレの逆を行く感情重視の音楽が求められるようになる。そこに登場したのがボロボロの演奏とグチャグチャの歌詞、つまり「パンク」を実践したセックスピストルズだった。メンバーはシド・ヴィシャスやジョニー・ロットンなど。ピストルズはボロっちい古着に安全ピンを止める「アンチ・ファッション」で世間に登場したが、言うまでもなく安全ピンはすぐに「ファッション」になり、パンクもまた資本主義の商品になっていった。シドは二一歳でドラッグ死した。ジョニー・ロットンは生き延びたが、近年はテレビ番組で駝鳥と闘ったりしている。代表作『勝手にしやがれ!!』。

で、三〜四歳頃になってやっと性器とリビドーが結びつくのです。「えっ、ちょっと早いんじゃないの」と思いますがフロイトによれば幼い子供にもちゃんと「小児性欲」があるというのです。これは梶原一騎の『カラテ地獄変』[13]の話ではありません。全世界に大きな影響を与えた「精神分析学」の話です。

個人的な話で恐縮ですが、そういえば僕は女性器に全然興味がありません。あれはキモいです。気持ち悪いです。あんなおっかないものに、皆さん、なぜ興奮できるのでしょうか？　僕がこんな有様になってしまった原因は、フロイト的に考えれば口唇期か、あるいは肛門期あたりで僕のリビドーの発達が止まっているからなのです。性器期に至る前段階でどこかにリビドーが固着しっぱなしなのです。でもアダルトビデオを観てみると、みんな僕と似たような人間らしいので特に気にしてません。私見ですが、性器にだけモザイクをかけるのが良くないんじゃないでしょうか。モザイクがかかってるから、性欲の対象にならなくなるんじゃないでしょうか。で、モザイクがかかってない制服とかスクール水着に性欲が固着してしまうのではないでしょうか？

話を戻しましてフロイトは、幼児の性欲は多形倒錯的である、と考えました。子供はみんな変態だということです。これは子供が不能だからです。で、オトナになるに従って、やっと普通に性器で興奮できるようになって、セックス可能になる、というわけです。つまり「**人間は生まれつきみんな変態だ**」とフロイトは考えたのです。当時は（いまもか）大顰蹙を買った言い草ですが、現代のアダルトビデオ業界[14]を鑑(かんが)みるに、まったくもってフロイト先生の仰(おっしゃ)る通りだったことがよくわかりますね。

よくもまあフロイトは殺されずに済んだものだと思います。実際問題、危うくナチスに逮捕されて焼かれそうになったんですが、これは学問上の問題よりもフロイトが

⑬「カラテ地獄変」
一九七〇年代から八〇年代初頭にかけて『週刊サンケイ』で連載された空手アクションマンガ。梶原一騎原作・中城健作画。『ボディガード牙』『カラテ地獄変』『新カラテ地獄変』の三部作。まずは『ボディガード牙』に主人公・牙の師匠として登場していた大東徹源（モデルは極真空手の大山倍達）が、連載中に人気急上昇。時間軸を過去に巻き戻して若き日の牙と大東徹源を描いた『カラテ地獄変』が始まり、ついには若き大東徹源を主役としたさらなる過去話『新カラテ地獄変』へと移行する。『アカギ』と同じで脇役が主役となってどんどん時間が逆行していくというパターン。特に最後の『新カラテ地獄変』では、フランスの元レジスタンスや南米のナチ残党、共産革命軍と独裁者が権力を争う小国といった世界各地の悪党・偽善者がぞろぞろと百鬼夜行。世界のどこにも正義などなく、人間はすべて悪であるという梶原哲学が延々と開陳される。また「聖母」と「ビッチ」という二極分化した女性観が頻出し、浣腸拷問シーンが延々と続く。作画を担当していた中城健は苦悩のあまり筆を折って宗教に走った。名台詞は「人間の性悪なり！」「人間、この度し難きもの！」。

⑭ 現代のアダルトビデオ業界
サディズムやマゾヒズム、フェティシズムなど、クラフト＝エビングが紹介・定義した性倒錯の多くが現在ではAVという形で商品化されている。

ユダヤ人だったことが弾圧の大きな理由でした。

シモネタみたいな話が延々と続いてしまって申し訳ありません。どうしてフロイトがこれほど極端に「性」にこだわったかというと、それまでキリスト教の影響下にあった西洋ではずっと性が抑圧されてきたからなんです。つまり、**実際に性の抑圧が神経症の原因になっていた時代だったん**です。決してフロイト個人がエロ妄想まみれの変態だったからではないのです（まあマザコンなのは確かですが、そんなこと言い出したら人類はたいがいマザコンではないでしょうか）。

フロイトはむしろ異常なまでに厳格な性格で、治療中の精神分析家が女の患者に惚れられる「モテの魔の手」現象をも発見し、弟子たちに「モテの魔の手が来たら護身せよ。決して患者に手をつけてはならぬぞ」と厳しく護身の教えを説いていたのです。精神分析治療は自我を一度壊して再構築するという一種の洗脳みたいなものですから、患者を口説こうと思えば口説ける、というか、口説こうとしなくても患者が「先生、私をお助けください」と依存してくるわけです。

フロイトは人間の中の「性」の問題を直視できたために、このようなモテの魔の手現象をもはっきりと認識でき、倫理的な対応策まで考えることができたのです。フロイトが偉いのは、治療を利用してモテようと思えばいくらでもモテることができたのに、あえて護身した点にあります。喪男精神の苦悩の謎を解き明かすという目的から決して逸れなかったのです。

モテに走ると、モテが目的となります。すると女が喜ぶ口当たりの良い理論を作ることになります。すると真実から遠ざかります。

フロイトは「女の精神は暗黒大陸だ」とまで言ってたそうです。「わしゃ男だから

女の心理なんか知らん」ということです。フロイトは、モテと真理が相反するものだと気づいたわけです。フッサール流に言えば、「モテ」を排除する「護身」こそがエポケー[*15]の第一歩なのです。世界をありのままに認識して真実に近寄ろうとするのが哲学ならば、女の色香に惑わされている「モテ」状態は哲学の敵なのです。

超自我で人は世界と繋がる

もちろん、これだけでは自我とエスの二元論的対立がなぜ起こるかということの説明にはなりません。よくよく考えると自我なんて要らないのです。すべての人間がエス剝き出しで生きていて、ずっと争っていても別に構わないわけです。つまり、現代でいうところのＤＱＮというタイプの人間ばかりでも不思議ではない。

ところが自我とエスのバランスを取るための機能、すなわち〈超自我〉というものが人間精神には備わっている、だから「道徳」が成立し人間社会の秩序が保たれるのだ、とフロイトは考えました。超自我が自我と区別されるのは、超自我の由来が外部の世界（親のしつけや教育など）だからです。つまり人間の精神（自我）は超自我という領域によって三次元世界の他人の自我と繋がっているのです。超自我はカントが考えた道徳律に近いのですが、生まれつき備わっているものではなく、あくまでも親や社会との関係によって後天的に形成されると考えた点がフロイトの特徴です。

この超自我の形成過程を説明するために、フロイトは「息子は父親を殺して母親を寝取りたいと思うのだが、不能故にできないのでその欲望をエスに抑圧し、不能という内的な欠陥の代わりに母親と寝てはならないという外来的な禁止条項を作り上げる。これが超自我の起源なのだ」というエディプス・コンプレックス[*16]理論を唱えまし

⑮　エポケー
現象学者フッサールが提唱した哲学的方法の一つで、判断をいったん停止すること。フッサールは主観（二次元）が三次元に意味を与えているという立場の二元論者で、常識や思いこみなどをいったん排除して主観的な意識そのものを分析しなければならないと考えた。また「共同幻想」概念の魁的な「相互主観性」という概念も考案した。つまり人間の意識はすべてが主観つまり二次元なのであるが、同じ三次元世界（フッサールは「生活世界」と呼んだ）の中に暮らす人々は、他人も自分と同じように世界を知覚し、同じ世界を共有していると信じている。これが「相互主観性」。もちろんフッサールもドイツ人。

⑯　エディプス・コンプレックス
ギリシア神話に登場するオイディプス王がモチーフとなっている、フロイトの学説の一つ。超自我つまり道徳のルーツとして語られる。父権社会では割と納得されるが、日本のような母系社会では「男の子は父親を殺して母親と寝たがってる」と言われてもあまりピンと来ない。

た。フロイト自身がマザコンだったので、たぶんこの理論はフロイト本人のコンプレックスを全人類に適用しようとしたものなのでしょう。

このように道徳心や倫理観は個人の内面に存在する、とフロイトは考えました。つまり、カントの道徳律やヘーゲルの絶対精神などというものは世界には存在しない。世界に存在するものは、ただ人間だけなのです。各人の自我はかろうじて超自我の領域で繋がっているものの、根本的には孤立しているわけです。しかも自我は、まったくもって利口なものではありません。むしろ人間を次々と誤謬（ごびゅう）に追い込むものです。フロイトは、自我が人間を真実の認識からどんどん遠ざけてしまう原因をいろいろと見出しました。

「抑圧」…自我にとって都合の悪い要素をエスの中に隠してしまう。
「否認」…都合が悪いことを抑圧できない場合、意識下で否定する。
「反動形成」…ある衝動・欲求を抑圧した結果、その欲求と正反対の行動をとってしまう。
「投影」…自分の内面にある感情や観念を、外部の他者に重ね合わせる。

などなど。

抑圧についてはすでに述べましたが、「嫌なことはなかったことにしよう」という心理です。忘れることで喪男は生きていけるのです。これまでに受けてきたトラウマ体験のすべてを常に思い出していたら、生きていくことなどできません。*17

どうしてもなかったことにできない場合は、否認するわけです。とにかく認めない。あれこれ理屈をつけて、現実のほうが間違ってると言い出すわけです。脳内勝利するんです。こうして、二次元と三次元の対立が始まるわけですね。

⑰「これまでに受けてきたトラウマ体験のすべてを常に思い出していたら、生きていくことなどできません」映画『バッファロー'66』で、主人公ビリーがファミレスのトイレで泣いているシーンを参照。

反動形成とは、例えば「ツンデレ」です。本当は彼のことが好きなんだけど、そんなデレデレな私を認めたくないわっ、と自分の感情を抑圧するので、反動でツンツンしてしまうのです。つまりデレを隠すために過剰にツンツンしちゃうんです。萌えますね。

投影とは、本当は自分があの子を好きなのに、逆に「あの子は俺を好きなんだ、まいったなあ」と言い出すようなケースです。こういうのを被愛妄想と言います。反対に被害妄想というのもあります。こちらは、本当は自分が相手に対して敵意悪意を抱いているのですが、逆に「あいつが俺を嫌っている」と思い込む心理です。「ツンデレ」も実は「あの子がツンツンしてくるのは本当は俺にデレデレだからなのだ、照れ隠しなのだ」という「投影」から生まれた萌え属性かもしれませんよ。

この他、「昇華」というのもあります。性欲をそのまま女体にぶつけるのではなく、彫刻や絵画といった芸術に捧げることを「昇華」と言います。悪く言えば芸術の出発点はたいていエロ妄想だということです。多少よく言えば、三次元で満たされない欲望も二次元の世界で発散すれば幸せになれるよということです。もちろんリビドーは芸術だけでなく、事業や学問など、いろんな行動に昇華できます。つまり人間の文化とは全部リビドーの昇華の結果なんです。

このようにフロイトは喪男の精神の暗部に思い切りメスを入れて、容赦なく「喪男が自分をごまかすプロセス」を暴き立てていきました。これは自分で自分の身を切り裂くような作業です。フロイトは自ら自己分析を行い、弟子たちにも自己分析を義務づけました。これは厳しい修行です。フロイトは、**自分自身の精神の暗部を直視することもできない奴に、他人様の精神を分析する資格はない、**と考えたんです。立派で

す。自分自身から目を逸らして偉そうにセカイの話ばかりしている連中に聞かせてやりたいですね。

それまでの西洋哲学は、喪男の苦しみは精神（二次元）の思うように世界（三次元）が動いてくれないことから始まると考え続けていました。しかしフロイトは、精神そのものがすでに内部で自我とエスに分裂していて、デカルトが絶対視した自我は、エスによって脅かされている脆（もろ）い存在なのだと言い出したのです。

ニーチェは、神が死んだ近代において弱い人間が神を克服するためには、自らが内面に神を見出せる超人にならなければならないと考えました。でも、ニーチェは「超人」という目的は見出せても、方法論を欠いていました。超人になる過程、すなわち近代的な自我の自立を達成する過程において、フロイトによる「人間解体」[*18]とでも言うべき作業がどうしても必要だったのです。フロイト自身の理想も、個人的・近代的な自我の確立でした。エスと自我に分裂した喪男の精神を理性によって認識して把握することで、苦悩を減じることができ、神経症の症状を終わらせることが可能だとフロイトは考えたのです。

フロイト理論に基づいて考えると、ナチス（ヒトラー）がユダヤ人を劣等民族として徹底的に迫害したのも、ヒトラーが自分の中のコンプレックス（劣等感）を「ユダヤ人」という外部の他者に投影した結果なのだ、ということになります。また、ヒトラーがヨーロッパを支配しようとして戦争を始めたのも、ヒトラー個人の「芸術家にもなれず、モテもせず、悲惨な青春を送った」というダメ人間コンプレックスが原因となります。当時の多くのドイツ人がこぞってヒトラーを支持したのも、彼らが敗戦とインフレによって総喪男化し、拭いがたいコンプレックスを抱えていたからです。

⑱「人間解体」
一九七八年。ドイツのクラフトワークによるテクノアルバム。『人間解体』がリリースされた年、YMOが結成された。

このようにフロイトはすべての原因となる実体としてのマルクス的な「世界」を否定し、人間の社会に起こるあらゆる現象の原因を「精神」に求めたのです。

エロスとタナトス

ところで前期フロイトは「汎性欲論」とも言える立場でしたが、後期になると少し変わって来ます。人はリビドーのみに生きるにあらず、と言い出したのです。もちろんフロイトはどこまでも喪男ですから、いささか人間がまるくなって「愛」だとか「善」だとか言い出したわけではありません。むしろその逆です。

まずリビドーを「生の本能＝エロス」と言い換えました。エロスは単に性欲が昇華されたものではなく、「生きようとする欲求」そのものです。後年にはフロイトはもう汎性欲論を捨てていたわけです。たぶん年とって性欲が衰えたからだと思います。また、そろそろ死が迫ってきたために「うわー死にたくないなー」と感じるようになったのでしょう。

リビドーは性欲つまり「種の保存」欲求でしたが、エロスは「個人的な主体の保存」の欲求です。「自我の保存」欲求と言ってもいいでしょう。で、このエロスが様様な方向に昇華されることで、人間の文化が発達したわけです。つまり二次元（＝想像力）が三次元（＝世界）を作り上げていった、という理屈です。ここまでは汎性欲論時代と同じです。

ところが後期フロイトは、さらに「タナトス」[19]＝「死の欲求」という矛盾した衝動が人間精神（＝二次元）に存在する、と考えるようになったのです。「死の欲求？　そんなバカな」と思われるでしょうが、例えば自殺というのはタナトスそのまんまですよ

⑲　タナトス
フロイトと同時代の哲学者バタイユは、人間の破壊衝動を「過剰」と「蕩尽」という理論で説明した。

ね。フロイトの目の前で繰り広げられていた第一次世界大戦の惨状が、彼に「人間には破滅願望がある」と気づかせたのでしょう。タナトスが自分に向かうと自殺になります。自殺まで行かなくても、自分で自分をダメにするという自傷行為はいろいろ見受けられますね。僕ですとひきこもりになったりします。で、タナトスが外部へ向かうと、人殺しとか戦争とかになるわけです。

日本のフロイト派学者・岸田秀[*20]は、フロイト理論を「人間の本能は壊れており、エネルギーだけが存在する。そして世界とは幻想である」という観点から再構築したのですが、岸田によればリビドーとは単なるエネルギーです。本来は種の保存という本能だけに使われるべきリビドーですが、人間は本能が壊れているのでリビドーをどんなものに注ぐこともできるのです。つまりリビドー（エロス）は「性欲」でも「生きる欲求」でもなく、いかようにも使われるものなのです。ですからタナトスは、リビドーが「自己破滅」や「世界への憎悪」という方向に振り向けられた結果であって、エロスとタナトスを別々の実体を持つ物理的エネルギーとして考える必要はないと岸田は言います。

僕の考えでは、エロスもタナトスも等しく「快」に向かっているのではないかと思います。いずれもエスから生まれてくる過剰なエネルギーですが、エロスは僕用語で言うところの「萌え」に近く、タナトスは「鬼畜」に近いのです。性行動もまた萌えエロと鬼畜エロに分類できますが、愛や癒しを含んだエロが「エロス」系のエロで、鬼畜と暴力へ向かうエロが「タナトス」系のエロなのではないでしょうか。僕の「喪男の喪エネルギーは萌えと鬼畜に振り分けられる」という理論は、実はフロイトが考えたエロス・タナトス理論から導き出されているのです。

⑳ 岸田秀
精神分析学者。一九三三年生まれ。早稲田大学文学部出身。一九八〇年代初頭、ニューアカブーム直前の『現代思想』誌で「唯幻論」を唱えて有名になった。吉本隆明（注㉓）の「共同幻想論」（注㉔）から「対幻想」（注㉑）を取り去ったことで、時代を先取りして一躍喪男のカリスマ的存在に。和光大学で精神分析学の教授を務めていたが、学位論文を提出しなかったので大学教授の資格を取り消されるなど伝説・逸話が多い。

自分で自分を救う方法を持たせようとしたフロイト

フロイトが果たした最大の業績は、人間の苦しみは「飢え」や「病」、「死」といった物理的なものだけではなく、人間の精神そのものの内部にそもそも苦悩が宿っているということを言い出したことにあります。これはアンチ資本主義とでもいうべき思想でした。資本主義（およびそこから派生した共産主義）では、人間は物質的に満たされることで救われるということになっていました。しかし物質的に満たされてもなお、人間は苦しむのです。それは人間の持つ「心」そのものが苦悩の源泉だからなのです。本書で延々と語ってきた三次元と二次元の対立は、単に人間と外界との対立であるだけでなく、実は人間の内面における葛藤でもあったのです。二次元と三次元は自我の中で繋がっていたのです。二次元が「私的幻想」、三次元が「共同幻想」であるとすれば、両者が精神の内部で繋がっているのはむしろ当然だと言えます。フロイトは内在化された二次元と三次元の分裂がある限り人間（喪男）の苦悩は終わらないだろうと考えたのです。

フロイトが「人間の精神」に光を当てたことによって、「個人」と「恋愛」の時代が来たのです。いわゆる「ポスト・モダン」の時代です。もう、神も国家も、いや科学すらも人を癒す装置としては有効ではなくなりました。残っている道は、個人が自己を癒す自己救済の道と、そして、「対幻想」[21]（恋愛）による小乗救済の道だけでした。

フロイトは「人間の精神」の内部に本人も知らない暗黒の部分があるということを「発見」したわけですが、「**超自我・自我・エス**」から構成される精神の見取り図は、**実は喪男を取り巻く「世界・喪男・喪エネルギー」の三者関係を内面化したもので**

㉑　対幻想
吉本隆明が『共同幻想論』で提出した概念。世界を「共同幻想」「対幻想」「自己幻想」の三つに分けた三元論は吉本隆明の独創で、政治から核家族・恋愛へと自我を支える装置が切り替わっていく一九七〇年代の到来を予言する概念となった。しかし「対幻想」は今現在では忘れ去られた概念となっている。というのは、マスメディアが「三次元」を支配した恋愛資本主義システムにおいては、「共同幻想」と「対幻想」とは同じレイヤーだからである。また、家族を持てず恋愛も行えない喪男たちにとっては、「対幻想」は存在しないも同然なのである。

す。超自我とは喪男の願望を裏切り続ける「三次元」（世界）が内在化されたものです。エスは喪男が持つ過剰な喪エネルギーの貯蔵庫です。そして自我は、世界と自らの喪エネルギーの狭間に立たされてオロオロと葛藤する喪男の意識そのものです。

それまで社会論として語られてきた「世界」と「喪男」の乖離と対立の問題を、フロイトは喪男個人の内面から説明したのです。

フロイトの考えた人間精神マップは、それまでいろいろな哲学者が「世界」そのもののマップとして論じ続けてきたアウタースペースを、個人の内面＝インナースペースに移植したものなのです。

いよいよ、個人主義の時代がやってきました。

これまで見てきたように、かつて西洋では人間の自我を安定させるための装置として「神」という巨大な物語が利用されてきました。神は、全人類を等しく救済する大きな存在です。しかし科学が発達するにともなって、神の力は薄れていきます。そこで次に登場した装置が「国家」でした。国家は、ヨーロッパ全土の人間を救済する力を持つ神に比べると小さな装置です。一つの国家、一つの民族を限定的に救うだけですから。とはいえ、マクロな装置であることに変わりはありません。神を小型化したようなものです。ところが国家による救済のシステムは第一次世界大戦・第二次世界大戦によって崩壊してしまいます。

フロイトが活躍した時代は、まさにこの二度にわたる世界大戦の時期に重なっています。フロイト自身、ナチスに追われてオーストリアからイギリスに亡命しています。神に続いて国家が崩壊していくさまを見ながら、フロイトはインナースペースの探究を続け、神経症を治療する過程で新たな「人間を救済するシステム」としての

「精神分析」、つまり個人一人ひとりを個別に救う方法を考え出したわけです。
「**世界を書き換えるのではなく、個人の自我を書き換えれば済むのではないか**」とフロイトは考えたのです。フロイトは個人の自我を不安定化させる要因として当初「性欲の抑圧」をあげていましたが、徐々に「死の本能・タナトス」のようなより根源的な衝動に注目するようになっていきました。しかしいずれにしても重要なことは、それらがすべて個人の内面の問題だということです。

フロイト理論は、実はブッダが考えた初期仏教の理論に似ているのです。

フロイトによると、神経症はエスに抑圧された性欲その他の衝動が自我を不安定にするために起こります。そのため、エスに抑圧されている衝動を意識化して自我に組み込むことによって、自我は安定し、神経症の症状も治まるというわけです。

ブッダもまた瞑想して「八苦」を認識することにより人間の苦悩は薄まり、やがては「解脱」へ至ることができる、と考えましたよね。

西洋思想は長い年月をかけて、ようやく東洋的な「個人による個人救済」のシステムに辿りついたわけです。

ヨーロッパが二度の世界大戦で崩壊した最大の原因は、「人間の理性」をあまりにも楽天的に信奉しすぎたことにありました。「国家」が神に代わって彼らの自我を支える装置に格上げされたのは、国家を運営する「人間の理性」が無条件に信奉されたからなのです。その結果、人間の内面にある「二次元」を世界（三次元）に持ち込んで世界を書き換えてしまえば救われるのだ、という「理性信仰」「人間信仰」の時代が訪れたのでした。

しかしその結果は、「国家」と「国家」のエゴの衝突によるヨーロッパの崩壊でし

た。フロイトはそんな時代に生まれてきて「人間の精神はそんな都合の良いものではない」と大声で言って回ったわけです。フロイトが発見した人間精神は、善悪を併せ持つ存在であり、自我はエスに抑圧されたもう一人の自分自身を知らないのです。フロイトは性悪論者的に捉えられがちですが、実際には**「人間の内面には善悪の両方が存在する」というごく当たり前のことに気づいただけ**なのです。そして、エスの快感原則を抑え、現実原則に基づいて自我を強化・安定させていくことを目標としました。すべての人間がブッダのように安定した自我を持てば「ナチス萌え」のような行き過ぎたムーブメントは起こりませんよね。フロイトは喪男たちに「自分で自分を救う方法」を持たせようとしたわけです。

2 哲学の終焉と「共同幻想」

政治の季節が終わり恋愛の時代へ

さて、ここからは戦後日本の話になります。
ようやく、僕の人生に哲学史が追いついてきました。
フロイト理論は日本に輸入され、岸田秀の「唯幻論」もここから生まれました。これは一言で言えば「すべては幻想である」という理論です。そんなことは大昔に仏教経典で「色即是空、空即是色」[*22]と唱えられているではないかと言われそうですが、実

㉒ 色即是空、空即是色
「般若心経」に登場する有名な言葉。インドでも西洋と同じく古代から実在論（三次元はあるとする説）と唯名論（二次元が三次元を規定するとする説）が対立していたが、空の思想は唯名論系の思想が極端化されたもの。「つまり目に見える三次元世界（色）とは、結局は意識に現れてくる実体のないイメージ（空）なんだよ！」「な、なんだってー！」という話のはずだが、「空とは、からっぽという意味ではありません。エネルギーのことです」という正反対の解釈もある。こちらはエーテル説の生き残りか。

際、岸田理論は東洋仏教と精神分析が融合したものです。

唯幻論が登場する前に、吉本隆明[*23]が「共同幻想論[*24]」を唱えていました。吉本は社会・国家とはすなわち「共同幻想」であると考え、「自己幻想」、つまり個人の精神と対置したわけです。さらに吉本は、この両者の間に「対幻想」という第三の世界を配置しました。対幻想とは家族や恋人といった閉じた小さな人間関係です。世界を、「国家・恋人家族・個人」の三種類に割ったのです。

どうでしょう。

いよいよ**「国家」と「個人」の間に、「対幻想」という狭い人間関係の世界が登場しましたよ！**

対幻想の領域の中には、戦後資本主義社会における新たな神（自我を安定させる装置）としてクローズアップされることになった「恋愛」があるのです。吉本隆明が『共同幻想論』を出版した一九六八年は、まだ学生運動が盛んな時代でした。国家と個人の対立の時代でした。対幻想である恋愛が実際にクローズアップされるのは、もう少し先の話、七〇年代初頭になります。上村（かみむら）一夫[*25]のマンガ『同棲時代[*26]』は、七二年に連載が開始されています。この年には浅間山荘事件[*27]が起きています。また吉田拓郎[*28]の『結婚しようよ』が大ヒットしています。この一年前、七一年には白土三平[*29]の『カムイ伝』第一部[*30]が連載終了しています。

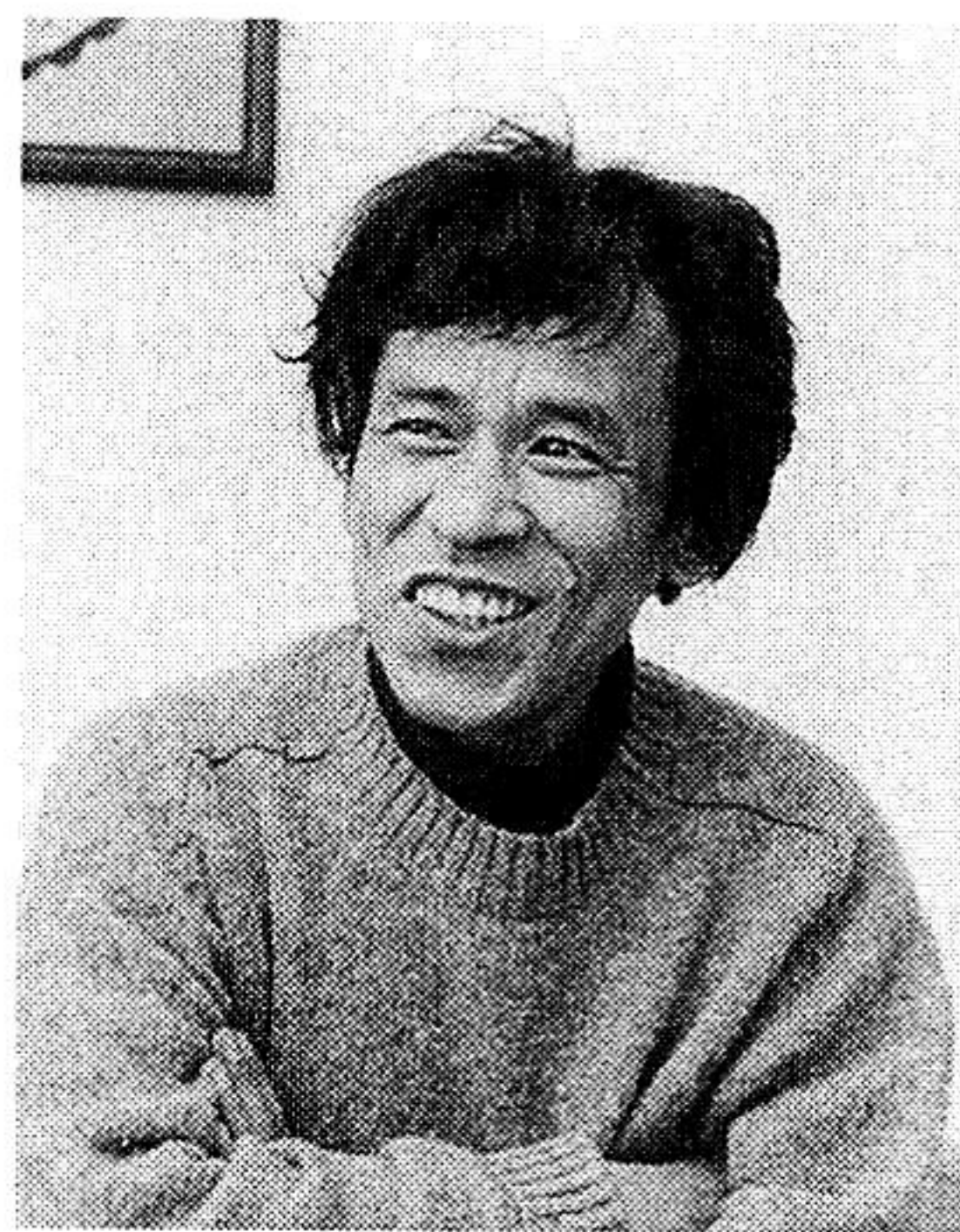
こうして眺めてみると、**七一年から七二年にかけての約二年間こそが、戦後日本の「政治の季節」が終わり「恋愛の時代」がやってきた変革期だった**と考えていいでしょう。

近現代の日本では「国家萌え」の時代を経て、敗戦後しばらくの間は国家対個人の

㉓　吉本隆明
評論家。一九二四年生まれ。一九六〇年代から七〇年代にかけて、左翼学生から支持を受けた。政治の季節が終わり、恋愛資本主義時代が到来した八〇年代からはサブカルチャー評論家的な存在になった感がある。娘は作家のよしもとばなな。

㉔　「共同幻想論」
一九六八年。吉本隆明の著。三次元世界（国家）を「共同幻想」と定義し、続いて人間個人の精神を「自己幻想」さらに家族や男女の関係を「対幻想」と定義した「三元論」を提唱した。

㉕　上村一夫
一九四〇年〜八六年。マンガ家。劇画全盛時代の代表的な作家で、当時まだ珍しかった「恋愛」を青年劇画のテーマとして取り上げ一世を風靡した。代表作『同棲時代』『修羅雪姫』。

㉖　「同棲時代」
一九七二年から七三年にかけて『漫画アクション』で連載され大ヒットした上村一夫の劇画。当時はまだ「同棲」という言葉が珍しく、若い男女の同棲生活を描く本作は非常な衝撃をもって迎えられた。そして、同棲が大流行した。言うまでもなく同棲できない喪男というのも大勢存在したわけで、そういう喪男は四畳半のアパートで薄いせんべい布団を被りながらルサンチマンに塗れ、枕を涙で濡らした。

「政治の季節」が続き、学生たちが安保闘争を繰り広げました。個人と言っても彼らはマルクス主義を自我の安定装置にしていましたから、政治的個人とでも言うべきでしょうか。

しかし七〇年代に入るとマルクス主義の「自我を支える装置」としての威力が急激に低下します。そして新たに浮上した「装置」が「恋愛」だったのです。とはいえ、七〇年代初頭の恋愛は、まだまだ安保闘争に敗れた若者の「ひきこもり先」でした。避難場所みたいなものです。なので、当時の恋愛には「貧乏」「苦悩」「悲劇」というイメージが付きまとっていました。吉本隆明も「共同幻想と対幻想は逆立する」[*31]と言いました（図5-4）。

ところが後から出てきた岸田秀の唯幻論では、「対幻想」というモデルが消えています。岸田は世界の構造を「共同幻想」と「私的幻想」の二つの要素に戻しました。なぜそうしたのかはわかりませんが、岸田先生が（たぶん）モテなかったからではないでしょうか。これは僕の勝手な妄想ですが、若かりし頃の（学者として売れる前の）岸田先生は恐らく喪男でした。故に、「対幻想」つまり恋愛による自我の安定という道を歩むことができなかったので、個人による個人の自己救済にこだわったのではなかったかと……。い、いえ、間違っていたら謝ります。

そうなのです。吉本モデルは「モテモデル」、岸田モデルは「喪モデル」なのです。

岸田　秀

㉗　浅間山荘事件
一九七二年に起きた事件。軽井沢の浅間山荘に連合赤軍のメンバーが人質を取って立てこもった。警官隊の強行突入は、テレビで生中継された。この時の視聴率は最高九〇%を超えた。また、山荘を包囲した警官隊がカップヌードルを食べるシーンがテレビで放映されたため、一躍カップヌードルが人気となった。

㉘　吉田拓郎
フォークシンガー。一九四六年生まれ。元々フォークソングは学生運動・政治思想と深く結びついたプロテストソングとして日本で流行しており、岡林信康がフォーク界のカリスマとして活躍していた。ところが当時喪男だった吉田拓郎が一九七一年のフォークイベントで『人間なんて』という悪夢のような喪男ソングを二時間近くがなり立て、切れた客が暴動を起こすという事件が起こり、岡林信康が帰ってしまう。これ以後、フォーク界は岡林ではなく吉田拓郎を中心に回り始める。しかし翌年、吉田拓郎はCBSソニーに移籍して『結婚しようよ』をリリースし、大ヒットを飛ばした。これでフォークは一挙にモテ側に。学生運動が挫折のうちに終わり、恋愛の季節がやってきたことを象徴する吉田拓郎の転身だった。しかし彼の喪男ぶりは八〇年代に制作された時代錯誤な喪男映画『幕末青春グラフィティRonin坂本竜馬』における高杉晋作役の怪演からも窺えるように、本物。

㉙　白土三平
マンガ家。忍者マンガの第一人者。一九三九年

恋愛資本主義時代の哲学

七〇年代後半から八〇年代初頭にかけて、徐々に「軽薄短小の時代」がやってきます。フランスでも五月革命[*32]以後はサルトルの影響力が低下し、構造主義全盛時代が訪れました。

八〇年代後半には日本にバブル経済が到来します。恋愛は後ろめたい暗いものではなくなり、明るく楽しいものになります。同時に、「恋愛イコール消費」という構造が完成します。これは、恋愛が資本主義のシステムの中に商品として取り込まれたことを意味します。「恋愛資本主義」の登場です。

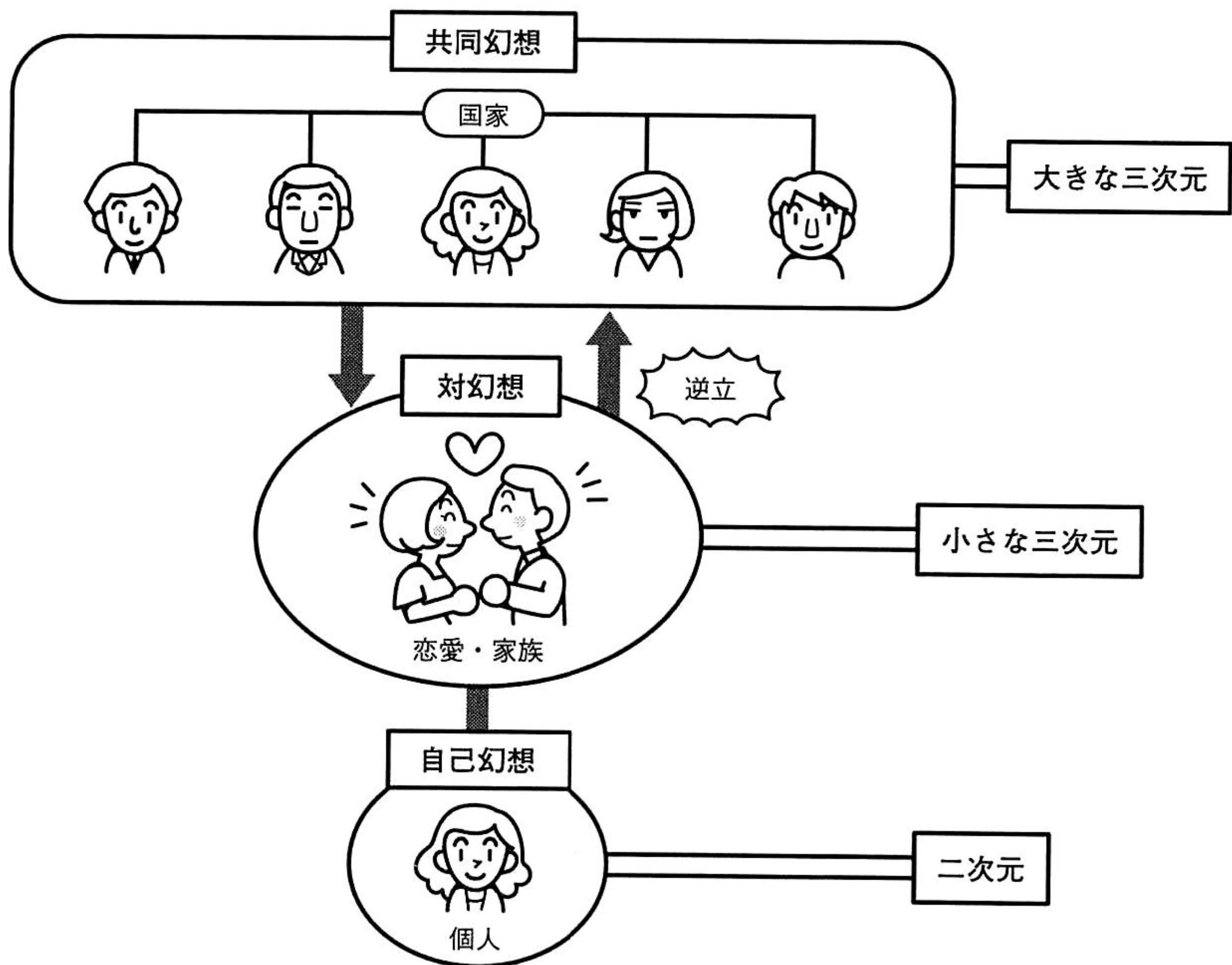
同時期に哲学もまた、「モテ」のためのアイテムになっていきました。八〇年代に訪れたニューアカブームによって、日本の哲学は「モテアイテム」化されたのです。吉本隆明もうっかりコムサ・デ・モードを着て雑誌に登場したりして、古い哲学仲間から「このモテ野郎め」と叱られたりしました。でも「対幻想」を考案した吉本は元来モテな人だったはずなので、そのまま八〇年代のポップカルチャーシーンを突っ走って行ったわけです。RCサクセション[*33]とかビートたけしについて語る人になったわけ

1970年代初頭、日本でも突然、国家やマルクス主義といった巨大な物語（共同幻想）が終焉した。そして、アメリカのヒッピームーヴメントなどの影響も受けながら、恋愛という小さな物語（対幻想）が大きな力を持ちはじめた。

図５―４　「恋愛」の時代の到来を予告した吉本モデル

です。これを吉本の「転向」だと考える人もいるのですが、元々吉本は「モテ」だったから「対幻想」という概念を思いついたわけで、別に思想が変わったわけではないと思うのです。吉本の「共同幻想論」の最大のポイントは「対幻想」というシステムを考え出したことにあるのであって、つまり**『共同幻想論』は「恋愛の時代」の到来を予言した本だった**んです。

かくして、八〇年代半ばには恋愛も哲学も、すべてが「モテ」のために「消費」される「商品」になってしまいました。

ところが、そんな時代に、我らが岸田秀先生だけは和光大学の教授室で酔っ払って「幻想だー、幻想だー、世の中全部幻想だー」と一休和尚[*34]みたいなことを歌っていたのです。

八八年、ニーチェに憧れて上京した僕は、早稲田大学の哲学ゼミで浮いていました。ニーチェとナチスについて論じた論文は教授に忌み嫌われ、他の学生からも「君は浮いているね」とバカにされていました。その学生が何をしているかというと、女の子に「サルトルってどういう人なの？」と質問されて「ああ、それはね……かくかくしかじか……アンガジュマンがどうのこうの」と目じりを垂れ下げながらヘラヘラと「哲学知識」を開陳するような愚民だったわけです。キャンパスを出ると、ポロシャツの襟を立てた「襟立て男」たちがオールラウンドサークル、つまりナンパサークルを運営して高価な自動車を乗り回し、スキーやテニスに勤しみ、女の子を酔わせては押し倒して強姦していました。

田舎モノだった僕は、このような八八年の東京の実情を目の当たりにして恐ろしい真相を悟りました。すでに日本の大学、ことに文学部は死んでおり、哲学そのものも

生まれ。マルクス主義に基づく唯物史観を劇画に取り入れ、一九五〇年代から六〇年代にかけて学生に熱烈な支持を受けた。『ガロ』誌上で『カムイ伝』を連載するが、七〇年代に入ると政治の季節は終わり、『カムイ伝』も失速。「第一部・完」の宣言とともに長い休載に。『カムイ伝』の第二部は八八年に入って『ビッグコミック』誌上で再開されたが、現在は再び休載中。すでに第二部は掲載分で完結しており、次はいよいよ第三部が始まると言われているが、〇六年になってもなかなか始まってくれずカムイファンをやきもきさせている。

㉚「カムイ伝」第一部
一九六四年～七一年。作者は白土三平。『ガロ』誌上で連載された。江戸時代初期、架空の藩を舞台に様々な身分階層の人間が複雑に絡み合う壮大な悲劇。クライマックスは農民たちによる大一揆なのだが、その頃すでに時代は七〇年代に入っており、マルクス主義は退潮し、学生運動は終わろうとしていた。故に作中の一揆も陰惨な結末を迎える。

㉛「共同幻想と対幻想は逆立する」
元々、日本において恋愛という観念は、世間・社会と対立する存在だった。それは江戸時代に「心中もの」が流行したことからもわかるだろうし、明治から大正にかけての文学では近代的・個人主義的な恋愛と、封建的な家族制度との対立がテーマとして取り上げられることが多かった。

すでに死んでいるのだ。現代日本では、すべてが「女」つまり「モテ」に支配されているのだ。真の哲学は、和光大学の岸田秀ゼミにしかないのだ、と！

というわけで僕は早稲田大学を中退して、しばらく岸田ゼミの偽学生になっていたわけです。でも岸田先生に「俺の言いたいことは全部本に書いてあるから、別に転学する必要はない」と言われ、元いた大学に復学したのでした。「モテ」に支配された哲学科に失望していたので学部は変えましたが。

唯脳論の登場

僕が新たに通った学部は人間科学部でした。フロイトは精神分析学をいずれ生物学と融合し、確固とした「自然科学」として成立させるつもりだったのです。リビドーは、本来は生物学的な基盤を持つ実体的エネルギーだったのです。フロイト自身はあまりに早く生まれすぎたために精神分析と生物学を融合する構想を実現できませんでしたが、僕が上京して大学に入った八〇年代の時点ではすでに哲学つまり形而上学が「終わっていた」ことは明らかでした。

宇宙論については、「宇宙物理学」というジャンルが哲学に取って代わっていました。人間の精神の問題については、「脳科学」[*35]が代わりをつとめるようになりました。元々はニューアカ系学者の一人だったはずの栗本慎一郎[*36]が「ドーパミン」の話を語り始めて喪男路線へ突っ走り始めたのも、ちょうどこの頃です。栗本は元々は経済人類学者でバタイユの「過剰＝蕩尽理論」などを論じていたのですが、八〇年代後半から突然脳科学の話を取り上げるようになりました。「人間の精神」を扱う学問は、哲学から心理学・精神分析を経て、この時期（ニューアカ時代晩年）になだれをうって脳科

㉜　五月革命
一九六八年五月にパリで起こった大規模なストライキ。労働者ストに被さるように学生運動が一気に過熱。しかしド・ゴール大統領は失脚せず、逆に事態を沈静化させた。学生運動は下火になり、五月革命は結局革命にはならなかった。五月革命の不発により、フランスにおけるマルクス主義およびサルトルの人気が凋落したと言える。この五月革命の影響で、日本の全共闘運動を始めとして世界各国で学生運動が活発化したが、学生たちの手で革命が実現した国はなかった。

㉝　RCサクセション
忌野清志郎が率いるバンド。一九七〇年デビュー。フォーク全盛時代にロックをやっていたために不遇時代が長かったが、ある日清志郎が何を思ったのか突然メイクしてステージにあがったことから運命が一変！『雨上がりの夜空に』で一躍ブレイク。さらに清志郎はもう一人のメイク派・坂本龍一と組んで『い・け・な・いルージュマジック』をヒットさせた。当時の『宝島』は毎月清志郎と戸川純の話ばかりしていた。八八年に制作した『COVERS』は原発批判を含んでいたために東芝EMIに発売を拒否され、かえって話題になってしまった。

㉞　一休和尚
一三九四年〜一四八一年。一休宗純。室町時代を生きた臨済宗の禅僧。とんちで有名。アニメ『一休さん』のモデル。しかし本物はモテ化・形骸化した当時の仏教界に唾を吐き、風狂を地でいく破戒僧だった。あの一休さんが、どうし

学へと移り変わったのです。元々フロイト自身が精神分析を最終的には脳科学に帰結させることを構想していたわけですから、これは歴史の必然とでもいうべき流れだったのです。

そもそも、精神分析もまた「言語による世界の説明」という哲学のはらむ構造的欠陥から免れていませんでした。原因の一つはフロイトが科学的な基礎体系を作れなかったためですが、これは時代を考えれば仕方のないことです。もう一つの原因は、フロイトの弟子たちが精神分析を「心理学」の体系にしてしまったからです。科学的な基盤を精神分析に持ち込むことを考えたり成し遂げたりした精神分析学者は、登場しませんでした。いや実はライヒ[37]という人がいたのですが、彼は精神分析とマルクス主義とトンデモ超科学を全部融合しようとして……。

精神分析が有効な領域は、実は、あまり深く生物学の要素が絡んでこない社会学の領域だけなのです。岸田唯幻論が、その代表ですね。社会こそが「精神分析」の対象に相応しいのです。そもそも精神分析は、社会のすべてを個人の精神から説明しようとする試みでした。つまり「三次元は、二次元から生まれる」という喪男哲学の追究と実践だったわけです。

しかし、喪男の精神の内面、これは精神分析で救われるものではありませんでした。いくら精神分析について研究しても、「俺はモテない、俺はダメだ」[38]という僕の苦悩は癒されませんでした。周囲では和田サンみたいなＤＱＮ学生たちが女の子を輪姦し、ボディコン女がお立ち台に昇ってセンスを振っていました。なのにオリはなんでこんなブサイクな顔に生まれて貧乏でモテないんだよう、というルサンチマンが溜まる一方でした。

てこんな喪男坊主に？　やっぱりさよちゃんと結ばれなかったトラウマが？　最後の言葉は「死にとうない」。代表作『狂雲集』。

㉟　脳科学
「瞑想によってアルファー波を出してどうのこうの」といった「脳科学系のオカルト」というジャンルもあり、一歩間違えれば危険な状況ではあった。

㊱　栗本慎一郎
経済人類学者。一九四一年生まれ。ニューアカブームで著名になった学者の一人。カール・ポランニー、マイケル・ポランニー、バタイユなどを紹介した。「過剰＝蕩尽理論」で知られる。衆議院議員を務めたこともある。代表作『経済人類学』『パンツをはいたサル』。

㊲　ライヒ
一八九七年〜一九五七年。ヴィルヘルム・ライヒ。オーストリア＝ハンガリー帝国生まれの精神分析学者。フロイトに弟子入りするが、精神分析学とマルクス主義を融合しようとしたためにフロイトと共産党の両方から除名されてしまう。ドイツではナチスが台頭したためにノルウェーからアメリカへと渡り歩き、その間になぜか超生物学者へと転身。「オルゴン・エネルギー」という未知のエネルギーを発見してしまい、オルゴンを利用したガン治療や研究所上空を飛び交うＵＦＯの迎撃などに取り組む。フロイトのリビドー学説をあくまでも生物学的に理論づけようとしたライヒだったが、同時にユング的なオカルトへの興味も持っていたためにマ

ニューアカ哲学なんて、「モテ」のアイテム、ファッションにしか思えませんでした。「言語で世界を説明しつくす」ことの不可能性は、すでに明らかでした。中学生でもわかる理屈です。そんな時代に「言語」だの「知」だのといった抽象的で実体のない言葉を弄する周囲のニューアカ学生を、僕はまったく信用できませんでした。**文系女子にモテたいからニューアカをかじっているだけなんだ、『ホットドッグプレス』[39]を読んでバカ女にモテようとしている体育会系の男と本質的には同じなのだ**、と喝破したのです。

ああ、喝破しなければよかった。

「知のある俺って、カッコいい」。これが当時の哲学学生の風潮だったのです（いまでもそうかもしれませんが）。喪男の苦悩とは無縁な、モテのための「知」。きゃつらは現代のソフィストどもです。「口ではなんとでも言える」これが僕の口癖になりました。やがてテレビ朝日で討論番組バラエティ『朝まで生テレビ！』が始まり、「口ではなんとでも言える」の代表例みたいな人々が徹夜で不毛な議論を交わすのを見て、ますます「言語で世界を説明しようとする哲学は、もう終わった」と確信しました。第一そんなものソシュールが出てきた時点でとっくに終わっていたのです。

ああ、僕は無知蒙昧（もうまい）な田舎モノだった。

文学部になんて入るんじゃなかった。

文学部なんて、もうすぐ消えてなくなる。

少なくとも、哲学科は、要らない。

いますぐ消えても誰も困らない。

僕は自分の喪男としての苦しみを癒すために、喪男の悲しみを終わらせる方法を探

ッドサイエンティストの領域へ踏み込んでしまったのだろうか。最後は不法医療行為で逮捕され獄死した。

㊳ 和田サン
早稲田大学のナンパサークル「スーパーフリー」を主宰。六本木ヴェルファーレでイベントを開催したりしていた。準強姦罪で大勢のメンバーとともに二〇〇三年に逮捕され、二〇〇六年現在も裁判中。スーパーフリーは一九八二年に設立されたサークルで、筆者が大学に入学した頃にはもう活動をしていた。その頃はレイプサークルという評判は立っていなかったはずだが（レイプサークルと言われているサークルは当時、他にあった）、九〇年代前半あたりからは常習的に輪姦を行っていたとされている。

㊴ 「ホットドッグプレス」
講談社の雑誌。若い男性に恋愛マニュアル・ハウトゥセックス・ファッション・モテイベントなどの恋愛資本主義ルールを教え込むための雑誌で、一九八〇年代には全盛を誇った。しかしバブル崩壊後、恋愛資本主義世界の二極化により男がDQNとオタクに二分化したため購買ターゲット層が激減、休刊となった。現在、ホットドッグプレスの魂を継承している雑誌はオヤジ向けモテ雑誌『LEON』だろう。読んでる人間は間違いなく同じ奴だ。

究するために哲学科に入ったのに、そんなことを考えている奴はどこにもいない。モテのことで頭が一杯。モテるための哲学。

腐っている！

哲学は腐っている！

どうしてこうなったかというと、簡単なことだ。政治の季節が終わり、さらには科学が哲学に取って代わったからなのだ！

哲学にはもう「やること」がないのだ。だから資本主義に組み込まれてモテアイテムになったのだ。

ラカン[*40]なんて何書いてるのか、さっぱりわからねえ！

精神分析と数学の融合なんて、インチキだ！

ただの衒学趣味、エセ学問だ。

精神分析に融合するべきは、脳科学ではないか！

ああ、もう「人間機械論」しかない！

すべての苦しみの原因を突き止めるのだ。「縁起」を辿るのだ。

そしてそのためには、昔ながらの瞑想ではなく、**「人間の精神とは、すなわち、脳という構造が生み出す機能にすぎない」**という最新の思想が有効だったのです。そこで僕は、当時流行っていたオカルトには走らずに、脳科学の方面に突き進もうとしたのでした。哲学の基盤としての脳科学を習得し、科学時代に相応しい哲学を生み出すという遠大な構想（妄想ともいいます）を抱いて。

ええまあ、当時一九歳だった僕は、そんなことを延々悶々と考えていたわけです。四畳半のきたなーい黴臭いアパートの一室でゴキブリと格闘しながら。モテるわけが

㊵ ラカン
一九〇一年〜八一年。ジャック・ラカン。フランスの精神分析学者。構造主義やソシュール言語学とフロイトの精神分析学を融合した。鏡像理論で有名。世界を「現実界（現実）」「想像界（三次元）」「象徴界（二次元）」のカント的二元論（三元論）で捉えた。ラカンは元々何を言っているのかよくわからない難解なレトリックを多用する表現が好きだったが、次第に数学表記を援用するようになり、アラン・ソーカルに批判された。代表作『エクリ』。

㊶ 養老孟司
解剖学者。一九三七年生まれ。東京大学名誉教授。『現代思想』で「唯脳論」を連載し、日本の喪男思想を唯幻論の先、つまり脳主義（という名の二次元寄り二元論）へと進めた。代表作『唯脳論』『バカの壁』。

㊷ 『唯脳論』
一九九〇年。養老孟司著。長々と続いてきた哲学における唯物論（三次元派）と唯心論（二次元派）の対立に「脳」を持ち出してきて両者を統一した。脳は心でもあり、同時に物質でもあるからだ。心は機能であり、脳は構造である。考えてみればデカルトがそもそも松果体において心と体が繋がっていると言い張っていたわけで、デカルト以後の哲学者は言語至上主義にこだわり自然科学から目を背けて脳を「見ない」ことにしていたにすぎないのではなかろうか。故に戦後のヨーロッパでは「形而上学の解体」が哲学の仕事となってしまったのだ。

ありません。女の子たちからは、狂人扱いされてました。奴らには喪男の苦悩などわかりはせん、わかりはせんのだ！　しかし偉大な哲学者はみんな喪男。臆するなかれ俺。真理とモテとは、逆立するのだ！

　ところがそんな頃、ちょうど唯幻論に代わって養老孟司[*41]の『唯脳論』[*42]が登場しました。まさしく九〇年です。養老孟司は脳の専門家ではないのですが、「哲学」としての『唯脳論』は非常にわかりやすく明快な本だったのです。「共同幻想」という概念を「脳化」という言葉で説明したからです。人間は世界を脳化したがる、脳化された人工世界こそが社会だ、という論です。ちょうど僕が作ろうとしていた哲学体系の基盤を先に養老先生が作っちゃったので、以後の僕は麻雀漬けの学生時代を無為に過ごすことになっちゃったのでした（い、いや、これは責任転嫁でした）。

　ドイツ観念論はフロイトを経て共同幻想論を産み、最終的には「脳」に行き着いたのです。社会が脳によって作られた人工世界だということは、我々が「三次元」と呼んでいるものも実は二次元が表出したものにほかならないということです。唯脳論もまた、喪男の哲学なのです。ちなみに養老先生の趣味は昆虫採集とマンガとゲームです（図5－5）。

二次元による自己救済

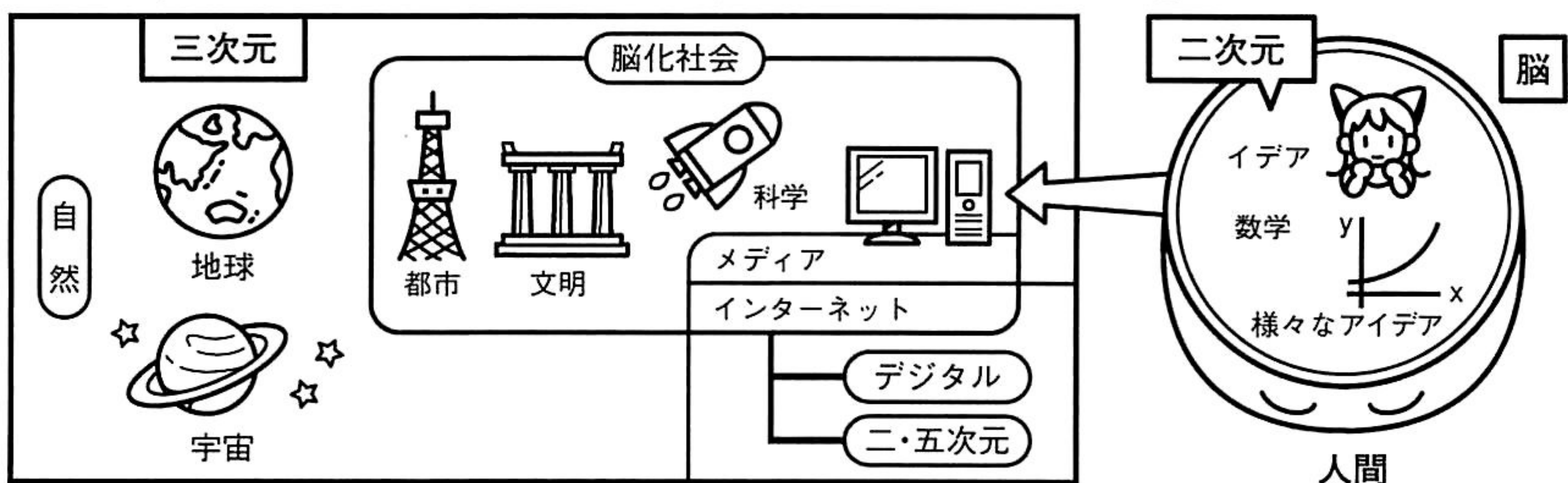
　いまから考えれば、モテ哲学（ニューアカ）こそは「恋愛」が人間を癒す装置として祭り上げられたバブル時代に適合した「時代の哲学」だったのかもしれません。喪男の苦しみの根源を探るのではなく、哲学をいかに「オサレ」に見せるかが重視された、悪夢のような時代でした。

養老モデルは、カントの二元論に近い。ただし「精神」ではなく「脳」を二次元の「場」に設定したことで、自然科学との親和性をはかっている。ところでインターネットのようなデジタルの社会は、ほとんど自然の世界とは関わりがなくなりつつある。「第三の世界」と呼んでも良いだろう。つまり三次元は、脳によってどんどん二次元＝脳内世界側へと引き寄せられているのだ。

図5―5　「共同幻想」を「脳化」で説明した養老モデル

なぜ悪夢かといいますと、僕の世界には「対幻想」などなかったのです。故郷の家族はとっくに崩壊しており、東京に出て来てもキモメンで貧乏人でオタクのオリは恋愛なんかできっこない。どこに「対幻想による救い」があったというのでしょう。あるわけない！　ですから、「喪男哲学」がどうしても必要だったのです。

しかし当時流行していた**モテ哲学は僕の人生と何の関係もない小難しい文章の羅列にしか見えませんでした。そんな本よりも、秋葉原で売られているパソコンゲーム『同級生』**[*43]**のほうが僕を癒してくれた**わけです。『同級生』に登場するキャラクター田中美沙と出会った瞬間に、三次元の女子大生への妄執が魔法のように失せていったのです。なぜならば三次元の女子大生は恋愛資本主義に汚染されていて、とうてい「真の恋愛」（恋愛資本主義に汚染されていないプラトン的恋愛）とは程遠い存在でした。しかしゲームのキャラクターは、まさしく「真の恋愛」の対象に相応しい存在だった！　これが……**これが「美のイデア」というものなのかーっ**！

かくして僕は「二次元オタク趣味とは実は、自分で自分を癒すために必要な信仰なのではないか」と気づいたわけです。例えば『同級生』のような恋愛ゲームというものは、二次元の仮想世界の中にバーチャルな対幻想を作り出すシステムなんです。これなら、三次元で対幻想を作れない僕でも、癒されるのです！

そんな実体験から「**二次元による自己救済**」という発想が生まれてきたわけです。

ですから岸田唯幻論は、単に吉本の共同幻想論から対幻想を取り去って簡単にしたというものではないのです。そこには「対幻想の消滅」という「喪の苦悩」が新たに盛り込まれていたわけです。唯幻論は、「神」も「政治」も「科学」も、人間が創造してきたもののすべては「自我を安定させるための幻想」であると看做しました。**文**

㊸「同級生」
一九九二年。エルフのパソコンゲーム。恋愛がテーマ。それまでのパソコンにおけるアダルトゲームはセックスがテーマだったが、『同級生』で初めて「恋愛」が導入され、この流れは以後『ときめきメモリアル』『同級生2』と続く恋愛ゲームへと続く。作ってる側は従来からあった「ナンパゲーム」つまりエロゲームのつもりだったのだが、ユーザー側が「恋愛ゲーム」と解釈してキャラクターに本気で萌えはじめたのだ。

明の歴史は、喪の苦悩から脱出しようとあがく喪男たちの苦闘の歴史であり、妄想を産み続けてきた歴史なのです。

フロイトはエディプス・コンプレックスを理論の中心に置きますが、唯幻論の根幹には「我が母の愛は偽物だった！」という岸田自身によるエディプス・コンプレックスの否定がありました。**意識して自ら家族という対幻想を否定するところから、唯幻論は始まった**のです。ということは唯幻論は、恋愛資本主義が蔓延し、家族も恋愛も人を救わなくなった現代日本を先取りした哲学だったのではないでしょうか。

自我を支える装置の歴史

しかし、「自我の支えの装置」としての恋愛をも家族をも否定し棄却してしまったら、いったい何が残るのでしょう。人間の自我は何らかの「信仰」を持たなければ崩壊してしまいます。「自分は何者なのか」「生きるとは何だ」「死が怖い」などの喪の苦しみに人間は囚われています。これらの喪の苦悩から逃れるために文明を作り上げてきたわけです。

太古の昔には、人間は原始的な宗教によって神や自然と一体化しようと努力しました。これは人類が早い段階から世界と切り離されて内面に三次元と二次元の対立を抱え込んでいたことを意味します。切り離されていたからこそ、わざわざ一体化しようと努力しなければならなかったのです。「神」という概念は、「物自体の世界」には存在しません。人間の脳内から生まれたものです。その脳内の「神」なる概念を、外界に投影したものが宗教なのです。

こうして、物自体の世界の上に二次元の概念（妄想ともいいます）をかぶせた三次元

という世界ができあがりました。宗教国家が誕生した時点では、神と国王とは同じものでした。しかしやがて国家と宗教が分裂します。キリスト教世界では、ローマ教皇が二次元（神の国）の権威となり、国王が三次元の権力を握るという二極構造が生まれました。これは、脈々と作り上げてきた「三次元」という世界が「物自体の世界」を完全に覆い隠すほど成長・進化を遂げたために起こった現象だと思われます。生産力が発達したり様々な発明がなされたりすることで、「三次元」の力が増大して二次元を凌ぐものになったんです。

　こういうパターンは、もっとはるか昔の中国からすでに見られた現象でした。古代の周王朝[*44]がそうです。周は当初、中国を自ら統治していました。しかし中国という「三次元」世界がどんどん拡大していくにつれて、広大になった領土を統治しきれなくなり、やがて各地に諸侯が乱立することになったわけです。こうして春秋戦国時代[*45]が訪れ、中国は多くの国家に分裂しました。ところがその間も、周王室は「二次元の王」として形だけとはいえ尊ばれてはいたわけです。結局最後は「周なんか知らん」とばかりに後発国の秦に攻められて滅亡してしまいますが、秦が周王朝を滅ぼさなければ周王朝はその後もバチカン市国[*46]のように「中国の二次元の王」として現代まで存続していたかもしれません。

　近世から近代にかけて、三次元の力はますます増大しました。二次元の神に代わって三次元の国家が人間の自我を保証する巨大かつ唯一の装置にまで成長しました。近代の三次元は「科学」や「資本主義」といった強力な武器を備えていました。これらも元来は人間の脳内から生まれた妄想だったのですが、この武器によって人間は、例えば古典物理学の法則に基づいて月に人類を送るといった奇蹟のような魔術を行える

㊹ 周王朝
BC一〇四六年頃～BC二五六年。古代中国の王朝。武王が太公望を従えて殷の紂王を撃ち、開いた王朝。東の成周へ遷都する前年のBC七七一年までを西周と呼び、以後を東周と呼ぶ。また東周の時代はすでに周王朝の力が衰えて有名無実化しており、群雄が各地に割拠していたので春秋戦国時代と呼ばれる。最後は秦に滅ぼされた。

㊺ 春秋戦国時代
BC七七〇年～BC二二一年。中国が拡大し、多くの国が覇権を争っていた時代。前半を「春秋時代」、後半を「戦国時代」と呼ぶ。春秋時代と戦国時代の境目はおおむねBC五世紀あたりとされる。春秋時代には「覇者」と呼ばれる実力を持つ諸侯が次々と登場したが、中国の統一は為されなかった。覇者には管仲に補佐された斉の桓公、長年諸国を流浪した晋の文公などがいる。戦国時代は乱立していた諸国のうち実力を持つ大国がおおむね七国に絞られ、最後は秦と楚が覇権をかけて争って秦が中国を統一した。多様な文化が発展し、諸子百家が様様な思想を発展させた。孔子や孫子、荀子、墨子などは春秋戦国時代の人間。

㊻ バチカン市国
イタリア・ローマに存在するカトリックの総本山。ローマ法王（教皇）が暮らす世界最小の独立国家。広さは東京ディズニーランドぐらい。かつて教皇はイタリアに広い教皇領を持っていたが、近代になると勢力を失っていく。そして一八七〇年にイタリアが統一された際に完全に

ようになったのです。

宗教の時代、魔術を持っているものは「言語」でした。ケルト[47]のオガム文字[48]、ユダヤ教のカバラ[49]やモーセの十戒、キリスト教の聖書、これら魔術的な力を持つアイテムの主流は「言葉」だったのです。

いまでも、アニメやライトノベルに登場する魔法使いは呪文を唱えますよね。これは、**昔は「言葉」にこそ魔力があると信じられていた名残です。**いや、実際に言葉には魔力があったのです。なぜなら三次元という世界は、二次元の言葉から作られている人工の世界だからです。言葉を介して、人間は三次元世界を「脳化」してきたわけです。ですからすべての学問の頂点にあるはずの哲学もまた、言葉の体系だったんです。哲学者たちは言語によって世界のすべてを説明することで、人間の自我を安定させられる、と信じたんです。丸山圭三郎[50]的に言えば「唯言論」です。でもまあ魔術の歴史と考察については、いずれまた別の機会に。

これに対して「科学」が武器としたツールが「数学」です。科学は元々は「自然哲学」という哲学の一ジャンルでした。しかし科学はやがて数学を武器にして、言語を武器としていた本家の哲学を凌ぐ力を手に入れたのです。力とは、三次元世界を構築する力のことです。

まず本書でも登場したデカルトが、代数学と幾何学を統合しました。図形を扱う数学と、数式を扱う数学とが、実は同じものなのだ、とデカルトは気づきました。これはつまり三次元の空間を二次元の数式によって操作することができるという一種の魔術の発見です。空間の線分を、数字とアルファベット記号による数式で表現することが可能になったのです。さらにニュートンやライプニッツは微積分学を考案し、静止

領土を失い、教皇はバチカンにひきこもってしまった。一九二九年にイタリアの政権を握っていたムッソリーニが教皇とラテラノ条約を締結し、以後バチカン市国は教皇の領土となった。

㊼ ケルト
古代ヨーロッパで栄えた民族・言語・文化。ガリア人。ドルイドと呼ばれる神官が支配した。ゲルマン民族の侵入、ローマによる支配、キリスト教化などによって衰退したが、スコットランドやアイルランド、ウェールズ、ブルターニュなどに現存している。古代イングランドでは一時ローマ軍が撤退してアングロサクソンが侵入したが、この時期にケルト文化とキリスト教が融合した独自のケルト系キリスト教が生まれた。アーサー王伝説はケルト神話とキリスト教説話が融合したもの。某ゲームでゲイボルグを振り回していたクー・フーリンはケルト神話の英雄。

㊽ オガム文字
ケルトのドルイドが使用した文字。魔力があると考えられていたので、占いなどの非日常的な祭事で使われた。

㊾ カバラ
ユダヤ教系の神秘主義思想だが、キリスト教系のカバラも存在する。ヘブライ文字を数字に変換して様々な操作を行うゲマトリアなど、言語と数字の神秘に深く関わっている。ドイツ観念論の先駆けとなったヤコブ・ベーメはキリスト教系カバラに通じた神秘主義思想家であり、「神の自己創出」という概念を生み出した。へ

している物体だけではなく動いている物体の運動そのものを数学によって計算できるようにしました。こうして三次元世界はすべて数学によって操作可能なものになったのです。

　科学によって三次元の力が飛躍的に増大した原因は、科学が「数学」という「二次元を三次元に持ち込む」魔力を持った強力な武器を手に入れたことにあるのです。これを**「科学の客観性」**とか言いますが、**客観性というのは別に「絶対不変の真実」というわけではなく、「人間の妄想（二次元）を三次元に適用させるための強い力を科学が持っている」**という意味なんです。

　こうして哲学は力を失い、科学に主役を奪われ、「現代思想」になりました。現代思想を一言で説明するなら、「哲学は信用できねえ」という思想です。フロイトは「人間の精神には、本人もわからない部分がある」と言って理性万能主義を否定しました。ソシュールは「人間の思考は、言語によって規定されている」と考え、哲学もまた「言語」という枠組みに囚われているという思想を産みました。ヴィトゲンシュタインは従来の言語哲学＝形而上学にはまったく意味がないと考え、数学のように論理的に厳密な分析哲学[*51]の基礎を考案しました。

　言葉の時代が終わり、数学の時代がやってきたのです。

　しかし、行き過ぎた三次元至上主義は二度の世界大戦や原爆の開発といった悪夢を引き起こしました。その結果、国家による人間の自我の安定・救済という「大きな物語」は終焉し、巨大な共同幻想が喪失してしまったポスト・モダン時代に突入したのです。神も国家も人間の自我を救わないとなると、残された道は「対幻想」、つまり恋愛や家族による救済と、「私的幻想」、すなわち個人による自己救済しかありません

ーゲルの「絶対精神」は実はベーメを通じてカバラと繋がっているのである。

㊿　丸山圭三郎
一九三三年～九三年。言語学者。ソシュールを日本に紹介した。代表作『ソシュールの思想』『文化のフェティシズム』。

㉛　分析哲学
数学的な哲学。科学時代に合わせて「神＝造物主を宇宙人とか進化した知的生命体などと言い換えた創造説」みたいなもの。

でした。

かくして、まずは資本主義と恋愛が融合した「恋愛資本主義」の時代が到来し、対幻想による人間の救済という実験が行われたのです。しかしその結果は言うまでもありません。「神」であれば、信仰すれば誰もが救われます。「国家」もまた然り。国民にさえなればよいのです。しかし「恋愛」は人を選びます。恋愛できない人間はすべて地獄に落とされます。

さらに、**同じ対幻想でありながら「恋愛」と「家族」は逆立するのです！**「不倫」「熟年離婚」「やらハタ」[*52]「援助交際」[*53]といった数々の「恋愛商品」によって、家族は解体されてしまうのです。

関係の永遠性に基盤を置いた家族は、個々人の自由意志による刹那的な関係である恋愛とは両立しないものなのです。しかも、「恋愛資本主義」は、「生産」ではなく「消費」のためのシステムです。

ボードリヤール[*54]は、現代の資本主義社会はすでに生産時代を終えて消費時代に突入していると考えました。消費社会では、すべての商品は「記号」として消費されるためのみに生まれます。例えば、服は元々風邪をひかないためにとか仕事がしやすいためにといった「有用性」のために生産される道具でしたが、消費社会では服が「お洒落」という記号になってしまいます。人々はよりお洒落になり、よりモテになるために服を「消費」するのです。これが消費社会です。消費社会とはつまり、「モテ社会」です。ボードリヤールは、**消費社会はありとあらゆる超越的な価値（二次元の概念、自我を安定させる装置となりうる概念）が、「消費される記号」に吸収されてしまう**、と唱えました。

㉒ やらハタ
「やらずに二十歳（はたち）になってしまう」こと。現代の女子中高生の多くが「やらハタ」になることを恐れて、慌てて適当なDQN男に処女を捧げてしまうそうだ。つまり「女の商品価値は一〇代がピーク」であり「処女でありつづけるということは女としての商品価値がないということだから、恥ずかしいことなのだ」という恋愛資本主義思想の蔓延によって、このような風潮が生まれているらしい。悪夢だ。ある調査によると「中高生の童貞率は下がっていないのに処女率だけは下がっている」そうだ。

㉓ 援助交際
恋愛資本主義時代のポスト・モダン思想は、素人売春を「援助交際」と改めた。

㉔ ボードリヤール
ジャン・ボードリヤール。一九二九年生まれ。フランスの現代思想家。資本主義社会は生産社会から消費社会へと移行したと言い出した人。「消費社会では、商品は記号になる」「すべてが記号となる現代社会に残された交換とは、死の贈与だ」と予言した。すべてが記号化された消費社会では本物と偽物の区別はなくなり、すべてがシミュラークルとなる。本書で頻出する「恋愛資本主義社会」も、消費社会の一種である。代表作『消費社会の神話と構造』『象徴交換と死』『シミュラークルとシミュレーション』。

ですから、恋愛は新たな自我を支えるための装置になると同時に、資本主義に吸収されて永遠に「消費」されなければならない商品（記号）と化したのです。なので、恋愛と逆立する家族は崩壊してしまいました。

こういう危機的な状況から、萌えオタクが現れたわけです。「現れた」というよりも、プラトンの末裔たちが現代に蘇ったと言えばいいでしょう。

第六章　文化は喪男が作り出す

1 哲学の仕事は「脳科学」と「物理学」に引き継がれた

「言語の体系」としての哲学は第二次世界大戦で終わった

前章で説明したように、一九八〇年代の恋愛資本主義勃興以後、哲学はモテアイテムになりました。

で、代わりに哲学者的な存在として注目されるようになったのが、宇宙物理学者や脳科学者でした。

ナチスドイツは、フロイトやアインシュタインといった自らの思想信条に反する学者たちをドイツから追い出しましたが、その結果、原子爆弾の開発に成功したアメリカのほうがはるかに強くなりました。ナチスにはナチスなりの学問[*1]があったわけですが、最新最強の物理学には敵（かな）わなかったのです。例えば**大陸に居残ることを許されたハイデガーやユングの形而上的な学問は、まったく戦争の役に立たなかったのです。**勝ったのは数学を基盤とした物理学でした。

第二次世界大戦は、哲学（言語）と科学（数学）の闘いだったとも言えるのです。ヨーロッパ哲学の本場であり観念論の中心であったドイツがナチズムに傾倒し、第二次世界大戦に敗北したことが、西洋における哲学の終焉の直接的な原因となりました。一つにはドイツ観念論的な「世界を思想で書き換えろ」という発想の危険性が忌避されるようになったということもありますが、もう一つ理由があります。**哲学（言語）は科学（数学）にまさる「物理的な」力を持てなかったのです。**つまり三次元世界を

① 「ナチスにはナチスなりの学問」
ナチス時代のドイツで発展していたが現在ではなかったことにされている学問には、例えばカール・ハウスホーファーの「地政学」（国家を生物学的・地理学的に捉えて、国家の生存権を獲得するために領土を拡大しなければならないとする学問。ナチスの領土拡張戦争を理論的に支えた）やエルンスト・ルディンの「優生学」（社会的操作によって人間の遺伝形質を改良する人種改良哲学。ナチスの強制断種やホロコースト、人工繁殖計画などを理論的に支えた）などがある。

② ピタゴラス
BC五八二年～BC四九六年。古代ギリシアの数学哲学者。世界の構造は「数字」で表されると主張し、ピタゴラス教団とも呼ばれるグループを率いていた。つまり数学の祖であると同時にカバラ的な神秘主義思想の先駆者でもあった。元々数学は魔術的なものだったのだ。

人間の意のままに操作する「魔術」としては、哲学より科学のほうが強力だったわけです。

しかしそもそも、数学の神様とも言える古代ギリシアのピタゴラス[*2]は哲学の一流派を率いていたわけで、「言語」も「数学」も等しく人間の脳が生み出した「表象」であり「抽象」であることに変わりはありません。ですから両者は同じ「二次元」から生まれた兄弟みたいなものです。哲学の主流が「言語」に一元化されたのは、ヘーゲルが「言語の体系」としての哲学[*3]を構築したからかもしれません。デカルトやライプニッツは数学者と哲学者の「理系・文系二刀流」でしたし、ニュートン時代の科学は「自然哲学」と呼ばれていました。ニュートン自身も、自分を哲学者だと考えていたのです。ただし、言語ではなく数学によって世界を記述する「自然哲学者」でした。

ともかく、第二次大戦以後、ヨーロッパでは「言語の体系」としての哲学は終わったのです。

物理学という新たな哲学

物理学の分野では「超ひも理論[*4]」という三位一体論よりはるかに難解な理論が登場しました。書いている僕もよくわかっていないのですが、とにかく難しい上に実証が困難なようです。

素粒子の世界というのは、どこまで行っても終わりがありません。かつては「原子」が物質を構成する最小単位だと思われていたのに、二〇世紀になると原子も実は原子核と電子によって構成されていることがわかりました。さらに、原子核もまたまた陽子と中性子から構成されていることがわかりました。まるで入れ子構造のよう

③ 「言語の体系」としての哲学
ヴィトゲンシュタインは、従来の「言語で世界を説明する」という形の哲学つまり形而上学をすべて意味がないと否定した。特に、キーワードに過剰な意味を持たせる神秘主義的な物言い（ドイツ観念論に多い）や、余計なレトリックの類を認めなかった。ソシュールも喝破したように、言語などはどうとでも取れる主観的な観念にすぎず、哲学もまた主観にすぎないからだ。それに対して数学の客観性は揺るぎない。ヴィトゲンシュタインは「命題分析」と呼ばれる厳密に数学的な思考法を哲学に導入し、哲学の数学化・論理学化をはかったのだった。このヴィトゲンシュタイン哲学からイギリスのホワイトヘッドやドイツのフレーゲらによる「分析哲学」と呼ばれる一派が生まれた。ただし、モテの国であるフランスの現代思想はまったく異なる方向、つまりポスト・モダンという主観主義・レトリック主義的な方向へ進んでいった。

④ 超ひも理論
粒子の根源の姿を、点ではなく長さを持った「ひも」だと考える物理学理論。超ひも理論には複数の理論が存在するが、それらをまとめたものが「M理論」と呼ばれている。

に、観測技術が向上するに従って「究極元素」の中から新たな「中身」が飛び出してくるのです。さらにさらにさらに陽子や中性子といった素粒子もまた、「クォーク」[5]によって作られていることがわかりました。もう何が何だか。ここまで来ると、クォークが最小の究極元素かどうかも怪しく思えてきます。キリがありません。どうやら、「究極元素」を探す限り、探求は終わらなさそうです。ドグラ・マグラ[6]です。

そこで物理学者は、発想を転換しました。物質の最小単位が「粒子」つまり粒だと考えること自体、間違っていた！　物質の最小単位は実は「ひも」（ストリングス）だーっ！　と言い出したのです。何のことかと僕に言われてもよくわからないので、聞かないでください。この「ひも」は、粒子のような不動の固体なのではなく、「振動」しているのです。ですから、この振動の具合によって属性が変わるわけです。ひもが、振動によって「ヒモ」（モテ）になったり「悲喪」（喪男）になったりするんです。いやそれは違うか。

物理学の分野では「光は波か、それとも粒子か」という難問が昔からあったわけですが、光だけでなくすべての物質について「ぱっと見は粒子に見えるけど、実はひもの振動なんじゃないか」という発想が出てきたわけですね。

一九九五年、エドワード・ウィッテン[7]はいくつかに分裂していた超ひも理論を一つにまとめあげ、「M理論」という理論を考えました。このM理論によると、なんと！　宇宙は「一一次元」なんだそうです。一一次元ですよ。四次元だってわからないのに、一一次元なんて言われても。現在我々人間が暮らしている世界は三次元空間と一次元時間を足して合計四次元時空ですが、それでは残りの七次元はどこへ行ってしまったのか？　見えない七次元は、すぐ近くにあるけれど、使わないタペストリーのよ

⑤ クォーク
極小の素粒子。ダウン・アップ・ストレンジ・チャーム・ボトム・トップの六種類が存在する。クォークが発見されるまで、素粒子は数百種類ものハドロンであると考えられていた。だが物理学者はエレガントな世界観を好むので「物質の根源である素粒子がそれほど膨大な種類存在するはずがない」ということになり、ハドロンを構成するクォークが発見された。レプトンという素粒子もある。電子やニュートリノはレプトンの一種。

⑥ 「ドグラ・マグラ」
一九三五年。作者は夢野久作。「脳」をテーマとした長編怪奇探偵小説。あらすじは要約不能。というか、読んだはずなのにあらすじが思い出せない。

⑦ エドワード・ウィッテン
一九九五年にM理論を提唱したアメリカの物理学者。一九五一年生まれ。大学では歴史学や経済学を専攻し、物理学は「趣味で」やっていたらしい。て、天才だ……。超ひも理論は五種類ものモデルが登場してしまったために一時すたれていたが、ウィッテンがその全部をM理論に統合したことで再び脚光を浴びるようになった。

うに巻き上げられてしまっているのだそうです。って、どこへっ？　すいません、ツムラのゴシュユトウ[*8]を飲んでいいですか？　頭が割れるように痛いです。

しかも、我々の「三次元＋時間」宇宙は、実は高次元時空を漂う「一枚の膜」だというんです。膜、つまり二次元です。

そ、そんなバカな？

我々が「三次元」だと思い込んでいた世界そのものが、実はただの「二次元」だったというのか？　しかも世界のどこかには「見えない次元」が存在するというのです！

これこそ、プラトンが「イデア界」と呼んでいた世界なのではないでしょうか？

イデア界＝二次元界は、人間の心の中のみの現象ではなく、この世界の外に、本当に実在する？

な、なんだってー!?

宇宙物理学は、とうとう、「イデア界はやっぱり外に実在する」というゴリゴリの旧プラトン主義を復活させたのです。

宇宙はビッグバン[*9]で誕生したというのが物理学界の定説ですが、そのビッグバンの原因は未だにわかりません。しかしM理論なら説明できます。膜のように漂っている我々の宇宙が、隣の宇宙の膜とぶつかったのです。ぶつかったショックでビッグバンが起きたのです。

マジかよ！

このビッグバンによる膨張は、いずれ終わります。そしてその時、宇宙は死に絶える、と思われていました。

⑧　ゴシュユトウ
呉茱萸湯。漢方薬。頭痛を抑える効果がある。花粉症で偏頭痛持ちの筆者がお医者さんでよく処方される薬。

⑨　ビッグバン
現在の宇宙物理学では、宇宙は一〇〇億年くらい前にビッグバンと呼ばれる大爆発によって始まり、以後膨張し続けていると考えられている。誕生当時の小さな宇宙は高密度・高温で、様々な素粒子が詰まっていた。しかし膨張するとともに低密度・低温となり、元素が合成され、星が形成されるようになっていったという。また現在では四種類に分かれている力も、当初は一つの力に統一されていた。ギリシア以来、哲学は「万物の根源」と「宇宙の起源」を言語で表現しようと努力してきたのだが、それらの仕事は現在では物理学が担っているわけである。

ところが膨張を終えた宇宙の膜は、再び、隣の膜とぶつかる。そして、またビッグバンが。こうして死んだ宇宙はまたもや再生され、振り出しに戻るというのです！
これは、ニーチェの「永劫回帰」！　インド哲学で言うところの「輪廻」ではないですか。
残念ながらこのM理論、理屈はエレガントですが証明されていません。今のところ、どうやって証明するのかもよくわかりません。
この他、実は我々人間が観測できるエネルギーは、宇宙全体のたった四％くらいにしかすぎないということもわかってきました。残り九六％は「暗黒物質」とか「ダークエネルギー」[10]と呼ばれていて、現在のところその正体は謎です。だいたいいまの技術では直接観測できないんですから。
どうも、エーテル[11]が復活する日も遠くなさそうです。
このように、哲学における「世界とは何か」という命題は、現在では宇宙物理学や素粒子物理学が担っているのです。M理論のように証明できていない理論がなぜ力を持つのかといえば、「数学的に整合していれば科学理論として正しい可能性が高い」からです。物理学とは、言語ではなく数学によって世界を説明する学問です。最初に数学的にエレガントな理論[12]が提出され、それを証明するために実証観測が行われる。それが物理学という新たな哲学なのです。

三次元も脳内現象である

「人間とは何か」「意識とは何か」というもう一つの哲学的命題については、哲学から心理学を経て脳科学へと主役の座が移り変わっていきました。フロイトは最終的に

⑩　「暗黒物質」とか「ダークエネルギー」
近年の宇宙の観測結果から、計算上は宇宙に存在するはずの質量のうち九〇％以上が観測されず、「足りない」ということがわかってきた。この足りない未知の質量が「暗黒物質」（ダークマターおよびダークエネルギーと呼んでいる）。その正体はまだ確定していない。いずれにせよ、現在のところ、我々人間は世界の「すべて」を認識できてはいない。それどころか、ほとんど何も見えていないのが実状なのだ。人間が認識できる世界は、宇宙全体の四％程度にすぎないのだ。残り九六％は暗黒物質なのである。

⑪　エーテル
一九世紀の物理学界で、宇宙にあまねく存在すると考えられていた仮想物質。マイケルソン－モーリーの実験とアインシュタインの相対性理論により一九世紀的な意味でのエーテルは否定されたが、最近暗黒物質やダークエネルギーが存在するであろうということがわかってきたために再び宇宙の真空にエーテルが蘇ろうとしている、かもしれない。

⑫　数学的にエレガントな理論
物理学者は、世界はエレガントな数式によって単純に表現することができると考える傾向が強い。故に宇宙に四種類存在する「力」（重力・電磁力・強い力・弱い力）は必ず一つに統一されなければならず、アインシュタインも後半生では力の統一理論を構築しようとしていた。

は精神分析を科学にしようとしていたので、当然といえば当然の結果です。最近では、脳科学者の喪木、い、いや、茂木健一郎先生が[*13]「クオリア理論」で注目されています。

クオリア理論をかいつまんで説明しますと、まず前提として「人間の精神は、脳内現象である」という第一の決まり事があります。次に、「世界もまた、脳内現象である」という第二の決まり事があります。すでにカントの項（第三章2節）で見てきたように、人間が「世界」だと認識・知覚しているものも、実は人間の「脳」内で組み立てられているイメージの世界なのだ、というわけです。

ここでまた哲学を知らない人は「現実は現実だろう」と言い出すんですが、何度も繰り返すように「物自体の世界」といわゆる「世界」（三次元）とは違うのです！　**三次元とは、物自体の世界をベースに、人間の脳が組み立てるもの**なのです。そしてこの三次元は「言語」などを介して「共同幻想」として大勢の人間によってシェアされています。インターネットの世界みたいなものですね。インターネットの世界とは、ですから、デジタルで再現された「もう一つの三次元世界」とも言えるわけです。

さて、本題のクオリアですが、クオリアには「感覚的クオリア」と「志向的クオリア」があります。

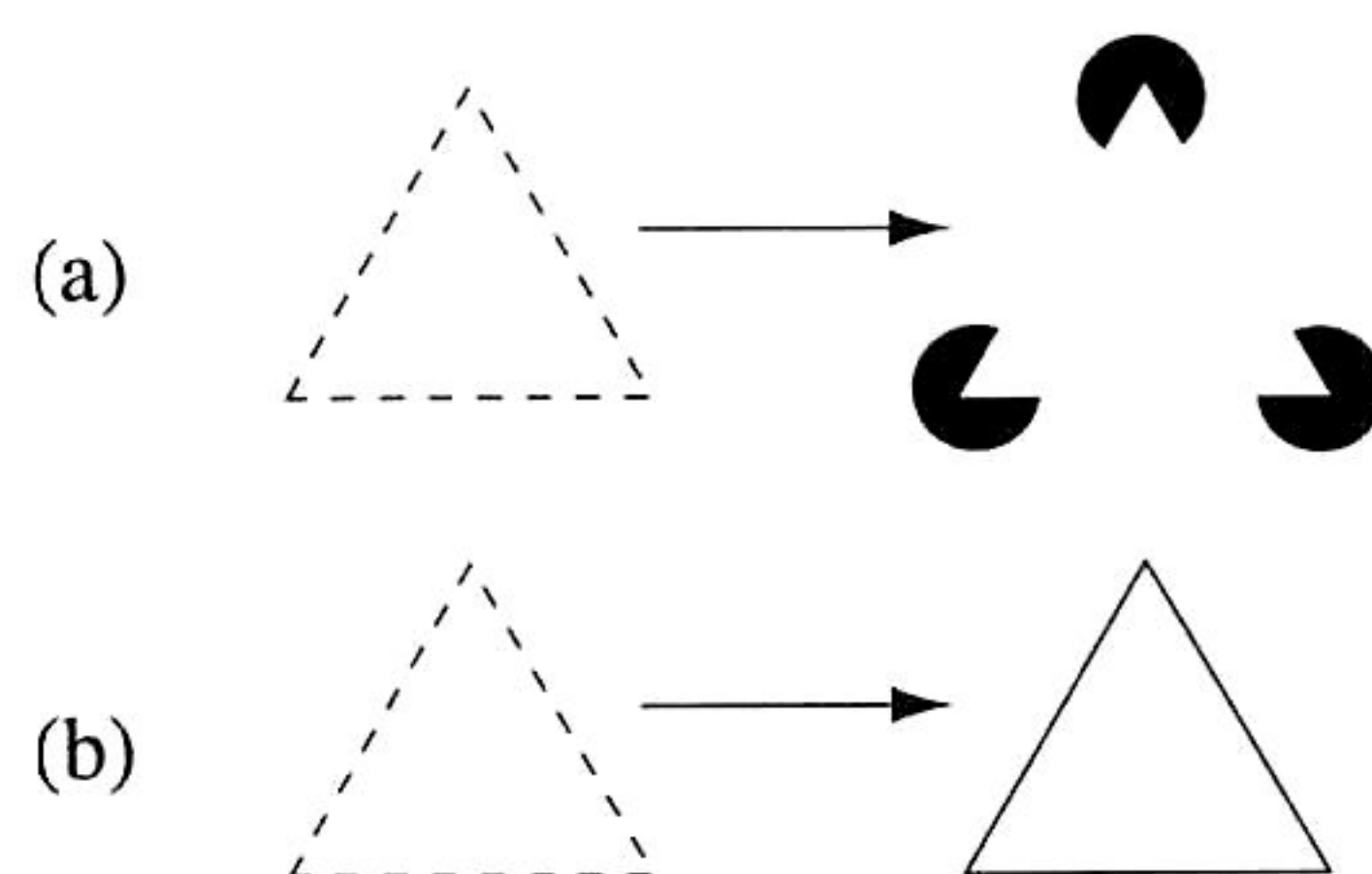
感覚的クオリアとは、例えば「赤い」といった感覚的なイメージです。

志向的クオリアとは「薔薇だ」といった言語的・シンボル的なものです。

人間は「赤い薔薇」を見ると、まず、「赤い」という感覚的クオリアを想起します。その次に、「これは薔薇だ」という志向的クオリアがかぶせられて、最終的に「これは赤い薔薇だ」という認識を生み出すというのです。

⑬　茂木健一郎
脳科学者。一九六二年生まれ。「クオリア」をキーワードとして脳と心の二元論問題を語る。ソニーの人なので何となくオサレ系のイメージがあるが、その著書には喪な話が多い。クオリアは言語では言い表すことができないので、ここでもやはり哲学は役に立たない。だがしかし、脳科学もまだクオリアを説明できないのである。代表作『脳とクオリア』『脳と仮想』。

(a)

(b)

志向的クオリア（左）と感覚的クオリア（右）
茂木健一郎『心を生みだす脳のシステム』ＮＨＫブックス、2001年、Ｐ61

人間の意識が二種類のクオリアから成立しているということは、人間が感覚的クオリアとして認知した世界に対して志向的クオリアをかぶせることで「世界」を脳内に再構築しているということにほかなりません。「三角形」という志向的クオリアを、人間は、様々な感覚的クオリアから読み取ることができます。図の（ｂ）のように実際に三角形がある場合だけでなく、（ａ）のように実際には三角形がない場合でも、人間は三角形を知覚することができます。これは、正確な感覚的クオリアが入力されずとも、人間には「三角形」という志向的クオリアを勝手に認知する能力があるということです。

アレ？　もしかして我々は「三角形」のイデアを見てしまっているのではないでしょうか？

話はここで、第一章におけるプラトンのイデア論に逆戻りするのです。

「リアリティ（現実性）」とは何か、という問題についても、脳科学の分野では「**リアリティは脳内で生まれてくる**」ということがわかっています。ペンフィールド[*14]は人間の脳みそに電極を突っ込んでビリビリやるという恐ろしい実験を行いました。一歩間違えたらマッドサイエンティストですが、元々はてんかん治療のために行ったのだそうです。ところが、実験中にペンフィールド自身も予期していない事態が起こりました。側頭葉のある場所に電極をさして電気でビリビリやると、なんと、「記憶」がフラッシュバックしたというのです。その上、刺激する部位によって蘇る記憶が異なる

⑭ ペンフィールド
一八九一年〜一九七六年。ワイルダー・ペンフィールド。医師。一九三三年、てんかん治療の際に脳を電気刺激するとリアルな記憶が再現されることを発見した。また記憶だけでなく脳の領域と身体の各部位の対応関係をも調べて脳の地図を作った。これが「ペンフィールドのホムンクルス」と呼ばれる地図。ゴリゴリの脳一元論者に思われているが、晩年は脳が死んでも心はもしかしたら外部のエネルギーによって存在し続けるかもしれないと言い出して心脳二元論に踏み込んでいった。代表作『脳と心の正体』。

らしいのです。しかもこのフラッシュバックした記憶は、まるで現実そのもののようにリアルだったというのです。茂木先生はここから、**リアルさの起源を「脳内のニューロン活動」だと結論**します。人間が「リアル」だと感じている「現実」は、実は「脳内現象」なのだ、と。

すなわち、三次元もまた、脳内現象である。

ただし脳科学はまだ始まったばかりの分野で、今のところ脳の神秘についてはほとんど何もわかっていない状態だそうです。脳はあまりにも構造が複雑なので、そう簡単には解析できないのです。もちろん生体実験をするわけにもいきませんし、たぶん我々が生きている間に脳の全貌が明らかになって精神の秘密が解けることはないのではないかと思われます。ああ、中途半端な時代に生まれてしまったなぁ。

恋愛資本主義の不毛

いずれにしても「**三次元こそが唯一の現実であり、二次元は価値のない妄想であり非現実である」というモテの世界観は全くもって間違い**なのです。それどころか三次元だけで決着をつけようとするモテの世界観こそが人類を破滅へ追いやってきた誤謬なのです。このことは哲学から科学へと連なる喪男たちの足跡を辿った本書をお読みいただいたことでご理解いただけたでしょう。まだわからない人は養老先生の『バカの壁』でも読んでください。

さて、宇宙物理学も脳科学も、まだまだ始まったばかりの分野です。茂木先生は脳科学を「錬心術」だと言っています。まだ残念ながら脳科学は中世の錬金術レベルで、科学と呼べるレベルには届いていないという意味です。ということは、意味論や

起源論についての答えは、どうやら僕たちが生きている間には出てこなさそうです。宇宙物理学や脳科学が我々の自我を安定させてくれる装置として本格的に機能する日は、まだ遠い未来だということです。今のところ「将来的に装置として機能してくれるだろう」という期待が持たれているだけなのです。

しかし、それでも喪男の今現在の苦悩は、なんとかして癒されなければなりません。

「俺が死んだ遠い未来に、喪男は救われる」

と考えるだけでは済まないのです。

なぜなら、ゆるい無神論者の我々日本人は輪廻や転生の世界観では生きておらず(たまにそういう人もいますが)、死んだらそれまでよと思っているからです。

僕だってそうです。

ということは、生きている間に救われなければ意味がないのです。

いますぐ俺が救われたいのです。この「モテ」に支配され、恋愛資本主義から弾圧され、愛の消えた街を彷徨っているこの俺が。

さりとて、「援助交際している少女たちはですね～」とか理解のあるインテリ知識人のフリをして小便臭いガキ娘に媚(こ)びてモテたいとも思えないのです。そんなことでは性欲は満たせても魂は救われないということは、喪男ならすでにご存知のはず。もう繰り返しませんが喪男にとって「モテ」は「救い」でもないし「癒し」でもないのです。そんなことは、お釈迦様の昔からわかりきったことなのです！　諸行は無常なのです。

そもそも恋愛の寿命は二～三年です。恋愛している間にはドーパミン[15]など様々な脳

⑮ ドーパミン
神経伝達物質の一つ。快感を引き起こしたり、意欲を向上させたりする。過剰分泌されると統合失調症の症状（妄想とか幻覚とか）が出る。また薬物依存などの中毒症状は、脳内現象として見ればドーパミン中毒である。逆にパーキンソン病ではドーパミンの分泌量が不足するという。

⑯ ヘレン・フィッシャー
人類学者。なぜか恋愛と脳の関係を研究し続けており、恋愛している人間の脳をスキャンして調査した。その結果、恋愛初期つまりロマンティック恋愛状態にある人間の脳内では大量のドーパミンが分泌されていることが明らかとなった。恋愛とはドーパミン中毒だったのである。しかし一人の恋人に対してドーパミンを分泌できる期間は短いこともわかり、恋愛になぜ寿命があるのかという謎もおおむね解けてきた。代表作『愛はなぜ終わるのか』『人はなぜ恋に落ちるのか?』。

⑰ ノルエピネフリン
神経伝達物質の一つ。副腎髄質ホルモン。ノルアドレナリンとも。ストレスホルモンの一種。交感神経を興奮させ、体温を上昇させたり心拍数を増加させる。元々は不安や恐怖を感じるような危機的状況に対応するために分泌されるものらしいが、恋愛によっても分泌される。恋愛は恐ろしい、恋愛はおっかねえ。分泌量が減ると鬱になる。神経過敏な性格は、長期間にわたる大量なストレスによりノルアドレナリンへの感受性が強化されたために形成されると考えら

内ホルモンが出ますが、相手に愛着を持ってしまうと愛着ホルモンだけが分泌されるようになり、ドーパミンのように高揚感をもたらすホルモンは出なくなります。

ヘレン・フィッシャー[16]の『人はなぜ恋に落ちるのか？』によると、恋愛状態になると脳からは快楽ホルモンであるドーパミンとノルエピネフリン[17]が分泌されます。ドーパミンが分泌されると男性ホルモンであるテストステロン[18]が増えるために、性欲も上昇します。恋愛と性欲が結びついている理由は、脳にあるわけです。また、恋愛すると他のことが目に入らなくなり、気分が高揚しますよね。人間が恋愛中毒に陥って恋愛をやめられなくなってしまうのは、ドーパミン中毒に陥るからなのです。フィッシャーはこの状態を「ラバーズ・ハイ」と呼んでいます。

「**恋愛は一種の中毒なのだろうか？　私はそうだと考えている**」とフィッシャーは言います。恋愛すると食欲がなくなるのもドーパミンのせいだし、不眠になったり心臓がばくばくしたりするのも躁状態になるのも泣き虫になるのも、すべてドーパミンが原因なのです。恋愛とは、つまり「脳内現象」なのです（すべての現実が脳内現象なのですから、これは今さら言うまでもないことですが）。

であれば、二次元での恋愛と三次元の恋愛には、「脳内においては」何らの差異もないわけです。

まさしく、色即是空。

ただし恋愛には寿命があり、いずれは「愛着」という段階へ移行します。[19]ドーパミンやノルエピネフリンが抑えられ、オキシトシンとバソプレシンという愛着ホルモンの分泌が増えます。この段階では、激しい恋愛感情は終わりを告げ、まったりとした癒しの関係が作られていくわけです。そしてこの関係は長続きするのです。こういう

れている。ノルアドレナリン感受性の強い人間は、恋愛対象に対しても過剰な恐怖を抱くため、おおむね恋愛に不向きな喪男となる。キルケゴールとか。

⑱　テストステロン
男性ホルモンの一種。性欲や攻撃性など、男性的な（本書でいうところのＤＱＮ的な）行動を引き起こす原因。セックスと戦争はテストステロンから発生する同根の行動なのである。男性の脳は胎生期にアンドロゲン・シャワーと呼ばれるテストステロン分泌によって形成される。また思春期になると睾丸から大量分泌されるので、たいていの青年男子はＤＱＮ化する。しかし三〇歳を過ぎると分泌量が減少していくので落ち着いていく。テストステロンの分泌量は個人差が大きく、いつまでもテストステロン過剰な男もいれば、すぐに涸れる男もいる。また脳が「癒し」状態になるとテストステロンは減少するので、長らく連れ添った「連れ」には性欲を感じなくなるわけだ。テストステロンは男性に多く、女性ではあまり分泌されない。故にテストステロン過剰なＤＱＮ男が女にモテるのかもしれないのだった。

⑲　オキシトシンとバソプレシン
いずれも神経伝達物質の一種。親子関係などのような家族関係では、信用ホルモンとも呼ばれているオキシトシンが分泌される。家族愛とはオキシトシンなのである。恋愛と家族愛は、異なる脳内現象なのだ。バソプレシンも同様に働く。

関係のまま結婚して暮らしていけば「家族愛」が生まれるわけです。
ところが「恋愛資本主義」は、この「愛着」つまり家族愛というものを軽視します。**「消費」のために一生涯にわたって恋愛させ続けないといけないからです。**恋愛資本主義とはドーパミン至上主義、快楽至上主義なのです。そこで、「不倫」とか「援助交際」とか「老いらくの恋」とか「熟年離婚」とか「やらハタ」という消費キーワードが続々と発明されます。僕は、ドイツやイタリアをはじめとする恋愛資本主義体制の先進国で出生率がのきなみ低下した原因は（出生率が低下した国は日本だけではありません。従ってオタクの増加が原因ではありません）、恋愛資本主義が人々を「永久恋愛システム」に放り込んで、いつまでも恋愛に駆り立て続けているからだと思います。

恋愛が家族を破壊したのです。
恋愛は必ず醒めるものです。これは生物学的にそう決まっているのです。短い恋愛の炎の後には、倦怠が続きます。
元々、西洋における恋愛とは社会と対立するものでした。トリスタンとイゾルデは不倫ですし、ランスロットとグィネヴィア[20]も不倫でした。ロミオとジュリエット[21]も悲恋です。恋愛とは元来、ドーパミン過剰による社会不適応であり、破滅への「暴走」だったわけです。そんな危ういものを社会の根幹に据えてしまった現代文明がいかに迷走しているかは、ごらんの通りなのであります。
それ以前に僕は見た目がブサイクなのでモテません。ええ、愛されませんとも。人の運命は生まれながらに決まるのです。整形したくても失敗が怖くてできません。お金ありませんし、保険も利きません。もし**イケメンに化けても**、**恋愛はすぐ終わって**

⑳「ランスロットとグィネヴィア」
中世の宮廷恋愛物語。アーサー王妃グィネヴィアと、アーサー王に忠誠を尽くす騎士ランスロットが不倫恋愛に突入。ランスロットはヨーロッパ最高の騎士と誉れ高い勇者だったのに、グィネヴィアに罵倒されて発狂したり、不倫を咎められて聖杯探索に失敗したりと後半生は散散。最後は不倫がバレてアーサー王と闘うことになってしまう。で、円卓の騎士はこの内ゲバでほとんど全滅。アーサー王も戦死してしまう。ランスロットはひきこもって死んでいく。

しまうはかないものです。そんなことは恋愛中毒イケメンの破滅を描いた『源氏物語』の昔からわかりきったことではありませんか。若い頃はモテモテだった光源氏も、老いてからは女の子に相手にされなくなってしまいました。その上、浮気しすぎて大切な紫上（むらさきのうえ）に見放され先立たれてしまう始末。死なれてから後悔しても、もう遅い。なぜ源氏は紫上と添い遂げなかったんだ、バカ、バカバカ！　ああ諸行無常。

人は三次元と二次元を生きる二元論的生物

しかし、それでも自我を安定させる装置は必要だ！
そこで再び見直されるようになったのが「二次元」なのです。
二次元とは、脳内「だけ」の世界です。
三次元も脳内世界ですが、一応、感覚クオリアを介して外界と繋がっています。
しかし二次元は、そうではありません。純粋な脳内世界なのです。
「リアル」という感覚がニューロンの活動にすぎないのなら、二次元での強烈な体験を「妄想」と片付けることはできないということになります。人間の体験において問題なのは、三次元なのか二次元なのかということではなく、「リアル」かどうか、という一点だけなのですから。三次元のほうが「リアル」を感じやすいのは、外界を介しているからです。つまり**入力される情報量が多いから、リアルを感じやすい。ただそれだけのことです。**

二次元にリアルを感じるのは、一見困難に思われます。そこで利用されてきたものが「芸術」です。芸術と言うとなんか高尚そうですが、つまりは「二次元作品」です。例えば音楽とか、小説とか、マンガとか、ゲームといったものは、全部、作り事

㉑「ロミオとジュリエット」
一五九五年。シェークスピアの戯曲。対立する敵の一族同士でありながら、ロミオとジュリエットは一目会うなり情熱的な恋愛に突入。もちろん二人は引き裂かれることになり、ジュリエットは仮死の毒を飲んでロミオとともに駆け落ちする計画を実行。だが連絡ミスでロミオはジュリエットが自殺したと誤解して自殺。目を覚ましたジュリエットもロミオの亡骸の横で自殺。日本の心中モノ同様、ヨーロッパでも恋愛は「死」と直結した甘美な破滅の道だったのだ。

ですから純然たる「二次元」です。でも、感動的な音楽を聴くと、じーんとして涙が出ますよね。美しい小説を読んでも、やはりがーんとショックを受けてボロボロと涙がこぼれたりしますよね。これが「二次元を体験する」ということです。例えば、ドストエフスキーの小説のようなドラマティックな体験、三次元じゃまず不可能です。ゲーム『ＡＩＲ』のような体験、三次元じゃ絶対無理です。そういうことです。

そのものずばり『脳と仮想』というタイトルの本の中で茂木健一郎先生は、

「私たちの精神は、頭蓋骨の中の『いま、ここ』の局所的因果性の世界と、『いま、ここ』に限定されない仮想の世界にまたがって存在する。私たちの精神は、本来的に二重国籍者なのである」

「私たちは、意識の中に現れる『現実の写し』のクオリアを、『現実』と呼び、それを『現実』と扱うことで、決して現実自体は知り得ないこの世界の中を生き延びていくのである」

と述べています。もちろん「いま、ここ」とは「三次元」（これまた脳内現象であって、真の「現実」ではありません）で、「仮想の世界」とは「二次元」です。

そしてさらにこう言います。

「仮想によって支えられる、魂の自由があって、はじめて私たちは過酷な現実に向かい合うことができるのである。それが、意識を持ってしまった人間の本性というものなのである」

これは僕が『電波男』で主張していたこととまったく同じだったりします。どうですか皆さん！　**僕が言うと「電波でしょ」で片付ける人も、有名脳科学者の茂木先生が言えば「そうかもしれない」**と思っちゃったりするんじゃないでしょうか。両者の

本の売れ行きを比較すれば、明らかにわかることですね……。「オタク」が言ったら電波とか負け犬の遠吠えで、「脳科学者」が言ったら真理かもしれないと思うわけですよ、ええ。

むきー！

……ともかく、「三次元こそ唯一の現実」という一元論の時代は、少なくとも時代の先端を走っている喪男哲学の系譜の人々にとっては、もう大昔に終わっているのです。人間は「三次元」と「二次元」を生きる二元論的生物であり、そして、三次元もまた脳内現象にすぎない。**三次元という仮想現実を共有することで、かろうじて社会生活を営んでいる。真の現実を人間は知り得ない。**これが、喪男哲学の辿りついた結論なのです。

2　日本で「仮想」＝オタク文化が隆盛になった理由とその必然性

戦争に負けて三次元の虚しさを知る

しかし戦後日本において、マンガとかアニメとかゲームといった二次元文化が一挙に花開いたのは、なぜでしょう？

ずばり、戦争に負けたからです。それも、ただ負けたのではありません。もう二度とアメリカに逆らえなくなるぐらい、徹底的にボコボコにされました。

原爆[*22]なんて普通落としませんよ。戦争して原爆を落とされた国は、いまでも日本だけなのです。あんな黒魔術、ありえませんよ。現代ではいろんなゲームやアニメにおつかない黒魔術が出てきますが、原爆に比べればずっとマシです。もう、何もかも、徹底的に日本という国の持っていた「三次元」を破壊されたわけです。そしてアメリカに占領されると同時に、「鬼畜米英」の世界観は消え去り、「ギブミーチョコレート」と「民主主義」という新たな「三次元」を与えられたわけです。天皇制は残りましたが、かつての大日本帝国は事実上解体されちゃったわけです。それも、たった一日ですべてが崩壊したのです。「世界」が一日で書き換えられてしまった。「三次元」が「永遠不変の確固たる現実」ではないということを、ですから、敗戦を体験した世代の人たちはよく知っていたわけですね。岸田秀先生もそうですし、手塚治虫先生もそうだった。

そこから「すべては幻想である」という唯幻論は生まれたのだし、手塚マンガもまた生まれたわけなんです。

手塚マンガの辿った道

手塚治虫が「マンガ」を職業に選び、一生涯マンガを描き続けたのは、日本人が三次元によってまったく癒されることなく、むしろ大勢の人間がボロボロになってしまったという巨大なトラウマを埋め合わせるための「再生」のためだったと言ってもいいでしょう。なにしろ、若い頃の手塚先生は空襲に遭って、目の前で人が文字通り虫ケラのように死んでいったのを見ています。「三次元」がいかに虚しく、人を救わないものであるか。その上先生は、（たぶん）モテませんでした。奥さんとはお見合い

㉒ 原爆
原子爆弾。ウランやプルトニウムといった放射性元素を核分裂させて巨大なエネルギーを取り出す爆弾。通常の火薬兵器が原子からエネルギーを取り出すのに対して、原子爆弾は核子からエネルギーを取り出すのでそのエネルギー量は桁違いに大きなものとなる。アメリカのマンハッタン計画によって物理学者オッペンハイマーたちが開発した。

ですし、生涯一度の大恋愛もしなかったと自ら豪語しておられます。個人的にも喪男だった上に、時代そのものが「日本国民総喪男状態」という有様だったわけです。

しかし、マンガなら？　二次元なら？

紙とペンと「妄想」さえあれば、いかなる世界をも構築することができるのです。

手塚マンガが日本マンガのプロトタイプになりえたのは、マンガの世界に映画や小説のような「物語性」を導入したからだと言われています。手塚は、「リアル」なマンガを描いた最初の人なんですね。初期作品の段階で、すでに主人公が丸焼けになって死んでしまったりするんです。それもディズニー系の丸っこいぷに絵で、です。当時の子供たちにとっては凄まじいトラウママンガだったはずです。『罪と罰』[23]や『ファウスト』を早々とマンガ化したのも手塚です。どうしてそんなことをしなければならなかったのでしょう？　手塚はマンガという二次元の世界の「力」を信じていたのです。

手塚マンガは「萌え」と「喪」の二面性を備えています。絵柄は丸っこいぷにぷにした絵で、いまのアキバ系ロリ絵の元祖ともいうべきタッチなのですが、そういうキャラが燃えたり死んだり食べられたりするわけです。残酷なんです。喪です。初期の代表作『鉄腕アトム』[24]もそうです。アトムが無惨に壊される姿に妙な興奮を覚えた、と夏目房之介[25]氏も言っています。

手塚は萌えキャラを描くことで、自らの、そして読者の内面の喪性を癒そうとする。だがその一方で、最終的には「リアル」を追求するために萌えキャラを破壊してしまう作家だったのです。アニメ版アトムの最終回は、アトムが太陽に「特攻」していくシーンで終わっています。「特攻」という悲劇的な結末の陰に、戦争末期に起き

㉓「罪と罰」
ドストエフスキー作。貧乏な喪男ラスコーリニコフが、独自の超人思想に基づいて金貸しの悪いばあさんを殺害する（もうちょっと大きな計画は思いつかなかったのか）。しかし根が小心者なので以後は罪の意識にさいなまれて苦しみ続けることに。そんなラスコーリニコフの喪の魂を救ったのは、家族のために己の身体を売り続ける献身的な少女売春婦ソーニャの愛であった。ソーニャに萌えたラスコーリニコフは改心し、自首してシベリアへ送られていく……。この感動の物語がネガティブ方向に反転した映画が『タクシードライバー』。

㉔「鉄腕アトム」
一九五二年～六八年。手塚治虫のマンガ。原子力で動く未来のロボット・アトムの活躍を描く。二〇〇三年四月七日にアトムは誕生したことになっているのだが、残念ながら未だに三次元世界ではアトムは開発されていない。しかし幼少期に『鉄腕アトム』にハマっていた喪男科学者たちが今、続々とロボット工学の分野に参戦しているのである。浦沢直樹が『鉄腕アトム』をリメイクしたマンガ『ＰＬＵＴＯ』を描いている。

㉕　夏目房之介
マンガ評論家。一九五〇年生まれ。大の手塚ファン。夏目漱石の孫。代表作『手塚治虫はどこにいる』『消えた魔球』『マンガの深読み、大人読み』。

た特攻玉砕の記憶が隠れていることは間違いないでしょう。

　後期の手塚は、一時スランプに陥ります。より「リアル」な表現手段である「劇画」が勃興したからです。**劇画は絵柄も「喪」で話も「喪」でした。何もかもが「喪」だったのです。**手塚の萌えな絵柄は子供っぽいと言われました。

　手塚は仕方なく劇画の手法を取り入れて自作から萌えキャラを消し、喪男ばかりを出すようになります。『アラバスター』[*26]や『ザ・クレーター』[*27]、初期の『ブラックジャック』[*28]といった作品はキモメンのオンパレードです。『火の鳥』[*29]もまた、喪男の陰惨な地獄を描いた物語でした。

　しかしまあ売れないわけです。救いがないんです。「リアル」だけを追求した二次元作品は、売れません。「癒し」にならないわけですから。もちろん「リアル」さが受け入れられる場合もありますが、それだけでは長続きしません。実際問題、劇画もまた、最終的にはマンガと融合していきました。ただ残酷なだけの劇画は廃れていき、『ゴルゴ13』[*30]や『あしたのジョー』[*31]のようなキャラクター性やドラマ性を持った作品が生き残りました。そういう意味で、劇画の大家・白土三平もまた、『カムイ伝』をあまりにも「リアル」に描きすぎた結果、いったん燃え尽きてしまったと言えます。

　『火の鳥』の喪男作品性についてはまた別の機会にゆっくりと説明したいと思いますが、ここではとりあえず「喪男は永遠にモテず、故に癒されない」という恐ろしい喪男哲学の最重要問題を正面きって「マンガ」という形で表現した傑作だと言っておきます。

　しかし『ブラックジャック』の連載途中に、手塚は突如として蘇ります。居直って

㉖「アラバスター」
一九七〇年～七一年。手塚治虫作。『週刊少年チャンピオン』で連載された。主人公のアラバスターは恋人に捨てられて身を持ち崩し、「美しいものが憎い！」と鬼畜喪男の道を突き進むことに。住んでいる家は「奇顔城」。奇顔城って、手塚先生……。ちなみに『アラバスター』は単行本版では元はフツーの黒人だったが途中で半透明の怪人に変身してしまったという設定だが、初出のチャンピオン版では元々「顔面の右半分に黒い痣のある日本人と黒人のハーフ」という激ヤバな設定だった。この「顔面が白黒二色のツートンカラー」というキモメン設定は、後に『ブラックジャック』として復活する。ブラックジャックは「美しいものが憎いっ！」と世界中の美を破壊しようとしていた喪男アラバスターの親戚だったのだ。同じキャラでありながらやはり「美しいものが憎い！」では売れず、「医者」だから売れたのだろうか。

㉗「ザ・クレーター」
一九六九年～七〇年。手塚治虫作。短編の連作だが、どれもこれも喪男話。マネキン人形に恋をして、いつも連れ歩いている喪男の話とか。

㉘「ブラックジャック」
連載は一九七三年～七八年。手塚治虫作。『週刊少年チャンピオン』連載。ピノコが登場してから伝説の「ヒューマンコミックス」となるが、最初は『アラバスター』と同じ顔のキモメン医師が奇怪な手術を繰り返す「恐怖コミックス」だった。ブラックジャックは奇形嚢腫（のうしゅ）を手製の人形の中に詰め込んで命を与

作中に「ピノコ」[32]という萌えキャラを投入したのです。こうして**「ブラックジャック」（喪）と「ピノコ」（萌え）の錬金術的融合が果たされ、手塚治虫は奇跡的にマンガの最前線に復活した**のです。以後、手塚マンガは劇画的な「リアル」さを表現すると同時に、ピノコや和登サン[33]といった萌えキャラもわらわら登場するという希有な作品世界を作り続けました。

その最高峰が遺作『ネオ・ファウスト』です。原作『ファウスト』についてはすでに説明しましたが、手塚は「生物科学」という新たな「自我の安定装置」を『ファウスト』と融合させ、「喪男がバイオテクノロジーによって理想の女性を作り、救われようとする」物語を描こうとしたのです。ただし、ゲーテの原作と違って結末では主人公は救われない予定だったそうです。やっぱり喪ですね。手塚は『火の鳥』にもクローン人間を登場させるほどクローンに並々ならぬ興味を抱いていましたが、『ネオ・ファウスト』においてとうとう「理想の伴侶をクローン技術で作る」という領域に足を踏み込み、科学に潜んだ喪男たちの欲望と祈りを「マンガ」という形式で表出したわけです。

哲学は喪男の苦悩から生まれました。哲学の落とし子である科学もまた然り。手塚作品は常に「未来の科学」という希望に救いと挫折を幻視していました。「未来のイヴ」を夢見たリラダンが悲惨な最期を遂げたのと同じに、手塚マンガは「未来のイヴ」による救済を最終的には否定します。なぜなら、手塚先生がご存命の間には「未来のイヴ」は完成しそうにもなかったからです。

それに、やはり敗戦体験が大きかったのではないでしょうか。「俺さえ救われればそれで良い」という感覚を、どうしても持てなかったんでしょう。ブラックジャック

えた「ピノコ」に癒されていたが、過去に恋愛沙汰がなかったわけではない。しかし初恋の女性・恵さんは子宮ガン摘出手術の際に何を思ったか女を捨てて男に変身してしまい、ブラックジャックの元を去ってしまったのだった。なのでブラックジャックは生涯童貞を貫くことになった。ピノコには大人の身体を与えないし、患者からのアプローチは全部護身。手塚先生……！

㉙「火の鳥」
手塚治虫の未完の大作。大和朝廷の黎明期を描く「黎明編」から遠い未来、人類が滅亡する世界を描いた「未来編」まで、過去から未来が円環世界として描きこまれ、その中で作者の分身である喪男「猿田」が永遠にキモメンなので女にモテないという地獄図絵が繰り返されるのだった。まさしく、喪男永劫回帰。徐々に未来と過去の時間が接近し、完結編では現代が描かれると言われていた。

㉚「ゴルゴ13」
一九六八年から『ビッグコミック』で連載中。劇画。さいとう・たかを作品。世界最強のスナイパー、ゴルゴ13（デューク東郷）の活躍を描く。ゴルゴの正体は未だに謎のまま。

㉛「あしたのジョー」
一九六八年～七三年。梶原一騎（高森朝雄）原作、ちばてつや作画。『週刊少年マガジン』で連載された。力石は死に、カーロスは廃人になり、ジョーは何度も光るゲロを吐き、紀ちゃんには「私、ついていけそうにない」と見放され

は「自分が生きるために」他人の命を救うメスを振るい続ける、と叫びました。手塚にとって「マンガを描く」ということは、そういう意味を持っていたのです。自分自身のモテより、多数の読者を癒すことこそに、手塚は自分の生きる目的を見出したわけです。武器は二次元、つまり妄想だけでした。しかしその妄想が、大勢の人間を癒したのです。

二次元が自我安定装置として機能

ともあれ、マンガやアニメ、ゲームといった「二次元」は、旧来の「三次元」を喪失した戦後日本の若者たちにとって、大いなる救済、自我を安定させるシステムとして機能しました。だからアメリカと違って、日本では大人もマンガを読むようになりました。七〇年安保闘争時代には、マルクスやサルトルと一緒に『少年マガジン』が読まれました。

その後、政治思想が衰退して恋愛資本主義が勃興すると、「オタク」という差別用語がマスコミを飛び交い始め、二次元は秋葉原の一角へ囲い込まれました。しかし、オタクは滅びるどころか、恋愛資本主義（三次元一元論主義）に対するプロテスタントとして増殖し続けたのです。恋愛資本主義というシステムでは、九五%ぐらいの人間が癒されません。恋愛で癒される人間など、モテてモテて仕方のない美男美女だけです。残りは、不満を抱きながら恋愛という名前の記号を消費させられ、あくせく働いて老いていくだけなのです。恋愛には寿命があり、しかも、ほとんどの人間は二次元で体験できるような素晴らしい恋愛体験を三次元では味わえないのです。なので、不完全な「恋愛資本主義」文化へのカウンターとして、「二次元脳内恋愛」文化が登場

てマンモス西の元へ走られ、最後はホセに敗れて童貞のまま真っ白に燃え尽きる。永遠のトラウマ劇画。

㉜ ピノコ
ブラックジャックと同居している幼女。実は、元は奇形嚢腫で、ブラックジャックが幼女型の人形を制作してあげてその中に臓器を詰め込んで造った。

㉝ 和登サン
『三つ目がとおる』というタイトルだけでもう放送禁止っぽい手塚マンガに登場するヒロイン。ボクっ子。主人公のショタっ子写楽君と一緒にお風呂に入るという素晴らしい趣味がある。『週刊少年マガジン』で何をやっているんですか手塚先生。幼かった筆者は、自分もいつか和登サンのような女の子と一緒にお風呂に入れる日がやってくると信じていた……。

したのは当然の成り行きだったのです。
二次元で人間が自我の支えを得られるということは、当然、三次元における争いごとも減るということを意味します。
すべての人間が脳内で萌えて幸福になれれば、戦争の必要もなくなるはずです。
人間は、三次元では「労働」と「子育て」をしていればいいのです。
美男美女はともかく、僕みたいなブ男ブ女は見合い結婚で充分です。
本気の恋愛は、そもそも二次元でするものです。
社会全体が恋愛結婚至上主義になったために見合い制度が廃れたのが、独身者増加の最大の原因です。
恋愛と結婚を結びつけたのは、大失敗だったと言えるでしょう。これでは子供が減って当然です。まず結婚できない人間が増えましたし、その上、恋愛と子育ては相反するものなのですから。いまや、結婚してもたくさん子供を作ろうとするカップルはほとんどいません。子育てよりも、自分たちのほうが大事だからです。
ちなみに、男が「オタク」と「ＤＱＮ」に二分されるのは（もちろん、両方兼任している人とか、どっちでもない人もいます）、テストステロンの量によって性格がはっきり分かれるからなんです。テストステロンが少ないとラブ＆ピース＆オタクになります。多いとＤＱＮ系になります。単純なことです。生まれつきの体質もありますが、環境によってもテストステロンの量には差が出る。運動していると増えますし、ホワイトカラーな仕事をしていると身体を動かさないので減ります。しかしなぜか農業に従事していると、うんとテストステロンが減るそうです。「農耕民族的」（おとなしい系）と「狩猟民族的」（ジャイアン系）という人類二分法が昔からありますが、実はテストステ

ロンの量によって男のタイプがそういうふうに二分されているんです。
昔から一見無根拠に経験則に基づいて言われてきたことを後から脳科学が裏付けるということとは、意外とあるのです。
大学の体育会あたりがよく集団レイプ事件を起こしたりするのは、元々若くて体力があってテストステロンが過剰な男子学生に強い運動をさせることでますますテストステロンの分泌量を増加させるためではないかと思います。僕は特にフェミニストというわけではありませんが、女性を守るために各学校は若者の運動を制限するべきだと思います。もちろん運動全部禁止というのではありませんよ。一定以上のテストステロン濃度を超えた男子の運動だけを制限すればいいのです。そうすればレイプ犯罪は、特に集団レイプは減ることでしょう。過剰な運動は、暴力を呼ぶのです。僕はこれを「運動脳」(ラグビー脳でもなんでもいいです)と名づけました。いや冗談ですが。でも「**ゲーム脳**[*34]」だの「**フィギュア萌え族**[*35]」だのなんてトンデモ語が飛び交っているんですから、「**ラグビー脳**」なんてふざけきったトンデモ用語だってありでしょう。
ちなみにアメリカの一部の州では、強姦魔の受刑者に女性ホルモンを投与してテストステロンの分泌を抑制するそうです。そうすればおとなしくなるんですね。しかしちょっと人道上・医学上の問題がありそうな方法ですな。それよりも毎日、甘甘でラブラブな恋愛ゲームをプレイさせるのが良いかもしれません。『つよきす』[*36]とか『キミキス』[*37]とか。そうすれば、少しは「萌えの心」というものがわかってきて、テストステロンが減るんじゃないでしょうか?

㉞ ゲーム脳
テレビゲームをやると人間の脳に悪影響があるという説。最近では「脳内汚染」という、より過激な言葉も発明された。また携帯メールを打つと「メール脳」になるという。もちろん科学的な根拠は乏しい。ニューメディアに対する一種の魔女狩り思想。昔は「ロックを聴くと人間の脳に悪影響が」なんて言われてた。

㉟ フィギュア萌え族
以前、広島県で幼女殺害事件が起きた時、大谷昭宏がテレビで「犯人はフィギュア萌え族」と言い出してフィギュアファンから非難された。ちなみに犯人は南米からやってきた小児性愛者だったが、大谷の謝罪はなかった。

㊱ 「つよきす」
二〇〇五年にきゃんでぃそふとから発売されたPCゲーム。ヒロインが全員ツンデレの強気っ子。しかし、そんなことよりも脇役キャラ・フカヒレのへたれぶりが全国の喪男の共感を呼んだ。プレイステーション2にも移植された。

㊲ 「キミキス」
二〇〇六年にエンターブレインが発売したプレイステーション2用恋愛ゲーム。とにかく難しい。

脳内二次元がネットワーク化される時代

さて、長々と喪男たちの哲学史を過去から現在にわたって俯瞰（ふかん）してきましたが、いかがでしたでしょうか。

哲学の歴史は喪男の苦しみの歴史であり、「二次元」追究の歴史でもあるのです。秋葉原には、オタクには、このような数千年にわたる人類の営みというバックボーンがあったんです。

二次元オタクとは、つまり、グノーシス主義[38]の末裔であり、カタリ派[39]の親戚であり、プラトンアカデミー[40]の教え子であり、その他もろもろの「一元論社会に弾圧されてきた二元論者たち」の一員だったんですね。

世の中には「二次元」を攻撃してくる一元論者がたくさんいますが、プラトンもカントもニーチェも知らないような人を相手に、そのような形而上的な問題について議論してもはじまりません。算数の九九を知らない人に「数学なんてインチキじゃないか」とケチをつけられているようなものなのですから。単に彼らが無知蒙昧だというだけなんです。そして、一元論者の多くが、そういう手合いなのです。さりとて「汝、無知の知を知れ」なんて言ってあげても、かえって逆恨みされてしまいます。

でも、心配することはありませんし、そういう人々と議論をして一度しかない人生を無駄に消耗することはないんです。

インターネット社会がいずれすべてを変えてくれるはずです。インターネットは、人類がはじめて持つことになった「二つめの現実」だからです。そこでは、これまで脳内に孤立していた各人の「二次元」が、次々とリンクしていってネットワーク世界を作るわけです。

㊳ グノーシス主義
精神と物質の二元論思想をベースとした古代の神秘思想。この物質世界は邪悪な神が造った悪の世界であり、善の世界は精神の世界であってこの世とは異なるのだ、という悲観的な喪男二元論。初期キリスト教にも影響を与えたが、グノーシス派キリスト教は教会から異端として弾圧され消え去った。しかし以後も後世の喪男思想に絶大な影響を与え続けている。

㊴ カタリ派
一〇世紀から一三世紀にかけて存在したキリスト教の異端宗派。「この世は悪なり」というグノーシス主義的な二元論を採用し、フランス南部のトゥールーズなどで流行した。この世＝三次元が悪なら、神の子が直接生まれてくるはずがない。故にイエスは三次元キャラ（人間）ではなく二次元キャラ（幻想）だという説を唱えた。十字軍と異端審問によって滅ぼされた。

㊵ プラトンアカデミー
元々プラトンが開いていた学校が「アカデメイア」なのだが、ルネサンス時代にイタリアのメディチ家が開いた学術サークルの名称も「プラトンアカデミー」。もちろん、プラトン哲学とアカデメイアの再興を念頭に置いての組織名である。ルネサンス期のイタリアでは、プラトン哲学とグノーシス主義が合体した「新プラトン主義」が盛んになっていた。新プラトン主義は本来のプラトン哲学とは異なり、世界は「一者」が流出して生まれたものだと考える神秘思想だった。

新しい世界ですから、いっそ「四次元」と呼んでもいい。「三次元」とは異なる「インターネット社会」が成長することによって、一元論思考は自ずと崩壊していくはずではありませんか。

以前ちくま新書の『萌える男』で僕が「二元論」について書いた時、ある編集さんから「三元論モデルのほうが良いのでは」と提案されました。それは確かにそうなのです。ただ、つい数年前までは、「二元論」（不可知の「現実」を合わせれば三元論です）と「一元論」しかありませんでしたから、当座は「二元論」として書いていこうと思ったわけです。

インターネットは、明らかに「二次元」の延長にあります。これまではスタンドアロンだった各人の脳内にある「二次元」が従来の三次元世界とは異なる「場」でネットワーキングされ始め、二つめの現実を作りつつあるのです。

現代日本では二元論者が異端扱いされてきましたが、いずれは逆に一元論者が異端つまり少数派になる日が来るでしょう。

すでにネットについていけなくなった人が焦ってネットを弾圧しようと騒ぎ出したりしています。「ゲーム脳」みたいな感じで。でも、基本的には放っておけばいいのです。カトリック教会が何を言おうが、有罪判決を出そうが、「それでも地球は回っている」のです。

「**それでも二次元は現実（リアル）である**」、脳科学がいずれこの言葉を証明してくれる予定です。三次元による癒しも、二次元による癒しも、いずれも脳内現象です。脳内現象である限りは、等価値です。**等価値であれば、他人をアテにするより、自力で自分を救済するほうが「漢（おとこ）らしい」ではありませんか。**

恋愛とは、ドーパミンの放出による「脳の活性化」作用なのです。実はキリスト教の信仰だって似たようなものだったはずです。喪男の苦しみとは、化学的に言えば、脳のストレスです。ドーパミンをはじめとする脳内ホルモンが出れば癒されるわけです。しかしドーパミンは恋愛だけでなく、スポーツとか、二次元による感動とか、様様な方法で放出させることが可能なのです。恋愛資本主義という地獄に落とされた喪男がドーパミンを出せなくなるのは、「恋愛」というドグマに縛られているからです。「恋愛以外に俺を救う手段はなく、俺は恋愛できない、従って俺は救われない」という思考に陥っているのです。

でも、癒しとは畢竟（ひっきょう）脳内ホルモンの放出という化学作用に帰結すると考えれば、簡単なことです。他の方法を使えばいいんです。何も、必ずしも二次元に萌えることだけを推奨したりはしません。運動が好きな人は運動すればいいわけですし、他にもいろんな方法があるはずです。映画観るとか。麻雀するとか。ただ、「二次元」は万人の脳の中に広がっているから、誰だって使えるんだよ、ということです。また「二次元」という概念を理解することは、三次元一元主義つまり現代の恋愛資本主義を相対化してそこから解脱するための第一歩になってくれるわけです。

恋愛資本主義は、古代インドのカースト制度の再来であり、復活した輪廻思想です。「カースト」という履歴不明の価値体系の代わりに「顔」と「金」が導入されただけの、原始的で呪術的な未開の文化なんです。

恋愛資本主義を相対化して捉え、二元論思考を身につけることで、喪男の脳はドグマから解放されるのです。

その上で、萌えによって癒される人は萌えればよいし、ボクシングや柔術で癒され

る人は格闘技を習えばいいわけです。他にもいろいろな方法があるでしょう。カラオケでもジョギングでもなんでも。他人に迷惑をかけないことであれば、形式はなんでもいいのです。

いまはまだ恋愛資本主義に洗脳されている人々も、インターネットを介して、いずれは自分自身の二次元に適合する新たな世界を手に入れることが可能になります。オタク同士の友達もいくらでも作れますし、ネットで相手の「内面」から入って恋愛に至るというルートも開けるかもしれません。

一人ひとりが、自らの方法で自分を癒すことが可能になる世界が、徐々に迫っているのです（もっとも、二次元のネットワーク化は逆にかつてのナチスドイツのような極端な「二次元一元論主義」を生み出す危険性もあります。つまり個人的救済ではなく、再び国家や民族といった巨大なシステムによる救済を大勢の人間が夢想することになる可能性もあるわけです。人間は集団化したがる傾向があるために、自我をなかなか自立させられないのです。この問題についてはいずれまたどこかで触れたいと思います）。

「ネット社会は前頭葉を使わない」なんてエセ科学なことを言う人もいますが、大間違いです。**恋愛資本主義に毒された三次元こそ、前頭葉を使わない世界なのです。**視床下部の性欲中枢[41]しか使わない荒んだ世界なのです。二次元を悪く言う面々は、たいてい**「恋愛しない奴は人間的に成長しない」などと言いますが、それはすべて三次元の恋愛資本主義中毒者自身の姿をこちらに投影しただけの発言**なんです。

そもそも三次元で癒されているのなら、他人を見下したり差別する必要なんてないはずです。**自分が苦しいから、いちいち他人を差別してウサを晴らそうとするわけです。**

㊶ 視床下部の性欲中枢
視床下部には食欲中枢や性欲中枢など、原始的・本能的な欲望を喚起させる部位がある。男のほうが性欲中枢の間質核が大きいらしい。また、好き嫌いの感情や恋愛感情は扁桃体から生まれてくる。もちろん好悪感情が生み出される源泉の一つには外部からの感覚情報があるわけで、つまりキモメンはモテないのである。

むしろ、二次元での体験や感動を「偽物」であると棄却した人間は、そのぶん「リアル」を体験する機会を喪失し、結果として人間的に成長したり安定したりしにくくなります。いくら三次元で腰のピストン運動を繰り返しても、精神が成長するわけではありますまい。

まあそれくらいならまだいいですが、三次元一元論主義に走る人が大勢増えて集団化すれば、また二〇世紀前半のような大変な面倒が持ち上がるかもしれません。実際、ヨーロッパの周縁部をはじめとする世界各地で民族主義が復活して終わりのない戦乱が延々と続いています。「民族浄化」とか「強制収容所」とか「核兵器」といった第二次大戦時代に逆戻りしたかのような言葉がぽんぽん出てきます。戦争の体験を「反省」するだけでは、何も変わらないのです。そんなものは、代替わりすればすぐに忘れてしまいます。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」です。変わらなければならないのは、人間の思考方法や根本的な世界観といった意識、つまり個人個人の「哲学」なのです。

この本を振り返ってもらえればわかるように、人類史に偉大な足跡を残してきた知性の持ち主は、たいていが喪男、それも「孤立した喪男」だったのです。同じ喪男でも、孤立せずに集団を作った喪男、あるいは一人の喪男カリスマを崇拝するために集まった集団は、偉大な足跡どころか人類史に大きな傷跡を残したケースが目立ちます。これは構造的に不可避なことなのです。人は集団化すれば、三次元を書き換えようとするものです。そこから一つしかない三次元を複数の集団で奪い合う争いが生まれるのです。ですから喪男は、友達はいっぱいいてもいいのですが、魂のコアな部分においてはキルケゴールのように孤立するべきなのです。「自分で自分を救う」とい

う覚悟が、自立が必要なのです。

名だたる孤立した喪男哲学者たちは、喪のエネルギーを三次元のオネーチャンにではなく、ピストン運動に要するカロリーにではなく、ましてや第三帝国の建国でもなく、広大な二次元の世界へと注ぎ込んだのです。その結果、様々な発見や発明、あるいは創作を成し遂げることができたのです。

これはある意味、大乗の道です。

彼ら「孤立した喪男哲学者」たちは、己の苦悩を糧として多数を癒そうとしたわけです。

文化の歴史は、喪男の歴史なのです。
モテない者は幸いであり、広大な二次元は彼らのものなのです。
喪男は幸いであり、真の「現実(リアル)」は彼らのものなのです。
魂に傷を負った者だけが、新しい何かを生み出すことができるのです。
喪のエネルギーを、想像力に変換して。
天国は、脳内にあり。

だから、すべての喪男よ、孤立せよっ！

苦しみを超えて歓喜に至れ（ベートーベン）。

あとがき

この本の執筆を終えた頃、担当さんから講談社現代新書『はじめての〈超ひも理論〉』（川合光著）をいただきました。もう超ひも理論の本は要らないですYO！　と思いつつ受け取ったところ、この本のオマケとして収録されていた「サイクリック宇宙」試論にびっくり仰天。サイクリック宇宙試論は「試論」と言われているようにまだ正式な理論としては完成していないのですが、その内容が喪というか仏教というか永劫回帰。なんと、宇宙はビッグバン（爆発）とビッグクランチ（収縮）を過去に何十回も繰り返しており、現在の宇宙は「五十回目の宇宙」なのではないか、というのです！　ええー。

しかも、宇宙はリセットされるたびに寿命を延ばし、進化してきたというのですよ。

哲学が担ってきた役割には「宇宙論」「人間論」などがありますが、これらはつまり人間の思考や学問の「枠組み」を作る作業です。そういう意味で、物理学や脳科学こそが哲学の現代における（現段階における）最終発展形なのだなぁ、とは思うのですが、それにしてもこれはそのまんま輪廻の世界観ではないですか。

ライプニッツは自分が発明した二進法を、中国の易経の知識を再発見したものと思い込んでいましたし、ニュートンも自分が考えた万有引力の法則の根源は古代の錬金術にあると考えて錬金術の実験を繰り返していました。現代の物理学者たちもまた、かつてニーチェやブッダが語った宇宙モデルを再発見している気分なのではないでしょうか。ルネサンス（文芸復興）とは、決して新しい文化を生み出そうとしたムーブメントではなく、実は古代ギリシア・ローマという過去の遺産の「再発見」でした。人間の文明の基本は「温故知新」というやつ

で、埋もれた古典を振り返る過程で新しいものが生み出されるわけです。ところが最近では、どうも様々な文化の歴史というものが軽視され、目の前のトレンディな知識だけがチヤホヤされる傾向があります。これでは人間はどんどん愚かになってしまいますよ。**知識の量が問題なのではなく、知識というものを体系的に、歴史的に捉えることが重要**なんです。

僕がわざわざプラトンやイエス、ブッダにまで遡って哲学の歴史をまとめてみたのも、人間の「ものの考え方」「世界観」というものを歴史的・時間的な視点から体系的に書いた本があったほうがいいのではないかと思ったからです。歴史には「繰り返しのパターン」や、「少しずつ進化していくパターン」、「過去の出来事とつながっているパターン」が多いのです。過去を知ることで未来を予測することもできるのです。最近は哲学のみならず、なんでもそうですが、一瞬一瞬の目先の話を取り上げるばかりで「時間軸」「歴史」という視点が欠けつつあるような気がします。もしかして受験教育の弊害でしょうか！　もちろん、小難しく書いてもしょうがないので、できるだけわかりやすく、笑いながら読めるように書いてみました。いや小難しい文章を書いてると僕が頭痛くなるんで。

とにかく、いにしえの哲学とは「頭が良い人」のペダンティックな道楽などではなく、世の中に不満を持った「喪男」が「どうすればいいんだろう」と解決策を考え抜く作業だったということがご理解いただけたのではないかと思います。だから彼らの大部分はいわゆるアウトサイダーだった。**本当の哲学者の知とは「難しい文章を書く技術」ではなく、「無知の知」なんです。**「汝、自身を知れ」ということです。難解なレトリックとかインチキ臭い数式のアナロジーとかフランス現代思想のカタカナ翻訳用語とか、そんなもの知らなくてもいいんです。というよりも、むしろ不必要です。「世界とは何だ」「人間とは何だ」「俺はなんでモテないんだ」。これらの人生の難問について、「考えているふり」をすることではなく、本当に「自分の頭で」考える行為こそが、哲学なのです。しかしながら、我々はヴィトゲンシュタインのような天才ではありませんから、いきなり直観で考えるよりもこれまでの先人たちの辿ってきた思考の足跡を（失敗例も含めて）軽く頭に入れておいたほうが良いわけで

す。本書がそのためのガイドブックになってくれれば幸いです。

なぜ哲学者でもない僕がわざわざこんな本を書いたかを説明します。

元々はちくま新書で人間の想像力の効用を論じる『萌える男』という評論を書きまして、そこで二元論と一元論の話をしたのですが、どうも「何を書いているのかよく理解できない」という声があったので「わかりやすい話なのに、なんでだろう」と悩みまして、どうやら**哲学の歴史、つまり人類の世界観の歴史が常に「一元論」対「二元論」の歴史だったということを学校からも書物からも教わっていない人が案外多いのではないか、という結論に達した**わけです。

だから、「たかがオタクの萌え話が、なんでそんな哲学臭い話になるんだ」とバカの壁に阻まれて思考停止してしまう。二つの話が頭の中で繋がらない。ですから、基礎の基礎に立ち返るという意味で、大昔まで時間を遡って一元論と二元論の歴史をこうしてエイヤッと書いてみたんです。モノが先か、想像力が先かという議論は、実はもう何千年も続けられてきたんですね。で、二〇世紀はモノが勝った時代だったんです。そこから恋愛資本主義というシステムが生まれてきた。だから萌えとかオタクとか二次元とか言っても、何も二一世紀の秋葉原周辺に限られた「ポッと出」の現象ではない。人類の歴史の上に何度目かの順番で巡ってきた想像力主義のムーブメントなんですよ。それを「現実逃避」などという浅はかな言葉で批判するような手合いは、あまりにもものを知らなさすぎるのではないか、**人類の精神の歴史というものをあまりにも軽視しているのではないか**、にもかかわらず自分を知的だと誤解しているのではないか、と思ったわけです。

ですがこの本は、ページ数の関係もありまして、想像力の効用について論じる上でまず一番基本的な「哲学」(世界観)についての話で終わってしまいました。

そこでこの次は具体的な「文学&マンガ」の歴史についてわかりやすく体系的に語る本を準備しています。一応本業であるところの小説の仕事のほうが忙しいのでなかなか難航しているのですが、いずれ完成すると思いま

す。最終的にはもう一冊加えて、「人間（喪男）の想像力（萌える力）に関する三部作」……「恋愛資本主義批判三部作」ができあがる予定です。

本田　透

二〇〇六年一二月

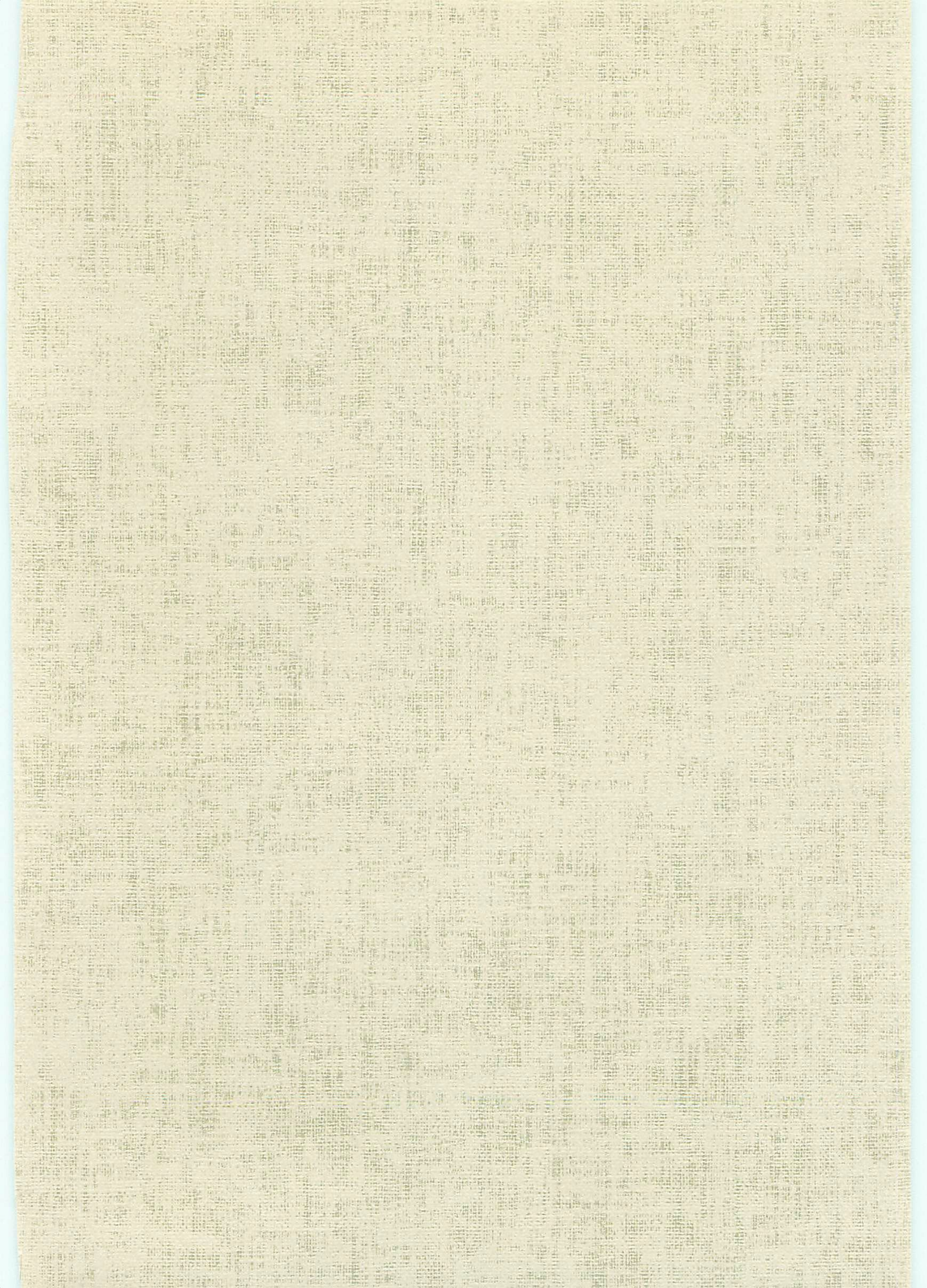
本田　透（ほんだ・とおる）
評論家、作家。
1969年兵庫県生まれ。
高校を二度中退後、大学検定を経て、早稲田大学第一文学部哲学科入学（中退）、同大学人間科学部人間基礎学科卒業。出版社勤務後フリーとなる。
評論の著書として『電波男』（三才ブックス）、『萌える男』（ちくま新書）、ライトノベルの著書として「アストロ！　乙女塾！」シリーズ『円卓生徒会』（以上、集英社スーパーダッシュ文庫）など多数。またオタク総合誌『メカビ』（講談社）のスーパーバイザーも務めている。

喪男（モダン）の哲学史（てつがくし）

2006年12月25日　第１刷発行

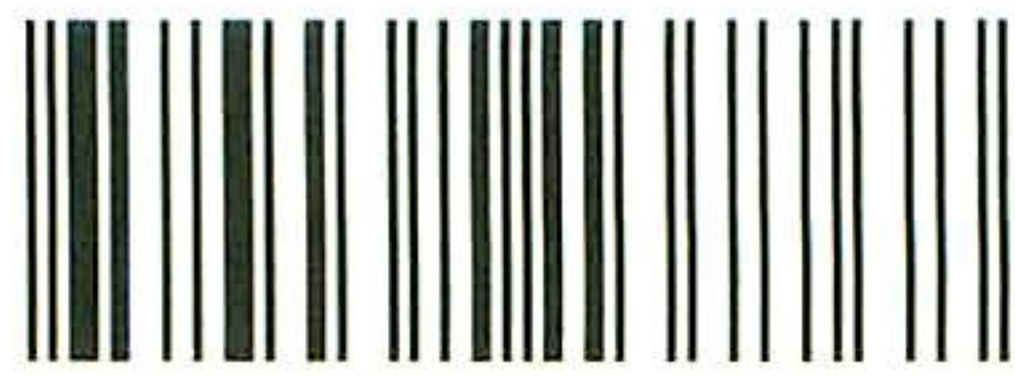
著　者――本田　透

発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-8001
☎ 東京 03-5395-3521（出版部）
03-5395-3622（販売部）
03-5395-3615（業務部）
装幀者――矢萩多聞
印刷所――慶昌堂印刷株式会社
製本所――株式会社若林製本工場
●落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは現代新書出版部宛にお願いいたします。

定価はカバーに表示してあります。
ISBN4-06-213776-3（現新）
N.D.C 102　318p　21cm

本田 透（ほんだ・とおる）

一九六九年兵庫県生まれ。高校を二度中退後、大学検定を経て、早稲田大学第一文学部哲学科入学（中退）、同大学人間科学部人間基礎学科卒業。出版社勤務後フリーとなる。

評論の著書として『電波男』（三才ブックス）、『萌える男』（ちくま新書）、ライトノベルの著書として「アストロ！　乙女塾！」シリーズ（集英社スーパーダッシュ文庫）など多数。またオタク総合誌『メカビ』（講談社）のスーパーバイザー、ライトノベル誌『ファントム』（二見書房）の企画・監修も務めている。

表4イラスト：
Santi Raphael “The School of Athens”
Vatican, Stanza della Segnatura

9784062137768
1920095018003
ISBN4-06-213776-3
C0095 ¥1800E (0)
講談社
定価：本体 1,800円（税別）

Plato and Aristotle